
とある伝説の赤き英雄 《レプリロイド》

ネコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある伝説の赤き英雄^{レプリロイド}

【Nコード】

N3798U

【作者名】

ネコ

【あらすじ】

Dr. バイルを倒しラグナロクと共に消えた伝説の英雄、ゼロ。彼は生きていた。しかし、目を覚ました彼がいたのは学園都市だった。

科学と魔術の交わりに、異科学の存在は何を与えるのか。ロックマンゼロとある魔術の禁書目録のクロスオーバーです。

プロローグ（前書き）

初作品です。至らぬ所も多々あると思いますが寛大な目で見ていただけると幸いです。

プロローグ

一人の少女が流れ星が降り続ける夜空の下、仲間の帰りを信じて待っていた。

世界を救った大切な仲間を。

「……………ゼロ」

『衛星砲台ラグナロク』、その残骸が流れ星のように地上へと落ちていくなか、残骸に交じって一人の赤いレプリロイドもまた地上へと落下していた。

(…くそっ！体がもう動かねえ…)

彼の体はすでにラグナロクでの戦闘で限界を迎えていた。

地上にたたきつけられるか、それとも大気圏で燃え尽きるのが先か、どちらにせよこのままならば彼が死ぬのは明らかだった。

(俺は帰るんだ…。あいつらの…シエルのところへ…)

しかし、彼の思いとは反対に彼の体はどんどん落ちていく。

「……シ……エル……」

無数に降り注ぐラグナロクの破片と遠くに見える地上……それが彼、『ゼロ』の見た最後の光景だった。

一方、とある世界において、

科学をつかさどる町、『学園都市』

その町に金髪、褐色肌のゴシックロリータという奇妙な格好をした女が入り込んでいた。

「学園都市もたいしたことないわね。あの程度の警備で私を止められるとでも思ってるのかしら」

そう言う、その女は歩き始めた。

自分の目的のために。

そして、同時刻。

ここにも、同じように外から学園都市へと侵入してきた者がいた。

「君、待ちなさい!!」

「くそっ!! なんで、こんなに早く効果が切れちゃうんだよ!？」
ツンツン頭の少年が警備員と逃走劇を演じていた。

「君、止まりなさい!!」

「だあぁっ!! もう!! 不幸だー!!」

プロローグ（後書き）

表現の誤り、誤字、脱字などがありましたら言ってください。

新たな出会いと始まり（前書き）

ストーリーは原作六巻からとなっております。ぐだぐだした文章で
すいませんが是非最後まで見てください。

新たな出会いと始まり

学園都市にある窓も扉もないビル。

そのビルの中心にある円筒器の中に緑色の手術着を着た『人間』が逆さで浮かんでいた。

その『人間』は男にも女にも、大人にも子供にも、聖人にも囚人にも見える。

名をアレキスター、学園都市統括理事長である。

(……、さて。そろそろか)

アレキスターがそう思った瞬間、小柄な空間移動能力者に連れられた大男が現れた。少女は会釈をし消えた。大男、土御門元春はそれを確認するとアレキスターへと近づいた。

「警備が甘すぎるぞ。遊んでいるのか」

土御門はスパイではあるがアレキスターの従属的な部下ではない。ゆえに、アレキスターの前でも外見は短い金髪をツンツンに尖らせ、サングラスをかける、さらには口調も部下も上司に対するものとはかけ離れていた。

「構わぬよ、侵入者の所在はこちらで確認できている。なんの問題もない。」

「お前も分かっているだろう」

土御門はそう言うと言っていたレポートを円筒に押しつける。そのレポートに留められた隠し撮りの写真には侵入者の女の姿が写っている。

「シェリー・クロムウェル。イギリス清教『必要悪の教会』の間だ」

土御門は苛立った様子で、

「イギリス清教だって人の作る組織である以上が一枚岩ではない。いや、構成の特性上、十字教の中でもあれほど複雑に分岐した国教は他にない。お前とて分かっているだろうが」

「隣人を愛する者同士が互いにいがみ合うとは、ずいぶんと素敵な職場だな」

「まったくだ」土御門は息を吐いて、「しかし、それ故にイギリス清教にも様々な派閥と考えがある。学園都市協力派がすべてというわけではない。お前がウチのお姫様と結んだ『協定』にしても、どこまで役に立つかはわからん」

学園都市とイギリス清教は『科学』と『魔術』という相反する力を持っているがわずかながらに親交がある。ゆえに、学園都市とイギリス清教のトップ同士は『協定』を結んでいた。

「魔術師は同じ魔術師が裁かなければならない。この法則はお前の方が分かっているはずだ。学園都市は『科学』を、教会は『神秘』を、それぞれの技術を独占する事でアドバンテージが生まれている。その中で学園都市の者が魔術師を潰してみろ。戦争の火種を生み出すようなものだ」

学園都市へのシェリーの侵入が彼女一人の独断なのか、それとも一派閥の意向なのかは判断できないが、もし下手にシェリーを倒せばイギリス清教と学園都市の間に亀裂が走る。シェリーを送り込んだ派閥が学園都市を嫌っているのだとすれば、そこを狙って亀裂を押し広げようとするだろう。

その先にあるものを土御門は言葉に出せなかった。

「まあ、今回の件でもよほど間拔けな選択をしない限り、この火種が燃え上がることはないだろう。だが、火種を消すために水面下で人死にが起きるかもしれない。お前は何を考えている？本腰を入れて警備に力を入れれば、いくらでも侵入を阻止できたくせに」舌打ちして、「とにかく、オレはシェリーを討つぞ。魔術師の手で魔術師を討てば、少しは波も小さくなる。それからスパイはこれで廃業だ。ここまで派手に動けば必ず目をつけられるからな。まったく、心理的な死角に潜ってこそそのスパイだというのに、四六時中監視されて仕事だ」

「君は手を出さなくて良い」

遮るようなアレイスターの一言に、土御門は一瞬凍りついた。何を言っているのか、理解できなかった。

「君は手を出さなくともいいと告げた」

「……本気で言っているのか？」

土御門は、相手の正気を疑うように言った。

「可能性は、決してゼロではないんだぞ。水面下での工作戦なんてビルからビルへ綱渡りするようなものだ、手を間違えれば戦争が起きるかもしれないというのに！」

大量破壊兵器の設計図が他国に漏れれば、それだけで戦争の火種として正当化される。学園都市内で教会の魔術師を捕獲するとは、つまりそういう意味なのだ。

確かによほどの事がない限り、全面戦争にはならないだろう。しかし、逆に言えばよほどの事があれば戦争が起きてしまうのだ。それも国家と国家の戦争ではない、国境の壁すら越えた『科学』と『教会』、二つの世界の大戦だ。

「アレイスター、お前は何を考えている？ 上条当麻に魔術師をぶつけるのがそんなに魅力的か。あの右手は確かに魔術に対するジョーカーだが、それでもアレだけで教会全体の破壊などできるはずもないだろう！」

「プラン二〇八二から二三七七までを短縮できる。理由はそれだけだが？」

アレイスターの言葉に、土御門の息が詰まる。

プラン。『計画』というよりは『手順』といった所か。アレイスターがこの単語を口にする場合、該当するものは一つしかない。

「虚数学区・五行機関の制御法か」

土御門は忌々しげに呟いた。虚数学区・五行機関。学園都市ができた当初の『始まりの研究所』と呼ばれているが、今ではどこにあるのか、本当にあるのかも分からないと言われる幻のような存在。ウワサでは現在の工学でも再現不可能な『架空技術』を抱え、また学園都市の裏側からその全権を掌握しているとさえ考えられている。

『外』の教会や魔術師はこのビルを指していると思っているようだが、違う。実際はそんなものではないし、本当の事を『外』に教える訳にもいかない。

言えるはずがない。学園都市に対して絶大な影響力を持つ『ソレ』が、誰にも制御できず何のためにあるのかも分からないまま潜んでいるなどと。

学園都市を治めるアレイスターとしてはあらゆるものを利用してでも五行機関の御し方を掴まなければならない。いや、アレイスターはおそらく御し方自体はすでに掴んでいる。ただし、それを実行するための材料が、キーが足りないのだ。

『手順』というのは一定の順序で事件・問題を起こしてキーを作り上げていく。

その『手順』の中心には一人の少年がいる。

上条当麻

アレイスターはイレギュラーが起きるたびに『計画』を組み替え、誤差を修正するところか逆に利用して膨大な『手順』を少しでも短縮しようとするのだ。

今回のシェリー＝クロムウェルもそういう事か。

「その程度の、ために？」

「この街の軍事力や影響力を考えれば、その程度などとは呼べないはずだがな。何せ世界を引き裂くほどの暴れ馬だ、手綱はできるだけ早く掴み直した方が無難だろう」

アレイスターは淡く笑う。そこからはいかなる感情も掴めない。

なんてふざけた話だ、と土御門は舌打ちした。できるならアレイスターの命令など無視して独断でシェリーを討ちたい所だが、それも叶わない。

彼一人ではこのビルから出る事もできない、出口がないのだ。

土御門が無駄だと知りつつもアレイスターにここから出すよう言おうとしたその時、

「ところで…、今、もう一人この街に面白い侵入者がいることを知

っているかい？」

「何：？上条当麻の事か？アイツは」

「違う」

土御門にはアレイスターの言っている事の意味が分からなかった。なぜならば、今朝、『外』からの侵入者はシェリーと上条当麻の二人だけのはずだったからだ。

「見たまえ」

土御門の前に出されたモニターには年齢は十代後半、腰よりも長く伸ばした金髪と少し攻撃的な目が特徴の赤いＴシャツにジーパンという格好をした青年だった。顔はどこか疲れており、困惑しているようにも見える。

「コイツは？」

「分からない。急に街の中に出現し、街を歩き回っている。」

「何だと？ならばなぜ報告がない？」

「このことはまだ誰にも伝えてはいない。だが、彼は魔術師ではない、そうだろう？」

確かに、モニターの男は魔術師には見えない。しかし、突然、街に現れたと言う。流石の土御門にも訳が分からない。

そんな中、分からないと言いながらアレイスターは笑っていた。

（もしかしたら……彼は……）

まるで、新しい玩具を得た子どものように。

少しばかり、時は遡る。

学園都市の路上に一人の青年が倒れていた。

「……………」

青年は目を覚ますと辺りを見回した。

「ここは…、どこだ？ネオ・アルカディアか？」

辺りには植物が生え、遠くには見たこともないような大きな建物が立ち並んでいる。

（何だ、ここは…）

青年の名はゼロ。

バイルを倒しラグナロクとともに死んだはずのレプリロイドだった。しかし、彼は生きている。

「どういうことだ？オレは助かったのか？」

とりあえず、どこか人のいるところに行こうとゼロが歩き始めたその時、

「不幸だー！ー！！！」

叫び声をあげながら、ツンツン頭の男がゼロの方へ走ってきた。

「はあっ…、はあっ…。ここまでくれば大丈夫だろ」

ツンツン頭の男はゼロの近くで立ち止まると疲れた体を休める。

「おい」

男はゼロに気付いていなかったようでゼロが声をかけるとその男は、

「なっ！いつの間に追いついたんだ！？すいません、どうしても外に出ないといけない用事があったんです！！見逃してください！！」

男はゼロに慣れたように土下座するといきなり弁明を始めた。

「…何を言っているのか知らんが、オレは別にオマエを捕まえる気はない。少し尋ねたいことがあるだけだ」

「へっ？」

男はゼロを見てようやく人違いだと気付き、ようやく立ち上がった

た。

「ああ、すいません、ちょっと色々あって」

男はゼロを見て同年代と思ったのか、普通の話し方で話してきた。「別に気にしてない。それより、ここがどこだか教えてくれないか？ネオ・アルカディアなのか？」

「ネオ・アルカディア？ここは学園都市の第七学区にある公園だ。ネオ・アルカディアなんて場所は学園都市にはなかったと思うけど…。」

ゼロは男の話を聞いて驚いていた。男の話が本当ならばここは学園都市というゼロが聞いたこともないような場所でもネオ・アルカディアはないというのだ。

（ここは、ネオ・アルカディア以外の人間の街かもしれない）

ゼロは心を落ち着かせると男にさらに話を聞いた。

「ここは人間の街なのか？」

すると、男はやや怪訝な顔をする、

「人間の町に決まってるじゃねえか。俺が人間以外の何かに見えるのかよ」

「いや、そういう訳じゃないんだが…。ならば、レプリロイドはどこにいる？」

「レプリロイド？なんだ、それ？ロボットか？」

ゼロは絶句していた。ネオ・アルカディアどころかレプリロイドすら知らないというのだ。

「俺みたいなやつは他にいないのかと言っているんだ」

ゼロはレプリロイドという言葉がないのかと思い、自分と似た姿のような姿の者ならばと思い聞いた。しかし、男の答えはさらにゼロに驚きを与えることとなる、

「お前みたいになって何言ってるんだ？確かに金髪でお前みたいなやつは多くはないけどそこそこいるじゃねーか。それとも、その顔の事

を言ってるのか？めっちゃくちやかつこいじゃねえか。確かにお前ぐらいかつこいじゃつはそういねえな。」

（かつこい？何を言っているんだ、こいつは？）

ゼロは不思議に思い自分の手を見てみて初めて気づいた。

そこにあっただのはレプリロイドの手ではなく間違いない人間の手だった

（何だ、これは！？）

「どうした、何かあったのか？」

男に尋ねられ、我に返ったゼロは

「いや、なんでもない…。ひきとめて悪かった。じゃあな。」

「ああ、じゃあな。気をつけて帰れよ」

それだけ言うと、ゼロは男と別れ、鏡がどこかにないかと探し始めた。

「と・う・まゝッ！！」

玄関を開けた上条当麻のもとに怒りを含んだ声が飛んできた。しかし、その声の主の少女が駆け寄ってくることはない。

上条は一瞬だけ怪訝そうな顔をしたが……やがて思い出した。

彼が中へ入って行くと、声の主の少女は部屋の奥で暴れていた。腰まである銀の髪と白い肌を持つ外国人の少女だ。来ている衣服は純白の布地に金糸の刺繍をあしらった豪華な修道服で、何故か服の縫い目に沿って無数の安全ピンが刺してある。

まだ子供らしさが残る少女の名前はインデックス。

……なのだが、今の彼女は体中を細いロープで雁字搦めに縛られていた。手足をまともに動かせないインデックスは、魚のように跳ねまわっていた。ちなみに、彼女の頭の上には三毛猫が器用に座っていて、必死にしがみついていた。感覚的には『ロデオ』という言葉葉がいやに似合う。

「うわっ、すっかり忘れてた！お前ずっとそのままだったのか！？」「とうま！人を置き去りにして置いて最初に出てくる台詞せりふがそれなの！？」

インデックスは犬歯を剥き出しにして叫ぶ。

昨日、八月三十一日、上条は閻咲逢魔やみさかおうまという男と出会い、彼の知り合いを助けるために学園都市の外へでることとなったのだが、危険を伴うためか弱いインデックスを外に連れて行くわけにはいかなかったのだ。それをインデックスに伝えた瞬間彼女は叩く蹴る噛み付くと大暴れを始めたため、やむなく縄縛術という縄スキルを持つ閻咲に彼女を縛ってもらい、インデックスにはお留守番をしてもらうしかなかったのだ。

「また今回も今回も一人で突っ走って……。とうま、とにかくこのロープを解きなさい！注連縄を使った小型結界でも、当麻の右手なら触っただけで壊せるはずだもん！」

当麻の右手。

イマジンプレイカー

そこには幻想殺しという力が宿っている。それが異能の力によるものならば、魔術だろうが超能力だろうが問答無用で無効かさせるものだ。ただし、その力は右手の手首から先しか適用されない、という欠点もある訳だが。

「けど、なあ、このロープ、解いたら解いたでお前ものすごく暴れそうだし」

インデックスは起こると人の頭に噛み付くというとんでもない悪癖がある。今の怒髪天モードの彼女の戒めを解くというのは、言ってしまえばお腹をすかせた猛犬の首輪を外して野に放つようなものだ。上条としては、新学期早々、体に女の子の歯形をつけて登校す

るなんてことはしたくない。ただでさえ、昨日は御坂美琴の恋人ゴツコに付きあわされたり、アステカの魔術師に襲われたりと疲れているのだ。おまけに学園都市に帰ってきてからは警備員に追いかけられたり、金髪の男におかしな質問をされている。

（そういえばあの人、あんな時間にあそこで何をやってたんだ？）

上条がそんなことを考えていると、インデックスの表情が柔らかく変化した。

分かりやすく言うと迷子になって怯える子供に接するような感じで。

「とうま。今なら怒らないから、素直にロープを解いてごらん？」

「……ホントに？ ホントに怒らない？」

「怒らないよ」

「ロープを解いた瞬間にガブガブ噛み付いてきたりしない？」

「しないしない」

インデックスはにっこりと、聖母のような柔らかい笑みを浮かべて言う。

「それなら」

と、上条はインデックスの体を縛っているロープを人差し指で軽くつつき、ロープをほどいてやった。

次の瞬間、拘束から解放されたインデックスは迷わず上条へ襲いかかる。

「ひい!？」

原始人が巨大な肉にかぶりつくように、彼女は上条の頭にかじりつく。

「とうまのとうまのばかばかばか!！」

「ぎゃああ!？」

上条は叫ぶがすでに後の祭りである。

「う、うそつき! 怒らないつつたのに痛あ!？」

「怒るに決まってるんだよ! まったく、魔術師と戦うってわかってるのに私を置いて行くなんて! どれだけ不思議な力を持っていたっ

て、とうまは魔術の素人なんだから！何かあったらどうするつもりだった

の！？」

見れば、間近にある彼女の顔は大層怒っていたが、その目だけは泣きそうになっていた。

インデックスは思い出の品を抱き締めるように、上条の頭に手を回す。

「……本当にどうするつもりだったの？」

抱きしめられた上条は、頭の上から降りかかるその声を聞いた。その長い銀髪から、ほのかに甘い匂いが漂ってきた。少女の体はわずかに震えていた。

「ごめん」

上条は、それだけしか言えなかった。

これ以上彼女を傷つけるわけにはいかない、そう思った。たとえば、自分が彼女の大切な思い出の中にいる『上条当麻』じやんとしても。

絶対に記憶喪失であることを悟られてはいけない、と。

上条はインデックスの朝ごはんを用意すると、すぐに始業式を用意を始める。

「えーと、必要なもんはあれとこれと…あと、それも…。だー！結局、宿題終わってないし！くっそう！怒られるよなー。」

一人、バクバクとご飯を食べていたインデックスは、

「とうま、ごはん食べないの？」

「ごはん、食べてる暇がないんだよ。あー、あの時あの人を無視して行くべきだったか？でもなあ……。」

「やっぱり、とうま、学校に行っちゃうんだよね？」

「あーそっか。俺が学校に行ってる間、お前ずっとるすばんになっちまうのか」

「む。と、とうま。私は別に寂しいとか一人が嫌だとか、そういうことを言ってるんじゃないんだよ？」

上条としては彼女を一人にすると危なっかしいので、彼女と一緒に行動しておきたいのだが流石にインデックスを学校に転入させるのが不可能なことくらいは上条にもわかる。

「その辺も考えなくっちゃなー。悪い、インデックス、今日はとりあえず留守番頼むわ。食器は流しの中で水に漬けといて」

すぐに身なりを整え、上条が学校へ行こうとすると、

「とうま、早く帰ってくる？」

「そうだな、分かった。帰ったら一緒にどこか遊びに行くか」

そう言うと、インデックスはとても素直な笑みを浮かべた。

その笑顔を見ながら、上条はうれしく思いつつも、同時にインデックスに『上条を経由しない人間関係』が作れないかと複雑な気分になる。

「じゃ、行ってくる」

「うん、いつてらっしゃい」

そんな彼に、インデックスは笑みを浮かべてそう言った。

彼らはその時気付いていなかった。彼ら、主にインデックスに危機が迫っている事に……。

「……、あれ？とうま、お昼ご飯は？……………ど、どうしよう。未曾

有の大ピンチかも」

一方その頃、

上条は学校へ向かうため、朝の大通りを走っていた。

電車で行くつもりが不幸にもトラブルが発生して電車が止まっていたのだ。

上条の学校では電車を使う事が元より禁止されているため、遅延証明書を持っていても遅刻扱いとなってしまう。

（はぁ…、こんな時まで…。不幸だ…）

すると、不意に後ろから、何者かにもものすごい速度で追い抜かれた。

茶色い髪を肩の所まで伸ばした、中学生ぐらいの少女だ。服装は学園都市でも名門と呼ばれる常盤台中学のもだったが、舞い上がるスカートの端も気にせず下には短パンを穿いてますと言わんばかりの走りは、完全にお嬢様のイメージからかけ離れている。

「…短パン。て、ことは、ビリビリか」

そう答えを導き出すと、

「おーっす、朝っぱらから元気で羨ましいですなあ」

上条の声を聞くとビリビリこと御坂美琴は、走る速度を落とした後、いかにも不機嫌そうな顔で、

「なんでそんなにアンタは気安く話しかけられんのよ。昨日の夜は人をさんざんさんざんさんざんスルーしていったってのに！少しは引け目とか感じないわけ！？」

昨日の夜、インデックスを探している途中に美琴に上条は会っていたのだが、切羽詰まっていたのでほったらかしにしていた。

「あれ、もしかして俺になんか用事でもあったのか？」

「べっ、別に。そういう用があったわけじゃないけど……」

「?????　じゃあなんで呼びとめたんだよ？」

「う、うるさいわね！別に何でもないわよ」

なおも上条は頭に疑問符を浮かべていたが、聞いたらまたいつもの電撃が飛んできそうなのでやめておいた。

「はあ……」

「何よ、アンタ、ため息なんてついて。さっきから随分と疲れてるように見えるけど、まさか、走ってるせい？アンタ、いつも私から走って逃げ回ってるじゃない」

上条は何気なくついたため息だったのだが、美琴には随分と重く受け取られたらしい。

「昨日、お前のも含めて色々あったんだよ。むしろ、なんでお前は疲れが綺麗サッパリとれてるんだよ。くそう、やはり二年の差はでかいという事か」

「他にもって！まさかアンタ、他の子ともあんな事を？」

「アホか。あんな事平然と頼んでくるヤツが他にもいたら、上条さんの体力が持ちませんよ」

「な……っ！？へ、平然ッてそんな訳ないでしょ！私だって、めっちゃくちや恥ずかしかったのをガマンして頼み込んだって言うのに！！」

「いや、あれは頼むよりむしろ無理やりだった気がするが……」

上条は寝不足の頭でツツコミをいれる。そんなこんなで、騒ぎながら二人は学校への道を走っていく。

美琴は上条と別れた後、少し体を休めるため自販機の前に来ていた。

（まったく…。いっつも、あの馬鹿は！だいたい…）

心の中で上条への文句を吐き続けると少し落ち着いたのか、自販機の方へと向き直る。

（少しジュースでも飲んで行こうかな）

すると、美琴はカバンを置いて軽くジャンプを始める。

ここの自販機はバネが緩んでいるため、衝撃でジュースが落ちてくるのだ。

「チェストー！！」

美琴は自販機へと見事な回し蹴りをきめる。

出てきたのは『ヤシの実サイダー』

「ラッキー！」

美琴はそれをすぐに飲みほし、学校へ行こうとする。

すると、近くに長髪を金色に染めた青年がこっちを見て立っていた。

（やっぱ、見られてたんだ）

流石にまずいことをしていたため、冷や汗がでてくる。

すると、男は、「どうした、おれの顔に何か付いているのか？」

美琴は拍子抜けして、「ああ、いえ、別に」そう言うとその場から脱兎のごとく走り去った。

ゼロは自販機を蹴ってジュースを得ていた少女が去った後、今までに得て情報を分析していた。

（おかしい点は三つ。ここには俺の知らないものがたくさんある事、ネオ・アルカディアやレプリロイドが存在しない事、そして、……オレが人間になっている事）

朝、男に言われてからゼロは鏡で姿を確認したり自分で体中を調

べてみたが完全に人間になっているようだった。さらに、幸いにもこの街の文字は読めたためこの事についても調べたが、いずれもゼロの常識を覆すようなことばかりだった。

（オレは一体これからどうすれば…）

ゼロが途方に暮れていると、

「ぐううう〜」

ゼロのお腹が鳴った。

（お腹がすいたな。しかし、エネルギー水晶などありそうにないし、さっき調べたとおりなら何かもらうにもお金というものが必要なはず）

実は先ほど、お金を知らずに物を持っていこうとして追いかけていた。幸いにも物を返して許してはもらえたが。

（今の人間の体ならばもしかしたら人間の食事ができるかもしれないが、お金がなくてはとうしようも…）

その時、ゼロは先ほどの茶髪の少女がお金を入れず、自販機を蹴って飲み物を得たのを思い出した。

（あの蹴りは見事だったが…、あまり良い事には思えんし）

しかし、ゼロの空腹はピークに達していて飲み物でもいいからすぐにでも何か口にしたいかった。

「仕方ない…」

ゼロはそう呟くと、先ほどの少女を真似して自販機へと回し蹴りをきめた。蹴る場所、角度、強さ、すべて先ほどの少女と寸分たがわずに。

ゼロは一回見ただけで少女の蹴りを完全に分析していた。人間の姿になっても戦士としての能力は健在である。

出てきたのは『ハバネロパイナップルジュース』

普通の人ならば、はずれだろうがゼロは気にせずそれを口に含む。

「！！！！」

ゼロの目が大きく見開かれる、そして、

（な、何だ、これは……。飲み物とはこんなに美味しいものだったのか！！）

飲み物なんてレプリロイドには必要なかったためゼロは今まで飲食物を口にした事がなかった。そんな中で初めて食べたこのハバネロパイナップルジュースはまさしく未知の領域であった。

（こんなに飲み物が美味しかったなんて……）

ハバネロパイナップルジュースは飲み物としてはあまり美味しくない部類に入るだろうが、それを知らないゼロは完全に虜になっていた。

そして、ゼロはジュースを飲み終わるとより詳しくこの街の事を調べるためにまた歩き始めた。

新たな出会いと始まり（後書き）

どうでしたでしょうか？

誤字、脱字があれば遠慮せず言ってください。

動き始める運命（前書き）

まだまだ思うようには書けず、だらだらと文章が続いていますがよろしければ最後まで読んでみてください。

動き始める運命

（補習を受けた事がこんなとこで役に立つとはなあ…）

美琴と別れた後、学校に着いた上条は、記憶を失った事を悟られないようにするため、校内の見取り図などの情報を頭の中で反復していた。補習の時に学校には来ているため、学校の情報は頭に入っている。

（ていうか、何度見ても普通の校舎だな。生徒も普通なヤツが多いみたいだし。さすが、環境的に普通を極めし学校だな。まあ、先生には普通じゃない方もおられるが…）

上条がそんな風にぼんやりと考え事をしながら昇降口への道を走っていると、横を明るいい緑色の、丸っこいデザインの軽自動車が上条を追いつめ、先にある駐車場に止まった。

（うお、何だあの車、小さすぎるだろ！一人乗り用かな？しかし、乗り物かー。俺も自転車でも買おうかな？そうすれば、今朝みたいな事にならずに済むし。……あれ、なぜだろう、幻想殺しがあるはずなのに、俺の自転車がなくなる未来が視えたような…。）

そこまで考えると上条は自分自身がかわいそうに思えてきて思考を中断すると、

ふと気づいた。

その車から出てきた小さな子供に。

「そんな馬鹿な！？小萌先生じゃ、アクセルにもブレーキにも足が届かないはずなのに！！！」

「とっ、届かなくなっちゃって運転できるんですーっ！」

上条の声を聞いた小萌先生はすぐに叫び返した。

その子、もとい先生の名は月詠小萌。上条のクラスの担任教師にして立派な『大人』である。見た目が完全に小学生な彼女の存在は学園七不思議にまでなっていた。

（ああ。確かに、あれなら小萌先生でも何とかかなりそうだな）

彼女の乗っていた小型車は特殊でゲームのコントローラのようにボタンを使ってアクセルとブレーキを制御できるタイプのものだった。

(…あれなら俺たち生徒の方がうまく運転でいるんじゃないのか?)

「てっ、上条ちゃん!何ですか、その顔はー!

上条はまた乗り物の事へと思考をシフトさせていたが、小萌先生の声に現実へと引き戻される。

「ああ、すいません、ちょっと考え事を」

「もしかして、また背後からこっそり近づいて先生の事を高い高いするための作戦を練ってたんですか!？」

「何でだよ!アンタの中では俺はそんな事を真面目に考えるヤツっていう評価受けてんのかよ!？」

もしそのような評価を本当に受けているなら上条は危ない人と思われるわれていても不思議ではない。

「ぶーっ。別にそういう訳じゃないですけど…」

上条と小萌先生は大声で言い合いながら校舎への道を歩いて行く。小萌先生は小走り、上条は早歩きではあったが、小萌先生は生徒に挨拶されるたびに立ち止まっているため、すぐに上条に追いつかれている。

「ところでそのクリアファイルの中身の紙束って何なんですか?言っときますけど上条さんは抜き打ちテストなんてされたら全然解けませんよ」

「上条ちゃんは何を自分で勉強不足をアピールしてるんですか!それに先生は学生時代にやられて嫌だと思った事はやりません。これは大学時代の友人から論文の資料集めをお願いされてましてそっちのお手伝いなのですよー」

「大学時代。…:…:そっか、やっぱりこの人、大人なんだよな…」

「上条ちゃん?」

ぶつぶつ呟いている上条に、小萌先生は小首を傾げる。

「ちなみにどんなもんなんですか、論文とかって」

「AIM拡散力場の話です。上条ちゃんももう少ししたら勉強するんですけどねー。簡単に説明すると能力者が体温みたいに自然に発してしまう力のフィールドのことです。能力の種類によってAIM拡散力場は異なっていて、パイロキネシス発火能力なら熱量、テレキネシス念動力なら圧力を周囲に展開してしまうといった具合ですねー。もっとも、精密機器を使わなければ計測できないぐらい微弱なものですけど」

「なるほど、とりあえず御坂の体から微弱な磁場が漏れてるようなものと考えとけばいい訳か」

「そのミサカさんが誰かは知りませんがその通りです。…ミサカ？いや、あの、まさかですよ」

そんな話をした後、上条は小萌先生と別れると、意を決して昇降口へと向かう。

記憶を失った上条にとってはここからが本番なのだ。

同時刻。

ゼロはあてもなく街中を歩き回っていた。

（先ほどのロボットはメカニロイドのようだったが、あれは……）

ゼロの言うメカニロイドとは学園都市中に配備されている掃除用ロボなのだがそんな事をゼロが知る由もなく、

（メカニロイドがいるのなら、やはりどこかにレプリロイドもあるのか？）

レプリロイドよりもメカニロイドの方が技術的に下なのでメカニロイドがいたからといってレプリロイドもいるとは限らないのだが、ゼロは混乱していつものような冷静な考えができなくなっていた。

「まいか！次はどっちへ行けばいいのかな？」

交差点に差し掛かったところでなんだかひときわ大きな声が聞こえてきた。

「ほんとに行くのかー？上条当麻もあんまり喜ばないと思うぞー」
「だってだって！とうまったら今日のお昼ごはんを用意せずにガッコーに行っちゃったんだよ！？このままじゃ、お腹がへって死んじゃうかも！」

修道服を着た銀髪のシスターと先ほどと同じタイプのメカニロイドの上に乗った奇妙なメイドさんが横断歩道の向こうで騒いでいた。
（何だ、あの二人は？昔、ペロケに見せてもらったデータの中にあんな格好をした人間が乗っていたが…）

今まで、見てきた人たちとは、二人ともまったく違う格好をしていた。ゼロも修道服とメイド服をそれぞれ二人が来ているのはわかる。だが、街を歩いていてシスターやメカニロイドに乗ったメイドなど一人もいなかった。

（まあ、人それぞれという事か）

考えてもわかりそうにないので、そこで考えるのをやめ、少女たちの話に耳を傾けてみる。人間の姿でもゼロの聴力は人間をはるかに越えていた。ただ本人にその自覚はないのだが。

「せめてとうまに、お昼ごはんをどうするのか聞きたいんだよ！」

（どうやら、話を聞く限り、向こうもお腹がすいているようだな）

だんだんとこちらへ歩いてきながらも騒ぎ続けているシスターに同情もまなざしを向ける。ジュースを飲んだとはいえ、ゼロもまたお腹をすかせていたからだ。

（残念ながらオレには何も出来ん。あの子が無事、食事にありつけるように祈っておこう…）

二人がゼロの横を通り過ぎ、姿が見えなくなると、ゼロはまたあともなく歩き始めた。

（くそっ。やっぱり、そううまくはいかねえか）

上条が教室のドアを開けると、目に飛び込んできたのは上条の望んだものとはかけ離れたものだった。

クラスの中は生徒も全員揃っておらず、なおかつ誰も席に座ってはいなかった。

（皆が座ってくれたら、楽だったんだけどなー）

そもそも不幸な上条にそんな事があれば一大事なのだがそう思わずにはいられない上条である。

「んー？どしたんカミやん。まさかここまで来て夏の宿題全部ウチに忘れてもうたー、なんて愉快に不幸な事実が気がついたとか？」

今の上条が知っている二人の友人の内の一人、青髪ピアスがどうやら教室にいたようで、突っ立っていた上条へ話しかけてきた。

「へ？いや、そういうわけじゃ……」

そこまで言って、青髪ピアスの言うとおり宿題を忘れてきているので反論ができなくなる上条、すると、

「お！上条！お前も宿題忘れたのか！」

「上条君、その、本当に忘れちゃったの？」

「よっしゃあああ！これで俺たちは救われる！！」

「ああ！どうせ先生の注目浴びんのは不幸な上条だけだからな！！」
色めき立つクラスメイト達に上条はうんざりした顔になる。

（父さん……。アンタの悩みなんてどうせこんなものなんですよ……）

上条のこの扱いを真剣に悩んでいる彼の父親には悪いが上条にとってはコミカルな日常の一部なのである。

「ていうか、こんなに宿題やってないヤツいんのかよ？」

昨日、宿題について一日中悩んでいた時間を返してほしくなるような光景に、上条は頭が痛くなってくる。

「そうやで、カミやん。ちなみにボクなんか小萌先生に怒られるた

めだけに、宿題終わってんのに取えて全部忘れてきましたよ？」

「小萌先生の泣き顔が目には浮かぶんだが……」

とりあえず日常会話(?)がいったん済んだところで自分の席に着こうと思い、上条は、

「ああ悪い。ちょっと俺の机の中からノート取ってきてくんない？」

「別にええけど……。何やの、カミヤン。終業式ん時に置き忘れたん？」

青髪ピアスは割と素直に従って、窓際の後ろの方の席へと歩いて行く。

(なるほど、あそこが俺の席な訳ね)

「なーカミヤン。ノートなんてどこにもないんやけどー？」

「あれ？おかしいなあ。そこじゃなかったっけ？」

上条は青髪ピアスに適当な返事をするに席に座って、世間話を始める。

しかし、青髪ピアスと話しつつも上条は別の事を考えていた。

上条には思い出がない。だが、今では新たな思い出ができていている。それはすなわち記憶喪失というハンデがなくなりつつあるという事だ。

だが、それで上条は救われても、あの白い少女は救われない。

あの少女の大切にする時間を上条が取り戻すことはないのだから。

「……、」

「カミヤン？、おーい！」

「ん？あー、悪い、ちょっと疲れてて」

青髪ピアスの声で我に返ると、彼は偽りの織りなす世界へと戻っていく。

ゼロは路地裏にいた。

まわりを七、八人の男たちに囲まれて。

全員、いかにもといった感じの不良ばかり。

(……来る道を間違えたか)

ゼロは大通りを一通りまわり終えたので今度は裏道を歩いてみようとしたりしたが、レプリロイドの姿でなくとも彼は十分目立つ。裏道に入っただけで彼を見つけた不良たちに囲まれてしまったのだ。

とりあえず、ここが自分のよく知る場所ではない以上あまり騒ぎは起こしたくないゼロ。囲まれているので逃げ出すわけにもいかず困っていた。

そんな、彼を見て怯えていると判断したのか、不良たちのリーダーのような男が話しかけてきた。

「おい、兄ちゃん。今は学校の時間だろ。お前みたいなヤツがこんなところ歩いてたら危ねえぜ。わかったら、有り金置いて、さっさとお家に帰んな！」

別に男たちなんてこれっぽっちも怖くはない。今まで命をかけた戦場で戦い、生き抜いてきたのだ。当然である。

が、ゼロは無駄な騒ぎは起こしたくない。よって、お金があれば別に渡してもいいのだが、あいにく一銭もありはしない。

「わるいが、オレは今、一円もお金を持っていないんだ」

ゼロは素直に事実を述べただけなのだが男たちにはあまり良い印象を与えなかったようで、

「じゃあ、ちよっと俺たちの相手になってくれよ。体を動かしたい気分なんだ」

男たちはゼロが金を持っていない事を知るとゼロをいたぶることにした。

「…それならいいだろう。どうする？全員同時に相手してやろうか？」

ゼロはなぜか相手を挑発するような態度を取り始める。もちろん、男たちがこれに黙っているはずもなく、

「なめてんじゃねえぞおお!!」

リーダーの男がゼロの顔に拳を叩きこむ。しかしゼロはそれを一歩右に移動して避けるとがら空きになった男の顎にアッパーをきめる。

男は吹き飛ばされ、数秒宙に浮き、地面に叩きつけられた。

「なっ!?! お前、能力者だったのか!?!」

それを見た他の不良たちは瞬時に実力を悟ったらしく、リーダーの男を担いでその場から逃げていった。

「能力者?」

逃げていく不良たちを見ながら、ゼロは静かに呟いた。

「しかし、この程度で終わりとは。体を動かしたいと言ったのは向こうの方だというのに。」

ゼロがなぜ相手を挑発するような態度をしたかというところ、ゼロとしては相手の言葉からこれは争いではなく、ウォームアップやスポーツに近いものだ判断していたからだ。さらにゼロはこれで自分分がどれぐらいの運動能力なのかを測るつもりでいた。こうなると、さすがに不良たちが哀れになってくる。

「まあ、今のオレがどこまで力が出せるかわかっただけでも良しとするか。ん?」

人間の姿でもやはりゼロの身体能力は明らかに異常だった。しかし、ゼロはそれを気にするまでもなく地面に落ちている物を拾い上げる。

「これは…財布か? だとしたらさっきの奴等の…」

そこまで考えが至るとゼロは男たちの逃げた方向へ走りだした。

「はいはい、それじゃあさっさとホームルーム始めますよー。始業式まであまり時間がありませんからねー」

小萌先生が教室へ入りホームルームが始まる。

「ありゃ？先生、土御門は？」

「お休みの連絡は受けてません。もしかしたらお寝坊さんかもしれませんねー」

上条の問いに、小萌先生は首をかしげながら答えた。

「ところで！出席を取る前にクラスのみんなにビッグニュースですー。何と今日からクラスの仲間が一人増えるですー」

転校生の話題にクラスのみんなが小萌先生に注目する。

「ちなみにその子は女の子ですー。おめでとう野郎どもー、残念でした子猫ちゃん達ー」

「「よっしやああああ！！」「」と、クラスの面々が色めき立つ。

そんな中、上条は一人、何かいい知れぬ嫌な予感に襲われていた。
（ありえない、俺の日常において普通の転校生が来てくれるなんて幸運は！！！）

このイベントにおけるオチを上条がひたすらに考えてる中、

「とりあえず、転入生ちゃん、どーぞー」

小萌先生が転入生を教室へ招き入れる。上条がそちらへ視線を向けると、

そこには、三毛猫を抱えた白いシスターが突っ立っていた。

「なぼあっ……！！！」

これには流石の上条も予想外だった。

クラス中に困惑した空気が満ちていく中、インデックスだけはいつも通りに、

「あ、とうまだ。よかった、ちゃんととうまがいてくれて。ここま
で案内してくれたまいかには後でお礼を言っておいた方がいいかも」
彼女の言葉を聞き、クラス中の視線が上条へ集中する。

彼らの目は語る。またテメエか!!

「ふえっ!? な、なぜ、シスターちゃんがここにいるんですか? ?
転入生はあなたじゃないでしょう!? ほら出てった出でったですー
っ!

「へ? こもえ、私はとうまにお昼ごはんの事を……」

インデックスは何か言おうとしたが小萌先生に押されて教室から
追い出されてしまった。

上条は追いかけようにも小萌先生の必死さに追いかける事が出来
なかった。

すると、彼女たちと入れ替わりのように、長い黒髪の少女が入っ
てくる。

「ちなみに。本物の転入生は私。姫神愛沙」

少女はかつて上条が助けた知り合いだった。

「何だ、姫神だったのか。よかったー」

「何だとは失礼すぎる気がするけれど」

安堵する上条とは対照的に姫神は少し怒っているように答えた。

教室から追い出されたインデックスはむくれながら廊下を歩いて
いた。

(……とうまがとんでもない顔をしてた)

彼女は先ほどの光景を思い出しながら、口をへの字にする。先ほ
ど教室で上条が見せたあからさまな『拒絶』の表情は一緒にいたこ
の一ヶ月ではじめてのことだった。

彼女が胸の中にあるモヤモヤしたものをどう処理していいか迷っている、今度はお腹が減ってきた。

その時、ちょうど彼女は食堂の前に差し掛かっていた。

こうなれば、肉を目の前にぶらさげられたライオンである。

彼女は食堂へ入ると部屋の隅には職食券販売機の機械が三つ並んで設置されていた。

（む、あれがマンガにあった、お金を入れてボタンを押すと食べ物の引換券みたいなのが出てくるヤツなんだね）

学園都市で得た知識をもとに販売機の前に立ち、小萌先生にもらった交通費を入れると食券を買おうとする。

（ふふん。とうまは私を時代遅れとか言うけど、わたしにだってこれくらいできるんだよ。…あれ？）

彼女はボタンを押そうとしていた指をピタリと止めた。

（ボ、ボタンがどこにもないんだよ！）

その販売機はボタンではなく、タッチパネルとなっており、いつもテレビを見てモニターには触れないと思っているインデックスにはモニターに触れるという考えはなかった。

学園都市における知識がついてきたといっても、インデックスの常識は根本的に科学とは違うのだ。

（うう。お、お金を取り出そうにも取り出し方もわかんないんだよ）
取り消しボタンももちろんモニターにはあるのだがインデックスにはそんな事はわからない。

「う、うううう。まるでとうまみたいな不幸っぷりかも……」

インデックスが絶望にうちひしがれていると彼女の肩が、何者かに叩かれた。

上条は始業式をすっぱかして校内を走りまわっていた。
インデックスを探すためである。

（ああ、もう！どこにいんだよ、アイツ！）

すでに始業式は始まっている時間で上条としてもこれからの学生生活のために始業式に出ておきたいのだがそういうわけにもいかなかった。

その時、どこからか聞き慣れた声が入ってきた。

（ん？この声は、……敵機補足、識別はバカシスターっ！！）

そう考えると上条は声のした部屋、……保健室へと突入する。

「おいインデックス！お前が何で保健室にいるんだよ！！保健室にはご飯なんて置いてあるわけねえだろうが！！」

上条は本気で説教するつもりで突入したのだが、

飛び込んできたのはインデックスと見慣れない少女の着替えシンだった。

二人とも服装が学校のものではなかったため、体操服に着替えて怪しまれないようにしようと保健室へやってきたのだった。

インデックスは口の端をひくつかせながら、見慣れぬ少女は今にも泣きそうな小動物みたいな目で上条を見ている。

上条は身の危険を感じると、

「……………えーと、これはお前の声が聞こえたからであって、決して覗こうとしたわけではなく、つまり、その、すいません！！間違えまーとおおおうううまああああ！！」ひいいいいっ！

一瞬の後、校舎中に悲鳴と怒号が響き渡った。今が始業式の最中でなければ大騒ぎになっていたのは間違いない。

上条はひどくご立腹だった。

着替えを目撃したのは悪かったが、本来インデックスはここに来てはいけない人物。それなのに、学校に来て、上条が始業式にも出ずに探し回るはめになり、さらには噛み付かれたのだ。ここまでされて、文句を言わないほど上条もできた人間ではない。

そんなこんなで、結局元の服に着替え直した二人の少女と一緒に食堂にやってきている。上条とインデックスはムスツとした顔のままで、見知らぬ少女だけがそんな二人の様子を見てオロオロとうろたえている。

上条は寝不足と不機嫌が重なった低い口調で、

「で、インデックス。そっちの子は誰？」

彼が言うと、何故か見知らぬ少女の方がビクリと肩を震わせた。

そんな彼女とは対照的に、インデックスは無然としたまま、

「よくわかんない。でも友達」

「よくわかんないって、なんだそりゃ！」

「よくわかんなくてもひょうかは友達だもん！」

『ひょうか』と呼ばれた少女は彼らが大声を出すたびにビクビクと小動物みたいに震えていた。

「えーと、わ、私は……風斬氷華って、言います……。あなたは？」

風斬氷華と名乗った少女はフレームの細い知的なメガネをかけていて、わずかに茶色の混じった黒髪を太ももぐらいまで伸ばし、それとは別に頭の横からゴムで束ねた髪が一房、伸びている。来ている制服はどこのものかはわからないが少なくともこの学校のものではない。

こんな子がなぜインデックスと関わることになったのか疑問に思う上条だが、気にせずに答えた。

「ああ、上条当麻だ。よろしくな」

上条の名を聞くと、何故か風斬の肩がビクリと震えた。

それを見たインデックスは、

「むっ！とうま！ひょうかを怖がらせちゃだめなんだよ！！」

「いや…、別に俺は何もしていないんだが…。…やっぱり俺ってそういう目で見られてるのかな…。」

「?、どうしたの、とうま」

上条は否定しつつも心の中で涙を流していた。

上条は気持ちを切り替えると、

「それで何でお前は学校にいるんだよ？」

「む、そうだよ、とうま。私のお昼ご飯はどうするつもりだったの！何にも用意しないまま出て行っちゃって！」

「今日は始業式だから昼までには帰れるっつーの！」

「そんなこと知らないもん！」

「知っとけよ！これぐらい常識だぞ！」

「とうまの常識をこっちに押しつけないでほしいかも！じゃあ当麻は分かる？イギリス仕込みの十字架に天使の力を込める偶像作りのための儀式上における術式を行うときの方角と術者の立ち位置の関係とか！実際、メインの術式の余波から身を守るための防護の魔法陣を置く場所は厳密に定められていて、そこから少しでも外れるとサブ的な防護はメインの術式に食われてうまく機能しなかったりするんだけど、とうまはそういった黄金比は分かるのかな？ほらほら、こんなの常識だよ！」

「ま……まーまー……」

その後も、風斬が仲裁を入れながらも二人の喧嘩は小萌先生が上条を探しに来るまで続いた。

小萌先生に上条が攻められている中、三人が気づいた時にはいつのまにか風斬氷華はいなくなっていた。

「……、とうま。怒ってた」

立ち去ったはずの風斬と再会したインデックスは校門近くの金網

のフェンスに寄りかかって、会話をしていた…、というよりは、風斬に悩みを聞いてもらっていた。

「今までだって何度もケンカした事あるけど、なんか今回は違う気がする。当麻は全然私の言葉を聞いてくれないし、ずっと怒ったまんまだし、ちっとも笑ってくれないし……」

そこには先ほどまで彼女が一度も見せなかった悲しそうな顔があった。

「とうま。私のこと嫌いになっちゃったのかな」

インデックスは視線を落とした。

そんなインデックスを見て風斬は小さく笑った。

「……、大丈夫。ケンカできる友達って……すごく仲がいいって証なんだから」

「どうして？ケンカすると傷つくんだよ。乱暴な言葉を言われると痛むんだよ。仲が良い人ならそんなの押し付けたりしないよ、絶対」
「ケンカができる友達っていうのはね……」風斬は静かな声で、「ケンカをしても……ちゃんと仲直りができる友達なのよ。それっきりで、終わらないの。」

「じゃあ、私とうまは仲直りできるの？」

「……うん。あなたがあの人とずっと一緒にいたいと思ってるのなら」

「私はずっととうまと一緒にいたいよ」

「そう思えるなら……絶対、あなた達は大丈夫……。あの人がどんな人かはあなたが一番よく知ってるでしょ？」

風斬がそういうとインデックスは嬉しそうに頷いた

上条はお金を引き出すためにコンビニに来ていた。

小萌先生の説教から解放された後、インデックスと風斬に合流し

た上条は、朝の約束通り、風斬も誘って遊びに行く事にしたのだが、お金をおろしていなかったのだ。

ATMの前で財布を無用心にも出しっぱなしにしていたため、女性アンチスキルの警備員に注意され、その警備員アンチスキルが自分の学校の先生かもしれない、と考えを巡らせていると、服を何者かにチヨイチヨイと引っ張られた。

彼が振り返ると、そこに姫神が立っている

「姫神？こんなところで何やってんだ？」

「……。人が転校してきたというのに。その淡泊な反応は何？」

「あー……。別にそういう訳じゃ……」

「そう。やっぱり。私は影が薄い女なのね」

ものすごく落ち込んでいる姫神に何と声をかけようか悩んでいた上条だが、不意に姫神は顔をあげると、

「それより、ちょっと耳に入っただけど。あのメガネの女の名前って。風斬氷華でいいの？」

風斬の方を向いてそんな事を言ってきた。

ゼロは財布を落としていった不良たちを追いかけて街中を走っていたのだが、

「一体、どこへ行ったんだ？」

不良たちが逃げてから随分時間がたっているため不良たちはまったく見つからなかった。

（誰かに尋ねてみるか……）

ゼロは近くにいた少女に、不良たちを見なかったか尋ねる事にした。

「少し聞きたい事があるんだが」

「えっ、あっ！はいっ、何ですか？」

その少女は話しかけられて少し驚いたようだったが落ち着くと元氣そうな声で答えた。

「こっちの方に男が七、八人来たはずなんだがどっちへ行ったか見てないか？」

「えーと、それならあっちの地下街の方へ行ったと思いますけど」

「そうか、時間をとらせて悪かったな。ありがとう」

それだけ言うとはゼロは走ってその場から立ち去って行った。

ゼロが見えなくなると同時に、

「佐天さー！ーん！！」

少女を呼ぶ声が聞こえた。

「遅いよ、初春」

「すいません、ちょっと、用事があって」

少女たちがそんな会話をしていると、初春と呼ばれた少女の携帯が鳴った。

「あっ、もしもし、白井さん？どうし……。え？はい、はい、わかりました」

初春は携帯をしまうと、

「すいません、佐天さん。ジャッジメント風紀委員の仕事が入っちゃって。今日の買い物は……」

「はいはい、分かってるって。行っておいで、初春」

「ありがとうございます、佐天さん」

そう言って初春が行こうとすると、

「ああ、忘れてた。えいっ！」

佐天は初春のスカートを大きくめくり上げた。

「！！！！、な、何するんですか、佐天さん！！」

「いやー、まだ今日の初春のパンツ見てないな、と思って」

「そんなこと思わないでください！思ってもやらないでください！」

「それより行くよ、初春」

「え？」

「私は大したこと出来ないけどお茶を出すぐらいはできるからさ」
佐天の言葉を聞くと初春も佐天と一緒に走りだした。

「それで何があったの？」

「それが、今日外からの侵入者が二人いて、その一人に白井さんが接触したんですが、その人、外部の人間なのに能力者のようなんです」

「えっ！？何で外部の人が？」

「わかりません、ただそれで白井さんは取り逃がしてしまったようで、居場所を特定してほしい、と」

二人はそれだけ言うと、何も言わずに走り続けた。

地下街に来て学食レストランで食事を済ませた上条たちはゲームセンターに来ていた。

といっても誰かから電話があり、地下街ゆえに電波が悪かったためあまり聞こえなかったのだが、その間にインデックスたちはジュースを買いに行っていた。

「うーん、何だったんだ？」

携帯をしまうと、インデックスたちを待つ間、上条は姫神に言われた事を思い出していた。

カウンターストップ

『風斬氷華は『正体不明』と呼ばれている。いわく、風斬氷華は。虚数学区・五行機関を調べるための鍵だ』

姫神の話によると風斬氷華は霧ヶ丘女学院という名門校でも最も

珍しい能力を持っていながら誰もその姿を見た事がなかったらしい。
しかも、風斬は自分を転入生と言っていたが、転入生は姫神一人だという。

（一体、あれはどういうことなんだ？）

姫神が嘘を言っているようには見えなかった。

『気をつけてね』

小萌先生に呼ばれたからと去っていった姫神の最後の言葉が上条の頭の中に響く。

ふと、インデックスたちが戻ってきていない事に気付いた。

（迷子……なわけねーよなあ）

とりあえず、念には念を、という訳で上条は二人を捜してみる。

「おい、インデックス、風斬？」

そのまま上条は店の奥にたどりつく。

「どこに行ったんだ？」

すると、「早く早く！ ひょうかも着るんだよ！」

「本当に…着るの？」

自販機の裏手から聞きなれた声が聞こえてくる。

上条がそちらにまわってみるとカーテンで仕切られた試着室らしきものがあった。

（もしかして、ここではコスプレをしたりして写真が撮れるのか？）

上条はそんな事を考えていたが、このままここにいても埒が明かないので、保健室の二の足は踏まぬように声をかけてみる。

「インデックス、そこか？」

瞬間、『ひぁ！？』『きゃあ！！』という、短い悲鳴が返ってきた。

といっても、上条もそこまで馬鹿ではない。

「あー、大丈夫だ、インデックス。上条さんはお前らのためにも自分のためにも一度ここから撤退しておくから」

「あ、うん。分かった、とうま。また後でね。」

そのまま、上条は宣言通り、その場から離れようとする。すると、すとな、と。

何の前触れもなく、いきなりカーテンが真下に落ちた。

「は……？」

もともと、乱暴な扱いを受けて斜めに傾いでいたカーテンレールが外れてしまったのだ。

となると、上条の目の前に広がる光景は…、

「何をこっちを向いているのかな、とうまあああっ！！」

インデックス達はインデックスの好きなアニメのキャラクターに着替えようとしており、またも着替えを見られた二人は本気で怒っていた。

「ま、待て。インデックス。この距離じゃ何も出来る訳ないだろ！！」

「でも、こっちを向いてたよね、とうま。覚悟、できてる？」

その後、インデックスと風斬は二人仲良く写真を撮っていた。物陰で、ボロ雑巾となった上条当麻をしり目に…。

上条たちがゲームセンターで遊ぶ少し前、

「……まずは、原書に土」

学園都市への侵入者、魔術師シェリー・クロムウェルは街を歩いていた。

「……神は土より形を作り、命を吹き込み、これに人と名をつけた」

シェリーは歌うように呟きながら、白いチョークのような魔法陣作成のためのオイルパステルを取り出し、手近なものにオイルパステルを走らせる。

「……その秘法はやがて、地に落つる墮天によって人へと口伝される」

シェリーは文字と模様の中間のようなものを進路上にある全てのものへとオイルパステルを走らせる。

「……しかしてその御業は人の手に成せるものにあらず、また墮天の口で正しく説明できるものにもあらず」

七十二ほど印を刻むと、彼女は中にオイルパステルを走らせ、

「……かくして人の手に生み出されし命は腐った泥の人形どまり、と。さて、泥臭いゴーレムⅡエリス。私のために、笑って使い潰されな」

最後にパン、と手を打った。

瞬間、シェリーの描いた落書きのすべてがピンポン玉ぐらいの大きさの眼球に変わる。

シェリーは葉書サイズの黒い紙を取り出す。

「自動書記。標的はこいつでいいか。……ちっ、名前が分かんないわね。まあ、別にいいか」

シェリーはその紙に標的の名前を書くと、その紙を手放す。

すると、まるで魚のように眼球が黒い紙へと押し寄せ、紙切れを食べて、泥の体内へと収めていく。

食べ終わると無数の眼球たちはゴキブリのように四方八方へと散らばった。標的：『風斬氷華』を捜すため。

「あまり待たせんよ。エリス」

シェリーは笑って雑踏の中へと消えていった。

『見いつけた』

今、上条たちの前には眼球があった。というより、壁から生えていた。

ゲームセンターを出たところで上条たちは風紀委員ジャッジメントから非難するように指示を出されていた。なんでも、この地下街にテロリストが紛れ込んだというのだ。

よって、おとなしく立ち去る事にした上条たちだったのだがその声は急に響いてきたのだ。

それは女の声だった。

『うふ。うふうふうふ。禁書目録に、イマジンプレイカー幻想殺しに、虚数学区イマジンの鍵。どれがいいかしら。どれでもいいのかしら。くふふ、迷っちゃう。よりどりみどりで困っちゃうわあ』

それだけ言うと、煙草か何かで喉を潰した歌姫を連想させる、退廃的な声は一転、

『ま、全部ぶっ殺しちゃえば手っとり早えか』

場末の酒場でも聞かれないような粗暴な声色へと切り替わる。

上条もあまりの事に頭がついていなかった

「土より出でる人の虚像……これはゴーレムだね。しかも…」

そんな中、インデックスだけは落ち着いてこれを魔術師によるものだと分析していた。

しかし、上条にはインデックスの言っている事がまったく理解できない。

(あれが…、ゴーレム?)

上条はインデックスの話を聞き終えると、

「つてことは……この魔術師がテロリストさんって訳か」

『うふ』と、泥は笑う。『テロリスト? テロリスト! それってこういう真似をする人たちを指すのかしら?』

泥と眼球が弾け、消えた瞬間、

がごん!!と。地下街全体が大きく揺れた。

上条たちはよろけながらもなんとか体勢を維持する。

さらにもう一度地下街全体が揺れる。

すると、いきなり全ての照明が同時に消え、非常灯の赤い光だけが薄暗く周囲を照らし始める。

今度は、低く、重たい音が響き始めた。

予定よりも早く、隔壁が下され始めたのだ。そして、完全に隔壁が下りる。

地下に取り残されたものはすでにパニックに陥っていた。

『さあ、パーティーを始めましょう————』
グチャリとつぶれた泥から、女の声が聞こえた。

『————土のかぶった泥臭え墓穴の中で、存分に鳴きやがれ』

さらに一度、一際大きな振動が地下街を揺らした。

「……、向こうはこっちの顔を確かめてから襲ってきたみたいだし、迎え撃つしかなさそうだ。インデックス、風斬とどこかに隠れてろ」
地下街という限られた空間では、敵がこちらの命を狙い、そして逃げる事も出来ない以上、取る道は一つしかない。

すると、三毛猫を抱えるインデックスは頬を膨らまして、

「どうまこそ、ひょうかと一緒に隠れてて。敵が魔術師なら、これは私の仕事なんだから」

どちらもお互い相手の事を心配するが故に、どちらが戦うのか言い争っていた。

入るスキもない風斬はただオロオロするばかり。

と、次の瞬間、手近な曲がり角からカッンという足音が聞こえた。

「!？」

上条はインデックスと風斬を、インデックスは上条と風斬を庇おうとした、……結果、お互いの体がぶつかって、上条とインデックスはもつれて勢いよく転んでしまった。

インデックスの腕に押しつぶされそうになっている三毛猫、スフィンクスが苦しそうに鳴く。

すると、足音と共に女の声が飛んできた。

「あら？猫の鳴き声が聞こえますわね」

「黒子。アンタ動物に興味ないんじゃないの？」

「かくいうお姉さまは興味がありませんでしたよね」

「べ、別に私は……」

上条にはその声に聞きおぼえがあった。

（あれ、この声……。まさか……）

曲がり角から現れた二人の少女は、床に転がっている上条とインデックスの姿を発見して足を止めた。

二人の少女は御坂美琴と、その後輩、白井黒子。

言うまでもなく、彼女たちは敵ではない。

とりあえず、上条はてきではなかったと胸をなでおろした。

同時刻

ゼロもまた、地下街へと取り残されていた。

（テロ……だと？それにさっき頭に響いてきた声は一体……）

頭に響いてきた声とは風紀委員による念話能力^{ジャッジメント}なのだがそんな事を彼が知るはずもない。

「とりあえず、事情を知っていそうなヤツを捕まえて話を聞いてみるか」

ゼロがそう言って歩き出そうとした瞬間、

「^{アンタ}どうま！私の見てない所で何やってたか説明して欲しいかもっ
！」^{もらうわよ}

ゼロの耳に一際大きな声が聞こえてきた。

（どうやら、あっちに人がいるようだな）

ゼロは声の主たちが何か知っているかと判断し、声のした方向へと走りだした。

（ひいっ！な、何でこの二人は妙に殺気立っているんだ！？）

上条は会った瞬間に不穏な空気を発し始めたインデックスと御坂に詰め寄られていた。

風斬はもう一人の少女、白井へ助けを求めようと目を向けるが、そこには恐ろしき形相を浮かべた白井が立っており、仲裁をしてくれそうにはなかった。

「どうま、早く言って欲しいかも！！！」

「さっさと白状しなさい！！！」

「ちょっ、待ってください！！上条さんは」

タタタタッ！！

その時、こちらへ誰かが走ってくる音が響く。

瞬間、風斬以外の全員は戦闘態勢をとると音のしている方向を向く。

そして、曲がり角から音の主が姿を見せる。

それは……。

声が近くなりだんだんと鮮明になってくる。

（この先か…）

ゼロが曲がり角を曲がるとその先にいたのは……。

「「お前は……！」」

右手に幻想殺しイマジンプレイカーを持つ少年と赤き異世界レプリロイドの英雄
二人の運命が交わる時、物語は動き出す。

動き始める運命（後書き）

次の投稿は少し遅くなってしまいました。すいません。なるべく早く書けるように努力します。

開戦（前書き）

すいません。前回あとがきであんなこと言いながら、意外と早く、書けちゃいました。

開戦

「「お前は……!!」」

「今朝のイケメン!」

「あの時のツンツン頭か!」

閉ざされた地下街の一角で二人の男がお互いを見ていた。

一人は上条当麻。学園都市の無能力者にして右手に幻想殺し^{レベル0}を宿した少年。

もう一人はゼロ。こことは違う異世界を救った伝説の英雄であるレプリロイド。

朝、一度会っただけだというのに、二人ともなぜだか、相手の顔を強烈に覚えていた。

「って! 何だよ、ツンツン頭って! ? お前、俺をそんな風に認識してたのかよ!」

「ああ。あいにく、オレはオマエの名前の知らないんでな」

ゼロは悪びれもせず答えた。

「そういえばそうだな。悪い名乗りもせず。俺は上条当麻だ」

「いや、あの時、話しかけたのはオレだ。本当ならばオレが先に名を名乗るべきだった。すまない。オレの名はゼロ。よろしくな、上条」

「ああ、こちらこそ、ゼロ」

「ちょっと! アンタ何一人急に現れたヤツと仲良く自己紹介なんてしてんのよ!」

上条とゼロが話していると上条の後ろから美琴の声が響く。

「それで、とうま。この人は一体誰なの? 知り合いつて訳じゃなさそうだけど…」

インデックスも続けて疑問を口にする。

「ん。ああ、朝にこの人に少し話しかけられたんだ」

上条の答えに二人は首を傾げる。

「じゃあ、何でそんなにその人と親しそうなの？」

「何でって言われてもなー……。なんとなくこの人とは気が合いそう
な気がしたんだよ」

「「何、ソレ……」」

二人が軽く呆れていると、

「ところで、そのシスターはご飯にありつけたのか？」

唐突にゼロがインデックスへと話しかけてくる。

「ほえっ？ う、うん。食べれたけど……。どうしてあなたがそんな
事を知っているの？」

インデックスの疑問はもつともであった。彼女は完全記憶能力を
持っているのだがゼロに見覚えはなかった。ただ、それはインデッ
クスが昼ごはんの事ばかりを考えて、舞夏の方を見ていたため、視
界に入らなかったというだけの事なのだが。

「街を歩いているとき、オマエがロボットのの上に乗ったメイドと共
にいて、騒いでいたんだ。声が聞こえてきたんだ」

今までの状況下からメイドの乗っていたものをメカニロイドと言
わず、ロボットというゼロ。今までメカニロイドという言葉をもっ
たく見かけなかったので使うのを控えたのだ。

「……お前。学校来るまでにどれだけ目立ってたんだよ……」

「そっ！ それはお昼ごはんの事を言っていかなかったとうまが悪い
んだよ！！」

そんなゼロの考えなど知らず、またも食堂の喧嘩の続き上条とい
ンデックスが始めそうになったところに、

「なっ、お昼ごはんってどういう事よ！？ 一体、アンタこの子と本
当にどういう関係なの！？」

お昼ごはんというワードに目ざとく反応した美琴が乱入してくる。

「あ、えっ、えーっと、それはですねえ……」

思わぬ美琴の問いにあわてる上条。もしも、インデックスが上条
の家に住んでいると知ったら電撃の嵐が来るのは間違いない。たと

え、それを逃れたとしても、ここには白井や風斬もいるのだ。もしかしたら、社会的な死が待っているかもしれない。

風斬が何もできずに上条たちの様子をビクビクしながら見守っている、

「みなさん、それどころじゃありませんわよ」

上条を救ったのは、意外にも白井の一言だった。

「言いたい事は全員あるでしょうが……もちろん私も含め————」

白井はそこまで言う、と上条を鬼も逃げ出すような顔をして睨みつける。上条は思わず一歩後ろに下がってしまった。

そんな上条の様子を見ると、白井は話を続ける。

「ですが、テロリストはすぐそこまで迫ってきております。まずはここを離れるのが先決ですわ」

白井の言葉を聞くと全員が黙る。そんな中、

「それで、これは一体何が起きているんだ。説明してくれないか？」
未だ状況をよく知らぬゼロだけは白井達へと説明を求めた。

「……ええ。まあ、いいですけど」

全く状況を分かっていないようなゼロの言動に訝しみつつも、白井がゼロへと簡単に説明しようとしたその時、

「あの……、ちょっといいか？」

上条が手を挙げて白井の言葉を遮った。

「……つまり、またアンタは何かめんどくさい事に巻き込まれてるわけね」

上条は美琴や白井、そしてゼロに簡単に事情を説明した。もつとも、話がややこしくなるため魔術の話は省いてだが。

「それにしても、外部からの能力者だなんて……。天然ものの能力者がいたとしても不思議ではないですけど、それでも……」

「『外』にもこと似たような能力開発機関があるっていうけど、眉つばものの噂だしねえ」

魔術の事を知らない美琴と黒子はあくまで今回の事件を超能力で考えている。それは魔術を知らなければ当然の事なのだが、インデックスはそれが気に入らなかったように口を挟もうとする。

が、上条に制され、しぶしぶ引き下がる。

「ところで、能力って何なんだ？」

街の至る所で聞いた『能力』という言葉。ゼロはそれを気にしていた。だが、

「能力とは、超能力の事で、この学園都市が科学的に人が手に入れた特別な力の事ですけれど。あなた……、まさか、この街にいながら超能力の事をご存じありませんの？」

ゼロ以外のインデックスを含めた全員がゼロをおかしなものを見るような目で見ていた。

他の人から怪しまれるのを恐れていたゼロもここまでは考えが及ばない……、というより聞かねば話が理解できなかった。

「あっ、ああ。少し事情があつてな。あまり詳しくは話せないんだが……。オレはあまり物事を知る機会がなかったんだ」

嘘を言っているわけではないが、ものすごく抽象的に話すゼロ。しかし、その言葉とゼロの態度が、むしろ他の人たちには地雷を踏んだ、と思われたため、それ以上は誰もゼロを問い詰めようとはしなかった。

「それで……、蹴り女。本当に外の能力はありえないのか？」

頭の中で情報を整理し、わからない事がまだありつつも、さらなる情報を得ようとするゼロ。しかし、ゼロの言葉はまた、話を脱線させることとなる。

「え？ 蹴り女って私の事！？ ちよっ、それどういう事よ！！」

ゼロに蹴り女と言われ、怒る美琴。

「どういう事も何もオマエ、朝、自販機を蹴って飲み物を得ていただろう。だからだ」

ゼロの言葉に、またか、という声が上がる。

「御坂、そんなに蹴りまくってたら、本当にあの自販機も壊れちゃうんじゃないのか」

「お姉さまったら、またそんな事を…。何度、お止めくださいと言えば気が済むのですか」

「なっ、いや、あれは走ってちよっーとのが渴いたからであっ…て……」

「お姉さま？」

その時、美琴は思い出した。朝、あの自販機のそばに立っていた男の事を。

「あーっ！！アンタあの時の！！」

「オマエ、気付いていなかったのか…」

「うっさいわね！ちよつと忘れてただけよ！」と、美琴は叫ぶと「それより、私にはちゃんと御坂美琴って名前があんのよ！美琴様と呼びなさい！」

今更、名を名乗る美琴。しかも、自分の事を様付けで呼ぶように要求。まわりの全員がさすがにひいていると、

「分かった。それじゃあ、オマエの事は美琴様と呼ぼう。それで美琴様、話を戻すが……」

「へっ！？」

まさか本当にそんな風に呼ばれると思っていたなかった美琴は恥ずかしさで顔を赤くする。

「ん？どうした、美琴様？」、ゼロは俯いてしまった美琴へと話しかける。まさか、冗談を本気にとられて、恥ずかしくなっているなど知らずに。

「やつ、やっぱなし！美琴様はなし！！」

「そうか、なら上条と同じ御坂でいいか？」

首を大きく縦に振る美琴。

「すげえ…、まさか御坂をあそこまで手玉に取るなんて…」

「くっ！あの殿方も侮れませんわね…」

ゼロは美琴から白井達に目を向けると、

「お前たちの名前も聞いていなかったな。できれば教えてくれないか？」

そうして今更ながらゼロへの自己紹介が始まった。

上条たちが地下街に閉じ込められる少し前。

小萌先生は同僚の黄泉川愛穂と職員室で話をしていた。

「あっはっは！うーん、上条当麻かあ。いーなー月詠センセのクラスは面白いガキどもに恵まれまくってんじゃん！ウチはつつまんねえ優等生ばっかだからやんなっちゃうじゃんよ！」

黄泉川愛穂とはコンビで当麻に注意をした先生だった。警備員アンチスキルにも所属しており、たとえどんな相手だろうと生徒には武器を向けない事を誇りとしている。が、機動隊が使うような特殊素材でできた防具で暴走能力者をどつき回すノリは『あれはシリカルをコミカルに始末する女だ』と呼ばれるほどである。

「だいたい、上条ちゃんはですね、いつもいつも女性に対して――

――」

そんな感じで二人で話していると、黄泉川が小萌先生に唐突に話を変えた。

「時にセンセ。例の部外者。二人いたじゃんっていう話なんだけど……」

学校には監視カメラが仕掛けられているため、もしも不審者が入る事があればすぐにばれてしまう。

小萌先生にはインデックスに何か人に言えぬ事情がある事が推測できたため、黄泉川に身元を調べないようお願いしていた。

「それが、どうかしたんですかー？」

「うんにゃ、一つだけ確認しときたくてね」

黄泉川は小萌先生を見る。

「果たして本当に二人いたのになって」

黄泉川が警備員アンチスキルの仕事があると言って去った後も小萌先生は黄泉川の言葉に疑問を抱いていた。

するとそこへ、姫神が小萌先生に頼まれていたAIM拡散力場について本について持ってきた。

「すみませんー。ホントは学生さんに仕事を頼むのは良くないんですけど、どうしても手が離せなくてですねー」

「いい。それよりこの専門書で合っているの？私はアパートにいっぱいあった本が全部同じように見えるから。少し不安。」

「うんうん。これですこれこれ。合ってますよー」

本音では、コンビニで上条に姫神も遊びに誘われたのだが、小萌先生との約束があったために断っている。なので、不満がないと言えは嘘になるのだが。姫神は上条の事を思い出しながら、彼と一緒にいた眼鏡をかけた一人の少女の事を思い出す。

「小萌先生」

「は、はい？」

「この学校に。風斬氷華っていう生徒はいる？」

「それじゃあ、話を戻すぞ」

自己紹介も無事終了し（インデックスが魔法名なども言おうとして上条に止められ暴れることはあったが）、ゼロ達は真面目な顔に

なるとテロリストについて考え始める。

「御坂、外部に能力者がいる確率はどれくらいだ？」

「そうねえ……」

ゼロ達が話している間、すでにこれが魔術師によるものだと判断していた上条とインデックスは今すぐにでも魔術師の下へ向かいたかった。

そーっ、と上条が話から抜け出そうとする。が、

「それにしても、今日は侵入者が二人。しかも、片方は能力者だなんて」

白井の言葉が耳に入った瞬間、上条の全身から嫌な汗が噴き出る。

「え、侵入者って一人じゃないの？」

「ええ。もっとももう一人はこの街の学生だったようですが」

「ん？どうした、上条。具合でも悪いのか？」

上条の様子がおかしい事にゼロが気づく。

「あの一、怒らないで聞いてほしいんですが、多分、もう一人の侵入者って俺だと思う」

上条の言葉に全員の目が上条に集中する。

「実は昨日、あるやつを助けるためにどうしても外へ出る必要がありました……、それで……」

美琴と白井は『またか』とため息をつきゼロは、「それで朝、叫んでたのか」と、一人納得していた。

「わかりました、そちらの件に関しましてはわたくしが対処しておきましょう。それはともかく、ここで話していてもどうしようもありませんわ。そろそろわたくしも仕事を始めるとしましょう」

「仕事？」

「ええ、わたくしこれでも『空間移動』^{テレポート}の使い手ですので、^{ジャッジメ}風紀委員として民間人を避難させる義務がありますの」

「なるほどな」

上条は白井の言葉に納得すると、

「分かった。白井、お前が閉じ込められた人達を脱出させてる間は、

俺が時間を稼ぐから、お前はあいつらを外に出してやってくれ」

上条が言った瞬間、三方から白井と美琴とインデックスの手で同時にどつかれた。しょうもないところばかりで気が合う、とばかりに美琴とインデックスは苦い顔で視線を交わす。風斬はツツコミを入れようとしたが勇気が足りずに虚空に手を泳がせ、ゼロは興味深そうに上条を見ていた。

「アンタは真っ先に逃げるの。っつかアンタ達がピンポイントで狙われてんでしょうが。いちばん危険な人間を戦場に残すと「待て」思っ…、えっ？」

美琴の言葉を遮ったのは、ゼロだった。

「相手を足止めするという事は、上条、お前は能力者相手に渡り合えるほど強いのか？」

「別に強いわけじゃないけど…。そもそも俺には幻想殺しがあるから白井の力も無効化させちゃうんだ。だから、ここに残ってヤツの相手をするしかねーんだよ」

イマジンプレイカー
(幻想殺し?)

「じゃあ、私も残る！」

ゼロはさらに質問しようとしたが今度はそれをインデックスが遮った。

すると、今度は五方から、上条と美琴と白井と風斬とゼロの手が同時にインデックスをどつき回した。ゼロもさすがにインデックスを残すわけにはいかないと判断し、引っ込み思案の風斬も勇気を振り絞ってみたらしい。インデックスはその衝撃に耐えられずによりける。

白井は両手を腰に当てて、

「残念ながら私の力では一度に運べるのは二人が限度でしょう」

「運べるのが二人となると…。じゃあ、まずはゼロと風斬を頼む」

「何を言っている、上条。女を先に逃がさないでどうする」

「それもそうだな。じゃあ、まずはインデックスと風斬を頼む」

「とうま。それはつまりそこの短髪と一緒に残る、と言いたいんだ」

ね？」

後ろから、少し平坦なインデックスの音が響くと同時にキラッと聞こえるはずのない歯の輝く音が上条に届く。

「……、あー。じゃあ御坂と風斬でいいや」

「ほう。アンタ、その小っこのと残りたい、と。ほほう」

今度はバチバチと前から御坂から青白い火花が飛び散る。

「あれが御坂の……」

ゼロが小さく呟くと、「ああちくしょう！じゃあインデックスと御坂で……」

上条が両手で頭を掻きながら叫ぶ。

「はあ。ではお姉さまとチビガキを連れて行きますけれど、危険のないように私も一緒に飛びますので」

ため息をつきながら、白井が答える。

「ではお二人とも」

いがみ合うインデックスと美琴の肩にそれぞれ手を置く。
瞬間。

ブン！と羽音のような音色が響き、三人の姿が虚空へと消えた。

「悪いな、お前たちを残しちゃって」

「……う、ううん。私は別に……」

「俺も構わん。それより上条。さっき言っていた幻想殺しとは一体何なんだ？」

ゼロはずっと考えていた疑問をぶつける。

「えーっと、俺の右手の事なんだけど、超能力とかそういう異能力なら神様の奇跡だろうとなんだだろうと打ち消す事が出来るんだ」

「……なるほど、確かにそれなら……」

ドゴン……！！

ゼロの言葉は地下街の奥から聞こえてきた音と振動によって遮られる。

（ちっ！もうここまで魔術師が来ちまったのか）

まだ、地下街には多くの学生が残っている。

上条は通路の奥を睨み付ける。

のんびりと考え込んでいる時間は、ない。

（やっぱ、行くしかねーよな）

上条は走りだそうとする。

「待て、上条」

すると、ゼロが後ろから上条を呼び止める。

「オレも行く」

ただそれだけを言うと、上条の横に立つゼロ。

「なっ！駄目だ！お前はここで風斬と一緒に白井が来るのを待っててくれ」

「お前一人じゃあれを止めるのは無理だ」

その瞬間、再びゴン！！と地下街が大きく振動した。

「どんな能力かは知らんが、これだけの力を使う相手を右手でさわるのは困難だ。それとも、オマエは一瞬で相手に近づけるほど速いのか？」

ゼロの問いに上条は何も答えられなかった。

確かに今まで魔術師や超能力者たちと戦い、何とか勝利してきた上条だが身体能力は少し喧嘩慣れしているだけのただの高校生レベルでたいして高くはない。

そんな上条の様子を見るとゼロは、

「確かに『今の』オレでは大したことはできん。だが、放っておくこともオレはできない。だから…、行くんだ」

それだけ言うとゼロは音のする方へと走り出した。

「あっ、ゼロ！！」

上条が呼び止めるがゼロは止まらない。

「くっ！仕方ない。悪い、風斬。お前はここで白井を待っていてくれ」
「え……、でも……」

風斬の言葉を聞くことなく、上条も走りだす。

「行ってくる」

ただ一言だけ残して。

上条は先に行ったゼロを捜しながら音のする方へ走っていた。

(まさか、もう敵と遭遇したんじゃない……)

そんな嫌な予感が上条の中を駆け巡る。しかし、曲がり角を曲がったところで上条はゼロを見つける事が出来た。

たくさんの傷ついた警備員アンチスキルがいる中で、一人佇むゼロを。

「なっ!!」

上条は絶句した。

そこは第一線ではなく、傷の応急処置をする野戦病院のようになった場所だった。しかし、警備員たちの怪我の具合はひどく、応急処置でどうにかなるレベルを超えている。まさしく戦場だった。

だが、上条はそれ以上にゼロを——彼の醸し出す雰囲気を感じてしまった。

まるでそれは、戦いに怒る鬼のようだった。

「上条、どうした？」

そんな事を上条が考えているとは思わぬゼロは上条へと話しかける。

「……いや、なんでもない。それより、お前こそどうしたんだよ？急に立ち止まって」

上条としては怖くなって逃げたくなったというのならありがたいのだが、さっきの姿を見るにそんなことはあり得ないように思う。「ああ、オレは今武器を持っていないからな。この人達のを借り

て行こうと思つて」

そう言うと、ゼロは近くに置いてあつた拳銃を二丁、残弾を確かめた後、懐へしまい、ライフルを手に持つ。

「ゼロ、お前それ、使えるのか？」

「ああ、使い方はすでにわかっている。問題ない。オマエはどうする？」

「俺はいい。使つた事ないしな」

「そうか」

すると、女性の警備員アンチスキルが上条たちを見咎めた。それは上条の学校の教師、黄泉川愛穂だった。

「その少年達！一体ここで何してんじゃん！？」

怒号に、その場にいた十数名もの警備員アンチスキルが一斉に振り返つた。ゼロと上条が答えられずにいると、黄泉川はいかにも苛立たしい調子で舌打ちして、

「くそ、月詠先生んトコの悪ガキじゃん。どうした、閉じ込められたの？だから隔壁の閉鎖を早めるなって言つたじゃん！少年、逃げるなら方向が逆————」

ゼロはそこまで聞くと奥へと歩を進めだす。

「ゼロ！？」

「上条、周りを見てみる」

ゼロの言葉に上条はもう一度、辺りを見渡す。そこには怪我をしながらも、退こうと考えている者は一人もいなかった。

「こいつらはもう戦える状態じゃない。だったら、今戦えるオレ達が戦わないでどうする！」

上条は警備員アンチスキルが怪我をしても逃げない理由が何となくだが理解できたような気がした。ゆえに、上条もまた奥へと歩を進める。

「どこに行こうとしてんの、お前ら！ええい、体が動かないじゃん！誰でもいいからその民間人アンチスキルを取り押さえて！！」

黄泉川が叫ぶと他の警備員達アンチスキルがゼロと上条へ手を伸ばすが届かない。

そのまま、二人が通り過ぎようとした時、

「これ以上先へ行かせる事はできません！止まってください！」

眼鏡をかけた、またも女性の警備員アンチスキルが二人の前に立ちふさがる。

どうやら彼女は比較的軽傷で、他の人たちの手当てをしていたようだった。

しかし、気丈にも、ゼロと上条の前に彼女は立ちふさがるが、見ればその足は震えていた。

疲れか、それとも恐怖からくるものかは二人には分からない。

だが一つだけ確かな事がある。警備員アンチスキルとは教師達の立候補によって成立している。それは彼女たちは全員街を、生徒たちを誰かに頼まれたからではなく自ら守りたいと思ったからこそここにいて、そしてどれだけ絶望的であろうとも逃げ出さないのだ。そして、この奥には今もまだ戦っているそんな人たちがたくさんいる。

（くそつたれが……）

上条はその右手を握りしめる。

「無駄だ。今のアンタじゃオレ達を止めることはできない」

ゼロは静かに答えた。

「そんなことはあ「体の傷や姿勢を見るに、立っているだけでもやっつとだろう」……」

ゼロの言葉に女性は黙るしかない。

「別にお遊びで行くとか、死にたくて行く訳じゃない。アンタ達と同じだ。守るために行くんだ」

ゼロの言葉を聞いても、女性が道をあけることはない。

「すまないが…、通らせてもらう！」

その瞬間ゼロと上条は一斉に走り出す。急に走り出したため女性には反応する事が出来なかった。

ゼロと上条が通路の奥へ向かうと、何かがおかしい事に気付いた。
(物音が……しない?)

先ほどまであれだけ響いていた音がやんでいた。

「急ぐぞ、上条」

「ああ！」

嫌な予感を感じ取ると彼らは急いで通路の先へと向かう。

その先にあったものは

「うふ。こんにちは。うふふ。うふふうふ」

錆びた女の声が、薄暗い空間に反響した。

漆黒のドレスを着た、荒れた金髪に褐色の肌をした女が通路の中央に立っている。

「アイツが、今回の犯人か？」

「あの声……。ああ、間違いねえ。あいつが犯人だ」

「そうか。……ということは『アレ』がアイツの能力、という訳だ。そう、女のそばには彼女の盾となるように、石像が立っていた。

鉄パイプや土、蛍光灯や椅子など、その他あらゆるものを強引に押し潰し、練り混ぜ、形を整えたような、巨大な人形だった。

そして、その周囲には七、八人の警備員アンチスキルが倒れている。まだ、なんとか全員息はあるようだった。

「くふ、存外、衝撃吸収率の高い装備で固めているのね。まさかエリスの直撃を受けて生き延びるだなんて。—————まあ、おかげでこっちは存分に楽しめたけどよ」

笑みの端が、残酷な色を帯びる。

「どうして……」

……そんな事が出来るんだ、と上条は絶句した。

「上条……」

「わかってる」

ゼロの言葉に短く返事をする上条。

「ならば……やるぞ」

「ああ」

上条は顔をあげ、女を睨み付ける。

「必ずあいつを……、ぶっ飛ばす!!」

開戦（後書き）

ここからはだんだんとオリジナルの展開を多くしていきたいと思っています。これからもお付き合いください。

居場所（前書き）

文章がだらだらしすぎている気がします。なんとか、改善していきます。

居場所

「ん？何だ、虚数学区の鍵は一緒じゃないのか。なんていったかしら、名前。私、ジャパニーズの名前よくわからないのよね」

女はめんどくさそうに金髪をいじりながら、

「まあ、別になんでもいいか。ぶち殺すのはあのガキである必要なんざねえし」

「何だと？」

その言葉に上条は思わず耳を疑った。

「どうやら、狙いは絶対に風斬、というわけではなさそうだな」

ゼロが隣で呟く。その声はどこか後悔しているような印象を受ける。

「へえ、アンタがだれかなんて知らないけど、なかなか良いカンしてるじゃない」

ゼロの言葉を聞いたシェリーは残酷に唇を歪めて笑う。

「どういう事だよ、ゼロ」

「つまり、風斬が狙いなんじゃなくて、複数いる狙いの内の一人が風斬というわけだ」

「なっ！」

上条がゼロの言葉に驚いていると、

「そう、つまり…、」

女が腕を上へとあげる。

イマジンプレイカー

「幻想殺し、別にアンタをぶち殺したっていいってことさ！！」

女が腕を振り下ろすと、ゴーレムが腕を上げる。

上条とゼロが危険を感じ、後ろへ飛び退くと同時に二人がいた場所に、ゴーレムの拳が叩きこまれた。

『ドゴォッ！！！！』

また地下街全体が揺れるような、そんな振動が響く。その振動に

二人はうまく立つ事が出来ない。しかし、女はそんな中でも平然と立っていた。まるで振動なんて受けていないかのよう。

「てめえっ!!」

「てめえではないわ。シェリー・クロムウェル。それが私の名前よ。覚えておきなさい。…って言っても、これから死ぬんだから意味ないか。なら私がイギリス清教所属って言っても意味ないわよねえ」

「イギリス清教？何でインデックスと同じ組織の人間がこんな事をするんだ！」

シェリーがインデックスと同じイギリス清教所属の魔術師と聞いて、眉をひそめる上条。

シェリーは薄く上条に笑いかけると、

「戦争を起こすんだよ。私はそのための火種が欲しいのよ。だから、わざわざ学園都市で騒ぎを起こしてるの」

「ふざけるな」

シェリーの言葉にゼロが反応する。

「戦争が起これば多くの人が傷つく。それがわからないわけでもないだろう」

ゼロは先ほどと変わらぬ表情をしながら、先ほどまでとは比べ物にならないほど怒りを含んだ声を発していた。

「私にはどうしても戦争を起こさないといけない理由があるの。それをおまえたちに理解してもらおうなんて思っただから、

————— エリス

エリス呼ばれたゴーレムはシェリーの振るオイルパステルの動きに合わせて動き出す。

「そのために死になさい！」

エリスはこちらへと歩いてくる。一步踏み出すごとに起きる振動によって上条は身動きがとれない。

(くっそ！このままじゃ…)

上条が焦ってどうしようかと考えていると、不意に横から何かがエリスに向かって走り出した。

「そんなことでコイツを殺させるわけにはいかない！」

とびたしたのはゼロだった。

驚異の速さでエリスに近づくゼロ。

「ちっ！エリス！！」

シェリーがオイルパステルを横になぐと、エリスも腕を大きく振り、走ってくるゼロをなぎ払おうとする。

しかし、ゼロはそれがかがんで地面とエリスの腕のわずかな隙間を使って避けると、まるでエリスを翻弄するかのようにエリスのまわりを駆け回る。

「上条！振動が来ないうちに、早くコイツに触れ！」

その言葉を聞いた瞬間、上条もエリスへと走り出す。

「うおおおっ！！」

上条はゼロを追っていきながら空きになったエリスの懷へもぐりこむと右手でその足に触れる。

瞬間、ゴーレムは動きを停止するとぼろぼろと崩れていく。

「エリス！エリス！！」

シェリーは叫ぶがゴーレムの崩壊は止まらない。

「これで終わりだ。シェリー！！クロムウェル」

上条とゼロがシェリーに近づく。だが、

「終わり？こんなんで私を倒したとか思ってるのかい？」

シェリーは不敵に微笑むと、手に持っていたオイルパステルで何か記号や文字を地面に書き始める。

「ちっ！仕方ない」

ゼロは持っていた拳銃でシェリーの肩を狙って引き金を引く。

が、それはシェリーの書いた模様から現れた腕によって遮られる。そして、さらにその模様の奥から再びシェリーのゴーレムが姿を現す。

「地は私の力。こんな地面の底で私に勝てるわけないでしょう」

シェリーは楽しそうに笑う。

「さあ、殺れ、エリス！あの二人をぶち殺せ！！」

エリスが拳を振り上げ、上条とゼロののいる場所へと拳を振り下ろす。

それを二人はそれぞれ左右に転がって、紙一重の所でかわす。

「こうなりゃ、もう一度あのゴーレムを壊して、また作られる前にアイツを……」

その時、

カッン、と。

唐突に上条とゼロの後方から小さな足音が聞こえた。

二人は同時に後ろを向く。とても嫌な予感を抱えながら。

そんな彼らの不安に応えるように、

「……あ、あの……」

聞こえてきたのは少女の声だった。

やがて、闇の中から赤い非常灯の下へ、声の主のシルエットが浮かび上がる。

それは彼らの見慣れた、インデックスの友達——風斬氷華だった。

「馬鹿野郎！！何で白井を待ってなかった！？」

上条はありったけの声で風斬を怒鳴りつける。

「……あ。だって……」

「何だ、虚数学区の鍵じゃないか。ちょうどいい、エリス」

風斬の存在に気付くと、シェリーはオイルパステルを動かす。すると、エリスは床を殴りつけ、大量の破片を飛ばしてくる。

「なっ！伏せろ、風斬！！」

上条は動けず、その場で地に伏せる。が、風斬は状況を理解していないらしく、微動だにしない。

（まずい！！）

破片の内の一つが風斬にあたりかけたその時、

「早く伏せろ！！」

風斬のすぐそばまで来ていたゼロが風斬を押し倒す。しかし、
「ぐっ！」

風斬を守るように上から覆いかぶさっていたゼロだが飛んできた別の破片が頭に当たってしまった。

「ゼロっ！！」

破片が止むと上条はゼロと風斬に近寄る。

「心配するな。大した傷じゃない」

そう言うゼロの頭からは血が流れ出していて、片方の目は血で開けていなかった。

しかし、ゼロはそれとはまったく別の事を考えていた。これが血か、と。

レプリロイドである彼は今まで多くの戦いを経験し、幾度となくその戦いの中で傷ついてきたが、痛みを感じても、傷口から血が出てくるなんてことは絶対にありえなかった。だが、今傷ついた彼の頭からは血があふれだしている。それは彼がレプリロイドではなく人間になってしまった事を意味していた。

「はっ！おまえ、バカじゃないのか？そんな化け物を庇うなんて！」
その様子を見ていたシェリーが嘲るように笑う。

「コイツのどこが化け物だって言うんだ！」

そんなシェリーの態度に怒りを覚える上条。

しかし、なぜかゼロは黙って風斬の腕を見ている。まるで、シェリーの事など興味がないかのよう。

上条も気になって、風斬の腕を見してみる。どうやら、小さな破片が風斬にも当たっていたらしく、少し切れていた。

だが、その傷ついた腕には必要な物が足りなかった。
血だ。

ゼロからはこれでもかというぐらいに、血が出ているのに、風斬にはそれがない。それどころか、風斬の傷を見ると、薄い板のような物が表から見ると、皮膚のようになってるのが分かる。そして、その中は空洞のような闇がどこまでも続いていた。

まるで、風斬の中が空っぽである事を示すかのように。

「な、何だ…、これ？」

上条は風斬の傷に顔をしかめる。

その傷が目に入ったシェリーも驚いた顔をしている。まるで、自分が言っていた冗談が本当だったようなそんな顔を。

「…えっ…？何これ…？何なの？」

自分の傷を見た風斬の表情がだんだんと歪んでいく。

「いつ、いやあああっ！！」

「待てっ！」

ゼロが止めようとするが、風斬は立ち上がると大声で叫びながら走り出してしまふ。…シェリーとゴーレムがいる方向へと。

「エリス」

シェリーがエリスの名を呼んだかと思うと、エリスの方へ走ってくる風斬へと裏拳気味にゴーレムの拳が叩きつけられる。

突然の事に何もできない上条とゼロ。

風斬は勢いよく壁に激突し床に叩きつけられる。

「あっ、あああっ……」

風斬の腕はねじれ、脇腹も大きく形を変えてしまっている。だが、そんな状況でも風斬はもぞり、と立ち上がり地下街の奥へと走っていく。

これにはシェリーも驚き、動く事が出来なかった。

「……。まあ、いいか。キツネ狩りをするのも悪くないし」

シェリーは後ろを向き、風斬を追いかけようとする。

それを止めようとする上条とゼロだったが、エリスは近くの支柱を殴りつけ、天井を崩して上条達を足止めすると、シェリーと共に奥へと消えて行った。

『もしも、人間らしいデータが全て揃ったとしたら、そこに「人間」がいることにはなりませんかー？』

生き埋めになってしまった警備員アンチスキルを助け出し、ゼロの傷を応急処置した後、上条は電話用のアンテナを探し、風斬の事を尋ねようと小萌先生に電話した。

そして、小萌先生が上条に語った事は『風斬氷華』という存在が人間ではなく、学園都市に住む能力者達のA I M拡散力場があわさり生まれた存在だという事だった。

「でも、小萌先生！風斬自身はその事に気づいてなかったんですよ。本当に風斬がそんな、生まれた時からずっと人間以外のモノだとしたら、おかしいじゃないですか」

『別にそんなことはないですよー。だって、生まれた時からずっと自分が人間だと思い込んでいれば、彼女は自分の存在に何の疑問も持たないはずですよー』

上条は何も言えなかった。

「だからどうしたというんだ」

そう言ったゼロの声はどこか悲しげだった。携帯の音声をスピーカーにしていたため、今までの会話は全て隣にいるゼロにも聞こえている。

「人間じゃなきゃいけないのか？人間じゃなかったらどうなってもいいって言うのか？」

そう上条に問うゼロの顔は見るからに怒っていた。会ってから一度も見ただ事がないぐらい。

「アイツだって生きているんだ。たとえ人間じゃなかったとしても。」

オレ達と共に『いた』んだ」

『誰だか知りませんがその通りですねー』

小萌先生がゼロの言葉に同意する。

『上条ちゃんから見てカザキリヒョウカさんはただそこに佇んでいるだけの幻想にすぎませんでしたか？人間だとかそうでないとか、本物だとか偽物だとか、そんなくだらない理由だけで仲間外れにして良いような存在でしたか？』

「……、」

違う、そんな訳があるか。上条は断言する。インデックスと共に遊び笑っていた風斬。上条に裸を見られて恥ずかしそうにしていた風斬。それはどこにでもいる普通の少女だった。

彼女が自分の右手で触れれば簡単に消えてしまう儚い幻想だとしてもそれで消えていい事には絶対にならない。

『うふふ、それで良いのです。先生はまっすぐな方向に育ってくれる子羊ちゃんは大好きなのですよー』

上条の気持ち伝わったのか嬉しそうに話してくる小萌先生。

『じゃあ、上条ちゃん。くれぐれも大事な友達を泣かせるような真似だけはしちゃダメですよー』

それではなのです、と言うと小萌先生は電話を切る。

『大事な友達』、上条達にとって。

そしてインデックスにとっては彼女自身が作った『初めての友達』。

「行くか、友達を助けに」

ゼロも立ち上がり、いつでも走りだせるよう体に力を込める。だが、上条は動かない。

「確かに今すぐにでも行きたいけど…、さすがに二人だけじゃ分が悪い。ゼロだってさっきみたいな動きはもうできないだろ？」

ゼロはその言葉に何も言い返せない。

（くっそ！落ち着け、考えろ！何とかアイツを倒す方法を！）

いくつか方法を考えるがどれも今の自分達では不可能なものばかり

り。

「誰だっ！」

するとゼロが後ろを振り向き叫ぶ。そこには、

「は、」

それを見た上条は思わず笑っていた。己の意思とは無関係に笑みがこぼれてしまう。

「そうだよなあ—————」

彼は笑う。今度は自分の意思で。

「—————くっだらねえ。そりゃ誰だってそう思うだろうさ。

なあ、ゼロ」

「…まったくだ」

少年達是不敵に笑いあうと覚悟を決めた。

あの巨大な石像に対する最後の切り札が、彼らの前にあった。

風斬氷華の体の傷は、ぐじゅり、という音を立てると塞がり始めた。

まるでビデオの早送りのように、ありえない速度で傷は完全になくなってしまう。

同時に体中を襲っていた痛みも引き、敗れた服や壊れた眼鏡も再生する。

「あ、ああ……！」

完全に自分が異常であるという事を理解する、いや、せざるをえない。

「本当に気持ち悪いわね。この化け物」

しかし、それを考える時間は風斬には与えられなかった。魔術師シェリー＝クロムウェルがすでに近くに迫ってきていた。

シェリーは歪んだ笑みを浮かべている。

「ひっ！」

風斬が逃げるため立ち上がった瞬間、彼女は巨大な石像がふるった拳に吹き飛ばされる。

地面を数メートル滑り、彼女の半身は地面との摩擦で見えるのも耐えがたいぐらい擦り切れていた。

が、ぐじゅぐじゅと風斬の体から音がするとまた傷は塞がってしまふ。まるでそんな傷は最初からなかったかのように。

「まさか虚数学区の鍵がこんなものだったなんてねえ。科学っていうのは本当に狂ってるわね」

シェリーの風斬を見る目はすでに最初のころとは違っていた。まるで、汚物を見るかのようなそんな目で風斬を見下ろしている。

「しかし、困っちゃうわねー。これじゃあ、殺すのも一苦労じゃない。まあ、別に死ぬまで殺し続ければいいか」

シェリーの視線に、言葉に、悔しく、そして恐怖を感じる。シェリーが怖いからではない。

自分が人じゃないことを悟ってしまうのが恐かったから。

「あらー、何その顔。別にあなたが死んでも誰も悲しむ訳じゃないのよ？ あなたはただのモノで化け物なんだから」

だんだんと迫ってくるゴーレムから風斬は逃げる事が出来ない。

いや、逃げる場所が思い浮かばない。

あの女の言うとおり自分は化け物なのだ、そんな化け物に居場所なんてあるわけがない。その思いでいっぱいだった。

(あの子も……)

風斬の心の中に白い修道服を着た一人の少女が思い浮かぶ。

自分に笑いかけてくれた少女、こんな化け物を友達だと言ってくれた少女。

彼女も自分の正体を知ったら、きっと遠くに行ってしまう。

風斬のまぶたに涙が浮かぶ。

もう、彼女に自分の居場所なんて残ってはいなかった。

「別に泣かなくなっただっていいじゃない」

シェリーは笑って風斬の涙を嘲る。

「ドウセソノナミダダツテツクリモノナンダカラ」

ゴーレムの拳がゆっくりと風斬へと迫る。

死にたくはない、だが、生きていても意味はない。

風斬は自分の死を受け入れるかのように目を閉じた。

「作り物の涙なんてこの世界に存在しはしない」

いつまで経っても、ゴーレムの拳による衝撃は来ず、代わりにシェリー以外の声が耳に届いた。

「……、えっ？」

聞き覚えのある声に、風斬が恐る恐るまぶたを開けると、そこには二人の少年が立っていた。

一人は巨大なゴーレムの手を片手で受け止めるかのように掴んでいる。

もう一人は拳銃をシェリーへと向けて構えている。

「アンタ達……、いつの間につ！」

ぎりっ、とシェリーが悔しそうに歯ぎしりする音が聞こえる。

同時に、ビシリ、とゴーレムから亀裂の走る音がする。

しかし、少年はそれらに見向きもしない。

彼はただまっすぐに風斬氷華の顔を見ている。

「待たせちゃったみたいだな」

彼の姿は涙で見えなかったが、それでも先ほどとは違うその声も数少ない風斬の知っている人の声だった。

その声にまた彼女は涙を浮かべる。

「だけど、もう大丈夫だ。だから、モスそろそろ泣くのは終わりにしろよ」

風斬氷華が涙をふくと、その先に『彼ら』はいた。

「まったく…、とんだ茶番だわ」

シェリーは吐き捨てるように呟く。

「なんだと？」

彼女に拳銃を向けているゼロが彼女の言葉に反応する。

「うふふ、だってそうでしょう？ そんな化け物をわざわざ庇って、一体どういう育ち方をすればそんな風になるのかしらねえ。ははっ、なあ、化け物！ よかったわねえ！ こんな世界に二人もこんな馬鹿がいるんだから」

切り札を失ってもなお、余裕の態度を崩さないシェリー。

「俺達だけだと思ってるじゃねえぞ」

上条の言葉にシェリーは呆れる。が、

ドカツ、と眩いばかりの閃光が襲いかかった。

「ぐっ!？」

思わず、両手で目をふさいでしまうシェリー。その光はこれでもかというぐらいの量の銃に取り付けられたフラッシュライトから発せられていた。

「確保っ!!!」

次の瞬間、その銃を構えていた者たちの中から声が響く。すると、シェリーはまわりを取り囲まれる。それを確認するとゼロも構えていた銃を降ろす。

アンチスキル
警備員。

それも一人や二人ではない。数十人もの警備員アンチスキルが集まっていた。しかし、無傷なものはそこには一人としていない。全員が重傷を負いながらもこの場にいた。

「……どう、して……？」

不思議そうに風斬氷華は問いかける。

彼らの内の一部は風斬に何があったかを目撃しているはず。なのに彼らは、風斬を助けるためにここに来ていた。

この戦場へと。

「ばっかばかしい、理由なんていらねえだろうが」

しかし、上条はすぐに答える。ゲームセンターで遊んでいた時となんら変わらぬ表情で。

「別に特別な事なんざ何もしてねーよ。俺はたった一言あいつらに言っただけだ」

眩いばかりの光の中で上条は言う。

「俺の友達を、助けてほしいって」

その瞬間、

ドゴン！！、とシェリーを囲っていた警備員アンチスキルが吹き飛ばされる。

幸いにも、彼らに大した傷はなさそうだった。

「ふざけやがって……！」

警備員アンチスキルを吹き飛ばした中心から、ゆらり、と金髪の女と巨大な石像が姿を現す。

「……オレが銃を降ろした瞬間にまたあの模様を描いたのか！」

ゼロが悔しそうに呟く。

「だったら、最初の予定通り、風斬を守りながら、あいつを倒すまでだ」

「……守、る……？」

上条だけではない。ゼロも、そしてここにいる人たち全員が風斬け物氷華を守るために集まったというのだ。

そのことだけで風斬は胸が張り裂けそうになる。

呆然とする風斬に少年達は言う。

「涙を拭って前を見る。胸を張って誇りに思え。ここにいる全員が、おまえに死なれちゃ困ると思ってるんだ」

「ああ、助けに来たのにそんな顔をしてちゃ、助けられないからな」
風斬は顔を上げる。

あれだけ闇に包まれていたように見えた世界は、もうどこにもない。

「今からオマエに見せてやる。救われない人なんてありはしない事を！」
を！

ゼロが風斬へ告げる。

「そして教えてやる！お前の居場所^{幻想}は、これくらいじゃ簡単に壊れはしないって事を！！」

風斬にとって、ゼロと上条のその言葉は何よりも頼もしく感じられた。

「本当にやるのかい、少年。別にやめたって誰も咎めないじゃん」
アンチスキル

警備員が作るバリケードの後ろで上条は先ほど話した作戦を実行に移そうとしていた。

「…待って、ちょっと…待って、くだ、さい。……あ、あの……何を……」

「決まってるんだろ」上条は間を開けずに、「これから、あの化け物を止めてくる」

「ダメ、です……そんな……っ！」

「心配するな」

上条の言葉を聞いて泣きそうになる風斬にゼロが言う。

「オレが上条を援護する。こいつらがするよりも危険はないし、成功の可能性も上がる」

「言ってくれんじゃん。一体、その自信がどこから来るじゃんよ？」
ゼロの言葉に黄泉川が問い詰める。

普通の学生が銃を扱った事があるわけがない。だが、
「自身があるわけじゃない。ただ、やらなきゃいけない。それだけだ」

ゼロはいつも通りの口調で答える。

「ふうん、まっ、聞きたい事もたくさんあるけど今は置いとく。ただし、後で聞いてやるから、絶対に生きて帰ってくるじゃん！それじゃ、準備せよ——————カウント3」

黄泉川が無線機に向かって何かの命令を下した。

「——————カウント2」

今まで床に伏せていた上条とゼロはわずかに上体を起こす。

「……そんなっ、ダメ、です……！……これ、じゃ、……絶対に、助からない……！そんな、の……！」

バリケードの外は警備員がゴーレムに向けて、銃を乱射しているため、跳弾が跳び回っている。そんな中に出たら、すぐにハチの巣になってしまいうだろう。

「風斬が俺を避けていた理由だけどさ。多分、この右手のせいだと思うんだ。この右手はあらゆる能力を壊しちまう。きっとそれは風斬も例外じゃない」

風斬は上条へと伸ばしかけた手を止める。

「——————カウント1」

しかし、上条はまっすぐ風斬を見ていた。まるですぐ近くで戦闘なんて起こっていないかのように。

「だけどさ、たとえ触れられなくても俺はお前の友達だから。それに、俺は死なない。必ず帰ってきてやる」

「オレ『達』な」

ゼロが上条の言葉に少し不満そうにつっこむ。

「ああ、悪い悪い」

上条はゼロに謝るとまた風斬を見る。

「帰ってきたらまた、遊びに行こうぜ。インデックスも一緒に。なんなら、ゼロもどうだ？」

上条は一度だけ笑う。

「面白そうだな」

ゼロもまた笑う。

「——————カウント0」

黄泉川が告げた瞬間、アンチスキル警備員達が一斉に撃つのを止めた。

シェリーはその行為に驚く。それはまさしく自殺行為だったのだから。

だが、効果はあった。今まで銃弾の中を進んでいたのが、急に抵抗がなくなったせいでゴーレムは前につんのめってしまったのだ。

上条はハードルのようにバリケードを越えると巨大な石像へ向かって一気に走りだす。

ゴーレムは向かってくる上条に拳を振り下ろすことはできない。

それをしようとすれば本当に倒れてしまうだろう。

だが、エリスは拳を振りかぶる。上条ではなく『床』を殴りつけるために。

しかし、パン、と上条の後ろから銃声が響くとゴーレムの足元の床が弾ける。

ゼロがその部分を撃ったのだ。ゴーレムのバランスを完全に崩すために。

「ちっ!？」

シェリーは急いで倒れたエリスを起こそうとするがすでに上条はすぐ近くまで迫ってきている。

「エ、エリス!!」

シェリーはゴーレムの名を呼ぶ。だが、

「デメエはそこで眠ってやがれ!」

上条当麻は一切の手加減無しにシェリー＝クロムウェルを殴り飛ばした。

居場所（後書き）

次で風斬氷華編は終わりにするつもりです。

ほとんど活躍していないゼロですが、次は活躍させようと思っています。

人ならざる者たち

「じゃあ、後はこれを壊したら終わりだな」

上条はうつ伏せに倒れている石像に近づく。

「おい、上条。あの女の持っていた白い棒みたいな物は壊したのか？」

「いや、壊してないけど…」

上条は石像の向こう側から声をかけてきたゼロへ答える。そもそも、あの薄暗い中で、シェリーが何を持っていたかなんて正直よくわからなかった。

「なら、あれを先に壊せ。あれはおそらくこのデカブツを作るために必要なもののはずだ」

先ほどの銃の腕といい、戦場での状況判断能力といい、ゼロの能力はどれも何度か死線をくぐりぬけてきた上条ですら驚かされるものばかり。

しかも今までの戦闘で、超能力を使った形跡はなかった。というか、戦闘の前の会話からして、超能力自体を知らなかったようだ。（一体、ゼロって何者なんだ？）

とりあえず、ゼロの言うとおり、先にシェリーの持っていた物を壊そうと上条が倒れているシェリーの方を向くと、

そこには倒れたまま、白い模様のような記号のような判読不能な何かを床に書き殴るシェリーの姿があった。

シェリーは上条が自分を見ている事に気付くと口の端を歪め、笑った。

「うふふふ。どうした、イマジンプレイカー幻想殺し？」

彼女は笑う。その顔には諦めの色は微塵も浮かんでいなかった。

それどころか、まるでこれからだ、といわんばかりの残酷な笑みがあつた。

（浅かった？まさかコイツ、自分で後ろに跳んでたのか？）

「上条！早く止めろ！」

後ろからゼロの声が響く。すぐに上条も走りだす。

「遅いわよ」

瞬間、シェリーが描いた文字を中心点にして、半径二メートルほど、彼女が倒れている地面が丸ごと崩れ落ちた。同時にシェリーの姿もその地面に空いた穴へと消える。

「くそっ！！」

上条が着いたところには、大きな底の見えない深い穴が残されているだけだった。

（やられた。下に地下鉄の線路が走ってやがる）

上条が舌打ちすると同時にゼロが来る。

「逃げられたか」

「悪い。まさか、穴が開くなんて思ってなくて。てっきり二体目を作ってたんだとばかり」

「あの石像は二体同時に作るのは無理なんだろう。できるのならば最初から二体作っているはずだ。見ろ」

ゼロの指差した方向を見ると、そこには巨大な石像の姿はなく、大量のただの瓦礫が散乱していた。

「おそらく、二体同時に作るのは無理だから、新しく向こうで作るためにこちらのを壊したんだろう」

ゼロが説明をするが、今の上条にはそれを詳しく聞いている暇はなかった。

上条は身を翻すと、急いで警備員達アンチスキルがいる方へと走る。

ゼロは上条の急な行動に戸惑いながらもその後を追いかける。

「おい、上条。どうしたんだ、急に？」

「インデックスが危ないんだ」

ゼロは上条の言葉に眉をひそめる。

「お前が言ってただろ。アイツの標的は風斬一人じゃなかった。そして、アイツの標的にはインデックスも入っていたんだ」

そこまで聞くと、ゼロも状況を理解する。

シェリーは逃げたわけではない。標的を変えただけ。より殺りやすい方へと。

それがインデックス。

なぜ彼女も狙われるのか、それはゼロには分からない。だが彼女に一番親しもうだった上条が言うのならそれは確かなのだろう。

彼らは警備員アンチスキルと風斬がいる方へと走る。

戦いが終わったからではなく、これから戦うために。

「何で地下街の封鎖が解かれないんだよ！？もうさっきのヤツは地下にはいないんだろ！？」

戻ってきた上条達の姿を見て安堵した風斬の耳に上条が警備員アンチスキルの女性に詰め寄る声が届いた。

その声はとても切羽詰まっていた。今までに聞いたどの言葉よりも。

「何度も言うように、地下街の管理とウチらとは管轄が異なるじゃん。こちらも連絡をつけているけど、命令系統というものもあるし、封鎖を解くにはもう少し時間がかかるじゃんよ」

「くそ！」

そう毒づいて壁を蹴る上条の様子は明らかにおかしかった。

少し今の上条に怯えながらも風斬は彼へと近づく。今の彼には放っておくと何をするかわからないような危うさがあった。

「……あ、あの……先ほどはありがとうございました」

「ん？別にお礼なんかいいさ。大した事をした訳じゃねーし。それより体の方は大丈夫なのか？」

「あっはい。……平気、だと思います、けど。えっと、……何が、

あつたん……ですか？」

上条の話は風斬にとっても恐ろしい事だった。

さっきの女が今度はインデックスを殺そうとしている。そして、立場上、インデックスを保護してもらうよう警備員アンチスキルに頼むわけにもいかない。

そんな上条の言葉にはインデックスを助けに行けないことへの悔しさが滲んでいた。

（あの子を……守る。そのためには……）

風斬にとって初めてできた大切な友達。彼女もインデックスを守りたい。だが、上条をもしまたあの化け物と戦わせれば今度こそ死んでしまうかもしれない。

インデックスを守り、なおかつ上条を戦わせない、そのために風斬ができる事は一つだけだった。

「……大丈夫、です。あなたが、行かなくても……助ける方法は、あります」

風斬の声に、上条は訝しげに眉をひそめた。

彼女は言う。

「化け物の、相手は……同じ、化け物がすれば良いんです」

息がとまった上条に風斬は笑いかける。

「……あの化け物に、勝てるかどうかは、分からないけど。……**囧**になって、……あの子を、逃がすくらいなら、……化け物でも、できるから」

その言葉に上条は絶句したようだった。

そして、彼の顔は驚きから怒りへと変わっていく。

「ふざけんじゃねえ！お前は化け物なんかじゃねえんだ！何でそれ

が分かんねえんだよ！お前がインデックスを助けるためにあの化け物に殴られたとして、それを俺が、インデックスが喜ぶと思っ
てんのかよ！たとえ、お前が俺たちを見捨てたって、俺達はお前を見殺しにしたりしねえんだよ！できるはずがねえだろ！」

自分のためではなく、風斬のために怒る上条の言葉は、こんな状況でも風斬にとって、嬉しかった。

自分のような化け物のために怒ってくれる人がいるのだから。

「……だけど、それで良いんです。私は、化け物で良い……」

風斬氷華は、目をそらさずに正面から上条の顔を見て告げる。

「私は、化け物だったから……あの石像に何度殴られても、死にませんでした。私が……化け物だからこそ、私はあの石像に立ち向かえます……」

だから、と彼女は一度そこで言葉を区切って、

「私は……私の力で、大切な人を守ります。だから、私は……化け物で、幸せでした」

にっこりと笑って風斬はシェリーが開けた大穴へと飛び込む。

上条はとっさに手を伸ばす。あらゆる力幻想を殺してしまう彼の右手を。

上条はすぐに伸ばした手を引っ込める。

彼もやはり心のどこかでは気づいていたのだ。

彼は落ちて行く風斬の姿を見送るしかなかった。ただひたすらに己を責めながら。

「何をしているんだ、オマエは」

上条が警備員アンチスキルに詰め寄っている間にどこかへ行ってしまったゼロが上条の後ろに立っていた。

「……やっぱりどれだけ綺麗事を言っても、俺も風斬を人としては

見ていなかったのかな？」

どこか茫然として呟く上条。

「別にオマエは悪くはないさ。それに、さっきも言ったはずだ。なぜ、人間である必要があるんだ、と。オマエがアイツを助けたいと思うならさっさと手伝え」

よく見ると、ゼロの手にはロープのようなものがあつた。それはしっかりと少し離れたところにある柱へとくくりつけてある。

「これで地下まで降りるぞ。これだけ長さがあれば足りるはずだ」
ゼロは穴の中へそれを垂らす。それは消火ホースだった。

「行くぞ。アイツがどれだけ言っても自分を化け物だと言い張るのなら、オレ達だってアイツを仲間だと言い張ってやる」

「違うさ」

上条も穴へと近づくとき消火ホースを握る。

「風斬はただの仲間じゃない。オレ達の…、友達だ！」

その目には先ほどの後悔も悩みも浮かんではいない。ただ、前だけを向いていた。

「こらーっ！ 待つんだよ、スフィンクス！」

上条達が来るのを美琴と一緒に待っていたインデックスだったが、スフィンクスが逃げ出してしまったため、仕方なくその場を美琴に任せ、その後を追いかけていた。

「捕まえたっ！」

路地裏を走りまわり、周りのビル全てが取り壊しの最中という、廃墟のような場所でもうやくインデックスは三毛猫を捕まえる。

そもそも、三毛猫が最初にインデックスから離れた理由は彼女が

三毛猫を腕に抱き続けていたため、暑くなったからだ。が、その後追いかけてきたインデックスが大声を出しながらものすごい形相で迫ってきたため恐ろしくなって逃げたのだ。

「スフィックス！あんまり聞きわけないと本当にお仕置きしちゃうかも！」

捕まった後も抵抗を続ける三毛猫へとすくむインデックス。

「早く短髪との待ち合わせ場所に戻るよ。返事は？」

「いやあ、と仕方なくといった感じで答えるスフィックス。

が、次の瞬間、ピクン、と顔を上げると今まで以上に暴れだす。

まるで、何かかに怯えているかのように。

それから、インデックスは気づく。近くのマンホールがかたかたと揺れている事に。

（あの魔術師は地下にいた……。まさか！）

インデックスが後ろへ跳んだ瞬間、彼女のいた場所が爆発した。

爆心地からは二メートルはある巨大な腕がのびていた。

インデックスはスフィックスを抱いてうずくまる。すると、その上を大量の道路の破片が通り過ぎる。

バチバチ、と後ろのビルに大量の破片がぶつかる音がする。

が、インデックスは振り返らない。彼女の目は前だけを見ている。そこには、まるで墓場から這い出る亡者のような動きで、ゆっくりと立ち上がる巨大な石像があった。しかし、その周りに術者の姿はない。

おそらくは遠隔操作が可能なのだろう。

（基礎理論はカバラ、主要用途は防衛・適性の排除、抽出年代は十六世紀、ゲルシヨムIIシヨレムいわく、その本質は無形と不定型。応用性あり、オリジナルにイギリス清教術式を混合、言語系統はヘブライから英語へ変更）

インデックス

禁書目録が完全記憶能力のよって保有する十万三千冊の魔道書による知識で、彼女は一瞬でゴーレムの正体を看破する。

しかし、インデックスは魔術も、ましてや超能力も使うことはで

きない。特別に運動能力が高いわけでもない。膨大な『知識』しか持っていない。

だが、そんなことは、巨大な石像には関係ない。

ゴーレムは容赦なく彼女へとその腕を振り上げる。

当たれば、戦車ですら破壊できる一撃を前に、少女は小さく息を呑み、

T T T L
「左方へ歪曲せよ」

一言、告げた。

瞬間、ゴーレムが真っ直ぐ放ったはずの拳が、突然蛇のように左に逸れた。

スベルインターセプト
強制詠唱。

彼女はノタリコンという、アルファベットの頭文字の母音だけを発音することで詠唱の暗号化と高速化を同時に行う発音方法を使い、術者がゴーレムへと送る命令を乱している。

これは、魔術ではあるが、魔力を使わず、相手を自爆させるための技。ゆえに魔力のないインデックスでも使う事が出来る。

ゴーレムは何度も拳を振るうが、インデックスが少しでも移動し、矢継ぎ早に叫ぶだけでその拳はまったく関係のないところへ飛んでいく。

(さばくだけじゃ……足りない！)

インデックスは足元の服に留めてある安全ピンをまとめて引きぬく。それは巨大な石像の相手をするにはあまりにも貧弱すぎる武器。それを彼女はゴーレムの足元へと投げつける。ひと肌も傷つけられないほどゆっくりと飛び、ゴーレムの足に当たって跳ねると、それが、磁石に吸い寄せられるように石像の体に飲み込まれた。

瞬間、

ゴーレムの右足首の動きがまるで関節にくさびを打ち込まれたかのように阻害される。

これも強制詠唱と同じ原理。相手の自己修復機能を利用して、相手の動きを阻害したのだ。

彼女の内に存在する十万三千冊の魔道書。

それはあるだけでは何の意味も持たないただの『知識』の塊。だが、それを最適かつ最速で使える応用力があるのならそれは最高の『力』となる。

インデックスにゴーレムの攻撃は当たらない。どれだけ威力があろうとも当たらなければ意味がない。

いけるかも、インデックスがそう思った瞬間、

ドン！！ と、ゴーレムがその場で地面を踏み付けた。

「きゃあ……！？」

その巨大な振動にインデックスは転んでしまう。どれだけ、ゴーレムの動きを妨害できようとも振動を止めることはできない。

転んだインデックスへとゴーレムが拳を振り上げる。

「一両足を平行に配置し重心を崩せ《MBFPADCOG》！」

彼女は叫ぶが、ゴーレムは先ほどまでとは違い、全く反応しない。

（ま、ずい……かも！遠隔操作から自動制御に変更され————

————ッ！！）

人が操っていないものを操る事はインデックスにはできない。

ゴーレムの拳が空をなぎ払う。

インデックスの手ではもはやその攻撃を止めることはできず、

ぐしゃり、と。

生肉をコンクリートに叩きつけるような、鈍い音があたりに響き渡った。

「いらっしやい、待ってたわよ」

上条とゼロが地下に着いた瞬間、近くにあった柱が倒れてくる。それを横に跳んで避けると、声のした方へと向き直る。

彼らから十メートルほど離れたところにシェリーが佇んでいた。だが、まわりにあのゴーレムの姿は見当たらない。

「うふ、うふ。エリスなら先に追わせているわよ。もしかしたらもう標的を肉塊に変えちゃってるかもなあ」

「デ、メエ……っ!!」

上条は低く腰を落として拳を握る。オイルパステルを使わなくてもゴーレムを操る方法はあったのだ。

しかし、反対にゼロは銃を構えようもしないし、上条のように格闘をするような構えも取らない。いつもと変わらぬ自然体のまま立っていた。

「おやあ？ 何のつもりだい？」

シェリーは気にしながらも、別にかまわないといった感じで尋ねる。

「……上条。悪いがここは任せてもいいか？」

上条は怪訝そうな顔になる。

「上条さん的には、できれば、ここは俺に任せて先に行け、みたいな事を言って欲しいんですがね」

「アイツの狙いはオマエを足止めすることだ。ならば、オレがサポートしたとしても通り抜けるのは困難だろう」

ゼロ達の会話は残念ながら十二分にシェリーにも聞こえてしまっている。ここは地下鉄の線路内。音は良く響く造りになっている。

「確かにその金髪がここを通っても別に追いはしないけど、そんな簡単に通す訳ないでしょ」

シェリーの言う事はもつともだ。ゼロが抜けた方が早くインデックス達のもとへ行ける確率が高いだろうがあまりにも無謀すぎる。

「アイツを倒すには少し時間がかかるだろう。それよりかはオレが先に行った方がいいんだ。じゃあ、後は頼んだぞ」

言い終わるやいなや、ゼロはシェリーの方へと走り出す。

「ふん、馬鹿が」

吐き捨てるようにシェリーが呟くと、ゼロの近くの柱が崩れて倒れてくる。

「危ない!!」

上条は叫ぶ、が、

ガガガガ、とゼロは持っていた銃をへ柱へと向けて撃ちまくる。

弾丸に当たった瓦礫はわずかにだが角度を変え、それが幾重にも積み重なり、わずかな時間と隙間を生む。その間をゼロは駆けて行った。

瓦礫が落ちた衝撃で粉塵が舞い、上条は腕で目を隠す。

目を開けた時にはすでにゼロの姿は見えなくなっていた。

「アイツ、意外と無茶をする奴だったんだな。ていうか、さっきの人間業じゃねえだろ」

上条がゼロに尊敬とも呆れともいえないような微妙な感想を思っている、瓦礫の奥で人の影が動く。

「まさか、通り抜けられるとはね。まあ、別にかまわないんだけど。私はあなたを足止めできればそれで良いんだから」

シェリーはインデックスを殺すために上条を潰そうとしている。上条だけを。

しかし、上条には納得がいかない事がある。

学園都市との戦争。これは本当にイギリス清教の総意なのかどうか。

神裂やステイルが学園都市と戦争を起こそうとしているようには見えなかった。

何より、インデックスは学園都市に滞在しているとはいえ、イギリス清教にとってかなり重要な存在のはず。それなのに戦争を起こす引き金のためだけに殺そうとするだろうか。

「一体何を考えてんだよ、テメエ。裏の世界の事なんて俺はしらねえけどよ。今は科学と魔術のバランスが取れてんだろ！なのに、何でそれをわざわざ壊そうとする！？」

上条の問いにも彼女はひたすら笑うばかり。

そして、そのまま彼女は告げる。

「超能力者が魔術を使うと、肉体が破壊されてしまう。聞いたことはないかしら」

ゼロはゴーレムが通った足跡を追いかけて走っていた。

そのスピードは普通の人間としては驚異の早さだったが、彼の前の体から考えるとあまりにも遅かった。

（銃の弾倉は底をついたか…）

最初のシェリーとの戦闘の時から使い続けて銃の弾はすべて使い切ってしまった。もちろん、替えがあるわけがない。

おもりとなると判断するとゼロは即座に走りながら銃を捨てる。

これでゼロに残された武器は一つだけ。少し運動ができるだけのただの青年になったも同然だった。

だが、それでも彼は走り続ける。この世界で新しくできた仲間を守るために。

（上条が来るまで逃げ切れれば…）

そこまで考えると、ゼロはある事に気付く。

そして、走りながら彼は手を額へとあてた。

シェリーが科学と魔術を戦争させようとした理由。

それは彼女の友達だった超能力者エリスが科学と魔術が手を結びかけた事により死んだことが原因だった。

『対立』ではなく『協力』しようとして生まれてしまう摩擦。それを防ぐために、二度と自分達のようなことを起こさないために。完全に科学と魔術の接点をなくそうとしたのだ。

(……でも！)

それはもしかしたら素晴らしい事なのかもしれない。争いが起きる事もなくなるだろう。

それでも、上条にはそれを認めるわけにはいかない。

そんな事になればインデックスと離れ離れになってしまうかもしれない。

もしかしたら、戦争の火種のために殺されるかもしれない。

とても個人的なだけど彼らにとっては大切な事。

上条は歩き出そうとする。彼らの未来を守るために。

「おやあ？さっきのを見てたってのに、まさかまだ気づいてないのかい？」

シェリーの言葉に足を止める上条。

いや、言葉だけじゃない。先ほどの彼女の余裕、態度。全てがおかしなことだらけだった。

「気付いたかい？どうして私がわざわざ姿を現したのか。どうしてこんなところで待っていたのか！」

ヒュン、とシェリーは空を引き裂くようにオイルパステルを横に振るう。

瞬間、地下鉄の構内全体が淡く輝き始めた。

上条の後ろからシェリーの後ろ側に至るまで百メートル以上がシェリーの描いていた紋様で埋め尽くされている。

（これは、まさか……エリスの！？だとしたら、アイツ。このトンネルごと潰す気か！）

二体目のエリスを作ろうとしたら、床をボロボロに崩してしまおう。ゼロはそう予測していた。そしておそらくそれは正しいだろう。それがこれだけあればどうなるかは簡単に予想がつく。

「地は私の味方。しからば地に囲われし闇の底はわが領域」

彼女のまわりにも魔法陣は描かれているのだが、おそらく彼女は何らかの逃げ道を用意しているだろう。

彼女に近づくにしても時間がなさすぎる。上条が近付けば、すぐにでも崩壊させるだろう。

（くそっ！どうすりゃいいんだ！？）

「全て崩れる！泥の人形のように！！」

上条の焦りすら見透かしたように、シェリーが叫ぶ。

それに呼応するかのように魔法陣が一斉に輝きを増す。

上条の右手で触れれば魔法陣を打ち消すことはできるだろう。だが、あまりにも数が多すぎる。彼の右腕一つではどうする事も出来ない。だが、

（……ん？何で床にまで魔法陣が？）

床に魔法陣が必要とは思えない。彼を潰すつもりならば、天井や壁を壊すべきだ。床を壊しても意味はない。だが、床にも確かに魔法陣が存在する。

だとすれば、それは破壊以外の意味を持つ事になる。

「愚者を呑み込め！泥の中へと練り混ぜろ！私はそれでテメエの体を肉付けしてやる！」

最後のスイッチを入れるようにシェリーは叫ぶ。

壁や床が今にも破裂しそうに膨らむ。

（やるしかねえっ！！）

そんな中を上条は走る。シェリーを殴るためではなく、床に描かれた魔法陣を消すために。

朝、食堂でインデックスが言っていた事を思い出す。

メインの余波から体を守るために防護の魔法陣を張る。つまり、床の魔法陣はその防護のための魔法陣。

シェリーの顔が上条の走る方向を見て驚きに染まる。慌てて、周囲の柱や壁に命令を下すが、上条はそれらすべてを避け、床に描かれた魔法陣へと触れる。

瞬間、魔法陣はまるでそこになかったかのように消え去った。

「ちいっ！！」

自分を守れなくなったことで、慌ててオイルパステルを振るい、崩壊を止めるシェリー。

バン！！ という壮絶な足音。

天井から前方へと視線を向けたシェリーの目に写ったのは、シェリーの方へ跳びこみ、すでに彼女の懷までもぐりこんでいる姿だった。

そして、上条の拳がシェリーの顔面へと突き刺さる。

彼女の体は勢いよく転がり、彼女が立ちあがったときすでに彼女はふらふらでその顔には焦りと緊張がまじまじと表れていた。

「なぜ止める！？ 今、学園都市はガードが緩くなり、イギリス清教も禁書目録を学園都市に預けるなんていう甘えを見せている。もしも、都市レベルで私とエリスのときみたいな事が起きれば、どうなるかなんて目に見えているのに！！」

シェリーの声は暗い地下を何度も反響し、上条の耳を多角的に揺るがしていく。

シェリーの目的もその理由も分かった。それでも、上条はつまらなそうに息を吐いた。

「くっただらねえ。そんな言い分で正当化できると思うな！ 怒ってもいい。悲しむのだって止めはしねえ。けどな、向ける矛先が間違っただろうが！ そもそもその矛先は誰かに向けていいもんなんかじゃねえ！ お前がその矛先を誰かに向けちゃったなら、それこそテメエが嫌う争いが起きちゃうだけじゃねえか！！」

エリスが死んだ原因をシェリーが知ってしまった瞬間、彼女の中

に芽生えたものは何だったのだろうか。

怒り、悲しみ、憎しみ、それとももう二度とこんなことは起こさないという誓いだっただけなのか。

「……分かんねえよ」

吐き捨てるように、だがとても悔しそうにシェリーは呟く。

「ちくしょう、確かに憎いんだよ。エリスを殺した人間なんてみんな死んでしまえばいいと思ってるわよ！　だけどそれだけじゃねえんだよ！　本当に魔術師と超能力者を争わせたくないとも思ってるのよ！　頭の中なんて始めっからぐちゃぐちゃなんだよ！　信念なんか一つじゃねえよ！　いろんな考えが納得できるから苦しんでるのよ！　笑いたければ笑い飛ばせ。どうせ私の信念なんか星の数ほどあるんだ！　一つ二つ消えたところで胸も痛まないわよ！！」

以前、土御門元春が言っていた。魔術師とはプロの戦闘集団が集まっているわけではない。ただ、どうしても叶えたい願いを叶える。そのために力をつけた、いわば武器を持った子供のようなものだと。

「何で気づかねえんだよ、お前」

「何ですって？」

「確かにお前の言う事は無茶苦茶だ。だけどな、結局テメエの中にある信念は一つしかねえじゃねえか」

彼は言う。彼女自身すら気づいていない、いや、彼女自身の事だからこそ気づけない、ただ一つの答えを。

「結局、お前は大切な友達を失いたくなかっただけなんじゃねえのか？」

魔術師や超能力者へと復習したいという気持ち、争いをなくしたいという気持ち。それら全てはただ一つ、シェリーへの変わらぬ友への想いが生み出している。

彼女の信念はずっと変わってはいなかった。

「そこを踏まえて考えてみる。もう一度何度でも考えろ！　テメエか

ら見て、俺とインデックスはどんなふうに見えた？俺達は住み分けて生きなくちゃ生きていけないように見えたのかよ。そんなはずねえだろうが！住み分けなんて必要ねえ。そんな事をしなくたって俺達はずっと一緒に生きていけるんだ！！」

上条達の関係が本来シェリーが望んでいたものだったとは言わない。

誰かの代わりなんて他の誰にもできるはずがない。だから上条は一言だけ告げる。

「お前の手なんか借りたくない！だから、俺から大切な人を奪わないでくれ！！」

シェリーの肩がビクリと震えた。

上条の幼稚で単純な願い。だが、それはどんな言葉よりも彼女の胸の奥へと刺さる。

彼が望む願い。それこそが、昔、シェリーが願った願いだったのだから。

「一わが身のすべては亡き友のために《Intimus115》

しかし、彼女は拒絶するように叫んだ。

放たれたのは、彼女の譲れない願い、魔法名。

彼女は上条の気持ちが届くほどよくわかる。だが、彼女は同時に、それが分からない気持ちも理解できてしまう。

ビューバン！！と、彼女の手の中にあるオイルパステルが閃く。

シェリーのすぐ横の壁に紋様が走った瞬間、それは紙粘土のように崩れ落ち、大量の粉塵を巻き上げ、二人の視界を遮る。

それを見た上条が、後ろへ下がろうとした瞬間、オイルパステルを手にシェリーが目の前から弾丸のような速さで、上条に迫ってきた。

もしも、オイルパステルであの紋様を体に書かれたら、自分もまわりの瓦礫のようになってしまうかもしれない。

そんな不安が上条によぎる。

「死んでしまえ、超能力者!」

鬼のような形相の彼女の顔は、まるで般若の面のように今にも泣き出しそうな顔をしているようにも見えた。

(ああ、そうか)

上条は反射的に右の拳を握りしめながら、ふと思った。

これが彼女の切り札だったとするならば、おそらくもっと早くに使っていただろう。

「デメエは、」

彼女は無数の考えが納得できるからこそ苦しいんだ、と言っていた。ならば、

「自分を止めてほしいって気持ちも、理解できる訳か」

ゴン!! と、上条の拳が柔らかいオイルパステルを粉々に砕く。勢い余った拳はわずかに軌道を捻じ曲げ、シェリーⅡクロムウエルの顔面を殴り飛ばした。

インデックスへとゴーレムの拳が飛んでくる事はなかった。

風斬氷華。

インデックスの背後からその頭上を飛び越した少女が、石像へと飛び蹴りを放っていた。

速度・威力共に普通の人間、いやたとえ強力な能力者であってもだせないようなものだった。

「ひょう、か……?」

インデックスはその後ろ姿に声をかけようとして、息が詰まった。飛び蹴りを放った風斬の右脚が、膝の上から木端微塵に吹き飛ん

でいた。そして、足の切断面の奥はただの空洞でしかなかったし、傷口もまるで透明な柱に塗ったペンキが剥がれるような、不自然なものでしかなかった。

(……な、なんだろう。あれ)

インデックスの知識を持ってしても、目の前の光景を説明することはできない。

ズバン！！ と、大きなシートで空気を叩くような音が聞こえた瞬間、風斬氷華の壊れた足が、痕跡残らず元に戻った。

「逃げて」

風斬氷華は振り返らない。

「あなたは、……早く……逃げて。ここは、まだ……危ないから」すると、急に倒れて起き上ろうとするゴーレムに集まるようにまるで突風のような風が吹き始める。

風斬の放った一撃はゴーレムの『核』も含めて、致命的なダメージを与えていた。

そして、その結果、ゴーレムは治らぬ傷を治そうとして自己修復機能が暴走を始めていた。

(まずい……かも)

周りにあるものを手当たりしだい取り込み、ゴーレムの体は一瞬の内に最初の二倍以上の大きさになっていた。

インデックスは真っ青になる。

もはや、彼女の知る限りこの状況を打破できるのか上条当麻以外いなかった。

「ひょうか、早く逃げよう！」

さっきの光景から、本物の風斬氷華なのかどうか疑問を持っているインデックスだったがそれでも叫ぶ。

しかし、風斬氷華は振り返らずに静かに語る。

「あなたは……早く逃げて」

「あなたはって、ひょうかはどうするの!？」

「私は」風斬は少し考えた後、「あの化け物を……止めないと」

風斬の声にまるで応じるかのように石像は動きだす。その動きは先ほどよりもゆっくりとしていたが、もしも構えた拳が放たれれば、辺りのビルすら巻き込み、彼女達の体を粉々に吹き飛ばすに違いない。

「無理だよ、ひょうか、逃げなきゃダメだよ！あれは人間じゃないんだから！あんな化け物なんかと戦うなんて思っちゃダメだよ！そんなことしたらひょうかは絶対に助からないよ！」

「……大丈夫」

風斬は言う。

彼女の顔は、泣き出しそうな表情のまま、笑っている。

「私も人間じゃないから」

インデックスは、思わず息をのんだ。だが、

「知るか、そんな事」

誰かが風斬とインデックスの手を取るとゴーレムから距離を取ろうとする。だが、ゴーレムはすでに拳を振り下ろす直前だった。

ドガァン！！と、ゴーレムの足音が爆発し、拳を振り下ろそうとしていたゴーレムはバランスを崩し、倒れこむ。

その間に、ゴーレムから離れる三人。

「あなた……何で、ここに？」

風斬とインデックスの前には金髪の青年、ゼロがいた。

「後を追ってきたんだ。上条もすぐに着くはずだ」

ゼロの声には風斬達の事を、そして上条の事も心配している感じはまったくなかった。だが、

「さすがだな。あの石像からインデックスをここまで守り抜くとは」

それは、興味が無いという訳ではない。

それは、彼らを信頼している、そういう声だった。

化け物であるはずの風斬氷華でさえも。

「……何で、来ちゃうんですか。化け物の、相手は……化け物がすればいいのに！」

「オマエがどう言っても、自分の事を化け物と言うのを止めないからな。悪いが、代わりにオレ達はどこまでもオマエの仲間……いや、友達でいることにした」

ゼロの言っている意味が風斬には理解できない。だが、彼女の心は何か温かいものに満たされていく、そんな気がした。

「友達だったら、守るのは当然。だろう？」

ゼロはインデックスへと同意を求める。

「……ひょうか。私はひょうかが何なのかは分からない」

インデックスの言葉は風斬の胸へと刺さる。つい、顔を逸らしてしまう。

風斬が嫌われてでも、恐がられてでも助けたい、彼女の大切な友達。

彼女の言葉を聞くのが恐かった。

嫌いと言われるのが嫌だった。

自分の下から離れて行ってしまうのが恐ろしかった。

それでも助けたかった。この手で彼女を守れるのならば、それでも良かった。

でも、やはり怖い。どれだけ覚悟を決めても、それは怖かった。だからこそ、

「でも、これだけはわかる。ひょうかは私の大切な友達だってことは」

瞬間、風斬はインデックスの方を見る。

その顔はとてもあたたかく、そして優しく涙を浮かべて笑ってい

た。

風斬の目からも自然と涙がこぼれる。

「でも……、私は、」

「たとえば、ひょうかがどんな存在であったとしても、ひょうかは私の友達で、私はひょうかの友達なんだよ!」

二人とも、嬉しそうに笑顔で泣いていた。

しかし、彼らのそんな幸せな時間は長くは続かない。

ガアアアっ!! と、ゴーレムが雄たけびを上げ体を起こそうとする。

「悪いが、続きは後だ! 早くここから離れろ!」

「でっ、でも……あの化け物を、相手にするには……私じゃなきゃ」

二人を逃がそうとするゼロへと風斬が反論する。

「悪いがオレは逃げるわけにはいかないんでな」

「……えっ?」

「昔、親友と約束したんだ。世界をそいつの分まで守りぬくと」

ゼロは懐かしむような、そしてとても悲しそうな背中をしていた。

「ここはその世界じゃない。だけど、ここでできた仲間達ぐらいは守ってみせる。それに」

ゼロは頭に巻いていた包帯をとる。

風斬を庇い、怪我を負ったはずの額には傷がなかった。

「……何で、どうして……?」

そこには傷だけでなく傷跡すら綺麗になくなっていた。

「こんなことで自分を化け物と言うのはやめにしないか? オレは自分の事を化け物だなんて思うつもりはないんでな」

そして、ゼロはゴーレムの下へと走っていった。

実際にゴーレムの前に立つと、その威圧感は今までのモノをはるかに凌駕していた。

（でかさだけならオメガたちにも匹敵するな）

これぐらいの大きさの相手も今まで戦ってきた中にはいた。

だが、それはあくまでゼロが戦える時の話だ。今の体は人間と同じになってしまっている。

そんな、ゼロの心を読んだかのようにゴーレムは拳を振り上げる。
「ちっ！」

ゼロが急いで後ろへと走ろうとした瞬間、落ちていた瓦礫に躓いてしまう。

何とか立ち上がろうとするが、すでにゴーレムはゼロへと拳を叩きつけようとしていた。

「ゼロ！！」

「逃げてください！！」

風斬はすでにこちらへ走り出している。だが、いくら風斬でもここまで来るには少し時間が足りない。

（ちくしょう！このまま何も守れずに終わるなんて）

ゼロは悔しさに奥歯をかみしめる。

（終わらせてたまるかぁ！！）

そして、エリスの拳がゼロのいる所へと叩きつけられた。

「……そ、んなっ……」

風斬の足が止まる。だが、

ゴーレムの拳はゼロにたどりつく前に止められていた。光る一本の剣によって。

「……えっ？…あれは、何？」

その光景に眉をひそめる風斬とインデックス。

あのゴーレムの一撃を受け止めるなど常識では考えられない事だった。

だが、ゼロだけはその剣に見覚えがあった。

「ゼットセイバー……だど？」

それは彼の親友エックスより以前渡された彼の剣、ゼットセイバーだった。

ゼットセイバーは強く光ると今度はエリスの拳を弾く。そして、まるで意思があるかのようにゼロの手へとおさまった。

「…また、共に戦ってくれるというのか。このオレと」

ゼロは一瞬だけ嬉しそうに顔をほころばせると、ゴーレムを見据える。

「いくぞ！」

ゼロが叫んだ瞬間、ゼロの体が光に包まれる。

「!!!!」

インデックス達もあまりの眩しさに目を隠す。

光が消え、視界が戻った時、インデックス達が見たものは、体中に赤を基調とした装甲を纏ったゼロの姿。

それこそが、今までゼロが仲間達を守るために戦ってきた姿だった。

「……ゼロ、さん。その姿は……一体……」

「オマエと同じだ。オレも人間じゃない」

風斬が息を呑むのが分かる。人の姿をしたヒトデナイナニカ。自分以外のその存在を知ったことで驚いたのか、それとも恐怖したのか。

「だが、オレはそんな事で悩んだりはしない。オレ達は生きて、ここに自分の意志でいるんだ。それを人じゃないからといって、否定しないし、させもしない」

ゼロの言葉は力強かった。

ゴゴゴ！ とゼロ達が話している間にも、吹き飛ばされたゴーレムは体を起こし始めている。

「さっきので分かったはずだ。自分が人じゃないからといって、勝手に自分を捨てるな。オマエの味方をしてくれる奴だって、たくさんいるんだからな」

ゴーレムが起き上り、拳を構えると同時に、ゼロは跳んだ。

ゼロはゴーレムのほぼ真上、ゴーレムの大きさの倍以上の高さまで跳躍する。

それに反応してゴーレムも拳を上へ放とうとする。

「こいつで終わりだ」

ゼロはセイバーへとエネルギーとを込め、ゴーレムへと振り下ろす。

チャージセイバー。

エネルギーをセイバーに溜めて放つ、ゼロの基本の技の一つ。

「はあああっ！」

ゼロのセイバーとゴーレムの拳がぶつかる。

そして、

ゴーレムの腕からビキッ！ という音がしたかと思うと、その腕はセイバーによって破壊された。

そして、ゼロはそのままゴーレムへと突っ込む。

ガードをするなんてことはゴーレムにはできない。

ドゴン！！ という激しい爆音とともに大量の粉塵が舞った。

「……やつ、たの……？」

風斬にもインデックスにもどうなったのかは分からない。

だが、粉塵が晴れた時、そこに立っていたのは赤い戦士の姿だけだった。

「ほら見てくださいよ。今回俺って入院とかしてないじゃないですか。うわすげーな俺、これって一つの成長進化ですよ？ そうですね？」

病院の診察室でカエル顔の医者に向かつてはしゃいだ声を上げる
と、両サイドから月詠小萌と姫神秋沙が同時に彼の頭を引っ叩いた。
そして、そのままカエル医者目の前で上条へと繰り広げられる
お説教。

「あの、何か後ろの二人が怖いのでやっぱり入院とか駄目ですか？」
上条が廃墟に着いた時、そこにいたのは、無事そうなインデックスと風斬。そして、倒れているゼロだけだった。

その後、騒ぎを聞きつけた白井と美琴の二人が来たので、ゼロを
この病院に送ってもらうように頼み、上条達も現場に警備員や風紀
委員が来る前に退散することにしたのだ。
アンチスキル
ジャッジメント

ただ、上条も一応銃撃戦に巻き込まれたりだのなんだのしていた
ので病院で精密検査を受けないわけにはいかず、結局、ゼロが送ら
れた病院に来ている。

風斬とインデックスはここに来るまでの間も、普通に話していた。
お互い普通の『友達』のように。

自分の怪我も、風斬達の事ももう心配はない。

あと、気になる事は一つだけだった。

「あっ、姫神、小萌先生。ちょっと、この先生と個人的なお話がし
たいんで二人だけにしてもらえますか？」

「むー、仕方ありませんね。でも、上条ちゃん！まだお説教は終わ
ってないですからねー！」

また後で、と言って小萌先生の後について姫神も診察室から出て
行く。

「それで、僕に何を聞きたいんだい？」

二人が出て行ったのを見てから、カエル医者が上条へと尋ねる。

「あっ、えっと、ゼロの事なんですけど」

そう。上条があと、気になるのはこの一点だけ。

最初、ゴーレムがいないのは風斬がゴーレムを破壊したからだ
と、上条は思っていた。

だが、二人から話を聞くと、ゴーレムを破壊したのは風斬ではな

く、ゼロだと言う。

いくら、運動神経が良いゼロだったとしても、何の能力も持たない彼がゴーレムを破壊できるとは上条には思えなかった。

そして、彼の怪我をしていたはずの額。

「ふむ。それについては彼自身に聞いてみるのが一番じゃないのかな。おいで」

カエル医者は上条を先導して、ある病室の前まで来る。

「先に言っておくことがあるんだが」

そこまで言うと、カエル医者はまわりに人がいないのを確かめる。

「彼はこの街の住人ではない。というより、この街に入った形跡が存在していない」

上条は驚愕する。

誰にも気づかれずいつの間にかそこにいた。それは風斬が学校に現れたときと、よく似た状況だった。

「失礼するよ」

カエル医者は病室の扉を開け、中へと入っていく。

上条もその後が続いて入ると、そこには静かに本を読んでいるゼロの姿があった。

絵になる、上条は先ほどの驚きも忘れてついその姿に見入ってしまう。

ゼロの姿はかっこよかったが、それに上条は見惚れたわけではない。本を読んでいる彼の横顔、それはとても楽しそうだった。まるで、今まではこんな楽しみを知らなかったとでもいうような顔だった。

「ん。ああ、上条か」

こちらに気づくと、ゼロは本を閉じる。

「怪我は大丈夫なのか、ゼロ」

「ああ、問題ない」

上条の問いかけに自然に答えるゼロ。

「それじゃあ、僕はこの辺でお暇させてもらうよ」

カエル医者は役目を終えたといわんばかりに、さっさと病室から退場していった。

部屋に二人だけになった瞬間、一気に空気が重くなる。

何を言えればいいのか、上条が言いあぐねていると、

「オマエは少しアイツに似ている」

唐突にゼロが話し始めた。

「アイツ？」

「ああ。オレの親友でな。そいつは自分を犠牲にしてまで、人間を守ろうとし、消える最後の瞬間までそいつは世界が好きだった。とんでもないお人好しだ」

ゼロはこちらを向いているが、その目は大切な思い出を懐かしそうに見ているようだった。

「大切な友達だったんだな、そいつ」

「ああ」

ゼロは顔をほころばせながら言う。

「オレがアイツを忘れてもアイツはオレを友だと言ってくれた」

「えっ？」

その言葉は上条に別の意味で衝撃を与えた。

「……もしかして、ゼロ。オマエ、記憶喪失なのか？」

記憶がない。それは上条も同じだった。

「……ああ。ここ数年の記憶はあるし、昔の記憶も断片的には覚えてるんだがな」

ゼロは今度はさびしそうに笑う。

「何で俺なんかそんな事を？」

「オマエはオレの事が知りたくて来たんだろう？」

ゼロはさも当然といった様子で答える。

「別に誰にでも話す訳じゃない。だが、オマエはもう仲間だ。だから話してもいいと思った」

淡々とただ説明するように話すゼロ。しかし、それは同時に上条への友情の証でもあった。

「まず、言っておくと、オレも人間じゃない。正確には一部分がだが」

上条は今度は驚かずにゼロの話を聞いている。友への信頼を表すように。

「オレの体は人間だ。……心臓以外はな。心臓だけは機械のようなものが代わりを行っているそうだ。さっきの医者が教えてくれた」
ゼロは自分の心臓のあたりを指差しながら告げる。

「この機械の力でオレは失った力を取り戻す事が出来るし、傷の治りも早い。それが真実だ」

ゼロの言う失った力のことは、現場にいなかった上条には分からない。だが、それが強力なものだという事は分かる。なにせあのゴーレムを破壊した力なのだから。

「最初、オマエ達に会った時にはこんな事になっているなんて知らなかった。だから、力を使えなかったんだ。すまない」

ゼロは上条へと頭を下げる。

上条は急に謝られ焦り出す。

「いや、別に良いって。しかたねえじゃねえか。知らなかったんだろ？」

「……ありがとう」

上条は一安心する。

確かにゼロの正体は驚きだったが、風斬と同じく、彼も大切な友達なのだ。

たといえ、普通じゃなかったとしても、それで嫌いになる理由にはならない。

これで上条の心配も消え、全て解決……のはずだった。だが、

「それで、魔術とは何なんだ？」

ゼロの言葉に上条の息が止まる。

まるで今度はゼロのターンとばかりにしてきたゼロの質問。

それは上条にも簡単に答えられるものではなかった。

いくら特殊な存在とはいえ、魔術の事を簡単に知らせていいものか。

だが、そんな逡巡は一瞬の事。すぐに上条は意を決する。

嘘をついたとしてもゼロは見抜いていしまう。そんな気がした。

それに、自分の秘密をあそこまで話してくれた友達に嘘はつきたくなかった。

「これで満足か？」

土御門元春は吐き捨てるように筒の中にいる人物…、アレイスタ―へと呟いた。

「まさか、誰も虚数学区・五行機関がAIM拡散力場そのものだなんて思わないだろうな」

五行機関とはそもそも有害か無害かすら分かっていない。

わかっているのはただ一つ。

それはある一定以上の衝撃を加える事で爆発的に力が増してしまう事。

だが、その『一定以上の衝撃』も『増加する力』がどれくらいなのかもわかってはいない。

ゆえに、学園都市も不用意に五行機関に手を出すことはできない。だから、制御しようとする。そして、そのための鍵こそが、

「風斬氷華、という訳か。まったく、あんなものへ人為的に自我を植え付けるなど正気の沙汰とは思えん」

風斬氷華、彼女は能力者達によって生み出された存在、虚数学区の一部。

そして上条当麻、彼は虚数学区にとって唯一といってもいい脅威。
『死ぬ』という脅威。それは心なき存在げんそうへと自我を持たせる。

「そこまでして虚数学区を掌握することに意味があるのか？」土御門はやがて聞いた。だした。

「今回の件で緩やかに世界は歪み始めた。科学側の人間が魔術が話の人間を倒しちまったんだからな。イギリス清教だって、これを黙って見過ごすとは思えん」

土御門の声にも、アレイスターは笑みを崩さない。

「魔術師共など、あれさへ掌握できれば取るに足らん相手だよ」
「あれ、だと？」

アレイスターの言葉に、土御門は眉をひそめる。

同時に嫌な予感が土御門の頭をよぎる。

虚数学区・五行機関。

それはそこにいるのに誰にも見る事も聞く事も出来ず、人間とは別位相に存在する、ある種の力の集合体によって構成される生命体。
土御門元春走っている。

その存在は、魔術において何と呼ばれるか。

「アレイスター……、お前はまさか人工的に天界を作り上げるつもりか！？」

「さてね」

対してアレイスターはつまらなさそうに一言答えるのみ。

土御門は今までのアレイスターの行動、それから、これらから考えられる可能性に戦慄しながらも、なかば負け犬が吠えるように吐き捨てる。

「ふん、これがイギリス清教に知られれば即座に開戦だな」

「馬鹿馬鹿しい妄想を膨らませるな。私は別に教会世界を敵に回すつもりは毛頭ない。そもそも君の考えにある人造天界を作るには、まずオリジナルの天国を知らねばならない。それはオカルトの領分だろう。科学にいる私には専門外だ」

「ぬかせ。オマエ以上に詳しい人間がいるか。そうだろうか？」

土御門は唇の端を歪めて、

「魔術師・アレイスター・クロウリー」

アレイスターはただ笑っているだけで無言だった。

土御門にはもう一つ解せない事がある。

「それで、アイツは何者なんだ？」

土御門の目は一つの映像を捉える。そこには赤い装甲をまとった金髪の青年が映っていた。

「ふむ、彼が手順^{プロセス}に影響を与えとは思いがたい。が、彼の力には多少、興味はあるな」

アレイスターはまるで土御門の声など聞いていないかのように呟く。

「おい、聞いているのか！」

「聞いているさ。彼が誰かなんて決まっている。この世界ではないどこか別の世界から来た存在だよ」

土御門にはアレイスターの言葉が理解できない。

もしあれが別の世界から来たというのならば、彼は天使か何かという事になってしまう。

「彼は君達のいう、天界などから来た存在ではない。文字通り『別の世界』から来た存在だよ」

土御門の疑問を見透かしたようにアレイスターは話を続ける。

「平行世界^{パラレルワールド}という事か？」

「おそらくそれが一番近いだろう。実際はどうかは知らんがね」
それだけ言うと、アレイスターは再びさっきの映像へと目を移した。

「我々とは、ベクトルの違う科学。果たして、君はここへ何をもたらしてくれるのかね……」

夕方になり、インデックスもゼロの病室へ見舞いに来て、少ししてから彼らは家へと帰っていった。

風斬はいなかったが、インデックスはまた遊ぶ約束をしたと、嬉しそうに語っていた。

誰もいなくなり、一人静かに本を読んでいると、

ピピピピッ！！ とベッドの下から携帯の音がした。

ゼロはそれをベッドから降り、屈んで取り出す。

（……いつからここに？ 上条が忘れて行ったのか？）

だが、それは上条が地下で使っていたものとは別のものだった。

不審に思いながらもゼロはそれにでてみる。

「初めまして」

男にも女にも、大人にも子供にも、聖人にも囚人にも聞こえる不思議な声。

「誰だ、オマエは？」

「私はアレイスター。この学園都市の統括理事長をしている」

ゼロは訝しむ。相手はこの街のトップだと言うのだ。無理はない。

「別に何かしようっていう訳じゃない。少し君と交渉がしたい」

「何だと？」

「君はこの街の住人ではない。というよりも、この世界の住人ではないと言った方が正しいか」

ゼロは顔をしかめる。

彼も薄々は気づいていた。ここが自分の住んでいた世界ではないという事に。

そして、それはこの世界において彼はいないはずの存在となる事を示す。

存在しないものが生きていくのはあまりにも過酷すぎる、それが世界だった。

（どこかでこちらの行動は監視されていた訳か）

ゼロが別世界の存在である事を知っている。ならば、おそらく彼がさっき使った力についても、そして彼の体の事についてもばれていくのだろう。

「私の下で働く気はないかね？ そうすれば、この街で暮らしていい」

アレイスターの提案は行くあてのないゼロにとっては魅力的だった。だが、

「断る」

ゼロははっきりとその申し出を断る。

「ふむ、なぜだね？」

「オマエはオレのことを知っていた。ならば、あの侵入者の事もわかっていたはずだ。なのにそれにしてはあまりにも対応がずさん過ぎた。わざとそうしたんじゃないのか？」

「なるほど。では、諦めるとしよう」

アレイスターはあっさりと引き下がる。

「だが、この街にはいてもらう。君という存在をあちら側が認知すると手を出してこないとも限らないのでね」

あちら側とはおそらく魔術師達の事だろう。

「なぜ、そこまでする？」

「簡単だ。君という存在は科学でありながら、この世界においては向こう側にとっても大きな意味を持つ。今、君が向こう側に捕まるのはこちらとしても少々困る」

ゼロは少し考えると答えを出す。

「いいだろう」

新たな世界で生きて行くためにはゼロにとっても居場所が必要だった。

自分の家も、そして、共に生きる仲間も。

二日後。

（はぁ……。ない頭を使いまくって上条さんのMPはすでに空っぽですよ）

シェリーの事件が終わった後、上条にはする事があった。

それは、クラスメイトの把握。

クラスメイトの名前と顔の一致、誰がどこに座っているか、上条自身との関係など。これらをばれないようにさりげなく観察し、家でもインデックスが寝た後に寝ずに頑張って覚えていたのだ。

そんなものは普通少しずつ時間をかけて、いつのまにか覚えているものだが、今の上条にはそんな事は言っていられない。

早く覚えて少しでもクラスのみんなに違和感を覚えさせないようにしなければならぬのだ。

そんな事をしていて、学校へ来て早々、机に突っ伏す上条。

「あれー？どしたん、カミヤん？何かあったの？」

「にゃー、どうせまた、学校へ来る途中に、かわいい女の子と良い感じになってたんだろう？」

「なっ！カミヤん、またかいな！？」

「ちげーよ。そんな事、この不幸の象徴である上条さんにあるわけないでしょう」

話しかけてくる土御門と青髪ピアスにも適当に答える上条。

ただ、自分の事を自分で不幸と言った事は、しっかりと彼の心にささっていたが。

「はい。みなさん、ホームルームの時間ですよー。さっさと自分の席へ座りやがれですー」

なおも、上条のまわりで騒ぐ土御門達だったが、小萌先生が入っ

てきた事により、自分の席へと戻る。

「今日はホームルームの前にみなさんにビッグニュースですー。なんと、またこのクラスに転入生が来る事になりましたー」

小萌先生の声に教室がざわめき始める。

始業式からまだ二日しかたっていないのに、また転校生なんてのは明らかに異常だった。

「ちょっと、事情があって、その子は最近までずっと学校に通えてなかったのですー。だから、みんな、仲良くしてあげてくださいねー。あ、ちなみに転入生は男の子ですよー。おめでとう子猫ちゃん達ー、残念でした野郎どもー」

その言葉に今度は疑問ではなく、純粋な興味がみんなに生まれる。「うふふ。これで私の影はまた。薄くなるのね」などという声が、姫神の方から聞こえた気がした。

だが、今回の上条は前とは真逆の心境だった。

ただでさえ疲れており、なおかつ前の時は姫神だったという安心感が彼の心にはあった。

（ふふふ、もういい加減私の不幸も出尽くしたころよ）

一人心の中でほくそ笑んでいる上条。

「それじゃあ、転入生ちゃん。入ってきてくださいですー」ガラリ、と扉が開く音がする。

瞬間、クラスから一切の音が消えた。

何事かと思つて、上条が顔を上げるとそこには、

「それじゃあ、自己紹介をしてくださいですー」

「赤谷零^{あかやれい}だ。よろしく頼む」

なぜか、上条の学校の制服に身を包み、赤谷零と名乗るゼロの姿があった。

人ならざる者たち（後書き）

文字数がまた多くなっています。

なんとか減らして見やすい文にすると決めたはずなのに。

次からは必ずより見やすい文にして見せます！

初日

「赤谷零だ。よろしく頼む」

転入生として教壇に立っていたのは、黒目で、長い金髪を後ろで束ね馬の尻尾のようにたらしめた少年というよりも青年と言った方がふさわしい、落ち着いた感じのする男子だった。

沈黙。

そして、

『きゃああああーっ！！！！』

クラスの女子たちから怒号のような叫び声上がる。その叫び声に驚き、一步後ろに後ずさる転入生。

その転入生は少し冷たい印象を受けるものの、かなり整った顔立ちをしている。

そんな転入生が来れば、一般の高校ならばこうなるのは当然の反応ともいえる。ただし、男子達は少し、いやかなりおもしろくなさそうな顔をしてはいるが。

上条は一人呆然とその転入生を見ていた。

なぜなら、転入生としてそこにいたのは、先日魔術師相手に共に戦った男——ゼロだった。

（何でアイツがここに！？アイツ確かこの街に不法侵入してたんじゃないかったっけ！？）

そんな疑問が上条の頭の中をぐるぐると駆け巡る。

「ん。当麻もこの学校だったのか？」

ゼロは呆けている上条に気付いたようでそちらへと視線を向ける。ゼロの上条への呼び方が当麻に変わっているが、それはこの間、病室で下の名で呼ぶ方が親しいと聞いたゼロがそちらに変えたのだ。

「あれ？上条ちゃんとお知り合いですかー？」

「はい」

小萌先生の言葉を肯定するゼロ。

すると、クラス全員の顔が上条の方を向いた。

彼らの目は語る、毎度毎度テメエは、と。

「にゃー、カミやん。カミジョー属性は女だけに限らず、ついに美男子まで網羅し始めたのかー?」、と土御門がろくでもない事を口にした瞬間、「ええっ!? 上条君と赤谷君ってそんな関係なの!?!」なんていう、あらぬ誤解がクラス中に広まる。

確かに、ゼロはすでに大切な仲間だがそれでもそんな事を言われるのは上条としてもとても不本意だ。

「ふっざけな! そんな事あるわけがねえだろ! 上条さんは男になんて興味ないし、女性に対しても硬派ですよ!」

上条がみんなの誤解を解こうと叫んだ瞬間、ヒュッ!! と上条の横から顔めがけて、拳が飛んでくる。

「うおっ!? 何すんだよ、いきなり!?! あぶねえじゃねえか!」

それを間一髪で屈んで避ける上条。

「にゃー、カミやん。自覚が足りないぜい。カミやんがそんなこと言っても嫌味にしか聞こえねえんだよ!」

カミジョー属性。それは上条が出会ったばかりの女性とすぐに仲良くなってしまうことをさす。

もちろん、このクラスの中にもそれにあてられた女子も何人かいる。

ただ、この上条当麻と言う男はそれをまったくといっていいほど自覚していない。

ゆえに、上条には土御門、ひいてはクラスの男子達が何に怒っているのかがさっぱり理解できない。

「はいはい。そこまですよー。みんな聞きたい事はあるでしょうけど、時間がないので後にしてくださいねー。じゃあ、赤谷ちゃんはある窓際の空いてる席に座っちゃってくださいーい」

「はい」

上条達の様子を少し呆れた目で見ていたゼロは、小萌先生の言葉

に素直に頷き、言われた席へと向かう。

小萌先生の言葉である程度は静かになったクラスだが、今もあちこちからゼロを気にした声が聞こえる。

「ん？」

席へ向かう途中でゼロが横目で一瞬、誰かを見た気がした上条。

（もしかして、）

「じゃあ、さっそく一時間目は先生の化学ばけがくの時間なですよー」

上条の考えは、教科書を出してくださいー、という小萌先生の言葉によって中断させられた。

（そういえば、アイツ、教科書なんて持ってるのか？）

気になって、チラッとゼロの席を見てみるとそこには教科書を広げ、真面目な顔で小萌先生の授業を聞いているゼロの姿があった。
「上条ちゃん。ちゃんと授業を聞かないと後でまた補習になっちゃいますよー」

気にしなくてもよかったかと胸をなでおろした上条の耳に、小萌先生の注意が聞こえた。

上条は黙って、前を見る。が、

「カミやんは転入生が気になって仕方ないんやね」

青髪ピアスが余計な事を言ってくる。

その言葉に、やっぱりあの二人……、と囁き出す女子たち。

「だから、違うって!!」

慌てて否定する上条。

だが、上条と違いゼロは話題に上げられたにも関わらず、全く気にした様子はない。

正確には気にしていないのではなく、クラスの連中が何で騒ぐのかが理解できないだけなのだが。

「……上条ちゃん……」

反論を続ける上条へ小萌先生が声を低くして呼びかける。ただし、声とは裏腹にその顔は今にも泣きそうになっていた。

それを見たクラスメイト達は全員、上条へと非難の視線を浴びせ

る。

「俺っ！？俺だけが悪いのか！？」

「当麻。少し静かにしろ」

ついには、ゼロにまで注意される上条。

今すぐにも、泣いて、ここから走り去りたかったがそういうわけにもいかない。

だから、一言。

「不幸だああー！ー！ーっ！！」

「それで。何でこの学校に入ってきたんだよ？」

ここは上条達の学校の屋上。

基本的に屋上への立ち入りは禁止されているため、人は来ない。

「色々あってな」

「いや、だからその色々が聞きてんだけど」

そこで上条とゼロの二人は購買で買ったパンをほうばりながら、話していた。

小萌先生の授業が終わった後、休み時間になるとゼロはまわりをクラスの連中（主に女子）に取り囲まれた。

そして、趣味や好きな女性のタイプなど、ありがちな質問を矢継ぎ早に受けていた。

普通の質問には淡々と答えていたゼロだったが、唯一前の学校を聞かれたときだけは答えにくそうにしていた。

ただし、ゼロからでた答えは、自分はずっと病院で寝たきりで学校には行けていなかった、という大層重い話になっており、全員がそれを聞いた瞬間、気まずそうに眼を伏せていた。

しかし、ここは普通の学校とはいえ、学園都市内にある学校であ

る。

能力値や能力の種類も当然聞かれた。

そこでも、ゼロは無能力者、能力の種類は分らないと、やはり淡々と受け答えしていた。

ゼロから彼の体の事などを聞いた上条にとっては、嘘であっても涼しげに言いきるゼロの演技には感服する。

その後も、休み時間になると、何かしらの質問を受けるゼロに、昼休みになって、上条はわざわざ自分が教えると言い張る女子数名をなだめ、購買へと連れて行く事に。

そして、そのまま話を聞くために、この屋上へゼロを誘ったのだ。人に聞かれるのは、あまり好ましくない話であろうことは推測できたので、誰にもばれないように、屋上を選んだ上条だった。

「……それはな、」

「それはオレが話してやるぜい、カミやん」

誰も来ないと思っていた屋上に急に表れたのは、彼らのクラスメイトである土御門元春。

「やっぱり、お前が関係してたのか」

対する上条は特に驚きもせず、寮の隣人でもあるクラスメイトの顔を見ていた。

ゼロはまるで説明は任せたと言うかのように、買ってきたパンをひたすら口へと運んでいる。

「何だ、気づいてたのか」

「さっき、クラスでゼロが一瞬だったけど、お前の方を見たからな。もしかして、と思ったんだよ」

そう。先ほど、席へ向かうゼロが見ていた視線の先にいたのは土御門だった。

もしも、土御門が普通の生徒だったならば、上条も例えば、同じ金髪だから気にして、などと考えていたかもしれない。

だが、彼は『普通の生徒』ではない。

イギリス清教『必要悪の教会』の魔術師にして、学園都市の学生。

学園都市やイギリス清教などあらゆる組織に所属する多角スパイ。それが土御門元春。その事は上条も以前あった事件の際に知らされていた。

「ほう。カミヤん、少しは成長したのかにゃー？」

「いいから、早く教えてくれ。何でゼロがこの学校に転入生として来てんだよ？」

土御門の言葉を流して、話を進める上条。

「簡単さ。魔術師の手には渡せない。ただ、それだけの事さ」

真面目な顔になって、話し始める土御門。そこには先ほどのふざけた顔は微塵もうかがえなかった。

「いや、正確には『外』の人間の手には、かな」

「何で『外』の人間の手にかかるとまずいんだよ？」

「カミヤんも聞いたんじゃないのか？ソイツの体の事を」

土御門はゼロを指差す。

ゼロもこちらをじっと見ていた。

「実は、ソイツの心臓となっている機械の技術はこの学園都市にすら存在しない異質なモノなのさ。学園都市でも解明できないものが『外』の連中に解けるとは思わないが……。そんなものが『外』に出ればどうなるかぐらいはわかるだろう？」

ここまで言えば、上条にだって、土御門の言いたいことは理解できる。

学園都市の『外』には学園都市の技術を盗もうとしているような連中もたくさんいる。

それは、個人規模から国家規模に至るまで多数存在する。

そんな状況で、学園都市ですらよくわからない未知の技術が『外』にあるとわかれば、それだけでも多くの人からゼロは狙われる可能性がある。

魔術師達だって、学園都市以外の集団が新たな科学技術を得よう

とすれば、それを潰そうとするだろう。

そうなれば真っ先に狙われるのは、組織ではなく、研究対象。すなわち、ゼロだ。いくら特殊な力を彼が持っていたからといって、何人もの魔術師に襲われればひとたまりもないだろう。

『外』が技術を持つのも阻止したいし、ゼロの心臓に使われている技術も解明したい。

そのためには、学園都市にとっては街の学生になってもらうのが一番手っ取り早いという訳だ。

「だから、学校へと通ってもらったのはあまりソイツの存在を目立たせないようにするためだ。この街の中にだってソイツを調べたいと言い出す科学者は少なくないだろうからな」

土御門はそれだけ言うのと、またいつものふざけたような顔つきに戻って上条達に背を向け教室へと戻ろうとする。

「まっ、安心してていいぜ、カミヤん。特に心配するようなことは何もないからにゃー」

そう言って、土御門は屋上から出て行った。

「まあ、あれだな。お前もいろいろと大変だな」

「まったくだ。だが、土御門には感謝している。オレの情報が漏れないように色々と動いてくれたらしいからな」

ゼロはまた美味しそうに買ってきたパンをほうばり始める。

「……お前の食欲って、実はインデックス並みなのか？」

その食べっぷりを半ばあきれた目で見つめる上条。

ゼロの今の食べようは彼に同居人のご飯を食べている姿を連想させる。

「インデックスの方が食欲は上だろう。オレは今まであまりうまい食べ物を食べた事がないから、こうなるんだ」

心外だ、と言わんばかりの目をゼロは上条へと向ける。

だが、その言葉は上条へと小さな違和感を与えた。

（たかが、購買のパンでここまでうまい食べ物を食べた事がない…

…?)

上条はまだ知らない。

ゼロの体が普通でない事は知らされている。だが、彼がどこから来たのか。その心臓の技術はどこで生まれたものなのか。そして、今までどうやって『外』で過ごしてきたのか。

上条はまだ多くの事を知らない。

しかし、それを無理に聞こうとも思わない。

彼だって、自分が何も覚えていない事を誰にも知ってほしくはないのだから。

「いいだろう」

それはゼロが上条の学校へ転入してくる二日前の病室。

ゼロはベッドの下にいつの間にか置かれていた携帯で学園都市統括理事長であるアレイスターと話をしていた。

「それで、オレはどこにいればいいんだ？」

「君には学生としてこの街に住んでもらう。詳しい事は土御門に聞きたまえ」

瞬間、電話からはピーピー、という無機質な音が流れる。

「……切れたか。土御門？」

アレイスターが最後に言った土御門という名前。アレイスターの言う通りならもうすぐ接触することになるのだろう。

気にしてもしかながない、とゼロが読みかけの本を開こうとした瞬間、

「にゃー、お見舞いの品はこれで良かったぜよ？」

短めの金髪をツンツンに尖らせ、サングラスをかけた、変な言葉を使う大男が部屋へと入ってきた。

服装は上条と同じ制服のように見える。

その手には、コンビニの袋を提げている。

「中身は近くのコンビニの新商品。豪華、パイナップル……、を乗せた高級プリンだぜい」

そう言うのと、大男は袋ごとプリンをゼロへと手渡す。

「感謝する。：それで、オマエが土御門か？」

「そうですね。オレは土御門元春。よろしくな、侵入者」

ゼロの方へ手を出して、握手を求める土御門。

「オレは侵入者じゃない。ゼロだ」

ゼロもまた、その手を握る。

「そうだったな。じゃあ、さっさと説明するぜい」

握手が終わると、土御門は椅子に腰をおろした。

「まず、オマエにはオレと同じ学校に転入してもらう。これといった特徴のない平凡な学校だからな。姿を隠すにはちょうどいいだろう」

どうやら、土御門はただの使いではなくゼロの事情も知っているようだった。その事に警戒心を強くするゼロ。

「次に名前は偽名を使ってもらうぜい。さすがにゼロのまま転入すればばれるだろうからな」

土御門はどこから取り出したのか、ゼロへと紙の束を手渡す。

それは転入に必要な書類だった。

経歴などは全て嘘だらけで、名前の欄には赤谷零と書かれている。

「まっ、オマエとわかりそうな名前にはしといたぜよ。感謝しろよ」
偉そうにする土御門だが、ゼロにはいまいち何を感謝すればいいのかがわからない。

「それじゃあ、転入は二日後だ。明日はオマエを寮へ案内する事になってるからにゃー。逃げたりしないでくれよ？」

土御門は立ち上がり、ドアへと向かう。

「元より逃げる気なんてない。それより、お金はどうするんだ。オレはまったく持っていないぞ」

「安心するといいいぜい。これは秘密の話だが、オマエへと降りる奨学金の額は高レベルの能力者以上にしてある。よっぽど無駄遣いしなけりゃ、生活に困る事はないぜい。他に、気になる事があればその紙束の中にだいたい書いてあるから読んどきな」

ボタン、と扉が閉まり、病室にまた静寂が戻る。

ゼロは少しの間、扉を見つめていたが少しすると、手元の紙束へと目を落とした。

「むー、やっぱりとうまがないと退屈なんだよ！」

上条の部屋でインデックスはスフィックスを相手にひたすら文句を言っていた。

「だいたい、とうまもとうまだよ。今度学校へ来たらお昼ごはんを抜きにするだなんて。これはもう虐待の一種かも！」

二日前、インデックスがもう学校へ来ないようにするために軽く脅しをかけた上条だったが、それが予想以上の効果を発揮していた。インデックスはシスターでありながら、食べ物には目がない。

本人はまだ修行中の身だとか言って、言い訳をしてはいるが。

にゃーっ、とそんなこと言われてもという風に鳴くスフィックス。「ん？何だろう？」

彼女が家の中をゴロゴロと転げ回っていると、外から何か荷物を運びこむような音が聞こえた。

インデックスが扉を開けて、外に出ると、ちょうど真下の階の部屋に引っ越しの業者と見られる人たちが荷物を運んでいる最中だった。

「どうしたんだろう？」

「下の部屋に誰か人が引っ越してきたみたいだなー」

インデックスが後ろを振り向くとそこにはいつも通り清掃ロボットのに乗ったメイド。土御門舞夏の姿があった。

プログラムに従って、前へと進もうとする下の清掃ロボをモップを前に置く事で動けないようにし、その上に正座で鎮座している。

「これからは少し静かにした方が良いでしょう。夜に暴れてたら、引越してくる住人に苦情をつけられかねないからな」

舞夏の声はいつもと変わらぬものだが、それは騒がしくしすぎるとインデックスの存在がばれてしまう事を意味する。

舞夏もたびたび土御門の部屋に寝泊まりをしに来ているが、インデックスの場合となると話は別。

この寮は男子寮である。土御門が妹を溺愛しているのは衆知の事実だがあくまで彼女は土御門の義妹である。

だが、インデックスは上条の家族でも親類でもない。そんな子と一緒に住んでいるのがあれば上条はただでは済まない。

今までは下の部屋に誰もおらず、隣の部屋が土御門の部屋だったため、割と騒がしくしても問題はなかったのだ。

「でも、誰が来るのかな？」

「さあな。こんな時期に引っ越しだなんて珍しいんだがな」

インデックス達は下の部屋へと荷物を運び入れる業者たちをじっと見ていた。

授業もホームルームも終わり放課後、

「赤谷、帰ろうぜ」

学校ではゼロと呼ぶと不自然なため、赤谷と呼ぶ事にした上条。

まだ、街に慣れていないだろうと上条がゼロを家まで送って行くかなと考えていると、

「赤谷君の歓迎会しない？」

唐突にクラスの女子の一人が提案する。

それを聞いたクラスメイト達は帰る足を止め、いいじゃんなどと
言って、賛成の意を見せる。

このクラスはそういうクラスだった。良くも悪くもノリが良い。

黄泉川から言わせたら『バカばかりで楽しそう』なクラスである。
が、「悪い。オレは今日は引越したばかりだから荷物を整理し
なくちゃいけないんだ」と、みんなの誘いを断るゼロ。

「えー、そうなの？」

「ああ。明日なら行けると思う」

その言葉に、じゃあ明日やろう！、と盛り上がるクラス。

そんな光景を見ながらゼロは、また明日、と言って昇降口へと向
かう。

「あつ、おい。待てよ、赤谷！」

上条も慌ててその後を追った。

後ろからは明日の歓迎会をどうするかで盛り上がるクラスの声が
響いていた。

「そういえば、ゼロは今、どこに住んでんだ？」

とりあえず、ゼロと並んでそのままついていく上条。

「もしかして、小萌先生の家とか？」

彼らの担任である月詠小萌には家出をした子たちを拾ってあげる
という趣味（？）があった。

姫神秋沙も少し前までは小萌先生の家にお世話になっていたたりす
る。

「そんなわけないだろう」

何を言ってるんだ、といった感じに否定するゼロ。

「……そもそも、あの人は本当に大人なのか？オレには子供にしか

見えないんだが」

ゼロの疑問は小萌先生にあった事のある人ならば一度は抱く疑問。彼女は どう見ても小学生にしか見えない。

「ああ、間違いない大人だぜ。しっかり大学も行ったらしいし、車も運転してる」

上条の言葉に考え込むゼロ。

「人間とは思議なものだな」

「いや、あんなのはあの人だけだから」

しみじみと呟くゼロにそれに突っ込む上条。しかし、二人の胸の中には同じ思いがあった。

小萌先生恐るべし、と。

「ん。着いたぞ」

「へっ？」

話をしている間に寮に着いたゼロ達だったがそこは、

「ここって……、俺とおんなじ寮じゃねえか！」

そこは、上条や土御門も住んでいる寮だった。

「そうだったのか。オレは昨日、土御門のヤツに『とりあえず、今日からここがオマエの家だぜい』と、連れてこられたんでな。お前も一緒だったのか」

ゼロの声には知り合いがいたことへの安心が節々にうかがえた。

「あーっ！とうまだ！！」

上の方から声が飛んでくる。

寮を見上げてみると、見慣れた修道服のシスターが手を振っていた。

それを見ると、二人はなるべく早く上へと行くため、エレベーターを使わずに階段を駆け上がる。

上条の家の前まで行くと、そこには三毛猫を抱えたインデックスが立っていた。

「おかえりなさい、とうま」

「ただいま、インデックス」

嬉しそうに笑うインデックスについて顔がほころぶ上条。たとえば、何があったとしても彼の守りたい笑顔がそこにあった。

「あれ？もしかして、ゼロ？」

上条の後ろに立つ人物に気付いたインデックスはゼロへと声をかける。

「ああ。二日ぶりだな、インデックス」

「どうしてゼロがここにいるの？」

「今日からこの寮に引っ越してきたらしいんだよ」

家の鍵を開けて中へ入ろうとしながら上条は答える。

インデックスとゼロもその後続く。

家の中に入り、インデックスはスフィックスを抱いたままベッドへ、上条とゼロは床へ腰を下ろす。

「それで、何号室に引っ越したんだよ？」

「ちょうどこの部屋の真下だ」

「えっ？真下？」

上条が目を見開く。

「本当！？だったら、今まで通りちよっとうるさくなくても問題ないんだよ！」

下の住人が知り合いだった事と、今まで通りでも問題がない事に喜ぶインデックス。

普通、下の部屋の住人が知り合いだったとしてもうるさくして良いはずがないのだが、インデックスの中ではすでにゼロだったことで騒ぐ事を許可してもらえると勝手に決め付けているらしい。

もっとも、ゼロはすでに上条達の事がある程度は理解しているし、別に上がるさくても気にしないため別にかまわないのだが。

「いや、出来ればこれを機に少し大人しくなってもらえると、上条さんとしては非常にありがたいのですがねえ」

「むっ！とうま！それは私が暴れん坊だと言っているように聞こえ

るんだよ!」

「別に暴れん坊とまでは言いませんがね。こう、もう少し大人しい方が色々と、」

上条の言葉がそれ以上紡がれることはなかった。

彼の言葉にしびれを切らしたインデックスが頭に噛み付いていたから。

「ぎゃああああっ!!!」

「とうまの馬鹿っ!!!」

「インデックス! いや、インデックスさん! 私めがわるうござんした! どうか、これぐらいで勘弁……。ぎゃああああっ!!!?」

謝罪の言葉を聞いても、インデックスは止まらない。

上条の頭をガジガジと噛み続けている。

「相変わらず騒がしいな」

そんな状況を呆れながらも、ゼロは楽しそうに見ていた。

彼が今までいた世界では考えられない。

みんなが楽しそうに笑いあえる世界。

(オレは最後にこんな世界をアイツらに作れたんだろうか?)

もう二度と会えないかもしれない仲間達の顔を思い浮かべるゼロ。

(こんな世界が生まれているといいんだがな)

なおも、ゼロは暴れ回る上条とインデックスを見て、少しだけ微笑むのだった。

「いいから、俺を助けてくれえーっ!!!」

「とうま! 逃げちゃダメなんだよ!」

「不幸だあああーっ!!!」

初日（後書き）

ここからは一応ゼロをメインに話を進めようと思います。

ゼロメインといっても、原作自体は大きく変えず、そこにゼロが介入していくという形にしたいと思っています。

やっぱりへたくそな文章になっていきますがなんとか改善していけるよう頑張ります。

学生生活（前書き）

今回はいつもより短めになっていますが、いつも長すぎる気がする
ので、これぐらいの長さの方がちょうどいいのかなー、と思って書
いてみました。

学生生活

「それでね！とうまが私の『歩く教会』を右手で壊しちゃったんだよ！しかも、その後も平然と話しかけてくるし！やっぱりとうまにはデリカシーが足りないかも！」

ゼロが上条の学校へ転入してきてから三日が経った。

一昨日にはクラス全員でゼロの歓迎パーティーを行うこととなり、「にゃー。騒ぐなら良い焼肉屋を知ってるぜい」と言い出した土御門に案内され、クラスみんなで焼肉屋へ。

その際、「私も行く！」と言い出したインデックスも連れて行く事に。

最初はさすがにクラスの連中に彼女を会わずのはまずいと反対した上条だったが、焼肉と聞いて食欲魔人と化したインデックスに噛み付かれそうになり、最終的には折れたのだ。

しかし、上条の心配とは裏腹にクラスメイト達は何も疑問を持たずにインデックスを受け入れていた。

以前、インデックスは学校へと突入していたし、何よりとても良くも悪くもノリが良い。それが彼らのクラスだった。

そして今、ゼロは上条の家で勉強をしながら、インデックスの思いつき話（九割以上が上条への愚痴）を聞いていた。

なぜ、ゼロが上条の家にいるのかというと、ゼロはまったく料理が出来ない。

そもそも、今までは戦場に身を置いてきたんだし、レプリロイドだったから食事だって食べ物を食べるわけではなかった。そんな彼が料理などできるはずもなく、初めて台所に立った時には火事になりかけたほどだ。

そのため、練習してはいるものの、上条の家へとお邪魔させてもらう事に。

ただし、食費はゼロが負担している。

元々、趣味を持つわけでもないゼロにとって、学園都市側から支給される奨学金は多すぎるぐらいだった。

もっとも、奨学金の額は学校側には虚偽の申告がされている。まだ大した記録術かいほうもしていないゼロが、多額の奨学金を受け取っていたら怪しまれてしまうからだ。

「おーっし、できたぞー」

台所から料理を持ってくる上条。

その顔は普段よりも若干晴れ晴れしている。

何せ、食費が自分やインデックスの分まで完全に浮くうえ、あの暴食シスターが台所へとつまみ食いをしに突入してこないのだ。

この三日間、上条にとってこんなにも楽しく食事を作れるのは、記憶を失う以前の事は分らないが、初めての事だった。

「ごっはん♪ごっはん♪」

インデックスは嬉しそうに机の前に座って、上条が料理を運ぶのを見ている。

ゼロはやっていた勉強道具を机の下にしまうと料理を運ぶのを手伝う。

「「いただきます」」

三人の楽しい夕飯の時間の始まりだった。

「ぷはーっ。ごちそうさま、とうま。おいしかったんだよ」

「ごちそうさま」

ご飯を食べ終え、満足したように和むゼロとインデックス。

「お粗末さん」

上条は自分とインデックスの食器を持って、台所へ。ゼロも自分の食器を流しへと持っていく。

「てか、二人とも食いすぎだろ……」

上条がゼロに渡された材料で作った料理の量は五人分。

ゼロとインデックスはそれぞれ二人分の量をたいらげていた。

「美味しいものは自然とお腹の中にはいっちゃうんだよ」

インデックスの言葉に同意するように頷くゼロ。

今まで、ご飯というものを食べた事がなかったため、基本的にゼロの食事の量はインデックスと同レベルのもだった。

「いや、まあ、いいけどさ」

それだけ食べてたら太るぞ、とは口にしない上条。そんな事を言えば、彼の頭に噛み跡がつくのはわかりきっている。

「よし。それじゃあ、ゼロ。宿題を写させてくれ」

「断る」

上条の頼みを一刀両断するゼロ。

「いいじゃないですか、ゼロさん。この通り！」

ゼロへ向けて、頭を下げる上条。

「……オマエには恥というモノはないのか？」

そんな上条をゼロは呆れた目で見つめる。

「そもそも、宿題というのは自分でやるものだろう。人のを写してどうする」

「まあまあ、気にせず気にせず。食事を作ってやったんだからさ」

「心配しなくても今からでも十分できる量だ」

料理をした事を交渉材料に持ち出す上条にも、一切容赦しないゼロ。

諦めた上条は仕方なく自力でやることにした。

「えーっと、この英語の問題は……。インデックス、この問題を解いてくれたら後でアイスをやろう」

「本当！？ 解く、解く！」

「……オマエというやつは……」

一問目からインデックスに教えてもらおう上条（物で買収）に呆れて、ゼロは何も言えなかった。

「それじゃあ、これでホームルームを終わりますー。みなさん、気をつけて帰るですよー」

ホームルームが終わり、生徒達も小萌先生にさようなら、と言って帰っていく。

「赤谷はこの後どうするんだ？」

ゼロへと近づき、尋ねる。

寮が同じという事もあるが、食事と共にするため、ある程度彼らは一緒に行動した方が都合がいいのだ。

「少し服でも見に行こうかと思ってる」

「服？何だ、お前もそういうのに興味があつたんだな」

上条にとってゼロは、『良いやつ、だけど無愛想』みたいな印象だったため、服を買いに行くというのは少し意外だった。

「下着はあるんだが、寝巻がないんだ」

「ああ、なるほど」

ゼロの言葉に納得する上条。やっぱりゼロはイメージどおりだった。食事以外だが。

「じゃあ、服売ってるとこに案内してやるよ」

「インデックスはほつといいのか？」

「さっさと帰れば問題ねえだろ。今夜は近くのコンビニで夕飯すまそうぜ」

「悪いな」

二人は一緒に学校を出て、服を買いに向かった。

ちなみに、ここ数日の二人の行動を見て、「やっぱりあの二人……」などという噂が一部の女子たちの間で流れることとなるのだが。

「……本当にこっちも必要だったのか？」

服を買って、寮への帰り道。

ゼロは袋を二つ持ち、片方の袋の中身を見ながら、腑に落ちないというような表情で尋ねる。

その袋の中には、普通のTシャツやズボンが入っていた。

「オマエが持つてる服って制服と最初会ったときに着てた服だけなんだろう？色々と着替えが必要になる事もあるから持っておいた方が良いんだって」

上条の言葉にそうか、と呟き、自分を納得させるゼロ。

「そうだ、当麻。ジュースでも飲もう。今日のお礼におごってやる」

「おっ！じゃあ、ありがたくいただくとするよ」

公園の中にある自販機に着くと、ゼロはハバネロパイナップルジュースを。上条はヤシの実サイダーを買う。

「……お前、そんなのが好きなのか？」

美味しそうにジュースを飲むゼロに恐る恐る尋ねる上条。

「最高の品だ」

対するゼロは無愛想な顔ながらも幸せオーラを醸し出しながら断言した。

（……たまにコイツがわからなくなる）

「以前、ここで御坂の真似をしてでてきたこれを飲んでから、この味が癖になってしまったな」

どこか楽しそうに言うゼロ。

「えっ？ちょっと待て、ゼロ。まさか、お前もこれを蹴ったのか！？」

「……不可抗力だ」

しまった、といった感じに口調は変わらず、だが先ほどまでより

も小さな声で答えるゼロ。その額には微かにだが珍しく冷や汗が浮かんでいた。

美琴、白井、初春、佐天の四人はゲームセンターで遊んでいた。今日は白井にも初春にも風紀委員の仕事はない。

よって、久しぶりに四人で遊ぼうという事になったのだ。

「御坂さん。このコインゲーム、上手ですねえ！」

「当然よ」

少し自慢げに答える美琴。だが、内心では微妙に焦っていた。

そのコインゲームのコインは美琴が普段彼女の十八番であり、通り名でもある超電磁砲レールガンを撃つ際に使用している物だった。

あまり、その事を他の三人には知られたくはない。

ミスをしたふりをして、さっさとそのコインを使いきると、美琴は別のゲームへと移る。

「そろそろ最終下校時刻も近付いてきましたし、帰りましょうか」

「そうですね」

一通り遊んだ後、四人はゲームセンターを後にした。

「ああ！楽しかった！最近白井さんも初春も忙しそうだったからなあ」

佐天が両手をあげて、背筋を伸ばしながら満足げに言う。

「最近、色々と事件が増えてますからね。私達も色々と駆り出されるんです」

「風紀委員も大変ね」

「あら？お姉様、あの方は」

白井が指差した方向を見ると、そこには先日地下街で出会った青年、ゼロの姿があった。

ゼロはジュースを飲んだ後、学校にノートを忘れた事に気が取りに戻っていた。

上条とは先に帰ってくれ、と言ったためすでに別れている。

「ちょっと、アンタここで何してんのよ」

不意に横から声をかけられた。

声のした方向を見ると、美琴と白井。それにこの間、道を尋ねた少女と頭になぜか花飾りをのせた少女がいた。

「御坂に白井か。どうした、何か用か？」

「何か用か、じゃないわよ。アンタ、いつの間に退院したのよ？」

「入院した次の日にはもう退院した」

ゼロの言葉に驚く美琴と白井。ゼロは見た目は大した怪我ではないように見えたが、医者の話では最低でも三日ほどは入院する事になるだろうとのことだった。

「あ、あのー」

佐天がおずおずと言った感じに話に入ってくる。

「この間、会いましたよね？」

「ああ。あの時はありがとう。世話になった」

先日、ゼロは佐天に不良たちに落とされた財布を届けるため、不良たちの行方を聞いていた。

もっとも、その財布はシェリーの一件があったため、不良たちに返す事が出来ず、学校に入り警備員アンチスキルという存在を知った時に、警備員キルでもあり面識のあった黄泉川に渡されている。

「あれ？佐天さんもコイツの事知ってたの？」

「い、いえ！前に道を尋ねられただけです」

「そういえば名乗ってなかったな。オレは赤谷零。御坂達はゼロと

呼んでいるがな」

あらそんな名前でしたの、とゼロの名（偽名）を改めて聞いた白井達の口からそんな声が漏れる。

「あっ、私は佐天涙子です」

「初めまして、初春飾利です」

佐天に続いて、初春も自己紹介をする。

「ん？アンタ、その制服ってもしかして————」

美琴が質問しようとしたその瞬間、

ドガン！！と近くのコンビニの店内から爆発音が響いた。

爆発音から少しして、店内からは十人以上の男達が出てきた。男達は大柄な者はコンビニの中からATMを持ち、残りの者達はその周りを拳銃を持って囲むように移動していた。

その男達の向かうすぐ先には一台の軽トラックが駐車してある。おそらくそれにATMを積んで逃げる算段なのだろう。

「初春っ！連絡を！」

「はいっ！」

白井と初春は即座に風紀委員ジャッジメントの腕章をつける。

「黒子っ！」

「お姉様。何度も言うようですがこれは風紀委員ジャッジメントの仕事ですの。民間人は手出し無用ですわ」

手伝おうとする美琴をたしなめ、犯人達の下に空間移動テレポートしようとする。だが、

「ロックオン
レッグ
脚部武装」

美琴達が横を向くとそこにゼロの姿はなかった。

「何だ。テメエ！？」

美琴達が犯人達の方を見ると、男達と車の間にゼロが立っていた。

「今すぐそれを置け。そうすれば、まだ罪も軽くなる」

「何言ってやがんだ、テメエ！」

男達の一人が警棒を取り出し、ゼロに突撃してくる。だが、ゼロはそれを左に一歩だけ動いてかわすと、右足をちょいっと突き出す。

男はその足に引っかけかって盛大に転ぶと、気を失った。

「この野郎！！」

男達がゼロへと拳銃を構える。

「危ない！！」

ゼロの手際の良さに唖然としていた美琴達は急いで対応しようとするが、一足遅かった。

ガウン！！と男の一人が発砲した。だが、

「複数武装《ロックオン レッグ&アイ》」

ゼロが小さく何か呟いた瞬間、ゼロは銃弾をかわし、そのまま男達へと瞬く間に近づく。

ゼロは男達の持っていた拳銃を全て蹴り飛ばし、ATMを持っていた男達を足払いしてバランスを崩し、ATMが上へと落ちてくる事のないように転ばせる。同時に男達の持っていたATMもドン！と音を立てて、地面へと落ちた。

「ちっ！」

男達はゼロへと殴りかかろうとする。

「そこまですわ」

だが、次の瞬間には男達は全員床に突っ伏していた。起き上ろうにも服のところどころに金属矢が突き刺さっていて起き上れない。

その様子を見ていた仲間の車は大慌てで発車し逃亡する。

「あっ！ちよっと待ちなさい！」

「大丈夫ですわ、お姉様。すでにナンバープレートの番号は控えてありますし、捕まるのも時間の問題ですの」

白井はゼロの方へと向き直ると、

「ご協力感謝しますわ。ただ、今後は控えてもらわないと。これは
ジャッジメント
風紀委員のお仕事ですので」

「すまない、悪かった。つい体が動いてしまっただけな
ゼロは頭を下げる。」

「別にもういいですわ。今回は運よく怪我がありませんでしたけど、
もしも怪我などがあればこっちとしても困るから注意したまです
ので」

「そうか、礼を言う。それじゃあオレは用事があるから」
そのままゼロはどこかへと行ってしまった。

「黒子、いいの？簡単に返しちゃって」

その背を見送りながら美琴は白井へと尋ねる。

「別にかまいませんわ。聴取しようと思えばいつでもできますし、
それに」

白井は一度そこで言葉を区切る。

「スキルアウトとはいえ、十数人相手に誰一人として怪我を負わせ
ることなく、鎮圧したのが無能力者レベル0なんて信じてもらえるとは思え
ませんわ」

「そうね」

しかも、彼は生身で銃弾をかわしていた。そんな事が本当に可能
なのだろうか。

到着した警備員アンチスキルに事情を説明する初春。

白井達の目の前には彼女に出してもらったデータが載っていた。

『赤谷零 無能力者レベル0 能力名 なし』

学生生活（後書き）

次から「法の書」の話に入ろうと思っていますが、どうやって関わらせようか悩みまくっていますので、もしかしたら少し遅くなるかもしれません。できるかぎり早く投稿できるように頑張ります。

『外』へと

『「法の書」とオルソラⅡアクイナス。この二つが一緒に盗まれたそうだから』

「そんな……誰に!？」

ロンドン、^{セント}聖ジョージ大聖堂へと向かう道すがら、イギリス清教のトップ、^{アーキbishopp}最大主教と赤い髪の神父、ステイルⅡマグヌスは新たに発生した事件について話していた。

二人とも喋っている様子はない。だが、通信用の護符を使い、朝の街を行きかう人々にばれないように会話している。

『「法の書」ともなれば、専門家の手は必要よね』

イギリス清教を統べる^{ローラⅡスチュアート}最大主教の外見は少女と言っても差し支えなく、また神々しいまでの美しさを誇っている。

だが、ステイルへと語りかける彼女の顔は何よりも、誰よりもあやしく笑っていた。

「だからなー、二学期というのは忙しいんだぞー。大覇星祭に一端覧祭、遠足に宿泊合宿に修学旅行、芸術鑑賞祭に社会見学祭に大掃除祭に期末試験祭に追試祭に補習祭に涙の居残り祭とお祭り尽くしなのだからなー。そのための準備にみんな忙しいから仕方がないのだぞー」

九月八日。

午後の学生寮の通路で土御門舞香はのんびりした口調で言った。いつも通り、清掃ロボの上に正座で鎮座し、モップでロボの動きを

封じている。

「でも暇だよ退屈だよつまらないんだよとうまもゼロも遊んでくれないし」

そんな舞夏に対して、口を尖らせて、体を左右にぶんぶん振って抗議をするインデックス。

彼女は気づかない。いや、知らないと言った方が正しい。舞夏の言葉は途中からどう考えてもお祭りではなくなっている事に。ただ、彼女が不満を言っている相手の一人、上条当麻という男ならば、全ての祭りを余すことなく堪能するはめになりそうだが。

インデックスにも上条とゼロが忙しそうにしているのは気づいていた。だが、インデックスにとって学園都市には話し相手はその二人しかないのだ。

いつでも、寮の外に出られるようにインデックスも上条から合鍵をもらってはいるが、ここは学生の街である。

昼間、外に出ても街を歩いている人間はごく少数。いたとしても、店の定員などがほとんど。

そんな中で土御門舞夏という人物は例外中の例外だった。

時間、場所を問わず、いたるところで見かける。

「上条達に迷惑をかけちゃダメだぞー。別に向こうも好きでほったらかしてるわけじゃないんだからなー。学校というのは色々大変なトコなんだぞー」

「むう。わかってるけど……。じゃあ、どうしてまいかはガッコーに縛られてないの」

「ふふん。私は特別なのだよ。メイドは実地が基本だからなー」

土御門舞夏の通う家政学校はあらゆる面で主人をサポートする秘書のようなメイドを育成している。『実地研修』もその一環。ただし、ある一定以上の成績を修めた一部のエリートのみが特殊ステップとして進めるものである。

そんな苦労など知る由もないインデックスは、

「メイドになればどこにでも行っているの？とうま達のいるガッコー

「にも？」

「いや、そもそもメイドとはそういうものじゃ――」

「じゃあ、私もメイドになる！それで、とうまのクラスに遊びに行くかも！」

「その台詞は素敵だけどメイドさんの道は厳しいのだぞー。料理、掃除、洗濯、どれもできない家庭スキルゼロの女の子には厳しいな――」

「じゃあ、とうまをメイドにする！ゼロは……、どうすればいいのかな？」

「上条当麻にはその台詞は言わないのが優しさだぞー。それと、赤谷零なら執事の方がお似合いなんじゃないのかー」

ならとうまも、と目を輝かせながら舞夏にせまるインデックスだった、

「うん、そうだね。悪いけど、君がメイドになる時間もヤツをメイドにする時間もないんだ」

唐突に背後から声が聞こえ、インデックスが振りかえろうとした時には、彼女の口は大きな手にふさがれていた。

長い金髪を後ろでくくってたらし少しこの学園都市でも人目を誘う高校生、赤谷零と今は名乗っているゼロは慣れてきた通学路を寄り道することなく通り寮へと帰っていた。

空にはアドバルーンによって浮かべられた最新鋭の超薄型画面がいくつも漂っている。そこには『備えあれば憂いなし 大覇星祭の準備 がんばりましょう』などの言葉が映し出されている。

大覇星祭。

クラスの連中に聞いた話によると街全体での運動会だと言う。

一週間かけて行い、その間はテレビカメラや一般の入場客、つまり『外』の人たちも中に入れるのだという。

そして、その催しには多くの来場客が毎年押し寄せる。なぜならば、この運動会では能力の全面開放がなされるからだ。つまり、普通の人にとってはあまりなじみのない超能力が見られるのである。それを一目見ようとたくさんの人が来るのだ。同時に学園都市にとってもイメージアップのため欠かせない行事らしい。

もっとも運動会など聞いたこともなかったゼロにとっては『普通の』運動会もうまくイメージはできないのだが。

だから、ゼロが大覇星祭に抱く想いはただ一つだけ。

「平和だな」

ただそれだけである。

ゼロの世界でこの街における超能力のような力を見に行きたいと言う者など一人もいなかった。そんなことをすれば、その先に待つのはただ一つ、『死』だけだったのだから。

ゆえに、力を見たいという気持ちがゼロには理解できない。

きつと、見に来る人達はテレビの中で起こっている事と同レベルぐらいにしか考えていないのだろう。

だが、この世界においても『力』がどれだけ危険かはすでにゼロも理解している。

見ているだけならば娯楽と変わらない力が、人を傷つける『牙』になりえることを。

「……そう言えば、上条達は今日の夕飯どうする気なんだ？」

寮の前に着いた時、ふと気づく。

先に大覇星祭の準備の仕事を終えた上条は一足先に帰っていた。

「何も聞いていないが……。今から聞きに行くとするか」

自分の部屋に戻る前に上条の部屋へと向かうゼロ。

すると、上条の部屋の前には土御門舞夏が何か憑き物が落ちたよ

うな顔をして清掃ロボに乗ってくるくと回っていた。

「何をやってるんだ？」

「おーっ、おかえり赤谷。いや、なに。どうやら私の不安は杞憂に終わったようだなー。なんと真相は歪んだ愛^{ラブ}だったのだよ！」

「いや、何を言いたいのかさっぱりわからないのだが」

突飛すぎる舞夏の発言に若干焦るゼロ。

実はゼロは土御門舞夏が実は少し苦手だったりする。メイド姿、清掃ロボに乗っているなどいまいち舞夏のキャラについていけないゼロであった。ただし、家事全般において舞夏にも教えてもらっており、その面に関してはかなり尊敬の念を抱いていたりする。

舞夏はモップで清掃ロボをうまく誘導すると、ゼロの前まで来て、

「いやー、あの銀髪シスターが誘拐されたんだぞー」

「何？」

舞夏の言葉に声のトーンが自然に下がるゼロ。だが、

「別に心配しなくても大丈夫だぞー。どうも、相手は上条当麻たちの知り合いだったみたいだから。もうすごかったぞー。赤い紙で身長が180センチ以上あってだな——————」

舞夏はまだ話していたが、ふっ、と肩の力を抜くゼロ。

上条がすでにインデックスの下へ向かったことに安心する。

「あっ、それでだなー。夕飯は遅くなるだろうから先に食べといってくれだってさー」

「そうか、ありがとう」

舞夏と別れると、ゼロは自分の部屋へと向かい、とりあえず着替えると近くのコンビニに弁当を買いに行った。

そこに誘拐（偽装）されたインデックスはいた。

近くには彼女を誘拐した犯人である男、イギリス清教『必要悪の教会』^{ウス}所属の魔術師ステイル・マグヌスが立っている。

「状況は今説明したとおりだ。もう一度言う必要はないだろう。君の記憶力ならばね」

「……イギリス清教の、正式な勅命になんでとうまが必要なの？」
インデックスは不満を隠さずに尋ねる。

彼女としてはわざわざ関係のない上条に危険な目に会って欲しくない。

ステイルは一度大きく煙草を吸うと、はーっ、と煙を吐き出し、
「僕だって何で上条当麻を使わなくちゃいけないのか疑問なんだがね。まあ、上からのご指名というやつさ」

ステイルはもう一度煙草をくわえる。そしてその端をゆらゆらと揺らし、

「それに、それでも僕達は難しい立場にいてね。学園都市所属の上条当麻にストレートに協力を求めるわけにはいかないからね。それ相応の動機付けが必要だったのさ」

そのための、誘拐。

上条はさらわれたインデックスを助けに行き、そこで偶然、その『仕事』に関わったという事にしようというのだ。

魔術側の人間であるインデックスだが今は上条当麻の下へと預けられている。それならば、上条が助けに行ってもおかしくはない。

「大体話はわかったけど、やっぱり納得はできないかも」

「そうかい？」

「うん。こんな回りくどい事しなくたって『助けて』って言えば、とうまは絶対に助けに来てくれるもん。無茶ばかりするから、ちょっと頼みにくいんだけど」

「……、そうかい」

ステイルは小さく笑った。

幼い娘が好きな男の子の話をしてきた時の父親のように、小さく

笑った。

「あつ、でも、今はゼロもいるからとうまも無茶できないかも」
「ゼロ？ さっき、上条当麻の寮でも話していたが一体誰だい？」

ステイルは今まで一度も聞いた事のない名前に眉をひそめる。
インデックスに尋ねるステイルの顔は先ほどまでとは打って変わって、娘の好きな男の子を聞き出そうとする父親のようだった。

「ともだち」

インデックスは嬉しそうに答える。

「最近はどうまと三人で一緒にごはんも食べてるんだよ」

「……、そうかい」

あくまで平静を装うとするステイルだが、その声は震えていた。

昔、自分が失ってしまったインデックスばしょの隣。

今、その場所にいるのは上条当麻という男。

だが、そこではなくとも彼女のすぐ近くにいる新しい存在。

たとえ何があろうとも、彼女を守り続けると誓っているステイルだが、やはり彼女の傍にいたかった。それが前と同じでなかったとしても。

そのゼロという人物は上条当麻と一緒に助けを求めるほど信頼しているのはインデックスの言葉を聞けば明らかだった。

（あの男じゃないが……。まったく、不幸だと叫びたい気分だよ……）

十万三千冊の魔道書の知識を持つインデックスだが、彼女の頭の中には一年以上前の記憶はない。

ステイル達と過ごした日々の記憶はどこにも存在しはしない。

「実は私、追われているのでございます」

学園都市の『外』のとあるバス停。

上条はそこでインデックスとは違い真っ黒な修道服を着たシスターさんに出会っていた。

インデックスが誘拐されたと聞き、目撃者である土御門舞夏から話を聞き、残された脅迫状を見た結果、犯人はステイル^{知り合い}Ⅱマグヌス、向かう先は学園都市の外、『薄明座』に向かう事が判明した。

よって、なぜか脅迫状と共に同封されていた外出許可証を持って、外にでたのである。

その途中で、シスターさんに話しかけられ、話を聞けば魔術師絡みの話だと言うのだ。

ただし、その話を聞きだすまでにそのシスターのあまりにも天然な言動に振り回され少ない体力・氣力をさらにすり減らしていた。

（この人の事は心配だけど、インデックスのこともあるし。どうすれば……。あっ！インデックスのところにいっしょに連れてけばいいじゃね？）

名案だと思った。

脅迫状には一人で来いとも書かれていたのだが、まあいいかとあっさり許可した上条だった。

ゼロはコンビニへと向かっていた。今日は上条達がいないのでコンビニ弁当で済みます気である。

「ん？」

コンビニへと入ろうとしたゼロの目が一人の人物を捉える。

土御門元春。

彼と上条のクラスメイトにして、上条の隣の部屋に住んでいる男

だ。

だが、同時にこの学園都市の裏の世界で生きる存在でもある。彼の助けもあり、今ゼロはこんな生活を送れている。

土御門はいつもと変わらず飄々として歩いているようだったが、数多の戦場を潜り抜けてきたゼロにはその姿はいつもとは違うように映る。

何かが起きている場所へ向かおうとする雰囲気。

それを今の土御門からは微かにだが感じた。

先ほどのインデックスの誘拐の件。舞夏は大した事のないように話していたが、今の土御門の様子を見ると何か嫌な予感がよぎる。インデックスの事情はすでにゼロも聞いている。ならば、もしかしたら上条はまた魔術絡みの事件に巻き込まれているのかもしれない。

ゼロはコンビニに入るのを止めると無言で土御門の後を追いつめた。

「ここは……」

ゼロが立っている場所。そこは学園都市と外をつなぐ出入り口だった。出入り口は関所のようになっており、警備員も何人か立っている。

先ほどまでゼロは土御門を追っていたのだがここにたどりつく直前に見失ってしまっていた。

（一体どこに……）

ゼロがあたりを見て回ろうと歩き出した瞬間、出入り口の向こう側、すなわち学園都市の外に見慣れたアロハシャツの男が歩いているのが見えた。

「!!」

ゼロは驚きながらも今ここで見失う訳にはいかないとどうにかして外へとでる手段を考え始める。

学園都市の外に出るには三枚の申請書にサインして、血液中に極小の機械を注入して、保証人がいなくてはならないらしい。

もちろんゼロはサインはしていないし、注射もしてないし、何よりこの世界には彼の保証人になってくれる人物などいるわけがなかった。

だが、だからといって諦めるわけにはいかない。

ゼロは出口の方を見る。

検問となっており、外に出さないようにレバーが降りていて警備員と監視カメラが数台ついている。

それらすべてに気づかれずに外へとでる方法それは、

「仕方ない、やるか」

ゼロは軽く準備運動をすると、

「ロックオン レッグ
脚部武装」

ゼロが小さく呟くと彼の足が赤い装甲に包まれる。

それは元の世界でゼロがレプリロイドだった時の足だった。

ロックオン
英雄武装。

それがゼロがこの世界に置いて使える力だった。

ロックオンという言葉スイッチに、かつてのレプリロイドの姿を取り戻し闘う事が出来る。さらにはこれは一部分だけの使用も可能だった。

病院で目が覚めた瞬間、なぜか自分の体の事、そしてこの力の事を一瞬で理解できてしまったのだ。一度『力』を使ったからかもしれないとカエル医者は言っていた。

先日、コンビニを襲った男達に使ったのもこれである。

ただし、これは長く使えば使うほど使った後に大きな疲労を伴う。そのために、ここ最近のゼロの日課はもっぱら体力トレーニングだった。

ゼロは目にもとまらぬ速さで出口まで行くと、そこからさらに速さを上げ、ダッシュする。

瞬間、ゼロの姿が少しだがぶれる。

シャドウダッシュ。

彼の脚部についている能力の一つで少しの間だが、ダッシュしているときに人だけでなく機械からも認識されなくなる。特殊技の一つだ。

彼が変身を解いた時にはすでに出口を突破し、外に出ていた。

「さて」

ゼロは再び少し遠目だが、前方にいる土御門の後を追った。

『いやいや。そうそう簡単に引き渡されては困るよなあ？』

上条と黒い修道服を着たシスターが薄明座まで行くと、そこにはインデックス、ステイル、そして見たことのないインデックスよりも幼そうな髪を三つ編みにした厚底サンダルのシスターが待ちかまえていた。

そのシスターの名はアニエーゼⅡサンクティス。ローマ正教に所属する魔術師の一人だった。

ステイルにインデックスを何で嘘をついてまで誘拐したのか尋ねると彼は人探しをするためだと答えたが、同時にもう終わったと言う。

上条がはあっ？と首をかしげるとステイルは上条の横のシスターを指差し、

「君の隣にいるシスターが行方不明の探し人だよ。名前はオルソラⅡアキナス。はい、お疲れ様。いやあ、よく頑張ってくれたね。」

上条当麻、君はもう帰っていいよ」

などと言いつ出す。

さすがの上条も怒りに震えていると、彼らの頭上から声が響いてきたのだ。

その声は野太く、男のものだと分かる。

上を見上げると、彼らの真上、上空七メートルほどの場所にソフトボールくらいの大きさの紙風船がふわふわと浮いていた。

『オルソラアクィナス。それはお前が一番良く分かっていないはずよな。お前はローマ正教に戻るよりも、我らと共にあった方が有意義な暮らしを送る事が出来るんだよ』

瞬間。

床から三本の剣がサメの背びれのようにザンッ！！と飛びだすと、オルソラのいた場所が正三角形に切り取られる。

「あ——————ッ？」

ずず……、と重力の消える感覚にオルソラが恐怖というよりも戸惑いに近い声をあげる。だが、それが明確な悲鳴になるよりも早く、正三角形二切り取られたアスファルトごと、オルソラの体が暗い地下へと落下していく。

「天草式！！」

アニエーゼが叫んで手を伸ばすがもう遅い。上条は慌てて穴の縁へと走り、舌打ちする。

「下水道かよ……ッ！」

『ローマ正教の指揮官さえ追っていたれば、オルソラアクィナスはいずれはここまで連れてこられると踏んでいたのよ。まったく地下を辿って待ち構えていた甲斐があったというものよなあ！！』

上条には状況がまったくつかめない。

下水道に潜んでいたのは誰なのか。いきなりオルソラをさらった理由は何なのか。

しかし、これだけはわかる。

連中は、いきなり問答無用で刃物を使って人間を奪った。それも

話を聞く限り、事前に計画を立てて、ずっとずっとひたすらにチャンスを待ち続けて。

「くそ！！」

「待って！駄目だよ、とうま！！」

穴へと飛び降りようとする上条へとインデックスが叫んだ瞬間、

ギリリ、と。闇の中から、何十もの刃の光が閃いた。

ぶわり、と熱風のような殺意の塊が溢れ出し、上条の顔へ直撃する。

動きを止められた上条の隣でステイルはルーンを刻んだカードを取り出す。それを配置し、彼が叫びながら煙草を真上に指ではじき捨てた瞬間、彼の手から炎の剣が飛び出す。だが、

「遅かったか」

ステイルが一言呟くと、彼の手から炎剣が消え去る。

彼が炎剣を振りかざした時、炎剣の光によって照らしだされた穴の中にはすでに誰もいなかった。

ふわふわと頭上を浮いていた紙風船が、ゆっくりと降りてくる。

誰もそれを手に取らず、紙風船は正三角形に切り取られた穴の中へと落ちていった。

「ちくしょうが。何がどうなってやがんだ」

上条は吐き捨てるように言って、

「おい、ステイル。一から説明する気あんだろうな？」

「説明は、僕の方が求めたいぐらいだね」

ステイルⅡマグヌスは踏みにじるように答えた。

陽も落ち、少しずつ熱が引き始めた海岸。

海水浴場から数百メートルほどしか離れていない、まわりを大量のテトラポッドに囲まれた岩場のような場所。

そこに海面から無数の手甲をつけた手が現れる。

瞬間、

西洋の鎧を身にまとった集団が海面を割ってテトラポッドの上に乗り上げる。

彼らはイギリスの誇る騎士達である。

彼らに下された命令はインデックスやステイル達の『仕事』を援護すること。

だが、彼らがここに来た理由はそうではない。

ただ単に、『仕事』を簡単に終わらせる、すなわち、彼らの考える『仕事』とは対象者達を殲滅することである。

もつとも、これは騎士団が不真面目なわけではない。

彼らにとつての主は騎士団長ナイトリーダーか英国女王クイーンレグナントであつて、イギリス清教のトップ、最大主教を主とは認めていない。

イギリス内部でも色々と事情があり、騎士派と呼ばれる集団と清教派であるイギリス清教派仲アーキビショップが悪いのだ。

よつて、彼ら騎士は最大主教からの命令に従う気は最初からまったくなかった。だが、

ヒュッ、と。

騎士達が全員、テトラポッドの上に乗つた瞬間、彼らの体は宙に浮いていた。

刹那。

彼らの体は地面へと叩きつけられる。

騎士団の力は恐ろしいほどに高い。

実際、彼らがここまで来るのに使つた海の中を進む術式は彼らが霊装を使わずに自らの力のみで発動した術式である。彼らにとって

霊装とは拘束具にすらなりうる。それほどの実力者たちだった。

だが、今、彼らは起き上るどころか指一本動かすことすらできない。

彼らが宙へと投げ出された瞬間、一秒にも満たない時間の中で全員が攻撃を受け、そして、決着は一瞬でついた。

神裂火織。

上条と面識のある数少ない魔術師の一人にして、世界に二十人とない聖人の一人。

彼女が持つ二メートルを超える日本刀『七天七刀』。その鞘での攻撃。それが騎士達が倒れた理由だった。

「加減はしたつもりです。この程度なら死者が出る事はないでしょう。そちらが頑丈な装備で身を固めていたので、こちらとしてもやりやすく助かります」

「き、さま」

静かな声を侮辱と受け取って、騎士の一人が立ち上がろうとするが、微かに指先を動かす事が精一杯だった。

それもつかの間。すぐに力尽き、気を失う。

「海へ落とした方もいましたが……まあ、潜水術式はまだ解除されていないかったようですし、溺死の心配はないでしょう」

神裂は一度だけ暗い海面に目をやってポツリと呟いたが、

彼女の背後でザッ、と地面を踏みしめる音がした。

「!？」

神裂が振りかえると、そこには長い金髪を後ろで結んでたらし、赤いTシャツにジーパンをはいた、少し目つきの鋭い青年が立っていた。

ゼロ。この世界の名で名乗るとするならば赤谷零。

だが、神裂は彼の事を知らない。

彼女から見れば、彼はただの一般人なのだ。

だが、だからこそ彼女は驚く。

神裂火織の鋭敏な感覚は人の気配を逃すことはない。ましてや、一般人ならばなおさらだ。

だが、彼が立っている場所。そこは彼女の感覚ならば、一般人どころか場数を踏んだ魔術師の存在だって感じられるほどの距離だった。

（信じられません。……魔術師のようには見えませんが。彼は……？）

魔術師ならば相手が魔術師だった場合、なんとなく気づくのだ。だが、数メートル先に立つ青年は魔術師には感じられない。

（とにかく、何とかごまかすしか……）

「なぜ、こんなことをしている？」

ゼロは神裂へと尋ねる。

その言葉には怒りではなく、疑問があるだけだった。

「あなたには関係のない事です。今すぐここから立ち去った方が身のためですよ」

神裂は言ってから、しまったと頭を抱えなくなる。これでは異常なこの状況を認めたも同然ではないか。

「確かに関係のない事だがな。さすがにこんな状況をほっとくわけにはいかないんでな」

ゼロは一步前に出て神裂に近づく。

「事情を話さないのならそれで良い。そのまま、警察にオマエを連れて行くだけだ」

「すみませんが……。そんな事をしている暇は私にはありませんので—————」

神裂は動く。

その速さは常人には視認すらできない。ただ風がふいたと思うだけだろう。だが、

「くっ！ロックオン レッグ脚部武装」

ゼロは驚きながらもそれに反応すると、神裂の前に立ちふさがる。

「なっ!？」

今度は神裂が驚く。彼女のスピードは騎士団ですら追いつけない。普通の人間が追いつけるようなものではない。つまり、

「どうやら、あなたは一般人というわけではなさそうですね」

「オマエこそ。その力。魔術師か」

彼は魔術師の存在を知っている。そう認識した瞬間、さらに速度をあげて、ゼロを抜こうとする。

「悪いが、そう簡単に行かせる気はない」

だが、またも反応される。

神裂は顔をしかめる。

彼女は人を殺せない。彼女は人を守るために魔術を使う。彼女にとって誰かを殺すというのは魔術師である事自体を否定するようなものののだ。

「なるほど。オマエはオレとは戦えないという訳だ」

ゼロはまるで神裂を見極めるかのように、ひたすら彼女を見ている。

その目に神裂は戦慄した。いや、恐怖したのだ。

強大すぎるほどの力を持ち、幾多の修羅場をくぐってきた神裂だったが、その神崎が相手の目に怯えていた。

自分以上の地獄を見てきたようなその暗い目に。

「だが、そこに転がっているやつらを攻撃したという事は、戦えないという訳でもあるまい。それにさっきの台詞。つまり、オマエは誰も殺したくはないということか」

だが、同時に神裂は気づく。自分を射抜くその目は上条当麻という男と同じくらいまっすぐに綺麗でもある事に。

「……何を言っても、無駄なようですね。仕方ありません、私の速さについてこられたのなら、実力はあるのでしょう。……最後に聞きます。おとなしく道を開けてはくれませんか?」

意を決したように言う神裂。

彼女が最後に聞いた問い。その答えは聞かずともわかる。今日の

前にいる相手とよく似た目をした男は最後まで諦めなかった。ならば、

「無理だな。どうしても通りたいならせめて理由を説明してからにしろ」

予想通りの答えに思わず笑いがこみ上げる神裂。そのまま、刀へと手をかける。

「やる気になったようだな。オレだって戦いたくはないが……。目の前で人があれだけ傷つけられたのに黙ってられるほど、器用じゃないんでな」

ゼロは一度、棒立ちになる。そして、

「英雄武装」 ロックオン

一瞬だけ光に包まれると、ゼロの体が変化する。

赤を基調とした装甲を全身に纏った姿。その手には彼の剣、ゼットセイバーが握られている。

ゼロの変化に神裂は一瞬だけ驚きを見せる。だが、次の瞬間、神裂の姿は消えていた。

ゼロの目の前まで一瞬で移動した神裂は剣の鞘でゼロを横なぎに殴りつける。

だが、ゼロはそれをセイバーで受け止める。そのまま、神裂を蹴りつけるが、神裂もそれを腕でガードし、その勢いを殺さずにゼロから距離をとる。

「七閃」

瞬間、ゼロの体が何かに切り裂かれる。

それは、細いワイヤーだった。

「そんなモノまで使うとはな」

「！まさか一発で七閃の正体を見破るとは思いませんでした」

話しながらも神裂は何度もワイヤーをふるう。ゼロの体にだんだんと切り傷が増える。

だが、その状態も長くは続かない。

ゼロのセイバーを持っていない方の手にいつの間にか何かが握られていた。ゼロの持つ柄の部分からまるでチェーンのようなものがびており、その先端は槍のように鋭く尖っている。

チェーンロッド。

ゼロの持つ武器の一つである。

ゼロがそれをぶんぶんと振りまわすと、それは遠心力により大きな円を描きながらまわる。

すると、ロッドに引っかけたワイヤーがちぎられていく。

七閃だけでは勝てない。先ほどのゼロの反応速度を考えると、ともに打ち合っても、簡単には押し通れないだろう。

だが、神裂にはもう一つ、切り札と呼べるものがあつた。唯閃。

だが、それは一撃必殺の技であり、くらえば、ゼロは死ぬ、防がれば、神裂は一気に窮地に立たされる。どちらに転んでも神裂にとってはあまり良い結末とはならない。

だが、今はそんな事を言っている場合ではないと神裂が刀を抜こうとして、

「そろそろ、やめとこーぜい」

不意に横合いから声かけられる。

そこには土御門元春が立っていた。

「……私を止めに来ましたか」

「別にそんな気はねーさ。ねーちゃんを止めろとも言われてないしな。もつともねーちゃんが問題を起こしそうな事がらを先回りして排除しろとは言われてるけど。それにこっちにはこっちの仕事があるんだぜい。ただ、この勝負だけは止めさしてもらうけどな」

土御門はゼロと神裂を交互に眺めながら、どちらともなく言う。「悪いがゼロ。こいつはオレやカミやんの知り合いなんだ。見逃し

てもらえないかにゃー？」

「……いいだろう。それならば、信用できそうだしな」

「……ならば、私はもう行きます。上へ報告したければご自由に」

「そうかい。のびてる連中は回収しとくぜい」

「恩に着ます。……ところで、あなたの名前を聞いていませんでしたね」

歩を止めて、振り返りながら神裂はゼロに尋ねる。

「オレは赤谷零。上条達はゼロと呼ぶがな」

「無^{ゼロ}ですか」

「オマエは？」

「私の名は神裂火織です。機会があれば、またいずれ」

そのまま神裂は去ってしまった。

神裂の背が見えなくなってから数分間。ゼロと土御門は一言も話さない。夜の海の波の音だけが響く。

「にゃー。できればこいつらを運ぶの手伝って欲しいんだが」

先に口を開いたのは土御門だった。

「別にかまわんが」

ゼロは倒れていた集団を言われた場所へと連れて行く。

「ほらよ」

それが終わり、ベンチに腰掛けていたゼロへと土御門が缶コーヒを投げて渡す。

また二人の間を静寂が包む。

「それで」

今度は先に口を開いたのはゼロだった。

「一体何が起こっているのか。説明する気はあるんだろうな？」
ゼロの問いかけに、土御門はにいと口の端を歪めた。

『外』へと（後書き）

今回の事ではっきりしました。

僕に足りないのはネーミングセンスです！

正直、自分でもなんじゃこりゃと思っけてしまいます。

笑われても仕方のないレベルです。すいません。

ちなみにロックオンというのはゼロではなく、ゼクスからとって
います。

天草式（前書き）

完全にゼロ視点のみとなっております。

天草式

「説明？そんなのあるわけないにゃー」

土御門はふざけながらもはつきりとゼロに拒否の意志を示す。

「ふざけるな。ここまでわざと尾行させておいて」

「おっ、気づいてたのか」

ゼロの言葉に今度は意外そうな声をあげる土御門。

そう。この海岸の近くでゼロが土御門の姿を失うまで、ゼロは土御門の後をつけてきた。だが、学園都市の門の時など明らかにゼロへとまるで自分の存在をわざと教えるかのような場面が何度もあった。

つまり、ゼロは尾行していたのではなく、尾行させられていたのだ。

「いやー、オマエがオレを見つけたのは偶然だぜい。その後の尾行はなかなかのもんだった。だけど、この土御門元春をなめちやいかんぜよ！」

はっはっはっ！と高らかに笑う土御門。

瞬間、

バキッ！と土御門の顔面にゼロの拳が深々と突き刺さり、土御門は倒れる。

「真面目に答えろ！……まあ、それはいい。ならせめて、オマエの事だけでも答えてもらうぞ。オマエは学園都市の人間じゃなかったのか？なのはどうして魔術師と親しいんだ？」

土御門と神裂火織の会話は単なる知り合いという感じではなかった。

ある程度の仲間意識を持っている、ゼロにはそう感じられた。「にゃー。だから、オレも『必要悪の教会』ネセサリウスの一員って事ぜよ」ゼロの目が驚きで見開かれる。

「つまり……、スパイという事か」

「正解。ただ、オレは同時に学園都市のスパイでもあり、またまたさらに他の組織のスパイでもある！つまり、多角スパイぜよ！」

ポーズをとりながら堂々と宣言する土御門。

もはや、ゼロも怒る気もおこらず呆れるしかない。

「ただし、能力開発を受けたせいでせっかく天才とまで呼ばれた魔術は使えなくなっちゃったんだがな」

土御門の言葉から魔術と超能力はいっしょに身に付ける事はできないことを理解するゼロ。

彼は知らないが、以前、魔術師シェリーが学園都市に攻めてきた原因がこれだった。

「なるほどな。それで、結局上条達に何が起きているのかは教える気がないんだな？」

「ああ。これ以上巻き込むわけにもいかないからな」

ふむ、と納得したように呟いたゼロは立ち上がると土御門から離れて行く。

「一つだけ教えてやるよ」

背後から追いかけるように土御門の言葉が届く。

「とある封印されている強力な兵器とその兵器の封印を解除できる少女の二つがある奴らに奪われる事件が起きた」

ゼロは振り返る。

「上条達関わっているのはそれか？」

「さあな。そういう事があった。それだけぜよ」

言い終わると、土御門もゼロとは反対の方向に歩いて去って行った。

ゼロは仕方なく学園都市への道に戻っていた。

ここにいたとしても自分には何もできない、そう判断したからだ。仲間達を守りたいという気持ちはある。だが、それ以上にまったく情報のない今の状況ではどうすることもできない。今の自分にはただ無事を祈るしかない。

何もできない。

かつて、どれほど自分が仲間達に助けられてきたのかを実感する。かつていた世界で戦っていた時にはこんな事に悩まされた事は一度たりともなかった。

シエルはゼロのみ戦わせる事に心を痛めていたが、彼女達も戦っていたのだ。そしてそれに助けられてきた。

「一人は……。無力だな」

自嘲するように笑うゼロ。

だが、不意にある建物が目に付く。

そこには『パラレルスイーツパーク』という看板が掲げられている。

学園都市の情報はかなり学んできたゼロだが、学園都市の外の事となるとさっぱりである。

ゆえに、このゼロが見ている建物を含めた敷地が巨大な菓子専門のテーマパークであることは知る由もない。

だが、一つだけわかる事がある。

この建物はおかしい。

見た目、印象、全てにおいてこの建物は『普通』である。

だが、彼の今まで戦いの経験で得た勘はこの建物が『異常』であると告げていた。

理由なんてそれだけしかない。

だが、ゼロはその場所へと足を踏み入れた。

(……おかしい所は何もない。なのになぜここにこんなにも引きつけられるんだ?)

ゼロは疑問に思う。

その時、

ドン！！とゼロのいた場所に一本の大剣が振り下ろされていた。

ゼロは間一髪でそれを横に転がって避けていた。

彼が偶然足元に月の光によって映し出された影に気づかなかったら今頃、真っ二つだったろう。

「ほう。よくかわしたなあ」

月の光に照らし出されたのは、二十代中盤くらいの男でクワガタのような光沢を放つほどの黒髪の毛先を尖らせ、細身ながらもサイズはかなり大きいTシャツとジーパンを穿いている。そのTシャツには右胸辺りを中心に赤いクロスが走っている。

「ローマ正教の手の者か？一人で乗り込んでくるとはよっぽど自信と見えるのよなあ」

だが、もっとも目を引くのは男の右手に握っている大剣。

長さは180センチはあり、その刃の表面は波打っている。

フランベルジェ。

フランスで生み出された大型の両手剣だった。

「いきなりだな」

ゼロはこんな状況の中、心の中でこの不幸に感謝幸運していた。

男が普通の人間には見えない。

魔術師。

こんな時にいくつも事件が起きているとも思えない。だとすれば、目の前の男は上条達の事件に関係している。つまり、これに関わる事が出来るのだ。

「…何を笑っているのよな」

男が不機嫌そうに言う。

ゼロは自分でも気づかない内に小さくだが笑っていた。

「悪いな。ただ、自分の不幸に感謝してただけだ」

その言葉はおそらく男には侮辱と取られたのだろう。

何も言わずに男はゼロへと向かってきた。

「ロックオン アーム」

ゼロは腕だけ武装し、ゼットセイバーを呼びだすと斬りかかってくる男の剣をそれで防ぐ。

男の目が驚愕に見開かれる。

「どこから取り出したのよな？」

「さあな」

つばぜり合いを続けていた二人だったが、次第に男がゼロに押され始める。

「ちっ！」

このままでは不利と判断した男は一瞬剣に力を込めて、ゼロのセイバーを弾くと後ろへと一気に跳ぶ。

二人の間に10メートル弱の距離が生まれる。

「ちょうどいい」

ゼロは臨戦態勢を解く。

「何の真似なのよな」

「話がしたい」

訝しむ男へと告げるゼロ。

「話？」

「ああ。まず、オレはローマ正教の人間でもないし、その協力者でもない」

なに！？と驚く男。

男も戦っている相手が魔術師でない事には気が付いている。

だが、ローマ正教とつながりがあるからこそこの場所を見つけたんだと思っていた。でなければ、ここを特定することなどできるはずがない。『隠す』ことこそが彼が所属する集団の本分だからだ。

「ならばなぜ、ここにいるのよな？」

「オレにもよくわからん。だが、この場所がおかしい。そう思ったんだ」

男にはゼロの言葉が到底信じる事は出来ない。
ゼロがここをおかしいと思った理由。それは彼の常識のなさにある。

彼にとっての常識は元の世界の常識となる。

よって彼にとってこの世界の常識や普通というのが彼の常識と異なる場合がある。

だが、彼は同時に必死にこっちの常識に慣れようとしている。その事によりわずかではあったが人工的に作られた『普通』が『普通』と違う事を彼自身も理解しない内に気付いたのだ。

「オレは学園都市の人間だ。だが、おそらくだがこの事件にオレの友達が巻き込まれている。オレはそいつらを守りたい。だから、今何が起きているのかを教えてほしい。頼む」

学園都市の人間。

それは魔術師にとっては関わるべきではない人間である。

だが、

「いいだろう。今の状況をお前さんに教えてやるのよな」

男はゼロの頼みを受け入れる。

男がゼロの申し出を受け入れた理由は一つ。

簡単に言えば、人質に近い。

ゼロがさっき言った友達の存在。その者達は確実にローマ正教に協力しているのだろうと男はふんでいた。ローマ正教の『本当の』目的を知っているのかは定かではないが。

そいつらが攻撃してきた時に、場合によっては交渉の材料の一つになるかもしれないと考えたのだ。

別に使えないのならそれはそれで構わない。そう簡単に負けるほど彼らも弱くはないのだから。

「だが、もしお前さんが妙な動きをしたときは」

ゼロの背後から左右両方の肩の上を二本の剣が突き出る。

ゼロの後ろには数人の男女がいつのまにか接近していた。全員が様々な剣を手を持っている。

「ただじゃすまない、か」

後ろへは目もくれず、目の前の男のみを見るゼロ。

男はにっ、と笑うと話し始めた。

「俺は建宮斎字。そして我らは天草式十字凄教。この日本の魔術結社の一つなのよな」

建宮と名乗る男は自己紹介を済ませるとテーマパークの奥へと進みだす。

ゼロと背後にいる天草式の面々もその後を追う。ただし、その間も剣がゼロから離れる事はない。

「我らはある少女を今、救うために行動している」

建宮の言葉を聞いた瞬間、ゼロは土御門の言葉を思い出す。

封印されている兵器とその封印を解く少女が誘拐されたと。

「その少女は『法の書』という強力な魔道書の原典を読み解くことができるのよな」

ゼロの中で完全につながる。

つまり、土御門の言っていた『兵器』とはすなわちインデックスの頭の中にあるのと同じ魔道書の一つである。

「少女の名はオルソラ・アクィナス。ローマ正教所属のシスターなのよ」

「……ある奴が魔道書と少女が誘拐されたと言っていた。それはオマエらの事なのか」

「違う」

ゼロはここで建宮が肯定したら、即座に戦うつもりだった。

だが、建宮ははっきりと、力強く否定した。その言葉が嘘だとはゼロには思えない。

「そこがおかしいのよな。イギリス清教などの魔術師達には我らが魔道書を盗んだと伝えられているが、我らはそんなもの盗んじやないのよ」

「ならば、なぜオマエ達はオルソラ・アクィナスを誘拐した？」
ゼロにはその理由がわからない。

先ほど彼らはオルソラを救うと言っていた。だが、もしもオルソラと法の書を手に入れたのなら莫大な力を手に入れる事となる。彼らもそれを狙っているのでは、とゼロは疑いの眼差しを向ける。

「誘拐ではない。助けを求めるオルソラⅡアクィナスに救いの手を差し伸べたのよ」

「助けを求める、だと？」

ゼロは訝しげに見る。

建宮は少し間をおくと、

「ローマ正教はオルソラⅡアクィナスを殺そうとしている」

「！！！」

「ゆえに、我らはオルソラⅡアクィナスを助けたのよな」

「ローマ正教がオルソラを殺そうとする理由は後で聞くが……、ならばなぜオマエ達はオルソラを助けようとする？」

「理由なんてねえのよ」

ゼロは静かに建宮の話聞く。今の彼には口を挟ませない何かがあった。

「そんなもんハナっからねえのよ。我らは、ずっと昔からそうやってきた。とくに今代は格別だ。女教皇様……、ブリエスデス我らがリーダーはただ一人の幼い夢を守るために山をも呑み込む悪竜の前へ立ちはだかり、死に逝く者の最後の願いを聞き遂げるために小さな村を万の軍勢から守り抜く。我らはずっと、その後ろ姿を見てきたのよ。時間こそ、ほんの一時だったが、ずっとだ」

建宮斎字は、遠い日の幻影を追いかけるように告げる。

まるで、自分の家族を誇るように、

「だからこそ、我らは道を誤らず、力の使い方を間違えず、正しい方向へと己を導き進めたのよ」

沈黙が、場を支配する。

静寂を破るように、建宮はギチリと奥歯を噛み締めて、

「……、そうやって生きてきたあの方の道を、全部我らがぶち壊したのよ」

建宮だけではない。後ろにいる天草式のメンバー達もある者は悔しそうに、またある者はうつすらと涙を浮かべてさえている。

「我らの死が、我らの未熟さが、女教皇様ブリエステスを苦しめた。我らがあの方と共に願ったせいで、あの方は我らが傷つき倒れて行くのを自分のせいだと思うようになってしまった。我らの弱さが、未熟さが！結果として、女教皇様ブリエステスは自らの足で己の居場所から立ち去ってしまった。あの方は何も悪くないのに！！」

建宮は己の顔に剣を突き刺すような声で言う。

喉の奥から絞り出された声に、生々しい感情が宿る。

「我らは、その未熟さを持ってあの方の居場所を奪ってしまったのよ。だから我らはあの方に居場所を返して差し上げなければならぬ。もう誰も傷つかず、もう誰も哀しまず、誰かの笑顔のために戦い、何者かの幸せを守るために迷わず全員で総力をあげて立ち上げられるような、そんな居場所を」

「……、」

「だから我らは助けを求めるオルソラ・アクィナスに救いの手を差し伸べたのよ。それができる人間が当たり前前に集う世界こそ、あの方の居場所に相応しいと思ったから」

ゼロは似ていると思った。

かつて、自分達にはゼロに頼るしかないと思しそうな目で謝ってきた少女達と彼らはよく似ていると。

「その女教皇様ブリエステスというのは誰なんだ？」

「神裂火織。今はイギリス清教に所属している」

ゼロにわずかだが動揺が走る。しかし、天草式の面々は誰もその事には気づかない。

ゼロはなるほどと納得する。

それならば、神裂がいた理由も説明がつく。彼女の具体的な目的はわからないが、彼女はこの天草式絡みでやって来ていたのだ。

「今のところはこれがほぼ全ての情報なのよな。悪いが、いろいろと準備があるんでな。何人かはここに残していくから聞きたい事があればそちらに尋ねてくれ」

残していくと言えば聞こえはいいが要は監視だろう。

「一体何の準備をしているんだ？」

ゼロは後ろの黒い髪を肩まで伸ばし、二重瞼が特徴的な顔立ちをした少女へと尋ねる。その少女の手には西洋風の十字槍、海軍用船スピア上槍が握られている。

「ここから移動するための準備と、もしローマ正教が攻めてきた時に抗戦するための準備です。私達の人数は向こうには遠く及びません。だから、それ相応の準備が必要なんです」

（なるほど）

戦いの鉄則である。

逃げる手段があり、それにある程度の時間がかかるのならば、そこまで時間を引き延ばすための戦い方をすればいいのだ。

「おい」

「何ですか」

「オレもオマエ達を手伝わせろ」

唐突なゼロの申し込みに目を丸くする少女。まわりにいる他の男女も同様だった。

「戦いなら少しは役に立つ。もしも、ローマ正教が攻めてきた時にはオレにも何か手伝わせてくれ」

ゼロは彼らを助けたいと思ったわけではない。

ここに上条達がいなかったという事はローマ正教相手側にいる可能性が高い。

おそらく、上条達が向こうに協力している理由は天草式が法の書やオルソラを誘拐したと思っっているからだだろう。ならば、その勘違いを解いてやる必要がある。でなければ、天草式にやられてしまうかもしれない。それを恐れたのだ。

だが、同時にもう一つ新たな想いが彼の中に芽生えていた。

天草式の事情。

別にゼロに関係する訳はない。だが、似ている。

昔の自分達の状況に。ゼロは敵を撒くために一年ほど仲間達から
レジスタンス
離れていた事がある。その時は本当にもう駄目だと思った。

それから、何とか生き延びたが、仲間達の助けなしでは生き延び
る事は絶対に不可能だった。

だから、天草式に肩入れしようとしているのだ。大切な仲間を失
ってしまった彼らに。

「なぜ、あなたがそんな事を？」

「ここにいる時点でオレは向こうから言わせれば敵と認識されてし
まうだろう。だったらオレも戦ってやる。こんな所で死ぬ気はない
んだな」

「でも、」

「いいだろう」

反論しようとした少女の言葉を遮って、こちらへ近づいてきた建
宮が答える。

「さっきの時の動き、かなり戦い慣れてるように見えたのよ。そこ
まで言うのなら手伝ってもらおうじゃねえの。ただし、助けは出せ
ねえのよな」

「構わない。オマエらも、それにオレとしてもそちらの方がやりや
すい」

建宮はにやっと笑うとゼロへと手を出す。ゼロもその手を取り、
お互いに握手をする。

長い夜の始まりだった。

天草式（後書き）

今回からロックオンのときに四字熟語使うのやめました。

じゃないと、あまりのネーミングセンスのなさに死にたくなりそうなので。

あれ、書いてないと思われた方、すいません。

それは僕の実力のなさが原因です。

誰かのために

テーマパーク『パラレルスウィーツパーク』の職員用出入り口に
近い金網フェンスの辺りまで上条、インデックス、ステイルの三人
はやってきていた。

この中に天草式と誘拐された少女^{オルソラ}がいる。

オルソラと法の書を天草式から奪還するため、ローマ正教のアニ
エーゼ部隊とは別ルートで侵入することになった三人。

囧として本隊が動き、その隙にいくつかの遊撃隊がオルソラと法
の書を奪還する手筈になっている。その遊撃隊の一つとして動い
ているのだ。

「おいステイル」

「何だ？」

「お前、本当に時間内に全部の仕事を片付けられると思うか？」

仕事とはオルソラの奪還、『法の書』の探索、そしてこのテーマ
パーク内に存在する天草式の移動用術式をするためのポイントの破
壊の事である。

「正直厳しいだろうね」

やや間をあげ、ステイルは静かに答えた。

「ただでさえ園内のどこに『法の書』やオルソラが保管されている
かもわかっていないんだ。それにローマ正教に伝えていない情報が
一つある」

「？」と首をかしげる上条に、

「事件発生直後に神裂火織の行方がわからなくなった。おそらくか
つての部下……、いや、仲間を思っただけの行動だろう。天草式を完全
に倒そうとすれば、あの聖人が襲ってくる可能性がある」

上条はあまりの驚きと緊張に息を呑む。

上条も神裂火織の強さは知っている。もしも敵に回る事があれば、
それがどれほど危険な事となるのかも。

「だから、全ての仕事を成功させようなんて思うな。最悪『法の書』が解読されるのは防ぐように立ち回るんだ」

「だったら、最優先はオルソラで良いか？」

上条はインデックスとステイルの顔を見ながら言う。

「僕は別に構わないさ。解読者がいなければ『法の書』は宝の持ち腐れだし、あれはローマ正教の持ち物だ。その子の頭の中にすでに『法の書』は入ってるし、イギリス清教に何か損失があるわけでもない」

「わたしもそれでいいと思うよ。どうせとうまはダメって言っても勝手に一人で突っ走っちゃうんだし。ただでさえ人数少ないんだからみんなでまとまらないとね」

インデックスとステイル、イギリス清教の魔術師達は特に悩みもせず答えた。

イギリス清教の事情もあるはずなのに、魔術に関してはただの素人である上条の意見を聞いて。

「……上条当麻。これを持っていたまえ」

ステイルは上条へと何かを手渡す。

それは銀でできた十字架のネックレスだった。

「何だよ、これ？……もしかして、霊装とかいうやつ的一种か？そんなの俺に渡してどうすんだよ？」

ステイルはふうっ、とため息をつく、と上条へとネックレスを放った。

「おいっ!？」

上条は慌てて両手でキャッチする。

「君なんかに霊装を渡すわけがないだろう。どうせ、君の右手で壊れるんだから」

ステイルは、君は馬鹿か？という視線を投げかけてくる。

確かにそのネックレスは上条の右手に触れても何の反応も示さなかった。

「ただの御守りみたいなものだよ。死にたくなかったら持っておく

事だね」

上条がステイルにさらに何か聞こうとすると、

ドン！！ と、遠く離れた一般用出入り口の方から爆発が起きた。

上条が爆発の規模の大きさに驚いていると、

「時間だ。行くぞ」

「とうま。油断しちゃダメだからね」

「ああ、わかってるよ」

オルソラ救出作戦が開始した。

「始まったか」

テーマパークの敷地内の一角で静かに立っているゼロ。

遠くからは、爆発音の後、戦闘が始まったのだろう。最初のものよりは小さいが激しい爆音がいくつも響いてくる。

今、ゼロは前線ではなくこの場所で、裏からの侵入者がいた場合の迎撃を任されている。

正体がばれないようにするために、大きなコートを羽織って、フードを深くかぶって顔を隠している。その姿は他の天草式達とは明らかに異なっており、この場所では逆に目立ってしまった。

「後は、当麻達と会えれば」

向こう側に上条がいる。それはこの天草式と敵対している事を意味する。

ゼロが聞いた『法の書』の力やオルソラがそれを解読できたことはおそらく向こうも知っているはず。

聞いたからこそ、オルソラを助けようとしている。それがこの一

週間共に過ごしてきた上条やインデックスという人物だったからだ。
不意に後ろから足音が聞こえた。

ゼロが振り向くと、そこには赤い髪をした身長は二メートルぐら
いあるであろう真っ黒な修道服を着た神父が走ってこちらへと向か
って来ていた。

「……建宮は相手の部隊は黒い修道服を着たシスターの少女達だと
言っていたが。だとすれば、あれは増援か？」

聞いていた敵の情報とは違う相手にどう対応するか悩むゼロだっ
たが、あいにく相手からは友好的な感じはしない。むしろ、今すぐ
にでも殺してやると言わんばかりの印象を受ける。

こちらに気付いたのであろう。ある程度の距離まで近づいたとこ
ろで神父は足を止める。

「天草式かい？ それにしては不思議な格好だが。まあいい。邪魔を
するのなら、燃やし尽くすまでだ」

神父は懷からカードを取り出すとそれを数枚、周囲へとばらまく。
THIAFIIMH「我が手には炎、IHTSOTSその形は剣、AHTRCその役は断罪！」

神父が叫ぶとその手に炎の剣が現れる。

ゼロは何も言わずにゼットセイバーを構える。

セイバーを見たステイルは訝しげな顔をする。

「何だい、その剣は？ 僕達のもの西洋文化とも こちらのもの東洋文化とも少し違うように見
えるけど……」

瞬間、

返事は期待していなかったのだろう。聞くだけ聞くと神父はすぐ
にゼロへと近づき炎剣を叩きつけてくる。

それをゼロは受け止めずに振り下ろされる瞬間に横に移動して神
父へと攻撃しようとする。が、

視界の端に見慣れた白いシスターが映った。

距離はここから少し離れており、声が届くかどうかは微妙な距離

だ。

先ほどまでは、神父の体がちょうど壁になってわからなかったのだ。

いや、わからなくしていたんだろう。神父はおそらくインデックスが真っ先に狙われないようにあえて自分の影になるべく隠れさせていた。

でなければ、いくらなんでもあそこまで気づかれないように壁になるのは難しい。

ゼロは攻撃するのを止めて、二人から距離をとる。

だが、神父は、「炎よ————」神父の炎剣の炎の揺らめきが激しくなる。

「待て！」

「巨人に苦痛の贈り物を！」

神父はゼロの制止に対して聞く耳を持たずに、炎剣を真横に振るう。

瞬間、炎剣が大きく膨れ上がり、ゼロのいたあたりすべてを爆発させた。

「悪いけど、あまり構ってあげられる時間はないんだよ」

ステイルは戦っていたフードの男が爆発に包まれたのを確認すると、手にあった炎剣を消した。

ステイルは背を向け、立ち去ろうとする。だが、

「悪いがこちらにはオマエ達に話さないといけない事があるんだ」

ステイルは驚いて顔を炎へと向ける。

（馬鹿な！炎剣を受けて生きているなど、あの男でもあるまいし、そんな事あるはずが！！）

ステイルはこれとよく似た情景を見た事があった。

摂氏三千度の炎の中から、当たり前のように話しかけてきたツンツン頭の少年の姿を思い出す。

炎が強い風で消し飛ぶ。

ステイルは思わず目を腕で庇う。

炎の向こう側にはフードは焼け落ちたのだろう。長い金髪を背中にくくってまとめたらしめている青年の姿があった。

その手の剣は先ほどまでとは違い、緑と水色の間ぐらいの色をした薄い剣だったのが、今は完全に青色の剣となっていた。

神父の炎剣が届く寸前、

ゼロはまわりは分厚い氷で覆われていた。

アイスチップ。

ゼロの武器に氷の力を纏わせる事のできる力であり、これでまわりに氷の壁を作ったのだ。

だが、これでもどこまで防げるかはゼロにもわからなかった。

爆発を受け、氷の壁はどんどん溶けていく。

しかし、同時に炎の方も勢いが少しずつ失われていく。

ゼロは氷が完全に溶け落ちた瞬間、手と武器だけでなく、足にも装甲を展開。

セイバーを構えながら、激しく回転し、風を起こして炎を散らせる。

結果、何とか、焼かれずに済んだのだった。フードは焼けてしまい、髪の毛の先端が少し焦げてはいたが。

「戦う前に話がしたい」

今もまだ混乱しているのだろう。目を見開いたままの神父へと話しかける。

「何を言っている。君達が――――」

「ゼロ!？」

神父が怒鳴ろうとした瞬間、ゼロの姿を見たインデックスが叫んだ。同時にゼロ達の方へ走り出す。

その声を聞いた神父はまた驚いて顔を歪めた。

気のせいかその目にはゼロに対して羨望や嫉妬混じっているように感じられた。

「何でこんなところにいるの!？」

インデックスはそんな事には気づかず、驚きながらも困った声をあげる。

おそらく、何の関係もないはずのゼロがいたことに戸惑っているのだろう。

「その事で話がある」

ゼロは、インデックスの目を見ながら静かに言った。

「さて、これからどうすっかなー」

上条はテーパーパーク内を隠れながら移動していた。

その横には黒い修道服を着た金髪の少女がいる。

オルソラ・アクィナス。先ほど天草式から逃げてきたオルソラと偶然出くわしたのだ。

イメージブレイカー

上条の右手に宿る幻想殺しは幸運の力すらも消してしまうとインデックスは言った事が、この悪運は幸運と取るべきか不幸と取るべきか。

（やっぱりステイル達と合流すべきか）

考えがまとまった上条はオルソラを連れて、ステイルとインデックスを探しに行こうとする。

「大丈夫ですか!？」

その時、後ろから上条達に声かけられる。

振り向くと、そこにはアニエーゼがいた。後ろには馬車に使うような大きさの木の車輪を担いだ背の高いシスターと、腰のベルトに硬貨皮の袋を四つほどぶら下げた背の低いシスターがいる。

「オルソラ! アクィナス!？」

アニエーゼ達は信じられないという目で上条を見る。

まさか、こんなにも早く見つけれられるとは思っていなかったのだろう。

「ありがとうございます。さあ、早く。オルソラをこちらへ」

「ああ」

瞬間、オルソラの肩が小さく震えた。

「？」

だが、それを考える時間は上条にはなかった。

「そう簡単に渡すわけにはいかんのよな!」

上空から男女が二人跳び下りてくる。

片方の男は刀身が波打つ大剣、フランベルジュを構え、もう一人の少女は先端が十字になった槍、フリウリスピア海軍用十字槍を手を持っている。

「シスター・アニエーゼ。オルソラを連れて先に行ってください」

背の高いシスターは一步前に出ると、アニエーゼをうながす。

アニエーゼは小さく首を縦に振ると、オルソラを連れて走り出した。

「待て!!」

男達はは追いかけようとするが、その前に二人のシスターが立ち塞がる。

背の高い方のシスターが車輪を地面へと落とす。

瞬間、木製の車輪が爆発する。

爆発した数百もの車輪の破片が勢いよく男達へと襲いかかる。

だが、男達は剣と槍でその破片を全て叩き落としてゆく。

「シスター・アンジェレネ！」

だが、シスター達は焦らず、今度は背の小さいシスターが腰に下げていた四つの硬貨袋を取り出すと、その袋を頭上へと投げる。途端、バサッ！と硬貨袋からツバメのように鋭い翼が袋の口から六枚ずつ現れる。翼はそれぞれ袋ごとに、赤、青、黄、緑の光に輝く。
Vienne Unapersonalistic
「きたれ。十二使徒のひとつ。徴税吏にして魔術師を撃ち滅ぼす卑賤なるしもべよ」
Lo schiavo basso che vi ha magment
required irahoolgonno

背の低いシスターが叫んで、夜空へ大きく手を差し出した瞬間、硬貨袋はキュガッ！！と弾丸のような速度で天草式の二人へと迫る。

それに気付いた二人は破片を撃ち落としながらもわずかに後ろへ下がるが、硬貨袋は二人の足元に激突し、大量の粉塵をまき散らす。と、同時に天草式へと飛んで来ていた木の破片はなくなり、あたりに散っている破片はまるで磁力に吸い寄せられるかのように背の高いシスターの下へ戻り、まるでジグソーパズルのように合わさって、再び木の車輪となる。

これを好機と天草式の二人は走りだそうとするが、少女は何かに足を取られて転ぶ。

それは、さっき背の低いシスターが撃ちだした硬貨袋だった。その口の紐が解けて、彼女の足へと巻きついて地面へと縛り付けている。

「ちっ！」

男の方は転びそうになりながらも、隣の少女の様子を見て気づき、持っていた剣で硬貨袋を斬り裂く。

だが、男が顔をあげた瞬間、目の前には走りこんでくる上条の姿があった。

上条は振りかぶると、思いっきり男を殴り飛ばす。
すると、男は殴られた事に驚いた顔をしながら、数メートルほど
吹っ飛ぶ。

もしかしたら男は何か魔術を発動していたのかも、などと上条は
つい相手を倒した事で安心してのんきに考える。

「待て、当麻!!」

が、遠くから聞こえてきた声に眉をひそめた。

見れば、そこにはインデックスとステイル、それにもう一人。
クラスメイトで同じ寮の住人のゼロが走って来ていた。

「何でゼロがこんなところにいるんだよ!？」

「それは後だ!当麻、オルソラを見なかったか!？」
珍しく慌てているゼロ。

「オルソラならさっきアニエーゼに引き渡したけど」

上条はゼロの様子やゼロがオルソラを知っている事など色々聞
きたい事があったがそれを呑み込んで答える。

「くっ、遅かったか……」

悔しそうに唇をかむゼロ。その隣ではインデックスとステイルも
どこか暗い顔をしている。

「オルソラが気になるならこいつらに聞いてみれば――――」

上条はシスター達を紹介しようとして振り向く。だが、そこにはす
でにシスター達の姿はなかった。

上条が首を傾げていると、

ヒュイイイイ!! と、遠くから甲高い笛のような音が聞こえ
てきた。

「退却命令。どうやら向こうは目的を果たしたようだね」
ステイルが忌々しげに吐き捨てる。

ゼロは天草式の少女と共に先ほど上条が殴り飛ばした男の怪我の具合を見ていた。

「一体、何があったんだよ？」

上条はまったく事態が呑み込めない。

突然現れた友達。

インデックス達の様子。

自分達を置いて、先に戻ったアニエーゼ部隊。

上条にとっては自分だけのけ者にされているようで良い気分はしない。

「ローマ正教は嘘をついていたんだよ」

誰も答えようとしない中で、インデックスが上条へと答える。

「嘘？」

「そうだ」

インデックスの言葉を引き継ぐようにゼロが答える。

天草式の男は少しふらふらしながらもすでに立てるようになっていた。

「ローマ正教はオルソラを助ける気なんてまったくない。ローマ正教はオルソラ＝アクィナスを……、殺す気だ」

「!!!!!!」

上条は自分の耳を疑った。

『パラレルスウィーツパーク』から出た上条達は夜道を歩きながら、ステイル、インデックス、建宮、ゼロ、上条の五人で情報交換をしていた。

すでにテーマパーク内にはアニエーゼ部隊はおろか、その痕跡すら一切残っていないかった。

天草式はかなりの人数が捕えられてしまい、今は十人弱ほどしか残っていない。

建宮以外の天草式の面々は何か準備があるらしく、今ここにはいない。

「宗教裁判……、いや、神明裁判かな。それが終わるまではオルソラは殺されないだろう。と言っても、殺さない限りは何をしても許されるだろうがね」

ステイルは淡々とした調子で話す。

オルソラは今すぐに殺される事はないという。それはオルソラがローマ正教の人間であるがゆえに簡単には殺してはいけならしい。だから、オルソラを『神に背いたもの』とするために少し準備がかかるというのだ。

オルソラがどんな思いで魔道書を解読しようとしてたのかなんてローマ正教は気にしないだろう。邪魔だから。都合が悪いから。厄介だから。面倒くさいから。うまくいかないから。たったそれだけの理由でアニエーゼ達は————ローマ正教は、オルソラの命を奪おうとする。

「ふざけんな！！オルソラが何をしたって言うんだ！」

ローマ正教もオルソラも同じ。『法の書』を危険視していて、それをどうにかしたいから行動しているだけなのに。

「『法の書』を解読しただけで何で殺されなきゃいけないんだ！！」
危険な魔道書をどうにか処分するための突破口を探していただけないのに。

「あいつがどんな思いで————」

誰かの役に立ちたかっただけなのに。

「—————どんな気持ちで『法の書』を解読したのか、わかってんのかよ——！」

誰よりも『法の書』危険だと思っていたから、何とかしたかっただけなのに。

オルソラは異端審問という名の手順を踏まされて、誰にも助けを

求められないまま処刑されるような事をやったのか？

(違う!!)

「そんなもの認められるか……」上条は奥歯を砕きかねないほど噛み締め、「たとえどれほどの理由があったって、どれほどの事情があったって、そんな真似が許されてたまるか!!」

「気持ちわかるがね」

上条の言葉を聞いても、ステイルは唇の端に煙草をくわえながら、飄々と答える。

そんな態度のステイルを上条は食い殺すように睨む。

だが、ステイルに動じた様子はない。むしろ、上条を心配そうに見ているインデックスの方が怯えたような目をしている。

「少しは気を静めたらどうだ。この街に集まっているだけで、彼女達は二百五十人近くいると言う話だったろう？君の拳はそれらすべてをなぎ払えるほど便利な拳なのかい？」

「……ッ！」

上条は自分の拳を握りしめた。

現実での素手でのケンカにおいて、お話のなかみたいは何十人も一人で打ち倒せるということはありえない。それはケンカにおいて、当たり前のように存在するルールである。

そう。

本物の戦闘のプロでもない限りはあり得ない。

その戦闘のプロである魔術師は、ゆっくり笑いながら煙を吐き、

「そもそも、僕達にもう出る幕はないんだ。残念ながら、この話はもう終わってしまったんだよ」

「なん、だと？」

「考えてみると良さ。オルソラ・アクィナスがローマ正教のルールを破り、それを罰するためにアニエーゼ部隊がオルソラを追っていた。それだけの話さ。『法の書』はローマ正教にあると言う話だし、天草式も『法の書』を悪用する気はない。結局、僕達イギリス清教は別に動く必要はなかったわけだ」

今度こそ。

上条当麻は迷わず、ステイルの胸ぐらを掴み上げた。インデックスは口元を押さえながら小さく悲鳴を上げ、建宮は上条の顔を見て小さく口笛を吹いた。ゼロは黙って上条達の様子を見ている。その顔からはどんな感情もうかがえない。

だが、ステイルに動じた様子はない。

「諦めるんだね、上条当麻。これはローマ正教内で起こった事件を彼らのルールで裁いているだけだ。下手に関われば、ローマ正教とイギリス清教の間に亀裂が入る。それとも何か？君は戦争を起こしてもオルソラ・アクィナス一人を助けようと言うのか？」

「……、」

ステイルの胸倉をつかむ上条の手から、力が抜けていく。インデックスは何か言おうとしたが、結局何を言っていないかわからず吐息が漏れるだけだった。

これが素人とプロの違い。

これが個人と組織の違い。

ステイルは退屈気に煙草を吐き捨てると、それを踏みつぶしながら建宮の方を見る。

「僕は君達の行動まで止める権限は持たないよ。好きにするといいさ」

「わかってるのよ。あー、少年、そこまでへこむなって。イギリス清教には戦う理由がなくとも、こっちには大アリなのよ。ちよっくら仲間助けるついでに、オルソラ嬢も助けてやんよ」

その声に上条は頭をあげた。
「狙うとすれば移動時。捕まってるやつらを助け出せば何とか勝機はあるのよな」

建宮の話では移動中ならば、アニエーゼ部隊を襲えるという。

同時にそれはアニエーゼ部隊が移動を始めなければ攻撃することはできない事を意味する。おそらく、残っている天草式もその奇襲のために動いているのだろう。

だが、ステイルの話では死ななければ何をしても良いという。

上条が顔を曇らせていると、建宮も彼の危惧に勘付いたらしく、
「……、わかれ、って言うのも酷かもしれないねえがよ。いくら我らでもできる事とできない事は存在すんのよ」

建宮は苦い顔をしていた。おそらくプロだけに上条以上に鮮明にその姿が思い浮かぶのだろう。

上条は近くの電柱を殴りつける。

最悪の事態が想像できるのに、何もできない自分が情けなかった。ろくに返事もできない上条をステイルはつまらなそうに見て、

「話は決まったようだね。それじゃ、僕達も適当に解散して姿を隠そう。上条当麻、君はインデックスと共に学園都市へ戻れ」

彼は新たな煙草に火をつけて、

「イギリス清教にオルソラを助けるだけの正当な理由があったら話は別だが、残念ながら今の状況ではここが限界だよ」

心底つまらなそうに煙を吐いて、

「ああ、それと上条当麻。一つだけ聞いておきたい事があるんだ」

「……、何だよ？」

上条が力なく振り返ると、ステイルは皮肉げな笑みを浮かべたま、

「僕が渡した十字架。見たところ、君は持っていないようだけど、どこへやったのかな？」

「悪い、オルソラに預けたままだ。俺が首にかけてやったらメチャクチャ喜んでたけど、もしかしてあれって大切なものだったのか？」

「いや、何の変哲もないただの十字架だよ」ステイルはなぜか愉快そうに笑みを強め、「君が持っている事に意味があったんだが……、まあ、今の君にはもう必要ないしね」

ステイルは訳のわからない台詞を煙と一緒に吐いた。

建宮と別れた後、四人は学園都市への道を歩いていた。

ステイルは学園都市までインデックスを護衛するつもりらしい。道中、インデックスは上条を慰めようと言葉をかけてくる。

だが、もしかしたらその言葉は慰めるためのものではなかったのかもしれない。上条の未練を断ち切るために、上条を日常へと帰すために言った言葉だったのかもしれない。

「あっ！冷蔵庫の中身が何にもないんだった」

上条は思い出したように言う。

「インデックスさん。めんどくさいから、今日の晩飯は無しという事で」

「とうまーっ!!?」

インデックスは夜中にも関わらず、大声をあげる。

「嘘だよーっ！ちゃんとそこらへんのコンビニで買ってきてやるよ」

「コンビニに？ならみんなで行けばいいかも」

「断る。お前を連れていくと何でもかんでも手当たり次第にカゴへ突っ込むからな。ステイル、インデックス達を先に学園都市へ帰してやってくれ」

「君がそうすると言うなら。この子にとって有益な申し出なら受けてやっても構わないが」

ステイルは口の端の煙草を上下に揺らしながら、

「ところで『場所』はわかってるのかい？」

「……、別に。コンビニなんてその辺を走りまわれば見つけられるだろ」

上条はステイル達と別れ、横道に逸れると、すぐに走り出した。

ステイル達の姿が見えなくなった所で携帯を取り出し、GPS機能を使ってコンビニ……、ではなくある教会を探す。

オルソラ教会。

この近くに建設途中のローマ正教の教会の話をアニエーゼから上

条は聞いていた。

三百人近い人間の移動をなるべくばれないようにするのなら、近くにある自分達の知っている場所を要塞化するのが得策だろう。

（あの野郎……。ばれてたかね？）

ステイルの言葉、おそらく彼は気づいているだろう。上条の目的に。

それにゼロの態度。飯の話をしてもし一切食いつきもしなかった。

（だいたい、ゼロの部屋には少しだけ食料があったしな）

教会の場所を把握すると、さらに走る速さをあげる。

上条が戦わなければならない理由なんてどこにもない。

だけど、自分を信じてくれる人を裏切りたくはない。

オルソラは上条を信頼してくれた。

最後まで気づかなかった上条を今もまだ信じてくれているかどうかはわからない。

それでも、彼女に背中を向けたくはない。

インデックス達のように集団に属さない人間だからこそできることがある。

唯一、自分が学園都市という科学サイドの一員だと思われなかが心配だが、おそらくそんな事になれば学園都市は上条を退学・除籍させて関係ないと言い張るだろう。

それでも構わないと思う。

それでもこの道を選びたいと思う自分自身に笑ってしまう。

だが、本当はゼロも来てくれるかもしれないと思っていた。

自分達の事を思って、巻き込まれたわけですらないのにここまで来てくれた友ならば一緒に来てくれるかもしれないと。

しかし、彼は来なかった。

上条に声を一度もかけることなく去ってしまった。

その事に安堵する自分と寂しさを感じる自分がいる。

戦う理由もないままに上条は走り続ける。

戦わなければいけない理由なんて一つもない。
でも、戦い続けたい理由なら彼の中にはあったから。

「まったく、本当に嘘の下手な奴だね」

上条と別れた後、ステイル達はまだ立ち止まって話していた。

「じゃあ、やっぱりとうまは……」

不安そうに呟くインデックス。

その目には後悔の色がありありと浮かんでいる。

自分と共にいたがゆえに巻き込んでしまった、とインデックスは自分を責める。

「そんなに悲観するな、インデックス」

ゼロはそんなインデックスを励ますように言う。

言いたくても、自分には言えないと思っているステイルは一瞬だけだが寂しげな目をする。

「アイツはそんな簡単には死にはしないさ。それにオマエ達もこれから行くんだろう？」

インデックスもステイルもゼロの発言に驚きを隠せない。

「気づいてたの？」

「いいや。だが、それぐらいわかる。オマエらの言う事は全て『上条当麻を諦めさせる』ために行っているようにしか聞こえなかったからな」

だからこそ、ゼロは会話へと入ってこなかったのだ。

ゼロは魔術の事だってこの世界の科学の事だって詳しくは知らない。だから、ゼロが余計な事を言ってしまうえば、上条がオルソラを助けに行ってしまうかもしれない。

それをゼロは恐れていたのだ。

もっとも、その甲斐なく上条は行ってしまったが。

「どういう理由で介入する気なのかは知らないが、行くなら早く行ってやれ。その方が当麻も安心する」

「別に僕達は構わないけど、君はどうするんだい？」

ステイルもゼロがそれなりの実力者である事はすでに理解している。

魔術側の人間ではなく、学園都市の人間とはいえ上条と同じ条件ならば、別に助けに行っても問題はない。

「オレは少し寄る所があるんでな。悪いが助けには行けそうにない」
インデックスは小さくほっ、と息をつく。ゼロが戦いに来ない事に安心しているのだ。

ステイルは吸い終わった煙草を地面に投げ捨てると、

「そうかい。ならばここでお別れだね」

ステイルとインデックスはゼロへと背を向け、来た道を引き返そうとする。

「一つだけ教えろ。オルソラ達がいそうなのはどこなんだ？」

行くわけでもないのになぜそんな事を聞くのか。

ステイルにはその理由はわからなかったが、

「オルソラ教会というローマ正教の教会だよ」

「そうか。すまない」

それ以上、ステイルはゼロを気にすることもなく、オルソラ教会へと向かった。

「どうすればいいかだって？そんなの、助けるに決まってんだろ
うが！！」

暗く、窓から差し込む月明かりしか光が存在しない中、二百人以

上の武器を持ち、黒い修道服を着たシスター達を前に上条は言い放つ。

「おも、しろい、ですよ。あなた」

アニエーゼはぶるぶると怒りで声と体を震わせて、

「二百人以上を相手に、この状況であなた一人に何がどこまでできるのか！見せてもらおうとしましょうか！ははっ、一体何秒で挽肉に変わっちゃいますかね！？」

その声を合図に、黒いシスター達は一斉に武器を構える。

対する上条はたった一人で拳を握りしめるだけ。

そんな両者が激突する寸前で。

唐突に何者かの声が飛んできた。

「まったく勝手に始めないでほしいね。せめてルーンを十分にはる時間くらいは用意させてもらいたかったんだけど」

「は……？」

アニエーゼが呆けた顔で振り返った瞬間、轟！！と炎が酸素を吸い込む音とともに完成途中の教会を支配していた暗闇がオレンジの爆発によって一気になぎ払わた。

上条とはちょうど正反対の位置。

そいつは外壁工事のための足場を伝ってやってきていた。

ステンドグラスをはめる予定の窓に穴をあけ、その窓枠に足をかけ、炎の剣を持ったステイルがそこにいた。

「イギ、リス、清教……？馬鹿な、これはローマ正教内の問題なんですよ！あなたが関わるというのなら、内政干渉とみなされちゃうというのがわかんないんですか！？」

「ああ、残念ながらそれは適応されない」ステイルはつまらなそうに煙を吐いて、「オルソラⅡアクィナスの胸を見ろ。そこにイギリス清教の十字架がかけられているのがわかるな？それを誰かにかけてもらう行為は、そのままイギリス清教の庇護を得る、要は僕達の一員になる事を示している。つまり今のオルソラⅡアクィナスはローマ正教ではなく、僕達イギリス清教のメンバーであるという事さ」

「そっか、それで……」

オルソラにあの十字架をあげると言った時、あんなにも喜んでいたのにはこういう理由があったのだ。

「そ、そんな詭弁が通じると思ってたんですか!？」

アニエーゼは顔を真っ赤にして怒鳴る。

「思っちゃあいないさ。だが、同時にオルソラⅡアクィナスが非常にデリケートな立場にいるのも事実だ。君達ローマ正教が、勝手に彼女を裁こうというのなら、僕達イギリス清教はそれを黙って見過ごすわけにはいかないんだよ」

すடன்、と窓から跳んだステイルは静かに説教壇の前に着地する。そして、炎の切っ先を、遠く離れたアニエーゼへと突き付けた。

「それに、君達のこんなくだらない都合にあの子を関わらせたんだ。最初からずつとその事にはイライラしていたんだよね」

「チィッ! 一人が二人に増えたところで何が……!？」

彼女は憎々しげな声をあげたが、またも別の声によって遮られてしまう。

「二人で済むとか思ってたんじゃないのよ」

ドゴン! と横合いの壁が爆発で吹き飛ばされ、砂煙の中から大剣を持った男が歩いてくる。

「建宮……」

建宮斎字の後ろには別の場所に監禁されていた天草式の面々も揃っている。その数は五十人程度、おそらくは監禁されていた全員だ。「まったく、わざわざイギリス清教の連中と話しあってお前さんが動く前に決着をつける手はずを整えようとしたのに。お前さん、想像以上の馬鹿だよな。ま、見ていて楽しい馬鹿は嫌いじゃないが」建宮は呆れたように答えた。

今度は上条の背後から、カツンと足音がなった後、聞きなれた白いシスターの声が飛んできた。

「まったく、やっぱりとうまはどこまでいってもとうまなんだね」

「いん、でつくす……」

「でも、こうなっちゃったら仕方ないよね。――――――助け

よう、とうま。オルソラⅡアクィナスを、私達の手で」

ああ、と上条は頷いた。

「……ゼロは、帰ったのか？」

「多分。でも、本当はその方が良いんだよ」

二人とも少しだけ寂しそうな顔をする。

だが、いつまでもそんな気持ちを引きずるわけにはいかない。

二人とも再び気を引き締める。

殺せ、という静かな、しかし大きな怒りをはらんだ声が響く。瞬

間、闇に染まる数百ものシスターが襲いかかってくる。

不条理な物語を終わらせるための最後の戦いが始まった。

誰かのために（後書き）

……すいません。

また文字数が……。

どこで区切れればいいのか悩んでたらまたこんなに。

次こそは！

……。

力と仲間（前書き）

愚痴なんです、この間遊戯王のパックを買ったら、何故か四枚しか入っていませんでした。

まさかの不良品！

不幸だ……。

力と仲間

神裂火織は深夜のビルの屋上にいた。

その眼下に広がる景色の中には建設途中のオルソラ教会があり、夜中にも関わらず、静寂はない。むしろ、怒号のごとき喧騒が響いてくる。

彼女は教会から遠く離れた所に立っていたが、それでも鋭敏な耳は彼らの言葉を聞いていた。たった一人の少女のために立ち上がった人々の声を、聞いていた。

彼女の目が優しげに細められる。

彼女は天草式を味方するためにここに来たのではない。最初から暴力を振うためにイギリスから失踪したわけではない。

ただ、真意を見届けたかった。

彼女が抜けても天草式はやはり天草式のまま、何も変わらずにそこにあるという事を、見届けたかった。

そして、彼らは今、信じていた通りのものを見せてくれた。

彼女の信じていた通り、何も変わらず彼女の大切な、もう帰れない場所がそこにはあった。

そんな彼女の背後で、隠そうともしない足音が聞こえてきた。

「やはりあの教会の周辺にいたか」

「：ゼロ、でしたね」

神裂は慌てて表情を消してから振り返った。ゼロは無表情のまま。今、自分が表情を消しているかどうかは判断できない。

神裂は無理にでも硬い声を出して、

「あなたにも迷惑をかけてしまったようです。すいませんでした」

「オレが自ら関わりにいった事だ。謝る必要はない」

神裂が素直に頭を下げようとするのを遮る。

「それより、オマエは行かなくていいのか？仲間なんだろう？」

ゼロの言葉に神裂は複雑そうな顔をする。嬉しそうな、けれど寂しさを含んだ顔。

「私が彼らの前に立つ資格はありません。それに今の彼らには私の力はいらないでしょう。彼らは強くなりました。あなたこそ助けに行かなくていいのですか？」

「行くさ。ただ、その前にオマエと話がしたかった」

神裂は疑問を浮かべた顔で、ゼロを見る。

冗談を言っているようには見えない。が、そんな事をしているほど悠長にしている良いのかと思う。

「私に何か言いたい事でも？」

「なぜ天草式の下へ戻ろうとしない？」

ゼロの言葉に胸をえぐられるような気分になる。

神裂は無表情でいようと努めるが、彼女の顔には不機嫌さが出てしまっている。

なんとか心を落ち着かせると、

「……あなたも話は聞いたでしょう。私は聖人です。私が近くにいれば、……彼らを傷つけてしまう。聖人とは無条件に『幸福』になつてしまう人間なんです」

彼女は俯いた。悲しいからでも悔しいからでもない。心が、痛かったから。

「私は生まれた瞬間から聖人としての才能を得て、女教皇プリエステスの地位が約束されました。ですが、それゆえに必死に努力してきた者を絶望させ、女教皇プリエステスになろうと夢見てきた者達の夢を潰しました。私は誰かに命を狙われても、爆発に巻き込まれても、運よく死にませんでした。ですが、そのために私を庇い死んでいった者達が大勢いました」

もう表情を隠す気はないのか、それとも表情を隠す余裕がないのか。

彼女の顔は今にも泣き出しそうだった。

「あなたにわかりますか？自分が『幸福』であるがゆえに、他の誰

かを『不幸』にしてしまうその気持ちか？」

ゼロは何も答えない。いや、答えられない。

そもそもゼロは幸福とか不幸とかそういう事を知らない。

彼にとつては、ただ毎日生きるために戦い、戦わなければ死ぬ。

そこには『幸福』も『不幸』もありはしなかった。

あつたのは生と死だけだった。

ゼロが押し黙っていると、

「私が彼らといれば、また私のせいで彼らは死んでしまうかもしれない。……私にはそんなのは耐えられません！」

建宮は自分達のせいで神裂が天草式を去ってしまったと言っていた。

自分達が弱かったからと。

「……だからどうした。ふざけるのも大概にしろ！」

「!!!!」

気づけば神裂は七天七刀をゼロの首元に突き立てていた。

鞘のままだが、それでも神裂が扱えば、一人殺すのなんて容易いだろう。

だが、ゼロは構える事もせず、神裂を睨んでいる。

「ふざけてこんな事をする訳がないでしょう！ですが、こうするか彼らを守る方法はないんですよ！」

神裂は叫ぶ。もしかしたら、オルソラ教会まで届いてしまうかもしれない。

だが、叫ばずにはいられなかった。」

ゼロはその声を聞いても、少しも動じることなく、

「守る？違うな。オマエは恐かったただけだ。自分のせいで仲間が死んでしまうのが恐かった。だから、逃げただけだ」

神裂は怒る。すぐにゼロを突き飛ばそうとする。

だが、七天七刀がゼロを襲う事はなかった。

神裂は何故か体が動かなかった。別にゼロが何かしているわけではないのに。

ゼロはそんな神裂を気にもせず、言葉を紡ぐ。

「天草式は強くなった？本当に強くなったのか？元から強かったんじゃないのか？今の天草式はオマエのために努力をし、確かに昔より『力』は強くなっているんだろう。だが、そんなことしなくともアイツらは昔から『強かった』んじゃないのか？」

神裂はゼロの言葉をそれ以上聞きたくはなかった。だが、彼女の体は動かず、彼女はゼロの言葉に聞き入ってしまう。

「オマエが天草式を弱いと思い、アイツらを信じられなかっただけじゃないのか？オマエのために倒れた者達は弱かったのか？オマエを大切に思い、命がけでオマエを守った者達は弱かったのか？」

「あ……、違っ……。……そうじゃなくて……！」

神裂には言葉が思い浮かばない。

ゼロの問い。

自分を守って死んでいった者達。彼らは死ぬ時にも笑って死んでいった。

神裂を守れて良かった、と。

（彼らが弱い？そんなはずはない！）

自分のために死んでしまった者達を、天草式の仲間達を弱いと思つた事などない。

「力ある者だけが仲間だというならば、それで構わない。それはオマエの勝手だ」

違う。

思いはゼロの言葉を否定する。だが、胸の奥がざわめく。

そのざわめきが思いを揺らす。

自分は本当に天草式の実力を信じていたのか？

「だが、それで天草式を弱いと決めつけるのは、ただの傲慢だ」

「……ならどうしろと言うんですか……？」

胸の奥のざわめきが心に広がって行く。まるで熱が氷を溶かすかのように。

今ならわかる。

ゼロの言うとおり、自分がどれほど傲慢だったのかが。自分がどれほど仲間達の実力を信じていなかったのか、よくわかる。

心のどこかでは力がなければ一緒には戦えないと思っていたのだ。だが、力なんて必要はなかったのだ。

あの少年を見ていればわかる。今も眼下で戦っているあの少年を見れば。

彼はただの素人だ。だが、みんなで戦い、みんなで勝利し、みんなで笑い合っている。

「私にどうしろと言うんですか!？」

神裂は吠える。だが、それは悲痛の叫びだった。

「分かっているはずだ。どうすればいいのかなんて」

神裂は何も答えない。

ただ黙って構えていた七天七刀を降ろした。

ゼロは話す事は全て話したという風に屋上のフェンスの所まで行く、下に広がる戦いを見る。

「オレはもう行く。オマエがどうするかはオマエが決める」

そう言うと、ゼロは、足だけをレプリロイドとかす。

ゼロが、フェンスに足をかけ、下にそのまま飛び降りようとする
と、

「待って下さい!一つだけ教えてください」

「何だ?」

「あなたも大きな力を持っているはず。その事について考えた事はないのですか!？」

「……確かに仲間達を守るためにオレは何度も戦った。正直、仲間達はそこまで強くはなかった。敵と戦えるのはオレしかいなかった」
ゼロは懐かしそうに目を細める。

神裂は少し驚いてしまった。ゼロもこんな顔が出来る事に。

「だが、仲間達を必要ないと思った事は一度もないし、弱いと思っただことだってない。仲間達はそれぞれ自分にしかできないやり方で

一緒に戦っていた。オレはアイツらと一緒にだったから戦えたし、一緒だったから勝てたと思ってる。別に守るために後ろに下がらせる必要なんてどこにもない。守るために一緒に戦うことだってできるはずだ」

ゼロは再び眼下へと視線を戻す。

「自分を心から思ってくれる仲間はあるには見つからない。だが、オマエには『幸運』にもその仲間達がいるんだ。天草式の連中だって、『幸運』にも命をかけて戦えるほどのリーダーを見つけたんだ。確かにオマエと一緒にいれば『不運』になるのかもしれない。だが、それで『幸福』をなくせば、オマエもアイツらも辛いだだけだ」

神裂は黙ってゼロの言葉を聞いていた。

何を考えているのかなんて、誰にもわかりはしないだろう。

そのまま、振り返る事なくゼロは飛び降りた。

『今』、命をかけて守りたい人達がいる戦場へと行くために。

オルソラ教会は七つの聖堂で構造されている。

その中でも一際大きい聖堂、『婚姻聖堂』にアニエーゼⅡサンクティスはいた。その周りには他にも十人ほどのシスターがアニエーゼの護衛のために待機している。

だが、アニエーゼが落ち着いて腕を組んで軽く目を閉じているのに対し、護衛のシスター達は爆発音や激突音が響くたびに肩を震わせ、あちこち見まわしている。

「騒いでんじゃないですよ。馬鹿みたいに見えちますよ。特にシスターⅡアンジェレネ」

「し、しかし、アニエーゼ様。もう戦闘が始まってから十分以上も経っております。お、オルソラを数に入れても、あれだけの人数さ、

ですよ？こんなのは普通じゃありません」

アンジェレネは狼狽しながらも話す。誰かと話していないと不安だというのがありありと見て取れた。

「わ、私達も動きましよう。少しでも人数の多い方が……」

アニエーゼがアンジェレネを止めようとする、

「大丈夫です」

いつの間に来ていたのだろう。聖堂の入口の所に、三人のシスターが立っていた。

「お前達！何をしているんですか！」

アニエーゼの声が飛ぶ。だが、三人は顔色を一つも変えることなく、

「いえ、手短にですが戦況の報告をしておいた方がよろしいかと思ひまして」

「大丈夫です。それより早くオルソラを捕まえて来ちまってください」

「わかりました」

三人のシスターはそのまま聖堂から出ていってしまった。

「アンジェレネ、聞いた通りです。行く必要はありません」

「は、はい……」

アニエーゼは再び目を閉じる。

（そう言えば、さっきの三人……。あんなシスター達、ウチにいましたっけ……？）

上条達は『終油聖堂』にいた。

ここにいるのは上条、インデックス、ステイル、オルソラ、建宮の五人。他の天草式達は別の場所でアニエーゼ部隊と交戦している。

上条達は劣勢となり、一度この場に逃げ込んだのだ。

もっとも、聖堂の扉は今なお、外から何十人ものシスターに破壊されつつあり、ここももう長くはもたない。

そのうえ、起死回生の一手となるかもしれない『法の書』の解説はオルソラの解説法が間違っていた事がわかり、万事休すだった。

「まあ、考えようによっちゃあ、救われたかもしれないよ。なあ、今からやっぱり解説法なんて分かりませんでしたっつたら、許してくれると思うよの？」

建宮が尋ねると同時に、ドォン！！と聖堂の扉に衝撃が走った。「無理、だろうね。ここまで暗部を見せてしまった以上、もう彼らも引き下がれない」

ステイルは絶望的な状況に、かえって薄く笑いながら答えた。やるべき事はなくなった。

掴む希望は永遠に失われた。

上条はオルソラやインデックスを逃げるために裏口へ誘導しようとして、炎剣を構えるステイルにぶつかってしまった。その懐からルーンのカードがバラバラと、床へ落ちていく。

瞬間、上条は小さな希望を見た気がした。

「おい、ステイル、建宮」

二人が上条へと顔を向ける。

上条は全員へと思いついた事を話す。

時間がない。もう後、数秒もすれば大量のシスター達が流れ込んでくるだろう。

「それしかないようだね」

「俺達ものってやんのよ、その作戦」

バゴン！！と一際大きな衝撃音と共に、『終油聖堂』の両開きの扉が破壊され勢いよく倒れかかってきた。同時に葬式にまつわる儀式を行う会場の中へ、何百もの漆黒のシスター達が宗教的な武器を構えて雪崩れ込んできた。

「チッ！これはやばいかもね……」

その数を見たステイル達の顔から笑みが消える。

上条の作戦を実行するにはこの場を切り抜ける必要がある。

だが、五人で立ち向かうには入ってきたシスター達の数はいくらにも多すぎた。

誰かを先に行かせる隙間すら作れるかどうか怪しい。

上条が絶望の足音が聞こえ始めたかと思った瞬間、

ドゴン！！ と先ほどの扉を破壊された時よりも大きな音が聖堂内に響いた。

あまりの出来事に全員が動けずに固まってしまっている。

ステイル達とシスター達がいるちょうどその間に何かが上から降ってきたのだ。そこから煙がまって何が落ちてきたのかうまく判別が出来ない。

「大丈夫か？」

不意に上条達へと声がかけられる。それは降ってきた何かから届いた声だった。

煙が晴れる。

そこにはゼロが立っていた。

「ゼロ！！」

「用事が終わったから、こっちへ来たんだ。時間がなかったんで上から飛び降りる形になってしまったんだが」

いつも通りの仏頂面で立っているゼロ。

上条にとってはそれが希望が降ってきたように思えた。

人数なんて一人増えたにすぎない。

相手のシスター達の手数は百人以上いる。どう考えたってそんなに大きく変わるわけではない。

だが、戦える。勝てる。そんな気がしてくる。上条の耳には先ほどまで聞こえていた絶望の音はもう聞こえなかった。

「オレは何をすればいい？」

「作戦がある。何とかこのシスター達をくい止めてくれ」

ゼロは頷くと、

「ロックオン」

かつての姿へと変身する。

ゼロにとって本当の姿へと。

次の瞬間、そこには赤い戦士が立っていた。

その姿に、見た事のあるインデックス以外の者達は驚愕する。

「とりあえずこいつらを倒せばいいわけだな」

刹那、

シスター達が吹き飛ばされた。

「えっ!？」

「走れ、上条当麻!」

あまりの出来事に呆けていた上条はステイルの声で我に返ると急いで裏口へと走る。

後ろを振り返る事はない。ただ前だけを見て、上条は走る。

その間にも、ゼロはシスター達を倒していく。

もつとも武器は一切使っていない。ゼロが武器を使えば、相手の命を奪ってしまう可能性が高い。

相手がレプリロイドや神裂のような超人ならばともかく、普通の魔術師レベルでは武器を使う訳にはいかないのだ。

だから、彼は打撃のみでシスター達を圧倒していた。それだけでも聖人以上の身体能力を持っているのだから、相手を制圧するのに問題はない。

「まったく、お前さんがここまでやれるとはなあ。呆れるぐらい強いじゃないのよ」

建宮は笑いながら話す。

「力だけが強くてって意味はない。一人でやることなんてどこかで限界が来るんだからな」

ゼロは建宮に答えるが、それはまるで建宮以外の誰かへと話して

いるかのように感じた。

十分ほど経った時、

『婚姻聖堂』には二人の人間が向かい合っていた。

一人はアニエーゼⅡサンクティス、もう一人は上条当麻。

アニエーゼの護衛をしていたシスター達は前線へと出ており、今の場にはいない。

だが、上条はアニエーゼへと近づく事が出来ない。なぜなら、

「こいつを傷つけると連動して他の物も傷つく。こんな風に、ね！」

アニエーゼはくると一転させた杖を床へと叩きつける。上条が後ろへと飛び退くと、上条の左肩があった部分の床へと衝撃が走り、床が大きくへこむ。

アニエーゼの攻撃はイマジンプレイカー幻想殺しを使えば打ち消せるのだろうか、『

どこから攻撃が来るのか』がわからない以上、攻撃に対して右手を会わせられない。

足を止めた上条に、アニエーゼは天使の杖を手近な大理石の柱へ、フルスイングで叩きつける。

上条は慌てて横へ跳ぶ。彼女の攻撃には命令から発動にまで一秒にも満たないが若干の余裕がある。従って、動き続ければ彼女の攻撃が当たる事はないのだが、

パガッ！！と。

当たらないはずの一撃が上条の左腕ごと脇腹へとめり込んだ。

「ぎ……っ！！」

横殴りの一撃を受け、上条の体は床を滑った。打撃の着弾点と脇

腹の間には左腕があったのだが、腕ごとまとめて脇腹に衝撃がぶち当たった。左腕は関節が外れたように力が入らず痛みの感覚も消えていて、脇腹の中、体の芯のような所からはギリギリとした痛みが噴き出してくる。

アニエーゼは床を杖の先で叩く。

上条は咄嗟に転がって移動したが、構わず衝撃が彼の胸に叩きつけられた。げほっ、と体内の酸素を強引に吐き出された彼は、それでも跳ねるように後ろへと下がろうとする。アニエーゼはそこへすかさず杖をナイフで傷つけると、上条の背中が斜めに切り裂かれた。一瞬の間があった後、背中^の痛みが爆発する。

「がっ、ば……アアああああああっ!？」

焼き付くような背中^の痛み^にのたうちまわる上条に対し、アニエーゼは杖を横に振った。大理石の柱に杖がぶつかる^と同時、彼の体が水面を走る飛び石のように床を飛ぶ。

「いつまでも単調に避けられるとは思わねえ事です。命令と発動までにタイムラグがあんなら、あなたの行動を先読みしてあなたの行動先に機雷^{攻撃}を設置しちまえば、そっちが勝手に攻撃範囲に飛び込んで来てくれる。大したタネもねえですよ」

上条は痛みで焼けつく頭を動かし、かろうじてその言葉を聞いていた。じくじくと痛む背中を気にしながら、よろよろと立ち上がる。アニエーゼはすでに勝利を確信しているのか、杖に頬ずりをしている。

(ぎ……ぎ……。ちくしろう、触れれば消せるんだ。触れる事が出来れば)

必死の形相を浮かべる上条に対し、アニエーゼは楽しそうに唇を歪めている。

アニエーゼが杖を杭のように柱に叩きこむ。

咄嗟に後ろへと下がるが、それすらも計算し先読みされ設置された一撃が真上から上条の頭に衝撃を叩きつける。がくん、と膝が折れかける。

闇雲に右腕を振るっても、それを嘲笑うかのように、別の方向から衝撃が襲いかかる。視界の明るさがゆっくりと明滅する。足は早くも笑い始めていた。

「はぁ…はぁ……。チッ。『法の書』だの魔術だの……嫌ってる割にや、テメエはバンバン使うんだな……」

だらだらと話し続けられ、上条の体力が回復するかもしれないのに、アニエーゼは気にもせず、

「あはは。殴られてご立腹なんですか。でも高位聖職者が持つ司教杖ってのは敵の鎧を叩きつぶすのに使ってたメイスって武器が変化したちまったものなんですよ。殴るための道具を殴るために使って何が悪いんですかね」

アニエーゼがうつとりして、杖を眺めていると、
「当麻、大丈夫か？」

聖堂の扉が開かれ、そこからゼロが入ってくる。

すでに姿はいつもの人間時の姿へと戻っている。

ずっとレプリロイドの状態でいると体力を使いすぎてしまうからだ。

「悪い。あんまり大丈夫とは言えねえわ。こりゃまた、病院に厄介になりそうだ」

思わぬ援軍に安堵したのだろう。上条に笑みが戻る。

「あらあら、囃に使った仲間が来ちゃったんですか。良かったですねえ、仲間がいて」

ゼロが来ても、アニエーゼは顔色一つ変えない。

その顔は余裕であふれている。

「当麻、まだやれるな」

ゼロはアニエーゼからすぐに目線を上条へと戻すと、尋ねるのではなく確認する。

その言葉に、無言で立ちあがって、肯定を示す上条。

「二人がかりだからってそんな簡単に勝てると思ってんですか？」

上条とゼロはお互い目配せすると、すぐに一列になってアニエー

ゼロへと突撃する。

前側にいる上条の後ろでゼロは身をかがめ、アニエーゼから姿が見えにくくなる。

「二人いた所で関係ありはしませんよ！」

アニエーゼは杖をくるくる回転させると、柱へと思い切り叩きつける。

二人並んで来るならば、後ろのヤツごと前のヤツを吹き飛ばせいい。そう判断したアニエーゼは今まで以上の力で叩きつけた。

ゴッ！！ と重たい激突音。

顔面への一撃。まともにくれば上条の顔が吹き飛び、ゼロにもその影響は及ぶだろう。

だが、

「今だ、ゼロっ！！」

上条は靴底を削るように急停止し、ゼロも足だけレプリロイド化させ、大きく跳躍する。

一歩先から迫ってくる攻撃ならば、一歩前に進まなければ当たらない。

そして、上条は握りしめた右の拳で『一歩前』の空間を思い切り殴り飛ばす。

バン！！ という風船が割れるような轟音。見えない巨大なシャボン玉を砕く感覚と共に、そこへ襲いかかるはずだった攻撃が跡形もなく吹き飛ばされていく。

「なっ！？」

その異常は素人である上条達よりも魔術師であるアニエーゼの方がよくわかるだろう。

同時にゼロが上からアニエーゼへと迫る。

アニエーゼは慌てて杖を思い切り振るう。

杖が大理石の柱へと直撃するが、

予期せぬ状況に満足な力を出す事も出来ず、

甲高い音と共にゼロの首が真横へ弾かれ空中で体勢が取れなくな

るが、

その頃には硬く拳を握りしめた上条がアニエーゼの懐に入っていた

ゴン！！ という鈍い打撃音。

アニエーゼⅡサンクティスの背中が後ろにあった大理石の柱へ叩きつけられた。

だが、アニエーゼはすぐに起き上がる。その目は戦う意志を失ってはいない。

「……オマエにも戦わなければならない理由があるみたいだな」

その瞳は今までゼロが出会い、戦ってきた者達と同じ目をしていった。

「ええ。私にだってそれぐらいあるんですよ」

お互いに睨みあう。

だが、

「ふん」

と、アニエーゼはつまらなそうに息を吐くと、唐突に杖の構えを解いた。あまつさえ、上条達から視線を外して辺りをゆっくりと見回す。

気がつけば、それはアニエーゼだけでなくゼロもだった。無防備なアニエーゼの隙を探るわけでもなく、辺りを見回している。

アニエーゼはそんな上条達をジロリと目玉だけを動かしてその顔を眺め、

「努力しようと頑張っている最中申し訳ありませんけど、もう終わっちゃったみたいですよ」

上条は一瞬何を言われたのか、理解できなかった。
そして、遅れて気づく。

『婚姻聖堂』は静まり返っている。上条達が動かないからだけで

はない。

外。

あれだけ激しかった戦いの音が全て消えていた。

それが示す意味は。

「どうも彼らが囷になっっている間に、あなたが司令塔たる私を倒して話を収めるつもりだったようですけど」

嘲り、罵り、最後に一つ哀れんで、

「あなた方の描いた幻想ようそうより、あっさりコトは終わっちまったようですね」

上条もゼロも黙ってその言葉を聞いていた。

呼吸すら忘れて、聞き入っていた。

握っていた拳を開く。戦うべき理由が消失する。

「ああ、そうだな」

最後に上条は絶対の自信と共に告げる。

「その通りだ。お前の幻想は終わっちまったよ、アニエーゼⅡサンクティス」

は？ と彼女が眉をひそめた瞬間、

バン！！ と上条達の背後で『婚姻聖堂』の両開きの扉が勢い良く開け放たれた。

そこにはいたのは見慣れた自分の部下たちではなく、イギリス清教のステイルⅡマグヌスと禁書目録、天草式十字凄教の建宮齋字と彼に抱きあげられたオルソラⅡアキナス、そして建宮の仲間達。

それともう一つ。

オレンジ色の人の形をした巨大な化け物が佇んでいる。

『イノケンティウス魔女狩りの王』

ステイルの切り札にして、摂氏三千度を超す炎の怪物。発動したが最後、爆発と再生を繰り返し、いかなる攻撃も障害物も焼き払い溶け落として殲滅する、好戦攻撃術式である。

かつて、上条当麻も対峙したことのある術式である。

が、この魔女狩りの王はその時とは明らかに違う。炎の密度も威圧感も通常よりも比べ物にならないほど強い。

「使用枚数は四千三百枚。使用枚数は大した事はないが……いや、天草式ってのは馬鹿にできないね。ルーンのカードの配置を使ってさらに大きな図形を描き、その図形をもって敷地全景の魔術的変質させ、このオルソラ教会そのものを一個の巨大な魔法陣に組み替えるなんて。こういった小細工は、僕には学びきれなさそうだ」

ごうごうと、勢い良く燃え上がる炎の塊を自慢げに眺め、

「皆にはカードの配置を手伝ってもらった。ま、と言っても元々完成寸前だったジグゾーパズルに残りのピースをはめ込むようなものだ。しかし、君の部下達は厄介だったね。そのゼロがいなければ、もう少し時間がかかっていたと思うよ」

大きく開け放たれた扉の向こうの景色。

そこには魔術の炎がくすぶり、黒い修道服のシスター達が覆いかぶさるように倒れている。

彼女達の体が炭化したり、火傷しているようには見えない。

何度も聞こえた爆発音は魔女狩りの王が起こしたものだのだろう。空気を押し出す衝撃波の壁を作ってシスター達をまとめてなぎ払ったのだ。

倒れている者は気絶しているだけらしい。

やられたシスターの数はせいぜい全体の五分之一ぐらいのはずだが、武器を手に歯ざしりしている。魔女狩りの王の破壊力を理解しているのだろう。

アニーゼは油断なく司教杖を構えたまま叫ぶ。

「何をやってちゃってますか！！数の上ならまだ私達の方が断然多いんです！まとめて潰しにかかりゃあこんなヤツら、取るに足らねえ相手なんですよ！！」

だが、シスター達は動かない。

数で押せば必ず潰せるはずなのに、そんな事はわかっているはず

なのに。

「何を……!？」

アニエーゼは当たり前前の事がわからない部下を怒鳴ろうとするが、彼女自身も気づいていた。

不審。

シスター達は、それが理論的に正しい事を知りながら、それを信じる事が出来ないのだ。争うべきか逃げるべきか、彼女達の心は揺らぐ天秤を見つめ続けている。誰か一人でも動けば集団心理が働いて流れが変わるだろう。

「まったく、この程度か。使えんな」

不意にアニエーゼの背後から声が響く。

そこには二人のシスターがいた。

二人の顔には外にいる者達とは違い、迷いが感じられなかった。

「お前達、アイツらに攻撃しちまいなさい！」

だから、アニエーゼは命令した。なぜそんな所にこの二人がいるのかなど考えもせずに。

次の瞬間、

アニエーゼの体ははるか後方の聖堂の壁に叩きつけられていた。

「がっ…はっ……。な、にを……!？」

アニエーゼの意識が遠のく。

薄れゆく意識の中で思い出す。

自分の部隊の中にこんな二人はいなかった事に。

「テメェら、何してやがる！」

急な事に全員が驚愕している中で、真っ先に上条が叫んだ。

「なに。役に立たないので退場してもらったまでだよ」

「キキッ! 殺さなかったただけマシだろう？」

上条は無意識の内に、一步下がってしまう

その二人の目は人間のものとは思えなかった。

「何者だい、君達」

ステイルの問いにもクツクツ と不気味に笑うだけで答えよう
としない。

外にいるシスター達は仲間の姿をした者が、自分達のリーダーを
攻撃した事に戸惑っているようだった。

「ほとんどの者達は初めましてだが。……久しぶりだな、伝説の英
雄殿」

ゼロの顔が一層険しくなる。

「わからないか？ なら見せてやるよ」
瞬間、

二人のシスターの姿がぐにやりとまるで蠟のように溶けていく。
同時に何かがそこから姿を現す。

片方はジャッカルの姿、もう片方は猿の姿をしていた。

「オマエ達は!!」

そこにいたのはゼロが元の世界で戦い、倒した相手。

アヌビステップ・ネクロマンセスとハヌマシーンだった。

力と仲間（後書き）

遅くなつてすいませんでした。
法の書編、次で終わらせるつもりです。

共に、闘う『仲間』を（前書き）

かなり長めになっていますが、どうか最後まで読んでいただけたら、幸いです。

途中で「もういいや」とか思われない事を祈ります。

祈ってもどうしようもありませんが（自業自得ですし）。

共に、闘う『仲間』を

かつて、ゼロが戦い、倒したレプリロイド。

すなわち、『ゼロの世界』の住人。

ジャッカル型のレプリロイド、アヌビステップ・ネクロマンセスとゼロ達より少し小柄な白い猿型のレプリロイド、ハヌマシーン。

その二体が今、ゼロ達の目の前にいる。

「オマエ達、何故ここにいる!？」

ゼロは現れた二体のレプリロイドに向かって叫ぶ。

その顔は今まで見せたどんな顔よりも狼狽していた。

「ゼロ、アイツらの事を知ってるのか？」

ゼロ以外の者には今の状況がまったく理解できない。ただただ、呆然としている。

人だと思っていたモノが、異形の存在へと変化したのだ。当然の反応だろう。

「……………れろ」

「え？」

何かをゼロが呟く。

「今すぐここから離れろ！」

ゼロが叫んだ瞬間にはソレは起きていた。

前方から上条達へと、巨大な炎の塊が迫って来る。

よく見ると、その炎の中心にハヌマシーンの姿がある。ハヌマシーンが炎を纏って、突進してきたのだ。

あっという間に、上条達のすぐ近くにまで、巨大な炎が迫る。

その先には上条とインデックスがいた。

「ちいっ！」

それにいち早く反応したのは、ゼロでも上条でもなく、ステイルだった。

天草式の技術により、普段以上に凶悪になっている魔女狩りの王

イノケンティウス

の両手を前に上条とインデックスの前に突き出す。

ドゴン！！ と大きな爆音が響く。

爆発の煙が晴れた時、すでにハヌマシーンは元いた場所にまで下がっていた。

衝突した瞬間に、すぐに後ろへ跳び、爆風を回避したのだ。

「人間の割にはなかなかやりますね」

「君のような輩に褒められても嬉しくはないんだが」

忌々しげに、吸っていた煙草を噛みちぎる。

今の一撃できめられなかったのが悔しかったのだろう。だが、その顔はすぐに別の表情へと変わる。

通常、イノケンティウス魔女狩りの王は破壊されても、すぐに再生し、再び敵へと攻撃を加える。それがイノケンティウス魔女狩りの王の特徴である。

が、ハヌマシーンを止めた際に、起きた爆発で吹き飛んだ両手が何故か、再生していなかった。

「どういう事だ！？」

ステイルだけでなく、イノケンティウス魔女狩りの王の能力を知る者全員が驚愕する。

手だけでなく、イノケンティウス魔女狩りの王の体全体がだんだんと小さくなりつつあった。

「もしかしたら、ルーンを守ってる連中に何かあったかもしれないんだよ」

このタイミングでこんな状態になるという事は、ルーンのカードの番をしていた天草式の者達に何かあった可能性が高い。

それを想像した建宮は表情を曇らせる。

「その炎の巨人は厄介そうだったんでな、先に手を打たせてもらったまでよ」

アヌビステップはその体を地上から数メートルほど浮かせて、空中から見下ろしながら、言い放った。

「あいつらがそう簡単にくたばるわけねえだろ！」

建宮が今にもアヌビステップへと跳びかかりそうな勢いで、アヌビステップを睨む。

「もう一体、いるという事か」

ゼロには一体のレプリロイドの姿が浮かんでいた。

今日の前にいる二体のレプリロイドは倒した後、強化されて復活した事がある。そして、この二体と同じように強化されて甦った事のあるレプリロイドがもう一体いた。

「その様子だとばれてしまったようだな」

もう隠す気もないのだろう。

それとも隠そうが隠すまいが同じと考えているのか。

あっさりとばらすアヌビステップ。

「あんな奴らがもう一体いるのか？」

「おそらく、氷の力を使うヘラジカ型のレプリロイドがいるはずだ」
そのレプリロイドの名はブリザック・スタグロフ。

ゼロがかつて戦った相手の一人。

氷を使い、ゼロを苦しめた相手の一人。

「これでわかっただろう。貴様達に勝ち目はない」

アヌビステップが告げる。

それはさながら死の宣告のようだった。

アニエーゼ部隊との戦闘ですでに満身創痍な上条達。

切り札であった魔女狩りの王も満足に使えない。
イノケンティウス

救いと言えば、トップのアニエーゼがやられた事により、アニエー

ゼ部隊のシスター達が戦意喪失していることぐらいだろう。

アヌビステップの言うとおり、すでに勝ち目はないに等しい。

上条達の心に絶望が広がって行く。

その様子をアヌビステップは満足そうに眺めながら、

「それでは幻想殺しと禁書目録を渡してもらおう」
イマジンブレイカー

瞬間、ゼロが射抜くようにアヌビステップを睨みつけた。

その眼光に一瞬だがアヌビステップは怯んでしまう。

「そうか。この二人が狙いだっただのか」

ゼロの声は静かに響く。

まるで地の底から響くようでありながら、恐ろしいほど静かに。

「この二人はオレの大切な仲間だ。それを奪うと言うのなら――」

――

一歩前に出ながら、

「――ロックオン！」

姿を変えるゼロ。

かつて、強力なレプリロイドであるアヌビステップ達を葬った姿。一昔前、破壊神として恐れられた姿へと変わる。

「覚悟は良いんだろうな？」

「なぜ、再び邪魔をする。かつてもそうであった。だが、今度は貴様にその者達を守る理由などないはずだ！」

わずかに芽生えた恐怖を悟られまいと、アヌビステップは必死に叫ぶ。

「我々と共に来い、ゼロ。こちらこそが貴様の生きる道だ！」

手を前へと差し出すアヌビステップ。

だが、そんな言葉など聞こえてないかのように、ゼットセイバーを出し、強く握りしめるゼロ。

「確かに当麻達との付き合いなんて、まだ数える程度のものだ」

ゆっくりと一歩ずつアヌビステップとハヌマシンの方へ近づく。

「だが」

ハヌマシンのゼロへと炎を飛ばす。

「時間なんて関係ない。当麻とインデックスは大切な仲間だ！ならば、オレはアイツらを……助ける！」

ゼロは炎を切り裂く。わずかに火の粉がゼロの頬を掠め、頬が焦げるが気にしない。

そして、ゼロはセイバーを構え直す。

セイバーを構え、跳びかかろうとするゼロに、

「少し待ってくれないか？怒っているのは君だけじゃないんだ」

後ろから声が飛んできた。

少し小さくなりながらもなんとか魔女狩りの王を維持しているステイル。イノケンテイウス

その目には戦う意志が宿っている。

インデックスを守る。

それが彼の戦う理由。

インデックスを狙うというのなら、たとえどんな状況であろうとも、誰が相手であろうとも殺す。

それがステイルの定めた誓い。

だが、ステイルだけではない。

上条も、インデックスも、建宮も、他の天草式も。

もう誰も諦めるなんて考えは持っていない。

全員で戦って、勝利するために。

未知の敵との戦いを恐れる事はない。

「そうよな。俺達が諦めてどうするのよ」

誰に言う訳でもない。

建宮は独り言をもらす。

「『救われぬ者に救いの手を』それが我らの生き方なのよな!!」
今の神裂の魔法名でもあり、女教皇ブリエステスが示してくれた生き方。

救いの手を差し伸べる者が諦めるわけにはいかない。

誰に対して言ったわけでもない呟きが、天草式全員の心へと刻み込まれる。

この『世界』すら越えた技術によって作られた超常の科学との戦いが始まる。

「まさか、あんなのが出てくるとは」

ビルの上で戦いを見守る神裂の横で土御門が呟く。

その額には冷や汗が浮かんでいる。

土御門はゼロがこの平行世界パラレルワールドの存在である事を知っている。だが、
（……あれほどの力。まったく方向性ベクトルは違うが、おそらくこの世界の技術を超えている）

ゼロの世界において、人間が超能力を使う技術は生み出されてはいない。

土御門もそこまでは知らない。

だが、もし今、眼下で戦っている異形の存在が何体もいるのならば、この世界の科学技術だけではまだ対抗する事は難しいだろう。

「にゃー、ねーちん。どう思う？」

横にいるのは、魔術の世界で二十人もいない聖人。

その聖人から見て、あの怪物達の力はどうなのか、それを知りたい。

だが、土御門の呼びかけに神裂は答えない。

先ほどから、土御門の声に応えることなく、ひたすらに眼下の戦いを凝視している。

まるで、何かに悩んでいるかのように。何かに取りつかれたかのように。

その瞳は何を見極めようとしているのかはわからない。

だが、確かに何かを見ていた。

ゼロと上条、そして建宮を含めた数人の天草式が『婚姻聖堂』の中に残っていた。

聖堂の外にはすでにアニエーゼ部隊の姿は見えず、倒れていたアニエーゼもいつの間にかいなくなっている。

目を覚まして自力で離脱したか、あるいは仲間が運び出したのかはわからないが、すでに撤退したのだろう。

だが、ゼロ達にとってはありがたい。戦えない者がいるのは足枷にしかないからだ。

しかし、いなくなったシスター達と取って替わるかのように、聖堂の中には二種類の多くの『存在』があった。

一種類は人の形をしているが、その体はゴミや瓦礫、砂などから形作られており、動きはまるでゾンビのようである。もう一種類はハヌマシーンを小さくしたような小型の猿達で、そこかしこを跳び回っている。

両方とも、アヌビステップとハヌマシーンがそれぞれ生み出した兵士である。

大した力は持たないが、あまりにも数が多く、しかもアヌビステップ達がいる限り無尽蔵に生まれるため、かなり厄介なのだ。

それらを相手にしている上条と天草式。

建宮達、天草式はそれぞれ数人で陣を組み、お互いに助け合いながら雑兵達を蹴散らしている。一方、上条は天草式に守られながらも、敵の兵達を幻想殺^{イマジンプレイカー}して殴り飛ばして消滅させている。レプリロイドの存在とはこの世界においては超科学^{オーバーテクノロジー}と呼ばれる類のモノ。すなわち異能の力である。

異能の力ならば、たとえば神様の奇跡だろうとも消滅させる事のできる右手。

だが、そんな右手を持っていたとしても、上条当麻はただの高校生。二体の強力なレプリロイドの相手をする事は不可能。

ゆえに、ゼロは一人でアヌビステップとハヌマシーンの二体と激しい戦闘を繰り広げていた。

「ハアッ!!!」

ゼロがセイバーをハヌマシーンへと振う。

だが、それをハヌマシーンは後ろに跳んで避けると、今度はゼロのまわりに巨大な針が大量についた棺の半分だけがゼロの眼前に急

に現れる。

前だけではない。後ろにも横にも、ゼロを取り囲むように現れ、ゼロを押しつぶして一つの棺桶になろうとしているかのようにつんでいる。

アヌビステップが杖を上から下に振り下ろすと、それを合図に全ての棺が迫ってくる。しかも、速い。まさしく迫りくる壁だった。

そして、ドガン！！　と言う音と共にまわりにあった棺がゼロを一斉に押しつぶした。

だが、どの棺の中にもゼロの残骸は存在しない。

ゼロは上空にいた。

だが、それはゼロの跳躍力によるものではない。

リコイルロッド。

ゼロの武器の一つで、刺突武器だが、トンファーのように扱い、地面をそれで叩く押すことによって、普段よりも高く跳ぶ事が出来る。

そして、ゼロは空中で体勢を整え、セイバーを出すと、空気を蹴るようにして、アヌビステップへと一瞬で近づく。

ダブルジャンプ。

ゼロは空気を蹴って、空中でもう一度飛ぶ事が出来る。だが、さつき棺をかわす際にはあえてそれを使わずに上空へと上がった。上空でアヌビステップへと近づくために。

ゼロはセイバーに力を溜めて、放つ。

チャージセイバー。

その威力はシェリーのゴーレムすらも粉碎するほど。その一撃を容赦なく、アヌビステップへと叩きこむ。

「ぐあああッ！！」

アヌビステップは戦闘不能にはならないものの、ゼロの一撃でダメージを負う。

今の一撃で体のいたる所に傷ができていた。だが、戦えないほどではない。事実、アヌビステップはなおも武器である杖を構えている。

る。

ゼロがさらに追い打ちをかけようとする、
「くっくくく。ここまでうまくいくとはな」

アヌビステップは顔を歪めて笑う。

今まさに、危機であるというのに、まるで好機であるかのように。
そして、ゼロは気づく。

さっきまで攻撃してきていたハヌマシーンがまったく攻撃して来ない事に。

ゼロが後ろを振り返った時、その目に飛び込んできたのは天草式と上条へと襲いかかるハヌマシーンの姿だった。

ゼロがバスターショットを出すと同時に、上条達とゼロの間に、棺がいくつも現れ、その前にアヌビステップの作った大量の兵士達が立ち塞がる。

棺は先ほどのモノとは違い、針がついておらず、まるで壁のように立ち並んでいる。兵士達も動く気配はなく、ただそこに立っているだけ。

つまりは、

「オレを向こうに行かさないと壁、か」

アヌビステップを睨むと、彼は愉快そうに笑っていた。

「その通り。貴様がいなければ、奴らはハヌマシーンと戦う事など不可能！これで幻想殺しは我らのモノだ！」

アヌビステップの言葉にもゼロは表情を変えずにただ睨み続ける。

そして、静かに薄く微笑を浮かべた。

「何がおかしい？」

ゼロの予想とは違う態度にわずかに怒りを覚えるアヌビステップ。
そんな事はおかまいなしにゼロは笑っていた。

「アイツらをなめない方が良い」

「何だと？」

「仮にアイツらが倒せなくても、オレがオマエをさっさと倒して向こうに加勢に行けばいいだけだ」

堂々と言い切るゼロ。

その言葉に迷いはない。

上条や建宮達の力を信じているから。

それとも一つ。

「ならば貴様を倒して、我が奴らに死を与えてやろう！」

激昂したアヌビステップが襲いかかってくる。

ゼロもそれに対抗するためにセイバーを構えた。

「キキッ！あなた達にはここで死んでもらいます」

『婚姻聖堂』をいったん出て、かなりの数の敵の兵士達を片付けた天草式と上条の前に、ゼロが相手にしていたはずのハヌマシーンが現れる。

その手には、上条達の身長よりも長い赤い棒が握られている。中国では棍とも呼ばれる武器である。実際の棍は日本における棒術で使用する棒よりも太くなっているが、ハヌマシンの持つものはだいたい棒と棍の中間のような太さをしている。

猿の姿をしたハヌマシーンが持っている、さながら西遊記の孫悟空の持つ如意棒のようであった。

「まさか、その棒、伸びたりしねえよな？」

「残念ながらこれに長さを変える機能はついていません。ですが」
ハヌマシンはぶんぶん自分のまわりでその棒を振り回す。
空気を切り裂くような音が上条達の耳にも届く。

それはそのまま棒を振り回す速度が恐ろしく速い事を示す。

「これに当たれば、あなた達人間なんて、すぐに死んでしまいますから」

その言葉を皮切りに、ハヌマシンは兵士達と戦闘を行っていた

天草式の一人へと兵士達をかくぐりながら接近する。

兵士達を相手にしていた事と、ハヌマシンの小柄な体格、速さが災いし、天草式の男性は近付かれた事にすら気づかない。

そして、思いっきり振われた棒をもろに腹に受けてしまう。

その天草式の男は、戦闘前から対衝撃術式を自分に発動していたが、それでも攻撃による衝撃を抑えきれず吹き飛ばされ、地面へと倒れ伏してしまう。

「おや、死にませんでしたか。普通ならば、腹がえぐれているはずなんです。人間のくせに本当にここの奴らは厄介ですね」

めんどくさそうにため息をつくハヌマシン。

その目は敵を見る目ではない。

自分にまわりつくハエを見るのと同じ目。ハヌマシンにとって、上条達は敵にすらならないと思っているということだ。

「なめてんじゃねえのよ!!」

建宮を中心に天草式の面々が陣を組みながら、ハヌマシンへと襲いかかる。

が、その前にハヌマシンが生み出した小猿達が立ち塞がる。

これぐらいならば敵ではない、と建宮達が斬りかかり、

子猿達が建宮達の目の前で爆発した。

「建宮ッ!!」

上条が叫ぶが応答はない。

子猿達はハヌマシンの意思一つで爆弾にもなる。つまり、自爆させたのだ。

爆発の煙がはれると、地に伏した建宮達が現れる。

息はしているようだが、すでにボロボロで立ちあがることすらおぼつかない状況だった。

イメージブレイカー

「さて、それでは幻想殺し。一緒に来てもらいましょうか。言っておきますが、これ以上抵抗するならば、両足を壊して連れていく事

になるので」

絶体絶命。

その言葉が上条の頭をよぎる。

諦める気はない。

だが、逆転の手が見つからない。

上条の右手で触れれば、兵士達同様にハヌマシーンも倒せるかもしれない。

だが、上条では向こうの速度についていけない。回避に専念して、三回に一回ほどかわすのがせいぜいと言ったところだろう。右手でぶん殴るなんて真似は出来ない。

(せめて少しでも良いから隙があれば……)

勝ち目を見いだせない上条。焦りばかりが先行してしまう。

「少々面倒ですが、その足を壊した方が早そうですね」

そんな上条にしびれを切らしたハヌマシンは棒を構えて、地面を蹴る。

上条が反応する暇もなく、上条に近づき、

その足へと、炎を纏わせた自らの武器を振るった。

ステイルは数人の天草式と共に、ルーンの配置場所へと向かっていった。

ゼロの話によれば、

『もう一人の敵は炎に弱い。オマエの使っていた炎の剣程度では大したダメージは与えられないだろうが、この巨人ならば倒せるかもしれない』

そのためにできる事。

天草式とインデックスの力を借りて、この教会に貼り巡らされた

魔法陣の破壊された部分に、再びルーンを貼る。

そうすれば、魔女狩りの王の力が戻り、敵を倒せるかもしれない。

ステイル達が勝つためにはその方法しかなかった。

ステイル達を感じる破壊されたポイントは二か所。

もう片方にはすでに別の天草式が向かっている。

インデックスとオルソラもそちらの部隊と共にいる。

ステイルがあえて、インデックスと離れて、別々のルーンを確認に言った理由。

魔術図書館である禁書目録がいれば、ステイルがいなくてもルーンを的確に貼れるというのもあるが、それだけではない。

おそらく、この先にいる。

ステイル達が向かう先の方が後に破壊されたであろう場所だったからだ。つまり、敵がいる可能性が高い。

ならば、

(あの子を危険な場所に連れて行くわけにはいかない)

インデックスも必要悪の教会に所属するプロの魔術師だ。戦いにおける覚悟もある。

だが、それでもできる事ならば、インデックスを戦いには巻き込みたくはなかった。

「いた！」

天草式の誰かが叫ぶ。

ルーンを配置した場所。

倒れ伏した天草式の中心に青い鹿の姿をした化け物が立っていた。

「むふー。援軍かー？」

ステイルは立ち止まり、口の端で煙草を揺らしながら、
「君かい？ 僕の用意したルーンを壊してくれたのは」

「このカードを破壊するのが俺の役目だー。それを邪魔するならば潰す！」

いきなり大きく跳びあがるブリザック。

鈍重そうな見た目からは考えられないほどの跳躍力だった。

ステイル達が急いでその場から離れると同時に、上からまるでミサイルのように、ブリザックが降ってくる。

ドオン！！ という音と共に地面が大きく陥没し、煙が舞う。

ステイルはルーンを天草式に任せ、炎剣で攻撃しようとし、

気づいた。

ブリザックが落ちてきた事により生じた煙が触れた地面が、炎剣が発する光をわずかにだが反射させている事に。

ステイルは急いで炎剣を爆発させ、その爆風で煙を吹き飛ばす。

「うわあああっ!?!」

天草式の一人が声をあげる。

そこには足が凍りつき、地面に固定されて動けなくなった天草式の男の姿があった。

ステイルが危惧したとおり、ブリザックが起こした煙はただの粉塵ではなく、ブリザックが発生させた冷氣。それに触れた物は、一瞬で凍りついてしまう。ステイルが炎剣で吹き飛ばしたのはタイミングも、熱と冷氣という観点から見ても最適であったと言える。

ステイルは急いで、足の凍ってしまった天草式の下へ向かうと、

「多少の火傷は我慢しろ」

生み出した炎で急いで、氷を溶かす。

敵がすぐ近くにいた状況では、火傷をさせずに氷だけを溶かすなんて真似は出来るわけもなく、少しだが天草式の男も火傷してしまう。

だが、あのまま動けなければ格好の餌食となっていただろう。

動けるようになった男は急いで他の天草式の下に行き、ルーンを貼り始める。

ここからは炎を使えるステイルがこちらと向こうの部隊がルーンを貼り終えるまで、一人でブリザックを引きつけないければならない。相手の力を考慮し、天草式の現在の状況を考えて結果、これが最適

という事になったのだ。

（まったく、僕の負担が大きすぎやしないかい？）

愚痴を言っている暇もない。すぐに新しい炎剣を生み出す。ルーンが貼り終わって、向こうから連絡があるまで一体何分かかるか。

最悪、十分以上、一人であの化け物を相手にしなくてはならない。助けを求める事は出来ない。だが、

（やってやる。それであの子を守るのならば！）

ステイルは煙の中から姿を見せたブリザックへと炎剣を振るう。摂氏三千度を誇る一撃必殺の剣である己の武器を叩きつけて、

「むふー。この程度かい？」

あっさりと受け止められてしまう。

炎剣を止めた手は少し焦げつつあったが、大したダメージになっているようには見えない。一撃必殺を誇る炎剣も、ブリザックには脅威にはならない。

急いで炎剣を手放し、ブリザックから距離を取るステイル。ブリザックの手の中で炎剣は形を失い、虚空へと消える。

あんなにも簡単に炎剣を止められてしまったのは、そんなに時間を稼ぐ事は出来ない。

「今度はこちらから行くぞー」

ブリザックは腕をステイルの方へと向け、その手から強力な冷たい風を出してくる。

腕で目を庇いながら、何とかその場に踏ん張るステイル。

だが、ステイルは拍子抜けしたようだった。

確かに、風は強いのだが、ステイルへとダメージを与えられるようなモノではない。

これならば、とステイルが反撃しようとして、

ステイルの脇腹を大きな氷柱がかすめた。

「ぐっ！？」

かすり傷ながら、急な痛みに踏ん張りがきかずに、後ろへと飛ば

され建物の壁へ激突するステイル。

目を開ければ、他にもいくつもの巨大な氷柱がステイルへと迫っていた。

ステイルは、

「Ash To Ash
灰は灰に」

右手に炎剣を生み出し、

「Dust Dust
塵は塵に」

左手に今度は青白く光る炎剣をもう一本生み出し、

「Squeamish Blood
吸血殺しの紅十字！」

迫りくる氷柱をいっぺんに引き裂くように左右から二本の巨大な炎剣を振るう。

その熱量にステイルへと達する前に溶け落ちる氷柱。

同時に、風も止み、自由に動けるようになった瞬間、急いで転がるようにその場から飛び退くステイル。

瞬間、

上からまたもミサイルのように落ちてくるブリザック。

「むふー。意外とやるなー」

ステイルは苦虫を噛み潰したような顔になる。

インケンティウス
切り札が使えず、目の前の敵に防戦一方。

これをゼロは昔、一人で倒したと言う。

「まったく、こんなのを相手にするなんて、一体どういう世界に住んでいたんだい、彼は」

インデックスと共にいると聞いたときに生まれた嫉妬のような感情とは別に、今度は畏怖と畏敬の念が生まれる。

プロの魔術師達すら蹴散らすほどの力を持つ化け物達を、倒したという男。

イマジンプレイヤー
幻想殺し同様に、もしゼロが科学サイドが隠し持つ力の一つだとすれば、

（まったく。学園都市もとんでもないモノを飼っているね）

聖人クラスでないと、倒せないのではないだろうかという気にな

つてすらくる。

瞬間、

「完了しました!!」

天草式からの合図が飛んでくる。

「やっとか。待ちくたびれたよ」

魔術師を蹴散らすほどの化け物だとしても、ステイルは負ける気はないし、負けられない。

ゼロが勝って見せたというのならば、

「僕に勝てない訳ないだろう」

ステイルは呼ぶ。

「―――――世界を構築する五大元素の一つ、偉大なる始まりの炎よ」

彼の持つ絶対にして、最強の力を。

「それは生命を育む恵みの光にして、邪悪を罰する裁きの光なり。

それは穏やかな幸福を満たすと同時、冷たき闇を滅する凍える不幸なり。

その名は炎、その役は剣。

顕現せよ、我が身を喰らいて力と為せッ!!」

彼が力強く叫ぶと同時に、

巨大な炎の塊が現れ、人の姿を形作っていく。

魔女狩りの王が再び姿を現す。

「何だー!?!」

初めて焦りの声をあげるブリザック。

「そういえば、君にはまだ名乗っていなかったね」ステイルは新し

い煙草をくわえながら、「僕はステイルⅡマグヌス。イギリス清教

第零聖堂区必要悪の教会所属の魔術師だ」

薄く、冷たい微笑を浮かべながら、

「Fortis931。魔法名、と言っても君には通じなさそうだけど、これから殺すからには名乗らなくちゃね」

最強。

それが魔法名に込めたステイルの思い。

「行くぞ、魔女狩りの王！我が名が最強である理由をここに証明しろ！！」

炎を纏ったハヌマシンの棒が、上条に反応する間もなく振り下ろされ、

上条が反応する間もなく、その棒が弾かれた。

「……え？」

一瞬遅れて、何が起こったのか上条の頭が理解した時、目の前にはポニーテールにしているにもかかわらず腰まで届くほど長い髪が舞っていた。

「あっ……」

誰の眩きだったのだろう。

喜びにも悲しみにも憤りにも聞こえる小さな眩き。

爆発で動かす事の出来ない体にもかかわらず、建宮達は必死にこちらを見ている。

正確には上条を、ではない。

上条の目の前に立っている人物。

神裂火織を。

「……どなたですか？」

距離を取りながら、怪訝そうに尋ねるハヌマシン。

今の一撃は、全力とはいかずとも、上条の両足を砕くつもりだった。その威力は普通の人間に抑えられるものではない。

「イギリス清教必要悪の教会所属の魔術師、神裂火織と申します」
神裂は倒れている天草式へと目を向ける。

上条からはかつての仲間が倒れた姿を見る神裂の表情は窺いしれない。だが、その背中からは激しい怒りが感じられた。

「私の大切な仲間をここまで傷つけたのですから、覚悟はできているでしょう」

話をする気はない、というように神裂はすぐに臨戦態勢へと移る。
ハヌマシーンもそれに応えるかのように、棒を構える。

「Salver000。私の魔法名です。言っておきますが、私はあなたを許す気はありませんよ」

ヒュッ！ と風を切る音が聞こえたかと思うと、二人の武器がぶつかりあっていた。

上条は急いで、建宮達の下へと向かう。

「建宮、大丈夫か!？」

上条は問いかけるが、返事はない。

他の天草式も同じ。

食い入る様に、神裂とハヌマシーンの戦いを見ている。

上条は自分達のために戦ってくれる事が嬉しいのだろうと思ったが、

「ちくしょう……」

建宮は小さく吐き捨てた。

喜びでも、悲しみでも、怒りでもない。そんなものは感じない。
感じるのはただ圧倒的なまでの無力感。

建宮の口から洩れたのはそんな自分の無力を呪う言葉だった。

「俺達は一体今まで何をやっていたのよな」

諦めたわけではない。むしろ聖人という圧倒的な力を持つ神裂が来たのだ。これ以上ないくらいの希望がふってきて、それを喜ばないわけがない。だが、天草式の者達は誰一人として、立ちあがる事が出来ない。彼らの目の前で展開される戦闘。神に愛された人間と、人外の化け物の別次元の戦い。

「あの方に居場所をお返しするため必死に努力してきたのに、結局このザマだ。地に倒れ伏し、あの方に助けられ、あの方を助ける事は出来ない」

悔しそうに唇を噛む建宮。他の天草式達も同じような顔をしていた。

そんな様子を見て上条は、

「そんなんで努力したって言えるのかよ」

静かに告げた。

その言葉に顔をあげる建宮。

「神裂のいない所で頑張ってるって言って、何で神裂が来たら、その努力を放棄しちゃうんだよ！折角、目の前にアイツがいるんだから、アイツに直に見せてやればいいだけじゃねえか！」

すぐ近くで行われている神裂とハヌマシンの戦闘はずっと爆音をあげている。

だが、そんな中でも上条の声は天草式達の耳へと届く。

「力はあるんだ。お前らにないのはそれを見せる勇氣だ！アイツはお前達の大切な仲間なんだろう？だったら信じろよ！アイツと共に戦えるって胸を張って、アイツの隣に並べばいいんだ！そうすれば、アイツだってお前達を信じられる。アイツに救われるだけになってんじゃないねえ！アイツを救いたいんだろ！！」

救われぬ者に救いの手^{o o o}を。

神裂の魔法名にして、天草式の目指すもの。

「俺は行くぞ。神裂を助けに」

上条は立ちあがって、神裂とハヌマシンの戦闘を睨む。その目

には揺らぐ事のない決意が宿っている。

それに合わせて、倒れていた天草式達もまたゆっくりと立ちあがる。

近くに落ちていた自分達の武器を手にとると、顔をあげる。

「確かにお前さんの言う通りよな」

建宮には目の前にいる上条が太陽よりも眩しく見える。

ただの高校生でありながら、自分達よりもはるかに強く、堅い意志を持つ少年が何よりも眩しい。

今まで、天草式は待つばかりだった。

神裂のためと言いながら、助けを求める者達を助けていた。

だが、それは違った。

神裂のためではなく、自分達のため。

神裂に本気で自分達を見てもらいたかったためにやっていた事。

だが、一度として、神裂に自ら伝えようとはしなかった。自分達の思いも、何も伝えようとはしなかった。

「なあ、一つ答えちゃくんねえか？まだ、俺達は間に合うと思うか？」

そんな建宮の問いに、上条は絶対の自信を持って、

「まだ終わっちゃいねえ。勝手に間に合わないって諦めるには早すぎるだろ」

建宮は笑って、

「テメエら、行くぞ！我らが女教皇様プリエステスの下へ！！」

本来、あるべき場所へ。

かつて、一度は失った場所を取り戻すために。

神裂は焦っていた。

目の前の敵よりも自分の能力が劣っているとは思わない。むしろ、自分の方が勝っているくらいだ。

だが、均衡を崩す事が出来ない。

相手は能力的には劣っていないながらも、その場その場で最適の戦い方をする。それは才能ではない。経験に裏打ちされた力。

相手の戦闘経験はおそらくはるかに神裂より上であろう事が、容易に想像できた。

いったん、ハヌマシーンから距離を取る神裂。

すでに、息はあがり、体力は限界に近付いている。唯閃。

神裂の切り札であり、まさしく必殺技というにふさわしい技。

目にも止まらぬ速さで繰り出される抜刀術による一撃必殺の技。

それをハヌマシーンは紙一重の所でかわすか、あえてある程度のダメージを受けるようなやり方で直撃を避けている。

だが、それが神裂へと大きなダメージを与えていた。

そもそも『唯閃』とは聖人の力を全開にして放つ技。だが、全開の聖人の力に生身の体は耐える事が出来ない。ゆえに一瞬のみ、聖人の力を使う事のできる抜刀術という形になったのだ。

しかし、ハヌマシーンはその唯閃を回避しているため、何度も発動する内に、神裂の方が限界に達してしまったのだ。

「先ほどの方々と同じ人間とは思えぬ力ですね」

さすがのハヌマシーンにも大きなダメージと疲労の痕がうかがえる。だが、それでも神裂よりかは幾分マシに見えた。

「しかし、それもこれで終わりです」

急いで身構える神裂。

だが、ソレは地面から急に出てきた。

ハヌマシーンの生み出す小猿。

前からの攻撃に備えるため、前方に重心を傾けていた神裂はわずかに反応が追いつかない。

そして、小猿の体が淡く発光し、

ドン！！ と、走ってきた上条に横合いから殴り飛ばされた。

上条の右手に触れ、爆発する前に消滅する小猿。

上条は笑みを浮かべながら、

「ぎりぎり間に合ったな。大丈夫か？」

いつものように話しかけてくる。

そして、

「女教皇様っ！！」
ブリエステス

その後ろからは倒れていた天草式の面々が走ってくる。

その姿に安堵しながらも、苦い顔をする神裂。

どんな顔をして彼らと会えばいいのだろうか。

だが、

『分かっているはずだ。どうすればいいのかなんて』
分かっている。

どうするべきか、どうすれば彼らを救えるのか。

（救われぬ者を救う？ 私は救えていないじゃないですか！！）

彼女の仲間。

彼らの救いを求める声にかつては気づけなかった。

自分の行いがどれだけ彼らを苦しめていたのかわからなかった。

だが、気づいた。今ならばわかる。

ならば、やる事は一つ。

彼らを『救う』には、本当の『仲間』であるためには、どうすればいいのか。

「……てください」

最初なんて言っているのか、建宮達にはわからなかった。

いや、きつとわかっていた。

だが、それを理解するまでに時間がかかった。

「あなた達の力を貸してください！」

瞬間、昨日まで共に戦っていた『仲間』のように陣形を組む天草

式と神裂。

その目に誰一人として涙を浮かべる事も、嗚咽を漏らす事もない。今までならば、ただ認められた、その事だけで歓喜していただろう。

だが、もうそんな事はしない。

そこが自分達の居場所。最初から、ずっと。

認められるために力をつけたんじゃない。神裂を助けるためにつけた力。

それを使う時が来たというだけの話。

「行きますっ！！」

真の天草式の戦いが始まる。

「はあっ！！」

ゼロはバスターショットを構え、放つがアヌビステップの杖に弾かれてしまう。

しかし、すぐにゼロはアヌビステップへ肉薄すると、その体をセイバーで斬りつける。

ぐうっ！ と苦悶の声をあげるアヌビステップ。

その状況を見れば、どちらが優勢かは一目瞭然だった。

「さすがは、伝説の破壊神と言った所か。私ではかないそうにはないな」

しかし、そんな状況でもあっさりと、自分の敗北を宣言するアヌビステップ。

最初からゼロと戦うのが目的ではないからだろう。アヌビステップは時間稼ぎであって、今この場でゼロを本気で倒す気はないのだ。事実、先ほどから彼が行っているのはゼロへの攻撃よりもむしろ

ゼロの足止めである。

「だが、どうやら目的は果たしたようだな」

アヌビステップはゼロの後ろ側にある『婚姻聖堂』の扉を見ている。
た。

ゼロは聖堂の両開きの扉の方を振り向く。

そこには二体の『レプリロイド』が立っていた。

上条達が相手をしていたはずのハヌマシーン、ステイル達が相手をしていたはずのブリザック。

「我を倒して仲間の下へと行く前に、どうやら先に仲間がやられてしまったようだな」

心底愉快そうに笑うアヌビステップ。

三体同時に攻撃して、ゼロを殺せるよう、杖を構える。

ゼロはそれに、構えもせず、セイバーを握ったまま俯いていた。
アヌビステップはその姿を見ると、

「これで終焉だ！」

杖をゼロへと飛ばそうとする。

だが、後ろの二体は動かず、佇んだままだった。

「貴様達、何をしている？」

アヌビステップが問いかけた瞬間、

二体のレプリロイドは床に倒れ、ドゴォンッ！！ と激しい音を

響かせて、爆散した。

「何だと!？」

あまりにも予想外の事態に思考が追いつかないアヌビステップ。
狼狽するその目に今度は、立ち上る煙の向こう側からこちらへと
歩いてくる者達の姿が写る。

標的である上条とインデックス、そしてステイルや神裂達、天草
式。

「そうだな、確かに終焉だ」ゼロはゼットセイバーを強く握りしめ、

「こいつで終わりだ」

一気に跳んで、アヌビステップとの距離を縮める。

アヌビステップは今使える唯一の武器である杖をゼロの方へと最大の力を込めて飛ばす。

ゼロはそれをセイバーで弾くが、込められた力に耐え切れず、セイバーも弾かれて、手から離れてしまう。

だが、ゼロはそのままもう一度空中で跳ぶと、後ろ手に隠していたバスターを構える。

最初から二段構え。

そう気づいた時にはもう遅かった。

アヌビステップにあれを防ぐ手はない。

そして、バスターから巨大なエネルギー弾が放たれる。

チャージショット。

セイバーと同じ、エネルギーを溜める事で強力な一撃を生み出す技。

それが、アヌビステップへと迫る。

死への足音が聞こえる。

残されたわずかな時間の中で思ったのは、敗北の理由。

だが、わからない。

なぜ、強力な力を持つレプリロイドが人間に負けたのか理解できない。

そして、その答えを見つける事の出来ないまま、

アヌビステップの体はエネルギー弾によって消し飛ばされた。

「来たのか」

ゼロは無表情で神裂へと話しかける。

いつもと変わらぬ仏頂面だったが、その声はわずかに嬉しそうだった。

「私の『仲間』を取り戻しに来ました」

神裂は微笑みながら返す。

もう仏頂面に努めなくても良い。

今ぐらいいは自分の気持ちに素直に従ったって良いだろう。

「ありがとうございます」

神裂はゼロへと頭を下げる。

その行動に、上条や天草式はもちろんの事、ステイルすらも驚いていた。

「別にオレは何もしていない。オマエが自分で頑張った結果だ」

ですが、と神裂は反論しようとするが、

その前に変身を解除したゼロが膝から崩れ落ちるように倒れた。

急いで駆け寄る神裂達。

だが、ゼロは心地よさそうに寝息をたてていた。

それを確認すると同時に、上条もまた気を失う。ゼロの様子を見て安心した瞬間に今までのダメージが押し寄せたのだろう。こちらも静かに寝息をたてていた。

「なんかこうしていると二人とも兄弟みたいかも」

楽しそうに言うインデックス。

帰ってきた彼女の日常。

そして、その様子を、嬉しそうに見守るステイル。

「では、学園都市へと運びましょう」

ブリエステス

「女教皇様。回復魔術による治療は良いんですか？」

まだおずおずといった感じで、天草式の一人が尋ねる。

神裂は上条を見ながら、

「彼に魔術による回復は効果がありません。このまま病院へ連れていくしかないんです」

答えてもらえた事自体が嬉しかったのだろう。その顔には隠しきれない歓喜の表情が現れている。

神裂は気にせず、今度はゼロを見ながら、

「彼は学園都市側からの要請で、回復魔術をかけるなどの事です」
今度の答えには、天草式だけでなくステイルも怪訝そうな顔を
する。

いくら学園都市の住人とはいえ、治療もしなくていいとは一体ど
ういう事なのか。

「神裂、ソイツは一体何者なんだい？」

あの化け物達が知っていた事。

あの化け物達を知っていた事。

あの化け物達と一人で渡り合っていた事。

すべてが普通ならばありえないような事ばかり。

ステイルは耐え切れず、聞いてしまう。

そして聞いてから、しまった、という顔を浮かべた。

ここにはインデックスもいる。彼女はゼロを気にいつている。も
しかしたら、神裂の答えが彼女の日常を壊してしまうかもしれない。
ステイルは今すぐにでも数秒前の自分を焼き殺したかった。

神裂は一瞬だけ目を伏せると、

「……私達の、恩人ですよ」

ステイルを見ながら、はっきりと断言した。

共に、闘う『仲間』を（後書き）

最悪です。

これで『法の書』編終わらせると言っておきながら、終わってない。少しだけど、まだ残ってます。

次に出してから、別の話につなげようと思うので、許してください。次で本当に最後です。

その後の行方

そこは暗闇だった。

光は一切なく、そんな中に一人ポツンと立っている。

いや、正確には立っているのか、それとも浮かんでいるのかすらわからない。

光はないのに自分の体は視認できる。そんな状況だった。

もしも彼が人間だったならばこれがどういうモノか答えられただろう。

だが、彼はずっとレプリロイドとして生きてきた。人間に起こる出来事は理解できない。

そんな暗闇の中に、ボウ　と淡く光る小さな光源が現れる。

暖かく、どこか懐かしい感じのする小さな光。

彼は引き寄せられるようにそちらへと向かう。

近づくにつれて、わずかにだが大きくなる光。

その光の下にたどり着いた時、その光の大きさは最初米粒見たいだった物が、彼の顔と同じくらいの大きさになっていた。

『久しぶりだね。まさか君にこうしてまた会う事が出来るなんて』

光から声が漏れる。

彼はその声にどこか懐かしさを感じた。だが、うまく頭が働かない。頭のどこかに霞がかかったかのようで、言葉を聞きとるので精一杯だった。

『本当はもっと色々話したいんだけど、時間がない』

気づけば、少しずつ光の強さが弱まっている。

イマジンプレイカー

『幻想殺しと禁書目録、この二人を守ってほしい。奴らの手に渡し

…て…は、いけ…ない』

光は完全に消滅し、再び暗闇が世界を支配する。

だが、そのすぐ後に、どこからか先ほどよりも大きな光の波が迫

ってくる。

そして、彼の体はその光の波に呑み込まれる。
それが彼の見た初めての『夢』だった。

気がつくと、ゼロはベッドの上で寝ていた。
神裂と話していた所までは思い出せるのだが、その後の記憶が一切ない。

部屋を見渡すと、どこかで見た覚えのある場所だった。
白い部屋、ベッドのまわりに付けられた落下防止用の柵、ポツンと設置された小さなテレビ。
すなわち、病院だった。

場所の確認を終えると、もうひと眠りしようと、ベッドに横にな
って、

「にゃー、お見舞いに来てやったぜい。お土産は高級メロン……の
小さな欠片が乗った、コンビニの高級プリンぜよ」

スパンッ！ と勢い良く開け放たれた扉から入ってきた、金髪、
アロハシャツにサングラスをかけた馬鹿野郎に妨害された。

一瞬で不機嫌のメーターが上昇したゼロは無視をきめこむ。

「あつれー？寝てるのかー？なら、起きるぜよ」

ゼロへと近づいて、無理やりゼロを起こそうとする土御門、
それすら、無視してやろうと思い、

土御門の鳩尾に拳を叩きこんでいた。

「ぐっふッ！ちょ……それは、あ、んまりじゃないかにゃー？」

「黙れ。寝ている奴をわざわざ起こす馬鹿がどこにいる」

「ここにい、ぐふっ！？」

土御門が元気に回復し、立ちあがった瞬間に二発目を同じ場所に

叩きこむ。

前の世界でも、ここまで容赦なく攻撃した相手はいなかった。それだけ土御門の冗談が癪に障るのか、それとも人間に近い体になったがゆえに感受性も豊かになったのか。

なにはともあれ、ある意味、学生同士の仲の良い戯れには違いなかった。もっとも、その自覚はゼロには一切なかったが」

「用件だけ言え」

「相も変わらず冗談が通じないぜい」

すぐに立ちあがって、ずれたサングラスを掛け直す土御門。

本気でないとはいえ、鳩尾を殴りつけているのだから、もう少し辛そうにしてもいいはずなのだが、そんな様子は一切見られない。

変な所で土御門の能力の高さがうかがえる。

「オルソラⅡアクィナス、および天草式の動向についてだ」

一転、真面目な顔になって語る土御門。

いつもそんな感じでいてくれれば、と思わなくもない。

土御門の語った内容によれば、ローマ正教からの暗殺・報復を防ぐために、オルソラⅡアクィナスと天草式は双方共、イギリス清教の傘下に入る事になったらしい。オルソラの持つ『法の書』の解説法は間違いだった事がわかり、それを全世界に公表した事によって、オルソラが他の魔術師に狙われる事もなくなったと言う。

「と、まあこんなとこぜよ。他に何か聞きたい事はあるか？」

少し逡巡した後、特にない、と首を振りながら答えるゼロ。だが、その顔は土御門からも読み取れるほど、聞きたい事があると言っていた。

「天草式十字凄教の事が知りたいんじゃないのか？」

土御門の方が尋ねる。

多角スパイだと豪語する土御門の事だから、ゼロと神裂が会っていた事も知っているんだろう。

確かに気にはなった。

あの後、彼らがどうなったのか。天草式もイギリス清教の傘下へ

と収まったと言う。だが、それだけではまだ本当に和解できたとは言いがたい。

しかし、ゼロはあえて聞かないでおこうと思った。

また会えた時、その姿をこの目で確認しようと思ったから。

「構わない。いずれ自分で本人達に聞く」

「そうかい」

そう言うのと、踵を返して、病室から出て行こうとする土御門。

なぜかその手にはお見舞いと言っていたコンビニのプリンを入れた袋が下げられたままだったが、別にいいか、と思いゼロはまた寝ようとベッドに寝転がり、

「今度はカミやんの所に行って、ねーちんとなんか面白い展開になってないか確認してくるぜい」

急いでベッドを跳び下りると、土御門の頭を後ろから思いっきりはたいた。

「何をしようとしているんだ、オマエは」

床に顔を打ち付ける前に首根っこを引っ掴んで、すぐに顔をこちらへ向けさせ、胸倉を掴む。

そんな状況でもいつもの態度を崩すことなく、

「いやー。ねーちゃんは前からどこかでカミやんに平謝りしようと思っただけにゃー。そのチャンスが今巡ってきたわけですわー。だったらそんな面白いイベントを逃すわけにはいかんぜよー！」

熱弁を振う土御門だったが、ゼロには逆効果だった。

「……人の決意に水を差すな！」

「ちよっ、ゼロ！？何ですわー、そのチェーンは！？それって凶器なんだろう！？ていうか、こんな所でそんなモノを振りまわしたら……にゃーッ！！」

幸運な事にゼロの部屋の防音設備は完璧だったと言う。

『それで、あの少年は一体何でありけるのかしら？』

宙に浮かぶモニターの一つには一人の女性の姿が映っている。

イギリス清教トップ、最大主教、ローラアーケビショップスチュアート。

今回のオルソラ救出において、ローマ正教はアニエーゼ部隊が勝手に行った事と、責任をなすりつけた後、一切何も言ってこない。

今、この状況で何か文句を言って状況が悪化する事を危惧しているのだろう。

だが、イギリス清教にはそんな事を気にする必要はない。

だから、聞く。

報告にあった一人の少年と三体の怪物の事を。

「ただの学生だよ。どうやら今回は勝手にこの街を出ていたらしいつまり、彼は巻き込まれただけという事だ」

ローラの質問に答えるのは学園都市統括理事会理事長、アレイスター。

『だったら、こちらの情報にある、その少年が使っていた力は何とする？』

「さあ？私もよくわからないのでね」

ここで初めてローラは訝しげな顔をする。

そもそも仮にも学園都市の長であるアレイスターがわからないとはどういう事か。

報告によれば、魔術ではないとの事。ならば、科学による力のはずなのだが。

「ただ一つだけ言っておこう。あれはこの世界の住人ではない」
その言葉にローラの息が止まった。

『……それはつまり、別世界の住人と言いたりけるのかしら？』

「その通りだ」

ローラはここでさらに表情を陰しくする。

その情報をこうも簡単に流す理由がわからない。

平行世界の存在は科学の方が領分としては強くなりつつある。が、古より魔術の世界にも召喚術なるモノが存在する。

その中には別世界のモノを召喚したという記述も少ないが混じっていた。

であるとするならば、あの少年の存在は科学と魔術の境目に存在する事になる。

それに、別の世界の存在ならば、もう一つ。新しい可能性を魔術の世界へともたらすかもしれない。

だが、迂闊には手を出せない。

そのような存在である以上、一度あの少年の事を調べる必要がある。

さらには、その少年の事を知っていたという怪物達。そちらも調べる必要がある。

『なるほど。わかったわ。それじゃあ』

「ああ」

別れの挨拶も手短にしたローラへと文句をたれるわけでもなく、ただ受け答えるだけのアレイスター。

何もない、中心に大量のコードをつけた大きな筒だけがある部屋。誰もいない。中心の筒の中で逆さまに浮かんでいるアレイスターだけがいる。

「さて。彼の持つ力。それは私にとって吉と出るか凶と出るか」

アレイスターがローラへと情報をわざと流した理由。

それはとてもシンプルなモノ。

ゼロの力を知るため。

そのためには、戦いが一番手っ取り早い。

ゼロが本気をだすような戦いが。

ゼロは土御門が去った後、ひと眠りをし、検診に来たカエル医者から退院の許可を貰い、自分の服に着替えていた。

ゼロの異常な回復力。

オートリカバ
オートリカバ
オートリカバ
自動修復。

肉体再生という自分がある程度回復させる超能力もあったりするが、それとは違う。

オートリカバ
ゼロの自動修復は動くと効果を発揮しない。

動かずにその場にじっと留まっておく事で、自分の傷を最終的にはすべて回復させる事が出来る。

が、動くとその効果は発揮されないので、戦闘においてはそこまです使えるわけでもない。

あくまで、終わった後のための能力なのだ。

ゼロはロックオンしているわけではないが、どうやらこの能力だけに限っては、人間の時でもレプリロイドの時でも関係なく発動するらしい。

ゼロにとっては嬉しい誤算と言える。

自分の傷を確認した後、Tシャツを着て、

サイドテーブルの上に置かれた紙に初めて気づいた。

いつから置いてあったのだろうか。

土御門が来ていた時には、確認していなかったからもしかしたらその時にはもうあったのかもしれない。

丁寧に折られたその紙にはを開くと、『神裂火織』の文字が目についた。

どうやら、神裂がこの部屋に来て置いて行ったものようだった。一通り、その手紙の内容に目を通すと、それをポケットの中へとねじ込む。

部屋には誰もいなかったし、鏡もなかったから、ゼロを含め誰も

知らない。

その時のゼロの、まるで子供を見る父親のような優しい笑みには。

だが、それも一瞬の事。

すぐにいつもの仏頂面に戻る。

とりあえず、上条の所にお見舞いに行こうと、病室の扉を開け、

部屋から出た瞬間、走ってきた小さい何かがドン！ とゼロにぶつかった。

急な事に多少よろけながらも、体勢を崩さず何事かと下を見るゼロ。

そこには水玉のワンピースを着た、小さな少女がいた。年齢は小学校中学年か高学年ぐらいだろう。その頭では大きなアホ毛がピョコピョコと揺れている。

少女はゼロにぶつかって、転んでしまったのだろう。

尻餅について、ぶつかった箇所なのだろう、額をさすっている。ゼロは起こしてやろうとして、

「いったーい、ってミサカはミサカは泣きごとを漏らしてみる」
……………ミサカ？

「おい」

とりあえず、手を差し出して少女を起こしてやる。

少女も素直にその手を取ってヒョイツ！ と起き上がるとパンパンとおしりの汚れをはらって、

「ありがとう、ってミサカはミサカは感謝を体で表現してみる」
何度も頭を下げる少女。

何か居心地が悪くなって、ゼロはすぐにそれを止める。

「オマエ、どこから来たんだ？」

ミサカという言葉も気になるが、それより先に場合によってはこ

の少女を送り届けるのが先だろうと、少女へと尋ねる。

「今はこの病院にいるの、ってミサカはミサカは退屈だーっという文句を言わずに告げてみる」

いや言ってるだろう、というツツコミを呑み込み、

「なら、病室まで送り届けてやるから、もう病院内を走るな」

「えー、ってミサカはミサカは口をとがらせて駄々をこねてみたり」
「駄目だ」

暴そうな少女を抑えて、ピシヤリと言い放つ。

元々、病院では暴れてはいけないと言う事はわかっていたのだから。すぐに少女はおとなしくなる。

「ところで、オマエ。名前は？」

少女は無邪気そうに、ゼロを見上げながら、

「打ち止め、ラストオーダーってミサカはミサカは元気に愉快に叫んでみる！」

今まで以上の大声をあげた打ち止めに軽くデコピンして戒めた所で、少女と共に、少女の入院しているという病室へと向かった。

その後の行方（後書き）

これで『法の書』は終わりです。

次からは少しの間、オリジナルで行こうと思います。

多分、科学サイドが関わってくると思います。

己の世界を話す時

「それでね、あの人が全然かまってくれないからつまらなくなつて、病室を出てきたのだ、ってミサカはミサカは誇らしげに胸を張ってみる」

ラストオーダー
打ち止めは楽しそうに、ゼロと話をしている。

ラストオーダー
と言つても、打ち止めが一方的に喋っているだけで、ゼロはたまに、そうか、などと相槌を打つただけだったが。

ラストオーダー
ゼロは打ち止めの話を話半分で聞いていた。

理由は二つ。

まず、この少女の話自体、あまり理解できない。

『あの人』とか言われても、ゼロには誰の事だかさっぱりわからない。

だから、適当に聞き流すくらいで良いと判断したのだ。

そして、もう一つ。

というか、こちらの方が主な理由なのだが、ラストオーダー打ち止めと名乗るこ

の少女。

ラストオーダー
打ち止めという名前も明らかにおかしいが、それ以上にゼロを悩ませてるのがその顔。

どこかで見た事がある。

と言つても、この少女を見た事があるわけではない。ゼロの知り合いの顔にそっくりなのだ。

知り合いである御坂美琴の顔に。もつとも、ラストオーダー打ち止めは美琴よりも圧倒的に幼く、正確には美琴の小さい頃の顔はこんなのだろうかといった感じだが。

ラストオーダー
それに打ち止めが先ほどからミサカという単語を言っている。

という事は、

(御坂の姉妹か?)

ゼロが気になって訊こうとして、

「ここだよここだよ、ってミサカはミサカは走り出、イタッ、ってミサカはミサカは小動物的な声をあげてみる」

病室に着いたらしく、打ち止めはダーッ！ラストオーダーと走ろうとして、ゼロに腕を掴まれ止められて、再びデコピンされた。

「走るなって言っただろう」

そもそも、ゼロにぶつかった原因が走った事であり、その事を一番最初に注意したはずなのだが、どうやら打ち止めには効果なかったらしい。

「ごめんなさい、ってミサカはミサカは頭を下げてみる」

「わかったらもう行け」

さすがにここまで送れば大丈夫だろうとゼロは踵を返して、当初の目的地である上条のいる病室へと向かう。

そのまま、一度も振り返る事なく歩いていると、

「ありがとう、ってミサカはミサカはお礼を言ってみたり！」ラストオーダー

また打ち止めが大声を出していた。

注意してやろうかと思い、止めた。

ゼロはそのまま振り向くことなく上条の病室へと向かった。

次会った時に注意してやろうと心に決めて。

ゼロは行きがけにジュースを買ってから、上条の病室に行った。自分の分と上条の分、あとインデックスの分で、三人分のジュースを買うと、それらを片方の手で器用に持っている。

病室の前に着くと、空いているもう片方の手で扉を開けて、

そこで頭に白い物体をぶら下げた男のフラフラになった姿を目撃する事となった。

それを見たゼロは無言で静かに病室から立ち去ろうとし、

「ゼロ！良い所に来た、助けてくれ！」

その姿を見つけた男が助けを求めてくる。

はあっ、と小さくため息をつく、病室に入ってから男――――
――上条の頭にかぶりついていた白い物体、もといインデックスの背中を軽く二回タップする。

扉をあける音も聞こえないほど興奮していたのか、急に背中を叩かれてビクッ！と驚くインデックス。

後ろを振り返って、ゼロの姿を確認すると、

「ゼロ、傷はもう大丈夫なの？」

普通にゼロの傷の具合を心配する。

「ああ、問題ない」

それを聞いたインデックスは安心したといった顔になる。

それを見ていた上条が小さく、俺はまだ治ってないんだから噛み付くのはちょっと、などと小声で呟く。

あえて小さくインデックスの耳に聞こえないように呟いたのは、言った所で意味のない事を理解しているからか。はたまた、そんな事を言えば、より激しく噛み付かれる可能性があるのを危惧しての事か。

だが、上条当麻は『不幸』な人間である。

本人は誰にも聞こえないように小さく言っただつたつもりだったが、不運にもその声は上条と同じベッドの上に居座っている人物の耳へと届いてしまう。

そして、

「ぎゃああああああああっ！！！！」

まったくの不意打ちだったため、いつも以上にそのダメージは大きかったらしい。

「心配はしてるけど、それ以上にとうまがこんな状況でもいつも通りすぎるのが悪いんだよ！！」

「心配してるならもう少し噛みつくのを……って、なんかさつきよりもさらに噛む力が強くなって!? い、い、インデックスさん、私が悪かったので許して下さい、痛ええええっ!!」

またしてもぎゃあぎゃあと騒ぎ始める二人。

とりあえず、ゼロはインデックスを止めるのを諦め、自分に火の粉が飛んでこないように少し離れた所から、インデックスの怒りが収まるまで待つ事にした。

それから数分後。

「少しぐらい助けてくれてもいいじゃねえか」

「巻き込まれたらかなわんからな」

ボロボロになりながらも、なんとか生き延びた上条はゼロへと文句を垂れる。

「で、何であんな事になってたんだ?」

まずは、理由を聞くゼロ。

上条が悪いのか、インデックスが悪いのかを判断するのは理由を聞かなくてはならないからだ。

上条がゼロに経緯を話そうして、

「とうまが女の人に頭を下げさせて『なんでも言う事をききます』なんて言わせるのが悪いんだよ」

「インデックス。もう一回ぐらい噛み付いたらどうだ?」

インデックスが話し終えた瞬間に刑の執行を言い渡した。

その間、コンマ一秒未満。

「ちよっと、待てえええええっ!!」

再び大口を開けてかぶりつこうとするインデックスを押さえながら、上条は必死で弁明を始める。

その形相には死刑宣告をされた囚人も顔負けだろう。それぐらいの必死さだった。

「違う! あれは神裂が勝手に言ってた事であって、決して俺が言わせた事ではない!」

神裂という名にピクンと眉が動くゼロ。

「神裂がなんか今までの事を謝るとか言い出して、それで頭を下げていた所にインデックスが突入してきたんだ！」

ゼロは神裂がなにか上条に恩義を感じていてそれで謝ろうとしている事は土御門の話で知っていた。

そして、それを成功させてやろうと土御門を抑えていたのだ。

が、もし今の話の通りだとすると、

「それで神裂はどうしたんだ？」

「インデックスの姿を見た瞬間に、凄い速度で逃げるように出て行ったぞ」

ゼロの予想通り、神裂の謝罪は失敗したようだった。

しかし、土御門がちょっかいを出そうとしていたのは、結構前の事。

もちろん、土御門の事だからタイミングを見計らって、出ていくつもりだったのだろうが、それでもどれだけ長い間、上条はインデックスと騒いでいたのかと少し感心してしまう。

神裂が逃げ出した理由。

ゼロは知らないし、上条も記憶を失っているので覚えていないのだが、神裂はかつてインデックスと親友と呼べる間柄だった。

だが、今のインデックスにその記憶はない。

この場にいる三人全員が記憶喪失とは数奇な運命だと言える。

神裂にとってはステイルと同様で、たとえインデックスが自分の事を覚えていなくても大切な人なのだ。

だが、神裂にしてもステイルにしても、『今』のインデックスに会う事をなんとなくだが躊躇している。

よって、頭を下げるなんて恥ずかしい状況で、インデックスが乱入してきたなんてシチュエーションは最悪だったのだ。

だから、逃げた。

すなわち、ゼロが土御門を抑えていたのは、まったくの無駄骨になっちゃったのだった。

「それで、怪我の具合はどうだ？」

「医者の話ではまた二、三日は入院だってよ。なんかもうこの部屋が俺の家のような気がしてきたぞ」

いつもいつも面倒事に巻き込まれて、気を失って目を開けることに目に入ってくる天井。

上条の記憶なんて一ヶ月ちよいぐらいのものだから、この病室にいる率も半端ではない。

「ゼロは……聞くまでもなく、もう大丈夫そうだな」
「まあな」

ゼロの体の事は上条も知っている。

だから、ゼロの怪我の治りの早さに驚く事はない。ただ、最近頻繁に怪我をする上条から言えば羨ましい限りだが。

ゼロは明日からはいつも通り学校に通う事だろう。

学校に行つて、大覇星祭への準備をして。いつも通りの日常へと帰る。

だから、今聞きたい事を聞く。

帰る前に。ここにいる内に。

「ゼロ。昨日の奴らは一体何だったんだ」

今までのような笑える雰囲気はそこには一切ない。

先ほどまで猛獣のようにグルグルと唸っていたインデックスも真面目な顔になってゼロを見ている。

その顔はいつもの食欲魔人のような顔ではない。

イギリス清教必要悪の教会所属の魔術師の一人としての顔だ。
ネセサリウス

「あの三体の怪物達は俺の右手とインデックスを狙ってた。俺達だって無関係じゃない。知ってる事があるなら教えてくれ」

ゼロは悩んでいた。

上条達にもまだ話していない秘密。

彼がこことは違う別の世界から来た可能性がある事。

言えば、上条たちならば信じてくれるかもしれない。これまでの付き合いから、そんな気がする。

むしろ、そんな奴らだからこそ、今まで一緒にいたのだ。

少し逡巡した後、ゼロは、
「オレがこれから話す話を全部信じれるか？」

「……本当にそんな事が？」

ゼロの話に上条は息を呑む。

インデックスも驚いた顔をしている。

無理もないだろう。

超能力、魔術、天使、イマジンブレイカー幻想殺し。

不思議な出来事、力にはめっぽう縁がある上条だが、まさか異世界まで出てくるとは思わなかった。その上、ゼロは元々は人間ではないと言う。

「やはり、信じれないか？」

「そんな事ねえよ」

ゼロの問いに間髪いれずに答えると、上条とインデックスは共に笑う。

ゼロが嘘を言わない事は知っている。

それになにより、

「お前がなんであろうと関係ねえ。お前は俺達の友達だ」

「友達を信じるのは当たり前なんだよ」

ゼロはポカンとした顔になる。

部屋を静寂が包む。

だが、それも一瞬の事。

今も笑顔を向けてくれる友へと、ゼロもどことなくぎこちないような、だが確かな笑顔を見せた。

「それで、あの怪物達の事だったな」

またいつもの無愛想な顔へと戻って語り始めるゼロ。

「あれはレプリロイド。オレの世界で人間によって作られた知性を持った、こっちの世界のロボットだ」

インデックスにはよくわからないようだが、上条は驚愕する。

なぜならば、この学園都市ですら、まだ意志を持ち、知能を備えたロボットなど存在しないからだ。

学園都市はこの世界で科学の最先端をいく街。

その都市ですら生み出されていないようなロボット。上条はその恐ろしさを瞬時に理解する。

「じゃあ、ゼロの居た世界ではあんなのがいっぱいいるってのか？」

「そういうわけでもない。あんな風に意志を持つレプリロイドはそんなに多いわけではない。ほとんどはこの世界のロボットと同じで命令されて動くだけ存在だ。それに暴走してイレギュラーと呼ばれる命令を聞かず、人間を攻撃するレプリロイドだっていた」

「マジで？……でも、そんなのを作れるって事は、ゼロの居た世界はかなり科学が進んだ豊かな世界だったんだな」

ゼロは上条の言葉に顔を曇らせる。

「いや。……世界全てを巻き込んだ大きな戦争があって、地上で人の住めるような所はごくわずかだった」

思い出す。

人工的な緑によって覆われた土地。

錆びた機械などが無残に落ちていた砂漠。

かつては人が住んでいたであろう場所。

どこに行っても、居るのはレプリロイド達ばかり。

ネオ・アルカディアという人達の楽園を除けば、人が住んでいたのは、ネオ・アルカディアから逃げ出してきた人達が住んでいた集落だけだった。

「人間達が住んでいたネオ・アルカディアという都市でもエネルギー不足が問題となっていた」

「どんな世界でも問題があるもんなんだな」

ゼロの言葉に神妙な面持ちで納得する上条。

学園都市では街中に風車を設置して電力を確保している。

だが、ゼロの世界では電力とはまったく違うエネルギーを使用していたため、そんなやり方ではエネルギー不足は解消しなかった。

「そして、エネルギー不足から一部のレプリロイドが迫害を受け始めた」

「え？」

「旧型の意識を持ったタイプのレプリロイド達が処分されたんだ」
処分。

それをした奴らから言えば、ただのロボットだったのだろう。

だが、本人達から言えば、『処分』ではなくそれは『虐殺』だったはずだ。

意識を持っている。それならば、死への恐怖もあったはずだから。

「そして、ある一人の科学者……いや、少女が処刑されることとなっていたレプリロイド達を率いて逃げ出したんだ」

ゼロはまるで大切な宝物を見るような目をする。

それは上条達の方を見ながらも、どこか別の場所、いや別の誰かを見ているようだった。

「でも、それだとそれこそイレギュラーになるんじゃないのか？」

「ソイツらは人間と戦う気はなかった。ただ殺されるのを防ぐ。ただそれだけの為に戦っていた」

「でも、戦うって言ったって人間を攻撃しちゃダメなんだったら、ネオ・アルカディアを攻撃できないだろ？」

そこでゼロは忘れてた、と言って、

「ネオ・アルカディアは確かに人間の住む街だが、その街を管理していたのはレプリロイドだ」

えっ！？ と上条が声を上げる。

「つまりレプリロイドが同じレプリロイドを殺そうとしたってのか？」

「そういう事だ」ゼロは買って来ていたジュースの蓋を開けて一口

飲むと、「そして、オレはその少女達、レジスタンスの一員だった」かつて、レジスタンスでゼロは戦っていた。

そして、多くの敵と戦い、何度も仲間達の窮地を救ってきた。

「オレは別に処分されそうになっていたわけじゃない。レジスタンスにおいてただ一人の人間であり、科学者でもあったシエルがオレの封印を解いてオレに助けを求めてきたんだ」

またしても、上条は驚かされる。

封印されていた。ゼロが人間でない事は先ほど聞いた。

そして、アニーゼ部隊やレプリロイド達との戦闘で見せた姿。

それだけで、おのずと答えは出てくる。

ゼロもレプリロイドなのだ。

だが、封印されていたという事はただのレプリロイドではない。普通ならば封印などされるはずがないだろう。

「そして、オレがレジスタンスとして戦ってきた敵達。その中に奴らはいた」

上条はそこでその考えを止める。

なぜゼロが封印されていたのかはわからない。

彼も記憶喪失と言っていたから、もしかしたら彼自身も知らないのかもしれない。

だが、たとえ過去がどうだとしても、それは今は関係ないと思った。

だからこそ、その事については考えるのを止めて、新しい話へと耳を傾けた。

「倒してんのに何で復活してんだ？」

「今までにも復活した事は何度かあった。だからそれは大したことではない。だが、気になるのはどうして奴らがこの世界にいたのか、それとどうしてお前達二人を狙ったのか、だ」

うーん、と顎に手を当てて考えてみる上条。

だが、それらしい理由は思いつかない。

自分達が狙われる理由は自分達の存在からして狙われる要素満点

だからわかるが、とすれば上条達の事をどこで知ったのかという話になってくる。

どうしてあのレプリロイド達がこちらに居たのかに関しては、まったく想像がつかない。

ゼロ自身は気が付いたらここにいたと言う。

だが、向こうは死んでいた身でありながら、一体どうやってこっちに来たのか。

上条は悩んだ末、先ほどから静かに話を聞いているインデックスの方へと視線を向ける。

インデックスはその視線に気づくと、

「魔術では召喚術と呼ばれるようなものもあるんだよ」

質問の内容を察したように言うインデックス。

こういう時にはやっぱり魔術師なんだと上条もゼロも感心してしまう。

そんな二人の軽く失礼な考えには気づくことなく、

「ただ幻獣とか悪魔とかを召喚するって言うのが一般的には有名だけど、そんな事をわざわざするような魔術師は今はいない。難しいっていうのもあるけど、使用のリスクが高いし、大きな力を必要とするから、召喚術を使う場合は一人じゃできないんだよ。それにもせろが異世界から呼び出されたんだとしたら、近くに術者がいないといけないはずだから。戦ったれぷりういどからも魔術の痕跡は見られなかったんだよ」

ゼロが目を覚ました時にいたのは、学園都市の中。

その中に魔術師がいたとは考えにくいし、なにより術者のような存在には会った事がない。

つまり、ゼロがこの世界に来た理由はインデックスにもわからないという事になる。

「役に立たなくてごめんね」

「気にしなくていい。わざわざすまないな」

落ち込むインデックスを励ますゼロ。

「でも、結局アイツらについては何もわからずじまいて事か」

「だが、奴らにまだ仲間がいるならばきつと襲ってくる」

ゼロの言葉に空気が張り詰める。

狙われるのは自分達。

それも人外の存在。

「心配するな。その時はオレが守ってやる」

ゼロは力強く断言する。

「俺だって戦うぜ。イマジンプレイカー幻想殺しは効いたんだ。だったら俺だって戦える」

上条はさっき感じた恐怖が嘘のようにどこかへ飛んで行った気がした。

それほどまでにゼロの言葉は頼もしかった。

だから、ゼロの隣に立とうと思った。

守られるだけでなく、守れるように。

ゼロはそれにたった一言だけ。

「……そうだな」

それから、三人は何気ない会話をし、時に笑い、時に上条がかじられ、最終下校時刻になるまで話した。

その後、上条とインデックスに別れを告げ、ゼロは寮へと帰宅した。

ゼロの気分は晴れ晴れしていた。

隠していた事を話したからだろうか。

それはゼロにもわからない。

彼は人間になったばかり。いくらレプリロイドが意識を持っていたとはいえ、やはり機械。人間とはわずかにだがズレが生じる。

だからこそ、人間になって感じる心は今までには感じた事のない不思議なモノばかりだった。

「そういえば、夕飯をどうするか」

上条が病院にいたので、自炊は不可能。

この時間ではスーパーまで行くのは少し面倒くさい。
となると、

「コンビニで済ますしかない、か」

通りがけにあったコンビニへと入り、弁当を一つとおにぎりを二つほど買って再び帰路へとつく。

空はすっかり日が落ち、街は暗くなり、街灯が灯っていた。

急いでいるため、近道をしようと路地裏へと入る。

ゼロが早めに帰ろうと走り出そうとして、

「止まれ」

不意に誰かが前に立ち塞がった。

声からして男。しかも、かなりでかい。

陰鬱そうな声で男は語る。

「こいつが俺達の仲間の邪魔をした奴か？」

その声はゼロへと向けられたものではない。

ゼロの後ろ、10メートル程度離れた所にもう二人男が立っている。

こちらは眼前の男ほど大きいわけではない。

普通より少し高い程度だろう。

片方は茶髪で、もう片方は暗くてよくわからないが頭にニット帽かバンダナのようなものを被っている。

「ああ。間違いない。コイツだ」

どちらが答えたのかはわからないが声が届く。

「仲間？誰の事だ？」

「先日のコンビニのATM強盗達だ。覚えていないわけでもあるま

い」

その言葉に思い当たるモノがある。

御坂美琴や白井黒子達と一緒にいた時に出くわした事件。

この男達の言う仲間とはそいつらの事だったのだ。

事件の際、軽トラの運転手をしていた男に逃げられている。おそらく、そこから情報が伝わったのだろう。

「俺達が間違っているのはわかっているが、だからと言って仲間がやられた借りを返さないわけにはいかないんでな」

ゼロは理解する。

この男達はおそらくスキルアウトだろう。

だが、どうやらこの大男は意外と仲間想いらしい。

そこは好感が持てるが、だからと言って捕まえた男達を許すわけにはいかない。

「浜面、半蔵。人が来ないように見張っておけよ」

はいよ、と後ろの男二人は答えて少し下がる。

「駒場さん、やり過ぎないでくださいよ」

「わかってる」

駒場と呼ばれた大男は拳を構える。

「悪いが、骨の一本や二本は覚悟してもらおう」

そして、跳びかかってくる。

ゼロはそれを屈んで紙一重で避けると、駒場の脇をすり抜けて、急いで逃げ出した。

ゼロとしては武力でねじふせてもいい。だが、学園都市で問題を自ら起こすのは得策ではないし、なによりゼロの力は加減が利かない。

戦闘シスターや神裂相手に完全なレプリロイド状態で戦いはしたが、戦闘シスター達の場合、大勢をいっぺんに押し倒すような力の入れ具合をしていたし、神裂の場合はそれぐらいの力を出さないと戦えなかった。

一部だけロックオンしても、普通の人と戦うには危険すぎる。

本来、ゼロの力是人ではないレプリロイドと戦うためのものなのだ。

いくら相手がスキルアウトとはいえ、そんな簡単に使っていないモノではない。

それに相手は拳で戦いに来ている。

武器があれば、それを壊して戦意喪失、なんてことも出来たかもしれないのだが、それすら不可能。

ならば、人の居る所まで逃げるしかなかった。

「待て!!」

狭い路地を走り抜けるゼロの耳に後ろから怒号のような声が聞こえる。

足音は三人分。

先ほどの男達、駒場、浜面、半蔵の三人の足音。

夜、ゼロとスキルアウトの壮絶な鬼ごっこが始まった。

己の世界を話す時（後書き）

二週間以上空いてしまいました。
すみません。

夏休みもう終わりですが、皆さんは楽しめましたか？
もう少し続いてほしい夏休み（五七五）

追う者、追われる者

「待ちやがれ、コラーッ!!」

ゼロは路地裏を駆ける。

後ろからは駒場、浜面、半蔵の三人のスキルアウトが追ってきている。

ゼロと駒場達の距離はだんだんと開いている。

ゼロの普段の脚力はレプリロイドである時には、到底及ばないが、普通の人間に追いつかれるほど、弱くはない。

むしろ、陸上選手の中でトップクラスの選手を連れてこないと、追いつくのは至難の技だろう。

(くそっ！大通りはどっちだ？)

人通りの多い所に出れば安全が確保できると考えていたゼロだが、それを見つける事が出来ない。

だが、それは仕方のない事だった。

ゼロがまだこの街に慣れていないという事もあるが、それよりも大きな理由がある。

ここは学生の街、学園都市。

もし、ここが普通の街だったならば、車が往来して、人が大勢歩いている通りなど、すぐにでも見つけられただろう。

だが、住んでいる住人の多くが学生である学園都市では、車を使用する人はそんなに多いわけでもないし、すでに最終下校時刻は過ぎている。

もちろん、この時間でも外にいるまともな学生もいるにはいるが、そういう人間が多く通る道を探すのは極めて難しい。

ゆえに、ゼロは未だに追手を振りきれないでいたのだ。

(こうなったら、一度どこかに身を隠すか……)

狭い路地裏で十字路となった場所へと差し掛かった時、ゼロは曲

がり角を曲がった。

少しして、追っていた駒場達もその曲がり角を曲がる。

が、曲がった後、一本道となっているその細い路地裏の道には誰もいなかった。

道には身を隠す物も何もない。ただ両脇を建物にはさまれた無機質なほそい道があるだけ。

ゼロの姿は忽然と消えていた。

「探せ！まだどこかにいるはずだ」

スキルアウトの三人は別れて、別々の道へと進む。

その場に人が誰もいなくなる。

その光景を建物の上から見下ろす者がいた。

ゼロだ。

建物の中、ではなく上。ゼロは曲がり角を曲がって、駒場達から姿が見えなくなる少しの間の時間を使って、足をロックオンすると、両脇の建物の壁を交互に蹴りながら、屋上まで跳び上がったのだ。

屋上から追って来ていたスキルアウト達が居なくなったのを確認すると、足をロックオンして、建物の上から跳び降りる。

地面に着地すると、すぐに駒場達の内、誰も行かなかった元来た道を走って戻って行く。

このまま路地裏に入った所まで戻って、入らずに家へと帰るつもりだった。

来た道に戻って、初めて気づく。

逃げているときには気にしてなかったのだが、気づかずになんかの距離を逃げていたらしい。ゼロが走ってもなかなか元の道にはでなかった。

急がなければ、さっきのスキルアウト達の内の誰かに見つかるかもしれないと、速度を上げて走る。

少しすると、入ってきた所が見えてきた。

ふう、とゼロは一息つくと速度を緩める。路地裏を出て家へと帰ろうとして、

「こんな所で何をやってるじゃん？」

声をかけられた。

女性の声だった。

「あれ？お前、月詠センスのクラスに転入してきた奴じゃん」
声をかけてきた相手には見覚えがある。

ゼロや上条の通う学校の先生だ。スタイルも良く美人なのだがいつもジャージばかり着ていて、色気をまったく感じさせない。青髪ピアスが「もったいない！！」と熱く語っていた気がする。適当に聞き流していたから、ゼロもうろ覚えなのだが。確か名は黄泉川だったと思う。

そして、ゼロは学校に入る前にも、この先生と面識がある。魔術師シェリー・クロムウェルが学園都市へと侵攻してきた時、地下街でシェリーと交戦していた警備員アンチスキルの一人だったからだ。

ゼロはしまった、と苦い顔をする。

すでに最終下校時刻を過ぎてしまっている。普通ならば生徒は家（正確には寮だが）へと帰っているはずなのだ。そして、目の前の教師は警備員アンチスキル。すなわち、

「で？最終下校時刻はとっくに過ぎてるけど、こんな時間に何をやってたじゃんよ？」

こういう風に尋ねられるのが当然なのだ。

「……晚饭買ってなかったから、買いに来たんです」

本来、ゼロは人に敬語を使うような性格ではないし、相手が誰だろうと敬語を相手に強要するような性格でもない。

言葉遣いなど一切気にしないのだが、この世界に来てからはそれはまずい、という事を学んでいた。

図書館で学んだ事によれば、目上の人には敬語を使うのが当たり前というのが人間社会なのだ。と言っても、目上でも使いたくないと思わせる人もたまにいたりするが。

そして、ゼロは学生である以上、先生には敬語を使う。これが普通なのだ。

だが、もし年功序列だけで言うならば、ゼロに敬語を使わない人はいなくなってしまうだろう。

ゼロが封印され、眠りについていた時間も含めれば、ゼロは学生をやるような年ではないのだから。

「ほう？ 今、こっちの道から出てきたのは見間違いだったじゃないかよ？」

ゼロは心の中で舌打ちをする。

ゼロが路地裏から出てくる所を見られていたのだ。これでは今言った言い訳のせいで、さらに疑われる事になってしまう。

本当は真実を話せばいい。ゼロは追われていただけなのだから、非は一切ない。

だが、ゼロは『話したくなかった』。

さっき、ゼロを追っていた三人のスキルアウト。

彼らがやってる事は間違いだ。彼らの仲間はコンビニを襲って、

ATMを盗み出そうとした。彼らはゼロを襲おうとした。

ゼロは被害者なのだから、いくら文句を言ってもいいだろう。

だが、ゼロは文句ではなく、彼らに好感を抱いていた。

なぜなら、彼らが自分の為でも、お金の為でもなく、仲間の為に、ゼロを襲っていたから。

たとえば、間違いを犯していたとしても、ゼロは仲間の為にやり返そうとしたスキルアウト達を憎めなかった。

むしろ、仲間の為に動ける人間ならば、間違いを犯すのにも理由があるのかもしれないとすら思っていた。

ゼロのかつての仲間達、『レジスタンス』。

それは科学者の少女シエルと廃棄処分されそうになっていたレプリロイド達が集まり、生き残ろうとした集団だ。

ネオ・アルカディア、そして人間達と戦おうという気は一切なかった。

だが、初めてシエル以外の人間と会った時、ゼロは知った。

ゼロが生き残るために倒してきたコピーエックスがはなった刺客達。そして、コピーエックス。

彼らが人間達にとっては本当に英雄だった事を。

生きるためにコピーエックスを倒したレジスタンスが人間達にとってはイレギュラー————悪だった事を。

ゼロは自分のやったことが間違いだったと思った事はない。倒さなければ、レジスタンスの仲間達は全員殺されていただろう。そして、ゼロも破壊されていたはずだ。

だが、コピーエックスが決して悪だけの存在でない事は知った。だから、仲間を大切にできる駒場達の事を、嫌いにはなれなかった。

もつとも、コピーエックスも駒場達も悪ではない、とは言わないが。

きっと善人とは上条や彼の親友————エックスの事を指すのだろう。彼らならば、エネルギー不足でレプリロイドを処分しなくてはならなかったとしても、決してそんな事はしなかっただろうから。

「んー？」

女教師はじっとこちらを見ている。何かを見透かそうとするかのように。

ゼロが口を開こうとしたその時、路地裏の奥からダダダッ、と誰かが走ってくる音が聞こえた。しかも、一人のものではない。複数の足音が聞こえる。

ゼロがわずかに体をのけぞらせて路地裏を覗き込むと、そこにはこちらへと走ってくるスキルアウト達の姿があった。

まずい、とゼロは思う。だが、もう遅い。

「追いついた……ぞ……ぞ……？」

駒場達は路地裏から出てきた瞬間に固まる。

黄泉川の姿は走ってくる駒場達からは建物で見えなかった。よっ

て、ゼロ以外に誰かいるとは思わなかったのだ。

黄泉川は一瞬ポカンとしたと思うと、今度は楽しそうにいつ、と口の端をつりあげて、

「誰かと思えばお前らじゃなかよ。はっはっ！奇偶じゃん！」

駒場達の顔色が一瞬で青ざめる。なぜか半蔵だけは微妙に嬉しそうな顔をしているが。駒場と浜面の二人はあからさまにやばい、といった顔をしている。

駒場達と黄泉川は顔見知りだった。

と言っても、別に仲良しというわけではない。

駒場達は今までにも何度か問題を起こしている。そして、何度か警備員アンチスキルに捕まったこともある。

その捕まった相手と言うのが黄泉川だった。

ただ、駒場達だったただの警備員アンチスキルならば、ここまで恐れたりはしない。

黄泉川だから恐れているのだ。

黄泉川は子供には武器を向けない事を信条としている。ゆえに、盾やヘルメットなど防具で、強能力者レベル3だろうと鎮圧する。武器を向けなくても十分に危険なのだが、こんな事は彼女の一部にすぎない。他にも多くの武勇伝(?)を残し、まわりからは『シリ阿斯をコミカルに処理する女』などとも呼ばれ、犯罪者を逃がした方が被害が少なかった、なんて事もある。

そして、駒場達は何度もその餌食となっている。

ゆえに、その恐ろしさを体で理解しているのだ。

「なるほど。またお前らが問題を起こしたってことでいいじゃん？」

駒場達は顔を見合わせる。

そして、瞬時に判断を下すと踵を返して、脱兎のごとく逃げ出す。なぜか、半蔵だけは逃げ出すとき、残念そうな顔をしていた。

「私から逃げ切れると思ってるじゃんよ！」

そのまま、ゼロには目もくれず、黄泉川は駒場達を追って、行ってしまった。

ゼロは何が起きたのかよく理解できず、少しの間その場に立ち竦んでいた。

「……帰るか」

ゼロは家への道をゆっくりと歩いて行く。

さっきの出来事はいまいち理解できない。だがこれだけはわかる。きっと、まだ彼らは鬼ごっこを続けるのだろう。ただし、鬼が交代になって黄泉川が鬼となったのだが。

ゼロはそのまま帰ると、すっかり冷めてしまったご飯を食べて、学校の準備をすると、眠りについた。

平穏で、平和な眠りに。

外で必死になって黄泉川から逃げている者達の状況とは無関係に。

その後、なんとか黄泉川を振りきった駒場達は、ゼロを狙っていると逆にゼロを囷にされて捕まるかもしれないと危惧し、スキルアウト達はゼロを狙うのを諦めたという。

「ええ、そうよ。問題ないわ」

夜の学園都市。

とあるビルの屋上。

一人の少女が携帯を耳にあて、電話をしている。

「ええ。また連絡するわ」

電話を切ると、少女は目の前に広がる街の光景を眺める。夜を照らす街灯。

転々と点在している家から漏れ出た光。

風を受けて、ゆっくりとだが回転している風車。

そして、窓も扉も一切なく、ただそこにあるだけのビル。

夜になると、その姿は不気味で、寒気すら覚える。

少女はそのビルを睨みながら、

「残骸^{レムナント}。私が必ず手に入れる」

誰に聞こえるわけでもない。ただ呟いただけだ。だが、それはまるで『窓のないビル』へと宣言したかのようだった。

「ああ。めんどくさっ」

路地裏の一角で、何人もの屈強そうな男達が死屍累々と転がっていた。

「何で私達がこんな奴らの相手をしなくちゃならないかなー」

その中心には四人の少女がいた。

全員、倒れている者達など気にも留めていない。

少女達の内の一人在どこかと電話をしており、他の少女達はそこらへんに積んである箱などに腰掛けている。

通話は終わったのだろう。電話をしていた少女は耳から携帯を離すと、

「次の仕事だそうです。もう少し先に行え、との事でしたが」

「結局、少しは休めるわけね」

「少してどのくらい？」

「タイミングは向こうから連絡があるそうです。そういうのって意外と超面倒くさいんですがね」

少女達は路地裏を出て、少し車が通る道へと出る。

もちろん、倒れていた男達はほっといたままだ。

「まあ、いいわ。で、次の標的^{ターゲット}は？」

「コレです。何でこんな奴を狙うのか超理解不能ですが」

全員が携帯の画面を覗きこむ。

一つの画面を四人で見ているので、少し窮屈だった。

「しかも、生け捕りだそうです。ただし、死ななければ方法は問わない、と」

「へえ。生け捕り、ねえ」

少女は達はもう一度画面を見る。

そこには一人の学生の姿とプロフィールが写し出されている。

「何でこんなのをやるのかしら？」

「結局、私達には教えてもらえないでしょ」

確かにその通りだった。

彼女達にそういった事情が伝えられる事はほとんどない。

彼女達は依頼され、命令を受けて、ただ壊すだけ。それが彼女達の仕事だった。

「とりあえず、超お腹がすきました。何か食べましょう」

「そうね」

さっきまで、たくさんの人が倒れている中に立っていた者とは思えないほど、普通に歩く四人。

彼女達にはそれが普通のなのだ。

一人の少女が夜空を見上げながら呟く。

「何で、無能力者^{レベル0}なんかを襲うんだろう」

四人は楽しそうに、まるで普通の女子学生のように夜の街へと消えていった。

追う者、追われる者（後書き）

次は「残骸編」です。

が、その前にもう少しオリジナルです。

拙い文章になるでしょうが、出来れば読んでみてください。

あと、ゼロのレプリロイドの時の身体能力ですが、大体聖人と同レベルと考えてください。

強くし過ぎてもアレだけど、弱いわけではないので。

……でも、武器とか技で聖人よりは強いはずです。……多分！

恋愛

「不幸だ……」

ゼロや上条の通う学校の昇降口で、いつも通りの言葉を上条は発していた。

隣で靴を履き替えていたゼロは呆れたように、

「あれぐらいで文句を言うな」

ゼロの言葉にくわっ！ と、上条は目を見開いて、

「あれぐらいって言うけどな！こっちは朝の登校だけで、財布を落として散らばった小銭は清掃ロボにほとんど吸い込まれちゃうは、自販機でジュースを買おうとしたら注文してないジュースが出てくるは、走ってきた人を避けたらそこに突っ込んできたバイクに追突されるは大変だったんだぞ！」

上条当麻は不幸な少年である。

こんな事は日常茶飯事と言っても過言ではないが、だからといって不幸が辛くないかと言えば、答えはノーなのだ。

そのため、上条の言葉はもはや叫び声となっていて、他の生徒にもこれでもかと言うぐらいよく聞こえていた。

その声に大半の生徒は迷惑そうな顔をしながらも、は微かに笑いながら通り過ぎていく。

上条の不幸っぷりは彼の事を知っている者の間では有名な事である。よって、上条の事を知っている生徒達はなんだ上条かと思いついて、過ぎて行くのだ。さらに知らない生徒も上条の体験談が聞こえて笑いがこみあげてくる。

上条は今、自分で自分自身の恥ずかしい話を暴露する事となっていた。

唯一の救いはその事実の上条が気づいていない事だろう。

ゼロは気づいてはいたが、それを伝える事はなかった。それよりも、

「最初のは同情するが、ジュースぐらい別のでもいいだろう。バイクだって、走り始めたばかりで大したスピードじゃなかった」

靴をはき替えた二人は教室へ向かいながら、話を続ける。

「別に良いけど、こんなまだ残暑で暑い日が続く今！朝の登校中にスープカレーを飲みたがるような奴がいるわけねえだろ！それにバイクだって、ゆっくりでも突撃されると意外と衝撃があるんだよ！」

「オレはスープカレー飲みたいが」

「お前とインデックスは特別！！」

ゼロの言葉に、ありありと暑い日でも鍋やカレーをばくばくと豪快に食べるインデックスやゼロの姿が想像できてしまう上条だった。

学園都市にある『窓のないビル』。

その中心に位置する部屋にポツンとある円形の容器の中にいる『人間』アレイスター。

学園都市を治める統括理事長である彼の前には無数のモニターが浮かんでいる。

「おそらく、狙いはこちらの学生かと」

モニターの一つから音声が響く。

連絡をしている相手の声はわずかにくぐもっている。

彼らは学園都市の『暗部』と呼ばれる存在。

表に出る事を許されず、裏の世界で生き、そして裏の世界で死ぬ。そういう存在が、学園都市には確かに存在していた。

アレイスターが声の響くモニターから、別のモニターに視線を移す。そこには一人の少年の姿が写っていた。

「どうしますか？」

アレイスターはわずかに口の端をあげると、

「今は手を出す必要はない。潰す際にはこちらから言う。それまでは待機しておけ」

「了解」

モニターがプツンと消滅し、部屋から音がなくなる。

アレイスターはゆっくりと目を瞑る。

その姿は、悩んでいそうで、呆れていそうで、苦しそうで。

だが、なによりも、楽しそうだった。

ゆっくりと目を開けると、

「出来れば、存分に力を発揮してほしいものだな」

音のない部屋で、その声は壁へと染み込むかのように消えていった。

「やっぱりあのコンビニの店員が狙い目だぜい」

「いやいや、あかんで。それよりこっちのファミレスの子に決まってるって」

午前の授業が終わって、昼休み。

上条、土御門、青髪ピアスの三人は昼食を食べながら、どこのお店の店員と仲良くなるか、という話題で盛り上がっていた。

こんな話でいつも盛り上がるからこそ、この三人は^{デルタフォー}クラスのスバカなどという、不名誉極まりない呼び方をされるのだが、本人達にその自覚はない。

「そうかあ？それよりも————」

「カミヤんは言わんでもええよ」

上条が話す前に、青髪ピアスがその言葉を遮る。

話を中断された事が納得いかず、上条は不満を露わにしながら、

「なんでだよ？」

「そんなのきまつてるにゃー」

その問いに答えたのは、青髪ピアスではなく土御門だった。

「カミやんが好みとか言い出したら、すぐにその女性が出てきて、いつの間にか良い雰囲気になるのがオチに決まってるぜい！」

土御門の言葉に青髪ピアスも頷いて、肯定の意思を示す。

話題は正直どうでもいい、冗談のような話のはず。

だが、上条を睨む二人の目は、冗談などではなく、本気の間違った。

そして、一触即発の空気となる。

お互いが相手の出方を窺い、

「すいません」

教室の入り口の方から声が届いた。

そこには女子が数名立っていた。一人の女子を中心にして数名の女の子がおり、中心の子は少し俯きながら、まわりの人達は楽しそうな顔をしている。

先輩のようには見えないから、おそらく同学年の別のクラスの女子だろう。

「……えっと。……赤谷君、いますか？」

中心の女子がゼロの名を呼ぶ。

上条は席を立つとその女子へと近づいて、

「赤谷なら多分食堂にいると思うぞ」

上条は今日はお弁当を作って来ており、土御門達も行きがけにコンビニで弁当を買っていたため、ゼロは一人での昼食となっていた。今頃一人大量にご飯を食べている事だろう。

前に一緒に食堂に行った時には、学食の安さから三人前ぐらい一人で頼んでいたのだから。

少女はお礼を上条に言った後、歩き出そうとして、急に立ち止まる。

どうしたのかと、上条が廊下へと首を出して覗いてみると、そこ

にはこちらへと歩いてくるゼロの姿があった。

少女はその姿を見て固まり、まわりの女子達はきゃーきゃー、と騒いでいる。

さすがの上条も理解する。

この少女がなにをしに来たのか。ゼロに何の用なのか。

「……赤谷君！」

顔を赤くしながら、必死に勇気を振り絞ったような声で少女はゼロの名を呼ぶ。

ゼロは少女の前に立つと、

「なにか用か？」

「あ、あの。これ……読んでください！」

少女は手紙を取り出すと、ゼロへと手渡す。

ゼロが受け取ったのを確認すると、そのまま逃げるように走り去ってしまった。まわりの女子達もそれにつづいていなくなる。

ゼロは手紙を見ながら、教室へと入る。

瞬間、

「「いただきーっ!!」」

土御門と青髪ピアスがゼロへと跳びかかる。が、ゼロは難なく二人をかわすとそのまま自分の席へと向かう。土御門と青髪ピアスは机に激突して床に蹲っていた。

「いやー、しかし、お前もラブレターをもらうとは。隅に置けねえなあ！」

上条はゼロの前の席に座ると、にやにやしながらゼロに話しかける。

だが、ゼロは上条の言葉にキョトンとしていた。

その表情に上条は違和感をおぼえる。

そして、その違和感に気づく。

ゼロの表情はゼロが知らない事、知らない物を見るときモノだ

った。以前にも料理をする時などに似たような顔をしていた。

まさか、と思いつながら上条はゼロへと、

「赤谷……ラブレターってわかる？」

「いや、知らない」

上条は苦笑いをする。

ゼロは学園都市の事やある程度の常識は図書館で本を借りて、勉強している。だが、まだまだ知らない事もたくさんある。ラブレターもその一つだった。

そもそも彼は恋愛自体を知らない。

『恋愛』という言葉は知っているが、『好き』という感情がどういうものなのか理解できないのだ。

「オマエも一緒に読むか？」

「はあっ！？何言ってるんだよ！ダメに決まってるだろ！」

上条だって手紙の内容は気になる。

先ほどの土御門達みたいに無理やり見るのならば、まだふざけるといふ気持ちがあるが、貰った方から見ると問われれば、罪悪感に苛まれてしまう。それが人間と言うものだった。

「そうか」

それだけ言うと、ゼロは便箋の封を開けて、中に入っていた紙を取り出して読み始める。

さっきまで、見たいという気持ちのあった上条だが、今はすっかり萎えてしまっていた。

ゼロが手紙を読み終えると、

「で、どうすんだよ？」

「なにがだ？」

上条の問いに質問で返すゼロ。

やっぱりわかっていない様子だった。

「だからさっきの子と付き合うのか、って事だよ」

上条の言葉に少し離れて聞いていた土御門達はもちろんの事、教室中が聞き耳を立てていた。

恥ずかしいではすまないような状況だが、ゼロは気にすることなく、たった一言。

「無理だ」

即答だった。

上条はてっきりゼロは恋愛について聞いてくるだろうから相談にものってやろうかと思っていたのだが、完全に出鼻をくじかれた格好となってしまった。

「何だよ？」

「あの子には悪いが、時間がないし、興味もない」

上条だけでなく、教室中の生徒達全員が呆気にとられていた。

だが、ゼロが恋愛に興味がないのも仕方がない。

今は人間とはいえ、元はレプリロイド。恋愛など知らずに生きてきたのだ。

そして、人間になったとしても、ゼロの年齢を考えれば、枯れているといってもおかしくはないだろう。

上条もゼロの特殊な事情を思い出して、すぐにゼロの言葉の意味を考え、納得する。

「まあ、お前にもお前の事情があるだろうしな」

上条は優しげに笑うと、その場から離れていった。

少しして、午後からの授業の先生が入ってくる。

手紙をくれた少女へ返答するのは放課後。ゼロにだって、この手紙が大事なものである事はわかる。

ゼロは授業のノートを取りながらも、どうすれば少女を悲しませずに断れるかを考え続けていた。

あるファミレスの一角。

そこで四人の少女達がそれぞれジュースを飲みながら、思い思いの事をしていた。

そんな中、一番年長そうな少女の携帯が鳴る。一瞬、まわりの客達の視線を浴びる。

少女は携帯を取ると、短く会話をしてから、

「はぁーい。了解了解。わかりましたよー、っと」

少女は携帯を取ると、今も少女の方など気にも留めずに行動している他の少女達を見る。

「これからお仕事だつてさ。ほら、さっさと行くよ」

少女達はだるそうに返事をしながら、席を立つ。

店の外に出ると、一台の車が用意されていた。

少女達はその車に乗っている運転手の事など一切知らない。だが、躊躇なくその車に乗ると、運転手も何も言わずに走り出す。

「で、結局いつやるわけ？」

「そうねえ。もうすぐ学校が終わるだろうから、人気のない所に入ったらで良いんじゃない？」

彼女達の表情が変わる事はない。

普通に、当たり前前に、それが日常であるかのように。

何一ついつもと変わる事なく、人を壊す方法を考える。

「まあ、なんとかなるでしょ」

車が赤信号に引っかかる。

「また赤信号ですか？今日は超引っかかるばかりな気がします」
「運転手が下手なのかな？」

それまで無表情、無言だった運転手にわずかに動揺が走る。

後ろに乗る少女達は、それほどまでに危険な存在だった。

青信号へと変わり、車は走り出す。彼女らの標的ターゲットの下へと。

ゼロは用事を済ませて、昇降口へと向かっていた。

用事、とは昼休みの手紙の件だ。

上条には先に帰ってもらい、ついてこようとする土御門達を制裁したゼロは少女の下へと向かった。

ゼロの答えを聞いた少女は、泣いた。

まわりで囁きたてていた女子達も、この時ばかりは自嘲していた。ゼロは最後にすまないと言おうと、その場を去った。人が泣くのを見るのは苦手だったからだ。

ゼロが靴を履きかえようとして、

カサツ という音と共に、足の裏に違和感を感じた。

靴を脱いで確認してみると、そこには手紙があった。昼間にもらったものに似た、小さな手紙が。

「……またか」

ゼロはげんなりする。

先ほど、断ってきて苦い思いをしたばかりなのに、たて続けに同じような手紙が来たからだ。

手紙を開くとそこには、

『放課後、この場所まで来て下さい。待ってます』

書いてあるのはそれと、あとはどこに行けばいいのかだけだった。差出人の名前も書かれてはいない。

ゼロは悩む。

本当ならば行きたくはない。だが、それでも行ってしまうのがゼロだった。

結局、指定された場所まで向かう事にした。

歩きながら、ゼロは奇妙に思う。

指定された場所は人気の少ない、スキルアウト達が溜まり場になっている場所のすぐ近くだったからだ。

だが、ゼロは告白されるというのなら、恥ずかしがって人が来ないような場所にしたのだろうと思い、走り出した。

途中、何度も信号に引っかかりながらも、指定された場所に着くが、そこには誰もいなかった。

手紙の差出人も、通行人も誰もそこにはいなかった。

あるのは放置されたゴミ箱やドラム缶などばかり。来てみて思うが、とても女性がいるような場所とは思えない。

ゼロは辺りを見回すが、人の姿を確認する事は出来ない。冷やかしかったのかと思いゼロは元来た道に戻ろうとして、

背中を向けたドラム缶がドゴオン！ と爆発した。

ゼロは爆発の勢いで思いっきり吹き飛ばされる。手に持っていた鞆を離してしまう。

が、ゼロ自身は地面への落下の際には受け身を取ったため、ほとんどダメージはない。

爆発に関しても、瞬間的に爆発の勢いに合わせて跳んだためほとんど無傷だった。

ゼロに対して、死角からの攻撃を成功させるのは容易ではない。かつて、四方八方から襲い来る敵と戦ってきたゼロにとって、死角を作るのは、すなわち死を意味する。

どんな時でも、どんな場所でも、常に周りに気を配るのが当然なのだ。

「うっそお！？あれでほぼ無傷って、結局おかしいんじゃない！？」
爆発の向こう側から声が響く。

女の声だ。聞いた事のない声。そして、少なくとも友好的ではない声。

こちらへと近づく足音も聞こえる。

それは、一人のものではなかった。

複数の足音がゼロの耳へと届く。

爆発の煙がはれると、そこには四人の少女が立っていた。

「私達は『アイテム』。おとなしく捕まってくれと嬉しいんだけどなあ」

声を発したのは、一番年長そうな少女。

おそらく感じから言って、彼女がリーダーなのだろう。

そして、感じる。

この少女は危険だ、と。

「逃げるなら逃げてもいいわよ。その代わり、足がなくなっちゃうかもしれないけどねえ」

少女は楽しそうに唇の端を歪めた。

恋愛（後書き）

すいません。

ちよつと、夏休みの課題が忙しくて（笑）

なるべく早く更新できるようには努力します！
なるべく、ですが。

『アイテム』

「コイツで間違いないのよね？」

「間違いないよ」

少女達はゼロの存在を無視して、話す。

ゼロの事など眼中にもないように。いつでも殺れる、と言っているかのように。

「て、ことで、お前を捕獲しなきゃいけないから、おとなしくしててね」

楽しそうに笑いながら、最も年長そうな少女はこちらへと向かってくる。

ゼロは踵を返して、急いで逃げる。

先日もスキルアウト達と、夜の街で鬼ごっこを繰り広げたが、その時とは全く違う。

本当の意味での、命の取りあい。死の匂い。

それを感じられるほど、少女達から感じる雰囲気は危険だった。ゼロは曲がり角にさしかかり、そこを曲がろうとする。

だが、ゼロがその道に入る前に、曲がり角に置いてあった箱がドゴォン！！と、激しい音をたてて爆発した。

まわりの建物を壊すほどの威力はないが、その道を曲がる事はしばらくできそうにない。

「ちっ！」

舌打ちをする。

先ほどの爆発を考えれば、今度の爆発も間違はなく、『アイテム』の仕業だった。

だが、ゼロはふと思う。

（これほどの規模の爆発を起こせば、誰か気づくんじやないのか？）
人が近くにいる気配がしないのだ。

前みたいに人の多い所が見つからないのではない。

人、そのものがない。まるで、このあたり一帯だけ、隔離されているかのように。

気になるが、今はそれどころではない。ゼロはひたすらに走った。

「フренда。ちゃんとやってんでしょね？」

「大丈夫。結局、袋の鼠になるのがオチって訳よ！」

彼女達は走らず、ゆっくりと、まるで学校からの帰り道のように、おしゃべりしながらゆっくりと歩いていた。

ゼロの受けた爆発は、遠隔操作によるもので、彼女達に、急いで追いかける、という考えはない。

「しかし、私達『アイテム』の仕事は、不穏分子の削除・抹消の
はずなのに。捕獲とはねえ」

『アイテム』のリーダー。麦野沈利は面白そうに、だが退屈そうに
呟く。

『アイテム』とは学園都市の暗部の組織の一つ。

麦野沈利・フрендаⅡセイヴェルン・絹旗最愛・滝壺理后の四人
の少女。

『アイテム』の仕事は学園都市内の不穏分子の削除と抹消。

だから、今回のような捕獲は、今までになかったことだった。

「けど、私達の姿を見て逃げるなんて、超珍しいですね」

「普段ならすぐに襲ってくるのに」

彼女達はその点に関しては感心していた。

彼女達は、まだ学生なのだ。

それに、絹旗は見た目12歳ぐらいに見えるし、フレンダは金髪の外国の少女だったりと、どちらかと言えば、全員か弱い少女というのが似合う見た目なのだ。

ゆえに、普段ならば、能力者だろうがスキルアウト達だろうが、彼女達を見ると、なめてかかってくるのが普通だった。

しかし、ゼロは逃げた。

彼女達の危険性を感じて。

「そう考えると、ちょっとは特別な無能力者レベル0者なのかな？まあ、なんでもいいけど」

『アイテム』達には、実は気になる事がもう一つあった。

彼女達が狙う標的は、あくまで『不穏分子』達のはずだ。

だが、今回の依頼は報酬はそこそこ高いものの、標的を狙う理由がいまいち曖昧だったのだ。

もつとも、そんな事は全員気にはなっても、深く考える気はなかったが。

さっさと、依頼を終わらせて報酬をもらって、終わり。そう考えていたからだ。

「鼠取りも、割と楽しいかもねえ」

今度の鬼は、鬼ではない。

鼠を狩る猫。狩人だった。

「ちっ！やられた……」

ゼロは憎々しげに呟く。

ゼロがたどり着いたのは、まわりを壁に囲まれた袋小路だった。行き止まり。もう逃げる事は出来ない。

ここに来るまでも何度か曲がり角はあった。が、それらは通る

前に全て爆破され、通る事が出来なかったのだ。

そして、結果。このような場所にいる。

つまり、まんまと相手の作戦に嵌ってしまったのだ。

ゼロは急いで来た道を引き返そうとするが、

「チェックメイトよね、これ」

すでに時遅く、道の入り口には四人の少女の姿があった。

「おとなしく捕まるか、それとも足掻いて両足を失って連れて行かれるか。好きな方を選んでいいわよ」

ゼロは奥歯をギリッ！と噛み締める。

間違いなく詰みだった。

まともな人間ならばここから逆転する事は間違いなく不可能だろう。

そう。まともな人間ならば。

「ロックオン・レッグ」

ゼロは足をロックオンすると、ダッシュして壁へと向かう。

「はあっ！？なによ、それ！？」

急に変化した状況に理解が追いつかない『アイテム』のメンバー。それもそのはず。

彼女達はゼロはあくまで無能力者レベル0のただの青年と聞いていた。

それなのに、足を変化させ、目にも止まらぬ速さで壁へと向かったのだ。そして、啞然とし動けない彼女達の前で、

ゼロは壁を蹴って、蹴って、蹴って。

まるで足でロッククライミングをするかのように、壁を蹴りあがった。

麦野達が行動を起こそうとするころにはもう遅い。

すでにゼロはビルの屋上へとたどり着いてしまっていた。

「悪いが、捕まる気はない。じゃあな」

そして、麦野達からゼロの姿が見えなくなる。

ゼロは油断せず、急いで別のビルへと跳び移ろうと、屋上を駆ける。

本当ならば、レプリロイドの姿を見られるわけにはいかない。だが、それでも使わなければならなかった。

使わなければ、確実に捕らえられてしまう。それほどまでに、彼女達の存在を危険視していた。

「……こっちでいいか」

逃げる為に、ゼロは他のビルに跳び移ろうとし、

踏み込んだ右足のあった場所から、白い光線がとび出してきた。

ゼロは慌ててわざと体勢を崩して避けるが、わずかに頬を掠めてしまう。

「なんだ？」

今のが何かはわからない。が、直撃していれば間違いなく死んでいた。

『アイテム』の内の誰かの能力。

ゼロが急いで立ち上がると同時に、第二波が襲ってくる。

が、今度はゼロとはまったく関係のない所に打ち込まれていた。

（オレの場所は気づかれてないのか？）

それならば好都合。

ゼロは足をロックオンすると、すぐにその場を離れる。

ゼロの予想をはるかに超える攻撃。

ゼロは確信する。

先ほどの能力を使った存在は、間違いなく超能力者^{レベル5}だと。

麦野達はまだ同じ場所から動いてはいなかった。

それどころか、麦野は困惑したようでありながらも、今までより一層笑みを深めている。

「うーん、もういないのかなー？手応えもないし」

「で、結局あれは何だった訳よ？」

「無能力者^{レベル0}っていう情報でしたが、超間違いじゃないですか」
絹旗の言葉に滝壺はコクコクと頷く。

スキルアウト達は、能力者と戦うために、ある程度の武装をしている。

だが、先ほどの芸当は、武装したからといって出来るようなことではなかった。

つまり、標的は能力者、という事になる。

麦野はポケットから透明なケースを取り出すと、それを滝壺へと渡す。

「まあ、能力者って事なら、滝壺からは逃げられないんだし」

滝壺はそれを受け取ると、中に入っていた白い粉末を少しだけ舐める。

瞬間、滝壺の瞳に光が戻る。

「A I M拡散力場による検索を開始」

佇んでいる滝壺から無機質な機械のような声が発せられる。

A I Mストーリーカー
『能力追跡』。

滝壺理后の能力。

一度記憶したA I M拡散力場をもとに、特定の能力者の位置情報を『検索』する事のできる能力。

麦野達がまったく焦らずに、ゼロを逃がしていた理由がこれだった。

たとえば、どれだけ離れようとも、一度A I M拡散力場を記憶していれば、地の果てまでも追っていけるからだ。

「検索完了」

滝壺の能力こそ、『アイテム』の要となる能力だった。
だが、

「結果、該当するA I M拡散力場は存在せず」

「なっ!？」

『アイテム』の全員が目を見開く。

今まで目標を捕捉できない事は一度もなかった。
近くにいても、遠くにいても、確実に見つけてきたのだ。

「超どういう事ですか!？」

「……検索してみたら気づいたけど、あの人、A I M拡散力場を
作ってなかった」

「待ちなさい。無能力者でも多少の力場ができるはず。それがな
いって事は……」

滝壺は頷く。

「まったく能力を持たない完全な無能力者^{レベル0}」

学園都市にわずかしらないまったく力を発現させない者達。
まさか、そんな存在を狙っているとは思っていなかった。

「でも、じゃあ結局さっきの事はどうなるのよ!？」

彼女達の目の前で、ゼロは壁を蹴りあがっている。

そんな事が完全な無能力者^{レベル0}に出来るはずがない。

だからこそ、彼女達はより困惑する。

「……とりあえず、追いかけるわよ」

「標的の位置は超わかりませんが」

麦野は携帯を取り出して、どこかに電話をかける。

「まったく。こんな事を頼むなんて、嫌なんだけどなー」

電話の相手が出る。

麦野は用件を手短に話し、電話を切った。

ゼロは体を休める為、学園都市では少し珍しい、廃工場にいた。おそらく、潰されたばかりで、まだ解体をしていなかったのだろう。でなければ、この街でこんな場所が残っているはずがない。まだ、いくつか機材や道具も残されていた。

どうやら知らない間に、まったく行った事のない場所まで来てしまったらしく、ゼロは携帯のGPSで場所を確認していた。

「……しかし、どうやらこのあたりは完全に隔離されているようだな」

逃げている間も、人一人見つける事は出来なかった。

いくら人が少ない場所とはいえ、ありえない事だった。

『アイテム』が、学園都市内である程度の力を持っている事が容易に想像できる。

ゼロを捕まえる為に、わざわざこんな事をしているのだ。

捕まりゆうなんて一つしか思い当たらない。

「オレの体の事が、ばれたか……」

考えている時間はない。

『アイテム』が何らかの方法でこの場所まで追ってくる可能性は大いにある。

ゼロはそろそろ行こうと立ち上がる。

「こんなところに居たんだあ」

ゼロが振り返ると、そこには麦野が立っていた。

麦野だけではない。

気づけば、四方を囲まれている。

常にまわりに気を配っているゼロらしからぬミスだった。

自分の素姓の事や、『アイテム』達の事を考えている間に、ここまで接近されていたのだ。

もっとも、『アイテム』も学生とはいえ、裏の世界で生きてきたプロだからこそ、というのもあるのだが。

これでは逃げる事は出来ない。

もしかしたら、工場のまわりに、先ほどの爆弾が仕掛けられている可能性もある。

「さて、これで鬼ごっこも本当に終わりね」

麦野は楽しそうに笑う。

ゼロはその姿を見ながら、麦野の方へと向かう。

「抵抗するのはいいけど————死ぬわよ」

麦野の手から、真っ白い光線が放たれる。

それは、ゼロを襲ったモノだった。

ゼロはそれを横に跳んで避ける。

「……オマエ、超能力者^{レベル5}か」

「正解。私は学園都市第四位の麦野沈利。私の能力は『原子崩し^{マルチダウン}』。電子を粒子でも波でもない状態に固定させる事のできる能力。絶対に勝つ事はできないわよ」

敵にこうも簡単に能力を教えるという事は、それだけゼロを見下しているのだろう。

いや、敵とすら認識されていないのかもしれない。

「まあ、いいや。もう大人しくしろとはいわないから————
—足、もらうわ」

麦野から、さっきよりも大きな光線が発射される。

しかも、一つじゃない。ゼロのまわりにも、まるで逃げ道を塞ぐかのように撃ち出される。

ゼロは動けない。

ビルの下から撃って、屋上まで突き抜けたという事は、壁は防御にすらならない。

そもそも、後ろや横には他の『アイテム』のメンバーがいる。

光線の角度を考えると、三人に当たる事はないが、三人の居る所へ行けば、そちらから攻撃を受けるだろう。

麦野の攻撃を受けるか、それとも残りの三人の誰かの攻撃を受けるか。

どちらがマシかは、一目瞭然だった。

だが、時間がなかった。

すでに、麦野の光線は目の前まで迫っていて、

光線がゼロへと直撃した。

麦野は、ミスった、と思った。

足を狙うつもりが、ついいつもの癖で、普通に体を狙ってしまった。

麦野の光線がゼロの近くにあった土の入った袋を破ってしまい、起きた粉塵でよく状況が確認できない。

彼女にしては、珍しく生きててくれないかなあ、ぐらいには考えていた。

「おい。フレンダ、絹旗、滝壺――。標的^{ターゲット}って生きてる？」

他の三人の角度からならば生死を確認できるだろうと、聞く。

そして、

「ああ、生きてる」

帰ってきたのは、男の声だった。

麦野は目を見開く。

煙が晴れた時、そこには無傷のゼロがいた。

「なんで、生きて————」

麦野は言葉が紡げなかった。

ゼロは無傷で立っているが、そのゼロの前に、何かがあった。

緑と、青が混ざったような、幻想的にも見えるモノがゼロを原子^{メルト}崩^{ダウナー}しから守ったのだ。

「確かに鬼ごっこは終わりだな」

ゼロは呟く。

「ここからは、オレも本気だ」

『アイテム』（後書き）

アイテムの人たちの口調を考えるのが以外と難しい。

口癖があると、特徴的だけど、何でこんなこと言うんだよ、って思っています。

超能力者（レベル5）VS破壊神（エイユウ）

シールドブーメラン。

ゼロの持つ武器の中で、唯一防御の力を持つ武器。

正確には、遠距離からのエネルギー弾を弾き返す力を持っている。今、ゼロの目の前に展開されているモノこそ、それだった。

『原子崩し』、メルトダウナー麦野沈利の能力は粒子でも波形でもない状態の電子を操るというもの。

この電子は物体に触れた時、粒子と波形のどちらの反応を示すか決定できずに、その場に『留まる』性質を持ってしまう。

それは疑似的な壁となり、その壁は放たれた速度のまま恐るべき威力で標的へと叩きつけられる。

それこそが『メルトダウナー原子崩し』。正式な分類は粒機波形高速砲。

学園都市超能力者の第四位の持つ力なのだ。

だが、それは所詮、電子の集まりで、エネルギーの塊のような物。ゆえに、シールドブーメランであれば、防げる。

もつとも、完全にゼロの世界で使われていたエネルギーとは同じではない為、跳ね返すまでは出来ないが。

それでも、それはあらゆる物を消滅させるはずの麦野にとって脅威となりうる。

ゼロは麦野を見据えて、

「ここからは、オレも本気だ」

逃げるのはもう終わり、そう告げる。

だが、同時にそれはゼロが『アイテム』を認めたという証。

神裂の時と同じ。『アイテム』を戦わなければ危険であると認識したのだ。

「……あ、あはははははははっっ!!」

麦野は愉快そうに笑う。ゼロを囲いつつ、少し離れた位置で様子を見ていたフレンダ達も憐憫の視線を送っている。

彼らの中には無能力者^{レベル0}は超能力者^{レベル5}には勝てないという、絶対の式がある。

ただし、それは無能力者^{レベル0}が弱いのもあるがそれ以上に、超能力者^{レベル5}が強すぎるゆえの式なのだ。

そして、麦野自身もその自覚がある。

先ほど自分の能力が防がれたのも、偶然の産物程度にしかすでに考えていない。

麦野は手の前にかざすと、

「やってみろよ、無能力者^{ゴミ}が！」

再びゼロに光線が襲いかかる。

しかも、今度は四本同時に発射されていた。その上、麦野は再び体も狙っていた。

ゼロはわずかに体を逸らして一本避け、足を開く事でさらに一本避ける。

そして、体を狙っていた二本の光線が届く前に、シールドブーメランを構える。

瞬間、シールドブーメランにずしりと重い衝撃がかかる。

「ぐうっ……！」

なんとか耐えたものの、その勢いに後ろへと押されて数歩後ずさる。

今のゼロは手だけをロックオンしている。

強い衝撃を受けきるには手だけでは不可能だったのだ。

「ちいっ。ねえ、それなんなのか、教えてくれない？」

一方、麦野は余裕の姿勢を崩さないが、二度も自分の『原子崩し^{メルトダウナー}』を防がれた事に憤りを隠せていない。

ゼロは無言で今度はバスターを構える。

「お前、手品師か何か？ そんな物、どこから出してんのよ」

麦野は取りだされた凶器を恐れるどころか、学生とは思えないほどの狂喜の顔をする。

ゼロはその時、初めて学園都市の『闇』を垣間見た気がした。

瞬間、

後ろから、絹旗最愛の拳が飛んできた。

ゼロは横にターンして避ける。

足を狙っていた絹旗の拳はそのまま地面を打ちつける。

ドゴン！！と、地面が重い鉄球を受けたかのように凹む。

絹旗の能力は『オフエンスアーマー窒素装甲』。

窒素を操り、手のまわりに纏う事で、通常ではありえないほどの怪力を生み出す。

ゼロはバスターを構え直し、腕を掠めるように撃つ。

戦う事を決めたとはいえ、人に大きな傷をつけるのはためらわれた。本当は傷をつける事すら嫌だったのだ。

だが、そんなゼロの心配は杞憂に終わる。

「すいませんが、私にこういうのは超効きませんので」

絹旗の腕に弾丸は当たったはずだが、そこに傷は一切なかった。オフエンスアーマー

『窒素装甲』による自動防御。絹旗の意思に関係なく持つ事となった能力の用法が、絹旗を守っていた。

「なるほど」

ゼロはバスターではなく、今度は両手に短めのトンファーのような武器を取り出す。

リコイルロッド。

ゼロは構えると、リコイルロッドに力を溜める。

「何をしようとしているかは分かりませんが—————」

絹旗は足に力を込め、思いつきゼロの方へ跳びながら、拳を構え、

「超無意味ですの！」

当たれば確実に骨が砕けるような一撃。

それにゼロは力を溜めた左手のリコイルロッドをぶつける。絹旗は終わったと思った。

『窒素装甲』による破壊力は常人では受け止められるはずがない。武器もろとも腕を砕くと確信した。

ゆえに、笑みを浮かべ、

その笑みは、弾き飛ばされた自分の腕を見た瞬間に凍りついた。

絹旗には何が起きたのか、理解が追いつかない。

フレンダや滝壺が自分と呼ぶ声すら遠くに聞こえる。

そして、絹旗の腹にゼロのリコイルロッドが打ち込まれる。

リコイルロッドは突きによる威力よりも、そこから生まれる衝撃による威力が大きい。

ゼロは先ほど弾丸が当たった時、わずかに絹旗の体がぶれたのを見逃さなかった。

完全に衝撃まで無効化できるのならば、体が揺らぐ事はない。

よって、絹旗の腹部を能力のシールドの上から打ち込まれた衝撃のダメージが襲ったのだ。

能力によって守られたものの、絹旗は吹き飛ばされる。意識はあるが、立ち上がる事は出来ないようで、必死に体を起こそうとするも、何度も倒れてしまっている。

ゼロはそれを確認すると、武器を再びバスターに切り替え、麦野の方を向く。

麦野の能力は仲間達も問答無用で巻き込んでしまう。

だからなのだろう。麦野は先ほどから動く事なく、そこに佇んでいた。

ゼロは腰を低くして、いつでも動けるように準備をする。

すると、今度は予備動作なしで、麦野から光線が放たれる。

それも、一本や二本ではない。

だが、同時に出すわけではなく、わずかに時間差をつけて連続で放つ、放つ、放つ。

ゼロは焦る。

連続で放たれたから、ではない。

麦野の撃ち方は、すでに他のメンバーの事など考えてはいなかった。

急いで空いているもう片方の手にシールドブーメランを構えると、足もロックオンする。そして、麦野から放たれる光線を全てシールドブーメランで受ける。

光線の内の一本を受けきれず、わずかに腕を掠める。

そこから真っ赤な血が一筋流れた。

「オマエ、自分の仲間がどうなってもいいのか？」

「いいわけないじゃない。当たらないようにしてたわよ」

嘘だ、とゼロは思う。

先ほどの光線はまさしく無差別攻撃だった。一步間違えれば、仲間に当たってしまう攻撃。

「ほら、アンタら。さっさと逃げときなさい。こいつは私が捕まえとくから」

麦野の言葉で、固まっていたフレンダと滝壺は、絹旗を支えながら建物の外へと避難していく。

そもそも、滝壺の能力はゼロには効果がなく、フレンダは普段、爆弾などを使って戦うため、事前の準備なども勝敗の大きな要素となる。

つまり、今ゼロと戦えるのは必然的に、麦野一人しかいなかったのだ。

フレンダ達の姿が見えなくなると、

「さーて、これで思い切り、アンタをぶち殺せるわね」

躊躇いもせず、告げた。

「オレを捕まえるんじゃないかったのか？」

「あれー？命乞い？まあ、確かにアンタを捕まえなくちゃいけないんだけど、もうそんなのどうでもいいわ」 麦野は残忍そうな笑み

を浮かべて、「アンタはぶち殺さなきゃ、気が済まないのよ!」
今までで一番大きな光線がゼロへと迫る。

だが、それはすでにゼロにはとっては、脅威でもなんでもなかった。

足をロックオンしたゼロの速さは完全なロックオンには及ばないが、それでも異常と呼べる速さなのだ。

難なく光線を避けると、今度はゼロが麦野に向かってバスターを放つ。

だが、こちらにも壁のような物に遮られ、バスターの弾そのものが消滅する。

それは『メルトダウン原子崩し』で生み出した、能力による障壁だった。

『留まる』性質を利用して、動かさず、その場に壁として残したのだ。

「しかし、スキルアウトでもないくせに、そんな物騒な物持っちゃって。ホントに何者よ、アンタ」

麦野の問いには、言葉が返ってくる事を期待しているような気持ちには少しも含まれていない。

麦野も学園都市に自分達ですら知らないほどの『闇』があることは理解している。

『闇』に生きるはずの『アイテム』すら知らぬほどの深い『闇』。迂闊にそれに手を出せば、潰されることも。

そう簡単に潰される気はないが、かといって麦野に学園都市と争う気はない。

麦野は数本同時に光線を放ち続けるが、ゼロはそれを全て尽くかわしていく。

「ちいっ! ちょこまかと!」

麦野はポケットから、カードのような板を取り出すと、それ自分の目の前に投げる。

(何だ、あれは?)

ゼロは警戒して、シールドブーメランを構える。ゼロの判断は正

しかった。

カードへと放たれた真っ白な光線はカードに命中した瞬間、無数に分裂し、ゼロへと襲いかかった。

ゼロは屈みながら、シールドブローメランを展開し、なんとか全身を無数の光線から守る。逃げ回っている内に工場の隅に追い込まれてしまっていたのが幸いし、なんとか全ての光線を防ぐ事に成功する。

麦野の使ったカードのような物は拡散支援半導体。シリコンバーン

『原子崩し』メルトダウンは数本同時に光線を出せるが、弾幕のように多い数を放つ事は出来ない。

それをカバーするための道具なのだ。

能力だけでなく、道具かがくも使う。

これこそが、『アイテム』の戦い方だった。

そして、その拡散された抗戦すら、囿にすぎなかった。

ゼロが顔をあげた時、麦野は力を蓄えていた。

そして、麦野の右手から今までで最も大きな光線が放たれる。そ

れは、ゼロの身長すら越える大きさのものだった。

ゼロは避けようとして、気づく。

先ほどは自分に有利に働いた建物の隅という場所が、今度は一転。逃げ場のない袋小路となっている事に。

そして、ゼロの居る場所を、麦野の力が消し飛ばした。

「ちィっ。まったく、めんどくせェ事ばかり起きやがって」

学園都市の夜の街を、首にチョーカーをつけた少年が、右手に持

った現代的なデザインの杖で体を支えながら歩いていた。
少年は灰色を基調とした服を着ており、その髪は白く、瞳は悪魔のように赤かった。

「これで可哀想なぐらいの三下だったらお笑いぐさだなア」
少年は夜の街をゆっくりと歩いて行く。

杖について、少しふらつきながらも、その足取りに迷いはない。
そして、少年は暗闇の支配する夜の街へと消えていった。

トゥルルルル、と麦野の携帯が着信音を鳴らす。

麦野はその電話をあえて無視する。

電話の相手は大体予想が付く。

フレンダ達か、それとも『アイテム』に命令を出しているいつもの女だろう。

今出れば、間違いなく標的の事を聞かれるだろう。

素直に、消したと答えてもいいが、それだと少しめんどくさい事になる可能性が高い。

どうしようかなあと考えて、

そこで、天井になにかがついている事に気づいた。

よく見れば、ついているのではない。ぶら下がっているのだ。
そして、そのぶら下がっている物を確認した瞬間、

「ッー!!」

麦野は再び『メルトダウン原子崩し』を放つ。

だが、それは光線が当たる前に麦野の方へと跳び下りる。
麦野はもう一発放つが、今度はそいつは空中で跳んでかわす。

そして、三発目を放とうとするが、

「遅い！」

至近距離で、そいつはバスターを放った。

『メルトタワー原子崩し』を放とうとしていた麦野は、弾を防ぐための壁を作ることができない。

そして、麦野の脇腹へと弾丸が打ち込まれた。

麦野が倒れたのを見ると、ゼロは肩の力を抜く。

彼は麦野の攻撃の際、上へ跳んで、チェーンロッドを使って避けたのだ。

といっても、それはぎりぎりで、右足に光線が当たってしまい、消滅はしなかったものの、ロックオンは解け、右足を少し引きずっているような状況だった。

「……ぐうっ……！」

麦野からうめき声が聞こえる。

ゼロは麦野を殺したわけではない。

サンダーチップ。

ゼロはバスターの弾丸に雷の属性を付加させる事で、相手を殺さずしびれさせたのだ。

だが、本来、麦野は電気の力を持っている攻撃がある程度、誘導できるはずだが、あまりにも時間がなく気づかなかったのだ。

ゆえに、麦野はまだ死んではいない。その内しびれも解け、動けるようになるだろう。

そうなる前に、ゼロは逃げなければならなかった。

ゼロは手と足のロックオンを解除すると、

「二度とオレを狙うな。オレは人を傷つけない」

麦野は何も返さなかった。

下がしびれて返せないのだろうか。

外はすでに最終下校時刻を過ぎて、夜になっていた。

ゼロが外に出ると、思った通り数人の武装した者達がいた。暗闇の中で、車の明かりが輝いている。

だが、誰もゼロを襲おうとはしない。それどころか、ゼロが通ろうとすると、道を開ける始末。

不思議に思いながらも、ゼロはようやく帰路へとつこうとして、

「……鞆がない」

鞆を落とした事を思い出した。

最初の爆発の時にどこかへ飛ばしてしまったはず。

帰る前に、傷ついた足で鞆を探しに行く事になったのだった。

ゼロが去ってすぐ、麦野の所には『アイテム』の下位組織の者達がやってきて、車へと運ばれた。

その頃には、麦野のしびれも取れ、かなり動けるようになっていた。

まだ、腕や足が少ししびれるが、十分に一人で動ける。

自分で傷の具合を確認するが、弾丸が体に撃ち込まれた跡はない。撃たれた所には、わずかな火傷があるだけだった。

それもそのはず。

もともと、ゼロのバスターから放たれるのは、エネルギー弾なのだ。

麦野の障壁で防げたが、もともと物質ではないのだ。

よって、ゼロの最後の攻撃は、ただ単にスタンガンの電力を一点に固めて撃ったようなものだった。

その傷を確認しながら、麦野は思案顔をする。
すると、車の無線機から、

『ちよつと！こいつときたら！何で電話に出ないのよ！』

『アイテム』を管理している女の声が響く。

麦野は好都合だと思う。

今から自分もそちらへ連絡使用していたところだったからだ。

『まあ、いいわ。用件だけ話すわよ？今回の任務は中止。今すぐ手を引きなさい』

麦野は驚愕する。

今まで自分達が依頼を放棄するような事は何度かあったが、この女から依頼の中止を言われたのは初めてだった。

『依頼主の方がこちらに虚偽の申告をしたのよ。それがさっき発覚して。……今頃消されてるんじゃないかしら？』

「虚偽の申告？」

『そう。標的^{ターゲット}だけど、本当は別に何でもなかったあの学生だったのよ』
そんな馬鹿な、と麦野は思う。

ただの学生があんな速さで動けるわけがない。ただの学生が壁を蹴りあがれるわけがない。ただの学生が武器を所持しているわけがない。

ただの学生が『アイテム』に勝てるわけがない。

『ところで、アンタら怪我したみたいだけど。何かあったの？』

「別に。役に立たない上司のせいで、こけただけよ」

『こいつときたらーっ！自分のドジを人のせいにしてんじゃないわよ！』

その後もぐだぐだと女は文句を言っていたが、一通り言うと、気が済んだのか、じゃあねと言って通信を切った。

麦野はもう一度自分の怪我を見ながら、

「学園都市の『闇』か……。一体、私たちはどこまで知らされているのかしらね」

吐き捨てるように呟いた。

ゼロが爆発を受けた場所まで戻ると、そこには投げ出されてから
変わらない状態で、鞆が落ちていた。

ところどころ焦げてしまっているが、使う分には問題ないだろう。
鞆を持つと、小走りで路地裏を走る。

少し走ると、すぐにビルに囲まれた広い道へと出る。
時間は相当遅いのかもしれない。

すでに歩行者だけでなく、車すらなかった。
さっさと帰って、ごはんでも食べようと思い、

そこで目の前に二人の男女がいる事に気づいた。

車の一切通らない、片道三車線もある広い道の真ん中で向かい合
っている。

片方は現代的なデザインの杖を持った白髪の少年。

もう一人は赤い髪を頭の後ろで二つに束ね、重そうなキャリーケ
ースを持った少女。

どちらも友好的そうな雰囲気は放っていない。むしろ、少年の方
からは敵意を、少女の方からはそれ以上に殺意すら感じられる。だ
が、同時に少女からはこれ以上ないくらいの怯えも感じられた。

「私は知っている！今のあなたに演算能力はない。かつての力なん
てどこにもないわ！あるはずがないもの！今のあなたはもはや最強
の能力者でも何でもないのよ！！」

少女は叫ぶ。

先ほどまでとは打って変わって、まるで自分の勝利を確信したか
のように。怯えを隠そうとするかのように。

「哀れだなア、オマエ」

少年――――学園都市の超能力者^{レベル5}第一位である一方通行は少女――――結標淡希を闇の奥から呆れたように見る。

「本気で言ってるんだとしたら、抱きしめたくなくなっちゃうほど哀れだわ。――――とここで、いつまで見てやがる」

一方通行はゼロへと声をかける。

別に姿を隠していた訳ではないが、こちらには気づいていないと思っていたゼロはわずかに驚く。

結標の方は初めて気づいたようで、ゼロの方にも明らかな敵意を向ける。

「何者だ、お前？」

「別に。ただの通行人だが」

一方通行は眉をひそめる。

一般人が何故こんな時間に出歩いているのか、という事よりも。

どうして、この状況で落ち着いていられるのか。それが気になった。
一方通行達の状況も、空気も、一般人ならばすぐに脅えて逃げるほど緊迫したものだ。

だが、そんな中で話しかけられて普通に対応できるなんて、よっぽど肝の据わった奴か、こんな状況になれているような者でなければ不可能である。

そして、感じていた。目の前に居る金髪の少年と青年の間のような容姿の男が『闇』の世界の住人ではない事を。

その様子を見ていた結標はチャンスとばかりに、逃亡しようとし、

真横に吹き飛ばされた。

ゼロでも一方通行からのものでもない。別の誰かからの攻撃によって。

「が……はっ……！」

持っていたキャリーケースを庇いながらも、結標はビルの壁に叩

きつけられて、気を失ってしまう。

結標が吹き飛ばされた方向とは逆側に何かがいた。

「何だア？」

アタセラレータ

一方通行は怪訝そうにそれを見ているが、ゼロは違う。

目を見開きながらも、すでに臨戦態勢に入っている。

ゼロ達が見据える先の闇の中。

そこにはボールのように丸いカエルがいた。だが、普通のカエルではない。

そいつはゼロ達の身長のお半分の大きさがあり、体は緑色だが、機械でできているような体だった。

すなわち、ロボット。いや、レプリロイド。

ゼロがかつて倒したレプリロイドの内の一体がそこにいた。

超能力者（レベル5）VS破壊神（エイユウ）（後書き）

本来、ゲームであれば、属性チップはチャージした技でなければ発動しませんが、この作品では、普通の状態でも発動するようになっています。

別に、それを忘れてたわけではなく、そっちの方がゼロが人と戦う時にやりやすいからです。

これからも、そういう風にゲームとわずかに違う所が出てくるかもしれないが、広い心で見てもらえると嬉しいですよ。

天使と悪魔

結標淡希を攻撃した者。

ゼロと一方通行アクセラレータの前に居る者。

そいつはボールのように丸く、カエルのような姿をしていた。

バーブル・ヘケロット。

かつて、ノトスの森でゼロが戦い、倒したレプリロイド。

そいつが今、ゼロ達の目の前に居た。

「ケロロッ。『残骸』レムナントっていうのは、それケロね」

バーブルは結標の方を向くと、口を大きく開ける。そして、その口から大きな長い舌を結標へと伸ばす。

まるで、カエルというより、カメレオンのような速さで伸びる舌。それが、結標を———彼女の持っていたキャリーケースへと当たる寸前、

「はああああっ！」

ゼロがバーブルへと斬りかかった。

前身をロックオンし、一撃で決めるつもりで振り下ろす。

「ゲ、ゲロオッ!？」

わずかに手応えはあったが、バーブルは舌をすぐに引っ込めて後ろへと下がったため、大したダメージにはならない。

「ぜ、ゼロオッ!？ お前が来るなんて聞いてないケロ！」

「オレもだ」

ひゅっ！ と風を斬る音が鳴る。

ゼロは二度、三度と斬りつけるが、バーブルもそれを右に左にとうまく躲していく。

「ケロケロッ！ ワスでもこんなに簡単に避けれるなんて。前より弱くなったケロか？」

ケロケロッ！ と笑いながら、バーブルはゼロの太刀を避ける。

その言葉にゼロは顔をしかめる。

麦野との戦いで負った傷。それは常に動き続けていたため、ほとんど回復する間もなく傷ついたままになっていた。

つまり、足の怪我によって、機動力が落ちてしまっているのだ。

ゼロ自身もそれは自覚している。

だが、レプリロイドの相手を人がするのはあまりにも危険すぎる。今、倒れている少女も、この戦いを見ている少年も傷つけるわけにはいかない。そして、そのためにはゼロが戦わなくてはいけないのだ。

しかし、現実には非常なモノ。どれだけ願っても、思いだけでは戦えない。

と、ゼロは膝から崩れ落ちてしまう。

「終わりケロ。でも、お前は後だケロ」

バーブルは再び口を大きく開ける。そして、そこからまるでレーザーのような速さで真っ赤な舌が、キャリーケースへと伸びる。

「くっ！」

ゼロは最後の力を振り絞って、走る。

その努力は実り、タッチの差で舌と結標の間へと割って入る。

だが、バーブルの舌はゼロを捕える。そして、ゼロは力が全身から抜けていくような疲労感に襲われる。

怪我やロックオンのせいだけではない。

バーブルの舌がゼロからエネルギーを吸い取っているのだ。

エネルギーを吸い取られて、ロックスオンも解けてしまう。

死。

そんな言葉がゼロの頭をよぎる。

もう一度なんとかロツクオンできないかと足掻こうとして、

ゼロへと繋がっていたバーブルの舌が強引に引きちぎられた。

「痛い いい いい いい いい いい ー ー ー つ!!」

バーブルは舌を引っ込めて、のたうちまわる。

ゼロはなんとか倒れそうになるのをこらえて、自分を助けてくれた存在を見る。

そこには白い少年————アクセラレータ一方通行が立っていた。

彼は、バーブルの苦しむ姿を確認すると、ゼロの方へと顔を向ける。

「……礼を言う」

「あアっ？ 別にんな事の為に助けたんじゃない。俺は悪党だからな。一流の悪党ってのは、一般人を傷つけたりはしねエんだよ」

照れ隠しでも何でもない。心の底からそう思っているのだろう。

ゼロには彼がどういう風に生きてきたのかわからない。だが、普通ではない事はわかった。なにより、レプリロイドの舌を引きちぎるなんて普通の人間ではできない。

アクセラレータ一方通行は、ゼロの方へと歩いていき、ゼロを無視して、彼の後ろで倒れている結標の前に立つ。

瞬間、

ドゴン！ という音と共に、彼女が大切そうに抱えていたキャリーケースが『中身』ごと粉々に砕けた。

「なぜ、それを壊す？」

「奴の狙いはこれなんだろうが。だったら先に壊してやればいい。元々、オレもこれを壊しに来たンでなア」

本当ならば、止めるべきだった。

どちらが善で、どちらが悪なのかはわからないが、あの少女の話も聞かずにケースを破壊するのはゼロには躊躇われた。

だが、目の前の少年を今は信じてみる事にした。

自分を助けてくれた子の少年を。

「いつつ……って、ケロオオオオオッ！！ なんて事してくれたケロかーッ！！」

痛みが引き、起き上がったバーブルは自身の狙いが完全に跡形もなく破壊された状況を見て、絶望したような表情になる。

「どうしようどうしよう。あの方に怒られるケロ……」

ぐぬぬ、と頭を抱えて悩むバーブル。

「後はアイツを壊せば終わりか……」

アクセラレータ 一方通行は目の前で唸っているバーブルを見据える。

「待て。あれは危険だ。オレがやる」

アクセラレータ 一方通行の前に出ようとするとするゼロだが、すでに体力は限界を超え、一歩足を前に出しただけで前のめりに倒れてしまった。

アクセラレータ その様子を見ていた一方通行は、

「……まさか、こんな所に『善人』がいるなんてなア」

アクセラレータ その眩きの意味はゼロにはわからない。だが、一方通行はそのままバーブルの方へと向かっていく。

「こうなったら、お前らを殺して、ゼロの首を手土産にするケロツ！」

バーブルの方もこちらを見る。

アクセラレータ その視界に一方通行の姿が入る。

「人間。まずはお前からケロツ！」

そして、先ほどと同じように舌がレーザーのような速さで撃ちだされる。

アクセラレータ だが、一方通行は動じない。それどころか、今までと変わらずただ前に歩き続けている。

真っ赤な舌が彼に届く寸前、彼は静かに首元のチョーカーについていたスイッチを入れた。

そして、バーブルの舌が襲い、

バーブルの舌が弾かれ、バーブル自身を吹き飛ばした。

「ゲロツ!?!」

バーブルは自分の舌を出したり引いたりして、異常がないか確認している。

「おい、三下ア」

なめるような声が響く。

闇の奥底から響く悪魔のような声。それを発したのは闇の中に佇む、白い、まるで天使のようにも思える一方通行^{アクセラレータ}だった。

「コンなんで終わりかア？」

バーブルは身震いする。

そして、同時に自分が人間に恐怖を覚えたという事実^{アクセラレータ}に戦慄する。
「後悔するがいいケロ！！」

バーブルが口を開けると小さなオレンジ色の芋虫が出てくる。

それを今度はバーブルが舌で捕まえ、口の中に入れるのではなく、食べる。

瞬間、

バーブルの姿が変化し、一方通行^{アクセラレータ}を超える大きさになる。

「死ねーっ！！」

さらに、バーブルは体を硬質化させ、ものすごい速さで転がる。

巨大な鉄球がまるでボーリングの球のように転がるのが一番近い情景だろう。

あれに潰されれば、人間などひとたまりもない。

だが、それでも一方通行^{アクセラレータ}は動かない。

動く必要などないと告げるかのように。

そして、ドガァン！！ という轟音と共に、

バーブルの体が、上空へと投げ出された。

「ケ、ケロツ？」

なぜ、潰れていないのか。なぜ自分は上空に居るのか。

なぜ、なぜ、なぜ。

そんな言葉だけがバーブルの頭を支配する。

下を見れば、一方通行^{アクセラレータ}が笑っている。

ぐちゃり、と顔を歪めて笑っている。その顔はまさしく悪魔。人のものとは思えなかった。

バーブルは心の底から後悔をする。

すぐに逃げなかった事を。自分の恐怖に従わなかった事を。
アクセラレータ

一方通行の軸足がドン！！と地面を踏みつける

固い地盤が激しく振動し、彼の身が低く沈む。彼の足を中心にアスファルトの道路に亀裂が走る。周囲のビルが軋んだ音を立て、地面の歪みに耐え切れなくなったように大量の窓ガラスが砕け散って、破片の雨をまき散らした。

そして、ダゴン！！という爆音。砕けたアスファルトをさらに踏みつぶし、アクセラレータ一方通行はロケットのように夜空を突きぬける。

アクセラレータ一方通行は能力名。

その能力はベクトル変化。

あらゆる力のベクトルを意のままに操る能力。

それが学園都市最強の能力者の力。

アクセラレータは飛ぶ。脚力のベクトル変化だけではない。その背には、巨大な暴風の竜巻のようなものが四つも接続されている。その姿を見る者の目には、それは奇しくも、天へと昇る天使のように見えた。

地の底に落ちて、どこまでも汚れきった天使が、天井の楽園に牙をむくような。

天使と悪魔。

アクセラレータその両方が一方通行に重なる。
アクセラレータ

一方通行は途中にあるガラスの雨の層を食い破り、バキゴキと壮絶な音と共に弾き飛ばし、もろともせず突破する。その皮膚に傷の一つもつけず、ただ真っ直ぐにバーブルの下へと砲弾のごとき速度で跳躍した。

彼の持っていた杖が握りつぶされ、その拳が握られる。

バーブルの顔が絶望に彩られる。
アクセラレータ

速度、重さ。あらゆる力が一方通行の拳に込められ、

「三下ごときが。調子にのってンじゃねエぞ！あの世までの一方通行の切符だア。ありがたく、受け取りやがれ！！」

そして、一方通行の拳がバーブルの体を食い破るように貫く。
グウェローツ！！ と濁った声と共に、バーブルの体が機能を停止する。

そして、

巨大な爆発が一方通行を包んだ。

だが、それすら彼には少しの傷も付けることができない。

その身に宿していた運動量を全て吐き出した一方通行はピタリと動きを止め、重力に引かれて暗い地面へと再び落下し始めた。

彼は、ゼロと結標がいる方を見る。

彼らにガラスの雨が降り注いだ様子はない。

それもそのはず。

アクセラレータ自身が風のベクトルを使って、彼らにふりかかるであろうガラスを全て吹き飛ばしていたのだ。

「確かにこのザマじゃ、学園都市最強は引退かもしんねエが」
静かに、目を細めて、

「それでも、俺はあのガキの前じゃ最強を名乗り続ける事に決めんだよ。くそつたれが」

誰ともなしに言った台詞は夜風に流され、彼は地上へと降りた。
彼にダメージは一切ない。

だが、再び地面が深くえぐれるように凹む。

「おい、大丈夫か？」

「ああ、問題ない」

ゼロはむくり、と立ち上がると、一方通行と向き合う。
一方通行は少しだけ驚く。

先ほどの様子だと、すぐには立ち上がれないだろうと思っていたのだが、以外とあっさりゼロは立ちあがっていたからだ。

「じゃあ、俺ア帰るぜ。じゃあな」

「一つ頼みがある」

「ンあアっ？」

ゼロが一方通行アクセラレータを呼び止める。

「今回のさっきのカエルみたいな奴とオレの事は秘密にしてほしい。頼む」

ゼロは頭を下げる。

それに、いかにもめんどくさいという態度を取りながら、

「別に誰にも言う気なンぞ、はなからねェんだよ」

その言葉に、ゼロはもう一度ありがとうと頭を下げる。

「ただし、取引だ。オマエも俺がここに居た事をだれにも言うンじやねエぞ。わかったな」

「ああ」

ふん、と鼻を鳴らすと、一方通行アクセラレータは夜の闇へと消えていった。

一方通行が消えた道を見ながら、

「オマエも、十分善人だと思うがな」

小さく呟いた。

そして、結標の方を見て、困り果てる。

すでに、自力で歩けるぐらいには回復しているが、人一人抱えてとなると、まだ不可能だった。

よって、その場に腰を降ろして、連れていけるようになるまで休む事にした。

そして、目を閉じて、先ほどのバールの事について考える。

バールは言っていた。『あの方』という言葉。つまり、レプリロイド達を仕切っている親玉がいるのだ。ゼロは一人だけ、そんな事をする者に心当たりがあった。

ドクター・バイル。

人でありながら、人を憎み、世界を滅ぼそうとした者。ゼロが元の世界で最後に戦った敵でもある。

（奴もこの世界に？　だが、奴はオレが倒したはずだ）

そんな押し問答を自分の中で繰り返していると、不意に足音が聞こえた。

目を開けると、闇の中から走ってくる誰かの姿が見える。そして、すぐにその姿を確認する。

向こうもこちらに気づいたらしく、急いで駆けよってくる。

「ゼロ？ 何やってんだよ、お前。てか、この状況は一体何!？」

そいつはゼロの隣人にして、友人。上条当麻だった。

翌日。午前中に上条当麻とゼロは学校に連絡を入れて遅れる事を告げると、とある病院にやって来ていた。今回は治療の為ではない。彼はどこも怪我をしていないのだから。

病院に来たのは白井黒子のお見舞いのためだった。

白井はゼロが結標達を見かける前に、結標淡希と戦闘を行っており、その際に大怪我を負ったのだ。

そして、上条当麻とゼロは喫煙スペースと自販機コーナーをあわせたような雑談場所で突っ立っていた。上条の頬には真っ赤な手形がついている。訪ねに行つて病室のドアを開けたら白井が着替えていたのだ。ゼロは一步退いた場所に居た為、見逃してもらえた。

病室から叩きだされた上条は、おそらく女性の着替えには少し時間がかかるだろうと推測すると、横でムカムカしていたインデックスと呆れていたゼロを引き連れて、同じ病院に入院している御坂妹に会いに行ったのだ。

妹と言っても、血のつながった姉妹と言う訳ではなく、御坂美琴の体細胞から作られたクローン。それが妹達^{シスターズ}である。

とある実験によって生まれた存在で、現在は世界各地に一人ひとりが散らばっている。

その内の一人、一〇〇三二号の事を上条は御坂妹と呼んでいるのだ。

そして、昨夜、上条は白井達を助ける為に奔走したわけなのだが、その事を教えてくれたのが御坂妹だった。

御坂妹は現在、前とは違う病室に居る。本来治療中であつた御坂妹にとって、上条の家まで行くという運動は結構危険なものだったらしく、今は、普通の病院ではまず見かけないような、SF的な強化ガラスのカプセルに満たされた透明な液体の中でふわふわと浮いていた。

カプセルの中の御坂妹は意識があるらしく、上条へとぺこりと頭を下げたが、そんな彼女は全裸に白いシールを張り付けただけのことでもない格好をしていて、そこではインデックスに思いっきり噛みつかれた。

ゼロと御坂妹はそんな事は気にしていないようで、ゼロは罪悪感からわずかに目線をずらしながら、初めまして、と挨拶をしていた。上条にとっては踏んだり蹴ったりな一日になっていたのであつた。そんなこんなで。

上条達は二つの病室を訪ねてから追い出されるように談話スペースに舞い戻ってきたのである。

「……、不幸だ。ただでさえ日常的に不幸な上条さんに不幸フィバー（確率変動）がやってきましたよ！　今なら怒涛の九連不幸とかやっても驚かぬぞ、神様！」
パーカ

修道女の前で、神様を平気でバカなどと呼ぶから不幸が来るんじゃないかと、ゼロは何度目かもわからないため息を漏らす。

インデックスは自販機についているルーレットに興味を示しながら、

「で、結局とうまは『それなら、今から残り半分を果たしに行こう』とか格好よさげな台詞を吐いておきながらあの後何の収穫もなかったんだね……」

「いやいやいや。白井の予測ルートをとどけてみたら、なんかもう全部終わってて、ついでに窓ガラスが全部割れてたりして、————どこのだれだけ知らないけどありがたいがとうって感じだぞ。あれ

って、ゼロじゃないんだろ？」

「ああ。オレがいたのは偶然だ。オレが来たときにもすでに全部終わっていた」

「とうま、とうま。普段はあんまり使わない日本語で言うね。この役立たず」

「いえーい！ 言われると思ったよ、ちくしょう！！ っつかどのどいつだ人の獲物を勝手に横取りして何も言わずに立ち去って行くなんてよお！ 一体どこまでお馬鹿に格好つけりゃ気が済むてんだー！！」

「正直、とうまみたいのなは一人で十分かも」

二人の漫才のような会話を聞きながら、ゼロは立ち上がり、自販機でジュースを買う。

すると、ピロリロリンという騒がしい音と共に、ルーレットが当たった事を示すマークが浮かぶ。

「インデックス。買っていいぞ」

やった！ という声と共に、ものすごい速さでインデックスは近づいてくる。

逆にゼロは上条の居る所まで戻る。

「で、結局あのキャリーケースの中身は何だったんだ？」

「えーと、なんか『残骸』^{レムナント}って言って、『樹形図の設計者』^{ツリーダイアグラム}はわかるよな？」

「ああ」

『樹形図の設計者』^{ツリーダイアグラム}。

学園都市の誇る超スーパーコンピュータみたいなもので、衛星として地球のまわりを回っていた。

しかし、

「それって実はもう壊されてて、その部品が入ってたらしいんだよ。で、それがあればこの街以外でも『樹形図の設計者』^{ツリーダイアグラム}の復元が可能らしくて、それでいろんな組織が狙ってたらしい」

ゼロはこの話を聞いて、あの白い少年が間違っていなかった事を

知った。何かはわからないが、彼にもなんとか止めたいと思う理由があったのだ。

ゼロは昨日出会った少年の事を考える。

まさか、その少年がすぐ近くの病室に居るとは知らずに。

学園都市の窓のないビル。

その中心の部屋に居る『人間』アレイスター。

その目の前のモニターにはゼロと『メルトダウナー原子崩し』の戦闘の様子。そして、学園都市に侵入したバーブルの姿が写し出されている。

「満足か？ アレイスター」

アレイスターの浮かぶカプセルの前に一人の男が立っている。

土御門元春だ。

「レムナント残骸の回収騒ぎに乗じて、ゼロを狙った科学者の行動。貴様ならば事前に止められたはずだろう」

アレイスターは表情を変える事もなく、

「アレの能力を把握しておくにこした事はあるまい」

ちっ！ と土御門は舌打ちする。

彼にも理解できていた。結局、どのような質問をした所で、はぐらかされるだけ。どのような質問をした所で、それは結局アレイスターの言うプランのため、なのだ。

土御門はアレイスターに背を向け、歩き出す。もう用は無いと、背中が語っていた。

土御門は振り返らないまま立ち止まり、

「アレイスター。ゼロの情報を流したのも、貴様か？」

返ってくる答えなど予想はできている。

そう。

「さあ。知らないな」

その答えを聞くと、再び土御門は歩き出す。目の前に外との移動のための空間移動能力者が現れ、それに連れられて、外へと戻る。

アレイスターは土御門がいなくなると、再び、モニターへと視線を戻した。

「もう少し、情報が欲しい所だな」
笑う。

アレイスターは楽しそうに、不気味に笑っていた。

天使と悪魔（後書き）

残骸編、終わりです！

残骸編が好きだった人。本当にごめんなさい。

美琴と黒子の出番は一切なくなりました。この話の主人公だったのに。

実はこれ、結構前から決めてた事です。

なんか、黒子のこの話にゼロが介入し過ぎるのは違う気がしたんです。

本当にごめんなさい。

この埋め合わせはどこかでしたいなあ、とは思っていますが……どうなるかわかりません。

平和な世界

九月十九日。

その日は学園都市にとっても、その外の者たちにとっても重要なあるイベントの開催日である。

すなわち、大覇星祭。

九月十九日から二十五日までの一週間をかけて行われる学園都市全体での大運動会。一言に運動会といっても、その規模は計り知れない。

学園都市に存在する学校の数 は数多で、生徒総数は百八十万人以上。

その人数に加え、大覇星祭の期間中は外の人間の出入りが自由となる期間でもある。つまり、商業的にも大事な時であり、なおかつ外の人間にとっては数少ない学園都市を生で見れるチャンスなのだ。だが、それも仕方のない事だろう。なにせ、テレビの中でしか見られない超能力なるモノを実際に自分の目で見られるのだ。

ゆえに、街は平日の朝であるにも拘らず、人でごった返していた。生徒達の父兄や観光客など数多くの人で、まるで電車のラッシュアワーのような状況になっていた。

そんな中を一人の少年が歩いていた。ゼロだ。

背中でくくった鮮やかな金色の髪やきつい目は、様々な人が行きかう街中でも異彩を放っている。

そんなゼロだがその服装はもちろん半袖短パンの体操服である。

学生という身分なのだからゼロも当然競技に参加するのだ。

ゼロは立ち止まり、空を見上げる。

空は変わらず青いまま。

だが、ひとたび顔を戻せば、今まで見た事もないぐらいの量の人

で溢れかえっている。それがゼロにとっては異彩で、異様で、異常でならない。思えば、最初にこの街で驚いたのも人の多さだった。彼にとって出くわすのはほとんどがレプリロイドの仲間たちであり、彼が交流した人間などごくわずかだった。

だが、その中でも様々な人間がいる事を知った。

レプリロイドに敵意を抱く者。好意を抱く者。どちらでもない者。そして、世界を守ろうとする者、世界を壊そうとする者。

どれも等しく人間だった。

その人間がこんなにもたくさんいる。そして、今日に映る人々も世界のごく一部の人間でしかないのだ。

なおかつ、これだけの人がいるという事は、

「平和、だな」

誰となしに呟く。

世界は今日も平和だった。

その事もまた、彼を戸惑わせる。

何度か事件に遭遇しはしたが、それもわずかの事。彼の居た日常は毎日が命のやり取りだったのだ。

平和。

ゼロが、そして彼の守ってきた少女がなによりも望んでいた事。それがここにはあった。

「……感傷的になり過ぎだな」

ゼロはふっ、と表情を一瞬崩すと、再び歩き始める。

「あっ、すいません。ちよっといいですか？」

急に横合いから声をかけられる。

そちらを見ると、そこには三人の男女がいた。見る限り、観光客というよりはどこかの生徒達の親に見える。

声をかけてきたのはその中に一人だけいる男性。三人の中では一人だけ少し年がかけ離れているように見える。

その隣には腕にバスケットを持った綺麗な女性が立っている。この二人が夫婦なのだろうが、ゼロにはどう見てもどこかのお屋敷の

令嬢と、その使用人にしか見えなかった。

もう一人いるのだが、そちらは「うーん、あれー？」などと唸って学園都市の案内用パンフと格闘しており、顔を窺い知る事は出来ない。

「この学校何ですけど、どこにあるかな？」

男性の方もパンフを持っており、こちらへと提示してくる。別に時間がおしているわけでもないので構わないと思い、男性の指差す学校の名を見る。

すると、それはゼロの通う学校だった。

「オレの学校ですけど」

男性達の顔がパツ、と明るくなる。

「それは良かった！ できればそこまでの道を教えてほしいんだけど」

ゼロは頷く。

ここから学校までの距離はそう遠くはない。口で説明すればすぐに着く距離だった。

ゼロが説明しようとした時、

「あら。あれは当麻さんじゃありません？」

その言葉にポカンとするゼロ。

女性の指差した方向を見ると、そこには生徒達の人混みがあり、その中に見知った顔のツンツン頭が見え隠れしていた。よく見るとその横にはランニングに短パンという本格的な格好の女の子がいる。というか、上条当麻と御坂美琴だった。

すると今度は、

「あっ。あれがウチの美琴です。良かった良かった。大学が忙しくて集合場所とかくくに話し合ってたから」

声の方向を見ると、そこには知り合いとよく似た顔の女性が立っている。

どこからどうみても、御坂美琴の関係者だろうと予測できた。お前らの家族はその顔しかないのか！ と、思わずツツコミを入れた

くなるゼロ。

シスターズ

妹達の事情は上条から聞かされたが、結局本当の家族も一緒なのかと脱力してしまう。

そんなゼロの耳に上条達の声が聞こえる。

間の雑踏で向こうからはこちらに気づいた様子はない。だが、余程大声で話しているのか、向こうの声は鮮明に彼らの下に届いてくる。

「ねえちよっと。アンタ結局赤組と白組どっちなのよ？」

「あん？　そういう御坂はどっちなんだよ？」

「赤だけど……。えっと、もしかしてアンタも赤組？　それなら合同競技とかあったら一緒に――――」

「ならばお前は敵だーっ！」

「えっ！？」

「見なさい！　この純白に輝くハチマキを！　貴様ら怨敵を一人残らず葬ってやるという覚悟の証ですよ！　チューガクセーだろうとコーコーセーだろうと知った事か！　ボッコボコに点を奪ってやるから覚悟せよ！」

「こ、この野郎！　そこまで言うからには覚悟しときなさい！　白組の連中なんて全員吹っ飛ばしてやるんだから！」

「はっはっはっ！　そんな簡単に人間が吹っ飛ぶと思ったら大間違いですよ！　っつか、お前に負けるような事があったら罰ゲーム喰らってもいいし！　何でも言う事聞いてやるよ！」

「言ったわね！　その言葉、忘れんじやないわよ！」

「まーア、常盤台のお嬢様ったら！　どうせ勝てもしないくせに希望ばかりは大きいです事！　その代わり負けたらお前も罰ゲームだからな！」

「ば、罰ゲームって……。つまり、その、な、何でも言う事を」

「あらア？　揺らいじゃうのかな、御坂さーん？　オネーサマが今ここで放った大口にはそれぐらいの覚悟しかなかったのかしら？」

「……良いわよ、やってやろうじゃない！　絶対罰ゲーム受けさせ

てやるんだから！」

「その言葉、いきなり敗北宣言してるようなもんですなあ！！」

何だと！！ という声と共にビリビリイ！ という雷撃音が鳴り響く。

だが、その事よりも、あまりにも想像とはかけ離れた子供達の会話に親達は固まったままだ。

上条の母親らしき人物は頬に手を当てて、

「あらあら、当麻さんったら。あんな年端もいかない女の子を言葉巧みに操りあんな無茶な要求を通らせてしまうなんて。一体誰に似たのかしら？ あらいやだ、母さん学生時代を思い出しちゃいそう」

上条の父親はズドーン、とショックを受けた顔で、

「そ、そんな。女子中学生に対して勝ったら何でも言う事聞かせるだなんて。一体どんなご命令を飛ばす気なんだ当麻ーっ！」

美琴の親族（姉？）はため息をつきながら、

「こいつらの影響なのか。ま、美琴には話を聞くとして、若いってどうか青いわねー……」

片手をおでこにあてて、もう一度深くため息をつく。

ゼロもまた同じようにため息をつきながら、

「よかったら今からアイツらに追いついて話してきましようか？」

それぞれ別の子の保護者達はゼロの方を見て、

「え？ もしかして当麻と知り合いかい？」

「美琴ちゃんとも？」

「当麻とは同じ寮です。御坂とは当麻繋がりで少し」

御坂にも色々^{シスターズ}と事件があったらしいが、詳しくは聞いていない。妹達の事情を考えれば予測はつくが、どうせいつものように上条が首を突っ込んで解決したのだろうと思っている。

「そうだったのか。初めまして、当麻の父の上条刀夜です」

「母の上条詩菜です」

「初めまして、赤谷零です」

お互いに頭を下げる。

だんだんと、この世界の一般常識を身につけつつあるゼロだった。

「初めまして。御坂美鈴。美琴の母です」

「初めまし……母？」

「ええ」

ゼロと刀夜は知り合ったばかり、なおかつ立場が子供の友達、友達との親という関係でありながら息ぴったりで顔を見合わせる。

「母あぁっ!？」

刀夜は大声で叫ぶ。まわりを歩きかう大勢の通行人がこちらを見る。

ゼロもまた同様に驚いた顔をしている。ゼロ達はてっきり美琴の姉だと思っていたのだ。

ゼロはなんとか平静を保ちつつ、

「それで、何を言えればいいんですか？」

当初の目的を果たすため、行動を始めた。

午後十時三十分。

ようやく開会式が終わった。

「暑あアあぁ……」

上条当麻が立っているのは、サッカースタジアムだ。特に部活動に力を入れている学校の設備らしい。どこにでもある普通の学校の生徒である上条からすればただの金の無駄遣いにしか思えない。

合成樹脂の人工芝もとけてしまいそうなほど厳しい残暑の中、様々な体操服に身を包んだ学生達は出口をくぐると、三々五々に散っていく。

上条は隣を見る。そこにはいつもと変わらぬ顔で歩くゼロの姿がある。

「なあ、ゼロ。お前暑くないのかよ」

「暑い」

即答だった。だが、どう見てもその顔は暑いと思っっている人の表情ではない。いつもと同じ無愛想な仏頂面をしている。

上条にはその事が信じられない。

大覇星祭の開会式は学園都市の三百カ所に分けられて同時に行われる。どれだけ広い設備を用意した所で百八十万人も生徒を収容できるスペースなど確保できるはずがないのだ。

そして、学校が多いという事は、

「この街の校長の数はもう少し減らすべきだと思う」

「そしたら学校も減るがな」

容赦のないツツコミが上条へと突き刺さる。

学校側としても厳選しているつもりなのだろうが、それでも『校長先生のお話』が長すぎる。というより、校長先生が多すぎるのだ。式の途中で倒れた生徒も何人かいた。

「何でそんなに涼しそうな顔ができるわけ？ もっとこうダラーツとなるもんだろ、普通は」

「別に砂漠のど真ん中や、溶岩が噴き出す場所の近くに比べればあれぐらいなんて事はない」

言われて改めてゼロの境遇を再認識する上条。

が、むしろそういう場所を常に渡り歩いていたという事実を想像して、余計に暑さが増した気がした。

ゼロだって、暑さを感じないわけじゃない。特に人間化した今、以前以上に暑いという事をより鮮明に感じし、今溶岩の近くなんかに行けば間違いなく死ぬだろう。

だが、そこは経験の為せる技。この程度ならば我慢するぐらいとうってことはなかった。

「とうまー。ぜろー」

と、不意に横合いから女の子の声がかかった。

そちらを向くと、そこには金の刺繍を施した真っ白な修道服を着

たインデックスが立っていた。

インデックスは胸のあたりに三毛猫を抱え、ぐったりしながら、
「どうま……私はお腹がすいたかも」

「もうかよ!? まだ午前中だし二時間ぐらい前に朝ごはんを食べ
たばかりでじゃねえか」

「オレもなんか食べたんだけど」

「俺のまわりはこんなのばかりか!」

屋台の誘惑と戦いながら、なんとか競技場へとたどり着いた上条
達だった。

ゼロは上条と別れてトイレへ行っていた。

インデックスはすでに競技場に入っているところだと思ふ。

ゼロは手を洗うと、クラスの連中が集合している場所へと向かう。

ゼロ達が一番最初から試合が入っていた。一回戦の競技は『棒倒
し』。学校同士、一学年の対戦と聞いている。

相手はスポーツ重視のエリート校らしい。

学園都市には『五本指』と呼ばれる学園都市屈指の名門校がある
らしい。事前に調べた去年までの成績でも上位五位はその五校が占
めていた。

そういう学校と出ないだけまだましと思うが、それでも勝てる見
込みは薄いと思う。

ゼロの学校は特徴のない平凡な学校なのだ。まわりの生徒達だっ
て、能力者だという感じは正直あまりしない。

だから、きつと負けるだろうと思う。それが客観的に見たゼロの
感想だった。

そして、集合場所へと着く。

そこに、かつて戦ってきた強者達と同様かそれ以上の気迫を見せる猛者達がいた。

なんだ？ と、ゼロは呆氣に取られる。

これから行われるのはたかが学校の競技なのだが、作戦を立てる上条達の顔は戦場へと赴く兵士そのものだった。

実はゼロが来る数分前に小萌先生と相手の学校の先生の間で論争があり、小萌先生が生徒達の為に涙を見せるというエピソードがあったのだが、ゼロはそんな事を知る由もない。

「ああ、赤谷。貴様は突撃班よ」

大覇星祭の実行委員の仕事もこなしている吹寄整理から急にそんな事を言われる。

『棒倒し』という競技の特性を考えれば言っている意味はわかるのだが、そのオーラの意味がわからない。

上条も、吹寄も、姫神も、青髪ピアスも、土御門も、他の生徒達も。

全員が本物の兵士のような気迫を身に纏い、まるで気合いを溜めているかのように静かな静寂があたりを包んでいる。

ゼロは居心地が悪くなって、もう一度トイレへ行こうとする。あのゼロさへも、逃げようと思うほどの気迫だった。

「どこへ行くんだにゃー？」

だが、土御門に肩を組まれ、逃げられなくなる。いつも通り殴ってしまおうかとすら考えたゼロだがさすがに自重する。

そしてそのまま、集合の時が来た。

大勢の観客でひしめく観客席。

上条は気づいていなかった（というよりそれどころじゃなかった）が、ゼロは応援席にいるインデックスの姿を見つけていた。予想通りぐったりと倒れている。

そして、なぜかその隣には美琴もいた。どことなく顔が赤くなっているようにも見えるが、遠くて上手く視認できない。

ゼロがフィールドに視線を戻すと、相手の学校の生徒達の姿が見える。

どの生徒も本格的な体操をしている。さすがはスポーツ重視の学校といった所だろう。

そして、こちらはというと。

全員が仁王立ちですでに用意はできているというような格好になっていた。

相手の学校の生徒達も明らかに少し怯えを見せていた。

そして、お互いの準備が整う。

パン！ という音が場内に響く。

瞬間、

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
！」

隣に居た上条がけたたましい声を出しながら、敵の方へと向かっていく。

上条だけではない。他の攻撃の役目の者達全員が声を張り上げ己を鼓舞して走り出す。

ゼロはそのあまりにも普段と違う光景に呆氣に取られて動く事を忘れてしまう。

少ししてから、ゼロは自分の役割を思い出し走り出す。

お互いの陣営までは約八十メートル。

ゼロの足ならばそう大した時間はかからない。だが、これはあくまで競技。しかも、能力者同士の戦いなのだ。

ゼロは今初めて、大覇星祭の壮絶さを知る。

向こうからは火炎や爆発系の能力者の能力を圧力系の能力者によって弾のようにした遠距離攻撃や、他にも風など様々な能力を駆使してこちらの動きを阻害する。

対して、こちらの陣営からは念動力テレキネシスを主体とした攻撃を放つ。砂埃を纏い、砂の矢のようにもなった能力がこちらへと襲い来る相手の動きを阻害する。

ゼロは一切臆す事なく、弾丸の嵐の中を進んでいく。

すると、青髪ピアスが前から吹き飛ばされてくる。が、すぐに味方の能力によってキャッチされる。

「おう、赤谷やないかい。こんなところで何しとん？」

「……見てわからないか？」

「それもそうやな。さあ、共にあのお高くとまったエリート集団の鼻っ柱を折ったろやないか！」

そんなあほ事を言いつつもしっかりと攻撃をかわしている青髪ピアスにゼロは内心感心する。それを言葉にする事はないが。

だが、

「ぎゃああああああっ！！」

ゼロと青髪ピアスの目の前に着弾した爆発弾により、またも青髪ピアスは後ろへと吹き飛ばされていく。

観客達は逆にその様子に歓声をあげている。

「気楽なもんだ」

やっぱり平和だと思う。

だが、それはやはり素晴らしい事なんだと思う。

「仕方ない、な」

ゼロも決意を固める。今だけは上条達の思いに付き合ってやろうと思う。本気でやるのだ。

ゼロは先にも上条が突撃していた棒へと向かう。

棒の周りには多くの生徒がいて、上条も攻めあぐねていた。

ゼロは一番層の薄くなっている場所を探す。

その間にも攻撃をされるが近くでは爆発系の能力は使えずなかな

か、まわりに来たゼロ達を相手も引き離せないようだった。

上条はゼロにアイコンタクトをして、一気に特攻を仕掛ける。

瞬間、わずかだが他よりも棒に近い、腕を伸ばせば届きそうな距離になった部分が偶然にもできた。

そこへゼロは突入する。

棒と自分の間にある人をかき分け、なんとか左腕が棒を掴むことに成功する。

そしてゼロは、

「ロックオン レフトアーム」

ゼロは大勢の観客がいるなかで腕をロックオンする。

だが、ロックオンした左腕は棒を守る相手側の生徒達によって隠され、さらに缶詰め状態の相手からもばれる事はない。

そして、ゼロは左腕に一つ武器を持つ。

ゼロナックル。

腕型の装備で、その本質は敵の装備を奪う事。敵を破壊すると同時に敵の部品を取り込む事でその敵の攻撃手段を使えるという武器だ。

だが、これは『取る』、すなわち『引く』力に優れている武器である。

よってゼロは、ゼロナックルで掴んだ棒を思いっきり自分の方へと引き寄せる。

ゼロと棒の間に居た人たちは横へと押され、棒を支えていた人たちの手からは棒が離れ、棒がゼロの腕だけで支えられる形となる。引っこ抜かれた腕はすでにロックオンを解除している。

あまりにも想定外の出来事に啞然とするまわりの生徒達。

上条でさえ、はあっ！？といった顔をしている。

その目の前で、ゼロは持っている棒を地面へと叩きつける。

ドン！！ という音と舞い上がる砂埃と共に棒が地面に横たわる。

「次だ!!」

ゼロは上条に支持を出す。

一つの棒を倒せば、別の棒を狙う人を増やすことができる。もちろん敵も増えるが、早くに攻めれば優位に立つことも可能だ。

はっ、としたように急いで別の棒へと向かう上条。それを見た相手も急いで別の棒を守りにいく。

だが、瞬間、ゼロが頭に声が響きその場を飛び退くと、盛大に爆発が起き、今まで少ししか舞っていなかった砂埃が一気にその量を増やす。

これこそ吹寄の考えた作戦だった。

彼女はスタイルも良く美人なのだが『対カミジョー属性完全ガードの女』などと呼ばれるほど堅物でもあり、かなり大胆な作戦を立てる。

要は土埃にまぎれて、敵の棒を倒す作戦なのだ。本来、砂煙をあげにくくするために、水が事前にまかれていたのだが、中からえぐるようにして砂を巻き上げた為、大きく土埃が舞う。

もちろん、このチャンスを逃すゼロではない。

再び手をツツコミ、ナツクルを装備すると、一気に引きずり出す。その棒を守っていた人達は急に支えがなくなった事でバランスを崩し、ドミノ倒しのように倒れてしまう。

悪い事をしたと思うが、そんな事を考えている暇もなく、頭の中に声が響く。

撤退命令だった。すなわち勝ったのだ。

ゼロもまさか勝てるとは思っていなかった。なにより、自分がここまで力を使うとは微塵も想定していなかった。

終わって初めて、自分のやった行為に危機感を感じる。大覇星祭の空気で自分も少し浮かれているのかもしれないと思う。

初めてできた『楽しい』と思える場所だった。だからこそ、なんだと思う。

ゼロがそんな気持ちで自陣へと戻ろうとすると、足がドン！と

何かを蹴る。

足元を見ると、そこには上条が転がっていた。

「……何をしている？」

上条は呻きながらも、

「う、うう……テレパシー念話能力が俺には届かないから、土煙をあげるタイミングがわからなくて……ふ、吹っ飛ばされた」

ガクツ　と頭を伏せる上条。

ゼロはその手を持って立ちあがらせてから、一緒に自陣へと戻る。そして、仲間達と勝利の喜びをわかちあう、事はなく、ただ淡々と挨拶をすませると、そのまま選手用出口から校庭の外へ出る。擦り傷だらけにもかかわらず、猛者達は一言も話さない。

すると、外では小萌先生が救急箱を持って待機していた。だが、その目は涙で潤んでいる。

「ど、どうしてみんな、あんな無茶してまで頑張っちゃうのですかーっ！　大覇星祭はみんなが楽しく参加する事に意味があるのであって、勝ち負けなんてどうでもいいのです！　せ、先生はですね、こんなボロボロになったみんなを見ても、ちっとも、ちっとも嬉しくなんか……ッ！」

ゼロはその姿にこれが先生なんだ、と尊敬の念を抱く。だが、何も語らない。

他の生徒達も同様に、それが美学であるかのように何一つ語らず、その場をあとにする。

少し行った所で上条は、

「じゃあ、オレはインデックスを探してくるから、ここで待っててくれ」

「ああ。早く戻ってこい」

ゼロは近くのベンチに腰をかけると、本日二度目、再び空を見上げる。

そこには青い空が広がっていた。

平和な世界（後書き）

ゼロの言っている通り、平和な回になってます。

暗躍する方々を出す気なんて微塵もありません。

次からは、しっかり暗躍する方々も出て来ますので心配は無用です。

次いつの更新になるかは分かりませんが、いつも通り、できる限り早く更新したいと思います。

屋台で食事

「これ学園都市、ね」

一般来場客が大覇星祭中行き来するゲート。それを見ている一人の女性がいた。

周りの学園都市に入ろうとする来場客はその姿を見た瞬間にその異様さに驚き、気にかける。

だが、別に女の姿に気を取られるわけではない。女の容姿は一瞬でまわりの目を引くほど美麗でありスタイルも良い。だが、まるでそれをあえて壊そうとするかのように工場の作業着のような服を着ている。

だが、その格好もさることながら、それ以上に目を引くのはその手に持つ物。

女の身長ほどもある大きな布でぐるぐると巻かれた、看板のような物をその手に持っている。

しかし、女にそれを気にするような様子はない。まわりの目などに気にせず、というより気にされても構わないというように人垣を進み、ゲートへと近づく。

大覇星祭中は警備強化の一環で、ゲートには多数の警備員が配備アンチスキルされていた。といっても、警備強化である事は伏せ、公式的には交通整理の為となっている。

大覇星祭は学園都市のイメージアップのための行事である。

いくら学園都市が閉鎖された街とはいえ、ある程度の情報を流さないで世間の評判が落ちてしまう。それを避けるための発表会みたいな物なのだ。

そして、学園都市の研究内容を一般客に見せるわけにはいかないため、そういう所にはしっかりと警備がはられている。だが、それを明かせばイメージダウンにも繋がりがかねない。よって自然と、警

備は人にばれないようにする、というのがルールになるわけである。ゲート前に配備された者達の仕事。それは交通整理と、不審者を見つける事。

この機に学園都市の技術を盗もうと送り込まれるスパイも少なくはない。学園都市のみが開発した技術。超能力。国、企業、大小問わず、あらゆる組織がその技術を欲しているのだ。

一人の警備員アンチスキルが女を視界に捉える。

瞬間、その警備員アンチスキルの目つきが鋭くなる。明らかに女を警戒している顔だった。

だが、同時に女もそれに気づいている。しかし、その事を気にする様子はない。今まで同様、普通に歩いてゲートを目指す。

女がゲートの前に来ると、

「すいませんが、」
警備員アンチスキルが声をかける。

だが、女はまるで聞こえていないかのようにその言葉を見無視して、ゲートをくぐる。

そして、女が警備員アンチスキルの真横を通り抜ける。

その態度にイラッとした警備員アンチスキルは、女を捕まえようと振り向こうとし、

止めた。

それ以降、女の事を気にする事などなく、その警備員アンチスキルは自分の仕事に戻る。

女もその様子を気にする事はない。

よく見れば警備員アンチスキルだけではない。女の事を気にしていた人達も、女が背を向けた瞬間にその姿を追わなくなる。

女は不敵に笑う。

すると、ズボンのポケットから無造作に何かを取りだす。

一見すると、それは暗記用の単語帳に見えた。だが、そこには何

も書かれていない。白紙のままだ。

女はその一枚を口ではさみ、リングから無理やりちぎり取る。すると、白紙だった紙に文字が浮かび上がる。

女は単語帳をポケットに戻して、その紙を拳で握りしめる。

『学園都市への潜入は成功しましたか？』

女の頭の中に直接響く形で声が届く。向こうも女の声だった

『もっしろくん。お姉さんを誰だと思ってるの？』

対する女も口を一切動かさず相手へと言葉を伝える。それはさながら念話能力テレパシーのようだった。

『それでは、よろしく頼みましたよ。オリアナ』

ええ、と一言だけ返すとオリアナは拳に握っていた紙を近くのゴミ箱に捨てる。その紙にはすでに何も書かれてはいなかった。

女は足を止めて空を見上げる。

「失敗なんてしないわ。それで世界が幸せになるなら」

遅い。

ゼロはそう思う。

上条がインデックスを探しにいくと言ってから、もうすでに随分時間が経っている。

上条がゼロを待たせて放っていくとは考えにくいから、どうせまた何か不幸な事に巻き込まれたんだと考えていた。

立ちあがって自分も探しに行こうとして、

足元に白いシスターが倒れていた。

「インデックス！ 何があった？」

ゼロはインデックスを抱きかかえて問いかける。場合によっては急がなければならないかもしれない。

ついさっきまで平和だと思っていたのに、とゼロは少し残念な気持ちになるがそれどころではない。

インデックスはわずかに口を開き、

「お……」

「お？」

「お腹減った」

世界は平和だった。

競技前に上条にお弁当を買ってもらっており、ゼロの見ていた限りだと美琴からも何か貰っていたようなのだがそれでもまだ足りない、否。すぐにお腹が減るらしい。

ゼロは一瞬で脱力してしまい、インデックスを支えていた手から力が抜けてしまう。

当然、抱えられていたインデックスの上半身は落ちるわけで、

「痛ーっ!？」

空腹状態からなんとか覚醒したインデックス。両手で頭をさすっている。

インデックスに抱えられている三毛猫は『やっと息ぐるしさから解放されましたよ』と言わんばかりに荒い呼吸をしている。

「すまん」

「すまんじゃないんだよ！ 人がお腹を空かしているというのに、さらにそこに痛みを与えるなんて！ これはもう拷問なのかも！」
憤慨するインデックス。

それでも上条に対するみたいに噛みついてこないだけマシなんだろうと思う。ゼロがもし上条だったならば躊躇なく噛みつかれていただろうから。

それもまた愛情の証か、とゼロはこんな状況でも少し微笑ましくなる。実際に微笑む事はないが。

「それでインデックス。当麻には会わなかったのか？」

「うん。会わなかったよ」

すぐに返答するインデックスだが、その瞳はわずかに寂しそうだった。

これなら場所を伝えておけばよかったと、後悔するゼロ。

観客席に居た事を伝えておけばこんなことにはならなかったのではと思う。

だが、後悔先に立たずである。

仕方なくゼロは携帯を取り出そうとして、教室にある事を思い出す。

「インデックス、携帯を貸してくれ」

「うん、いいよ」

上条が契約したというインデックスの0円携帯を借りて電話しようとする。

携帯をうけとるが、その画面は真っ暗なまま。一向に電源がつく気配がない。

「インデックス。これ、充電してるか？」

？ といった感じで首を傾げるインデックス。

ゼロははあっ、とため息をつく。携帯は電池切れだった。

なぜここまでインデックスは機械に疎いのかと思う。ゼロだって別世界の住人でこちらに来るまで携帯なんて物は知らなかったが、それでもすぐに扱う事ができた。

（魔術師全員がこれなのか？）

だとすれば、ちよっと面白いかもしれないと思う。

ステイルや神裂が機械で慌てふためく様子は想像するだけで珍しく笑いがこみ上げそうになる。

そんな事をしていて、

「あーっ！ いるじゃねえか！」

まわりを歩き交う人の流れも声のした方を何事かと注視する。ゼロとインデックスもまたそちらを向く。

その声の主————上条当麻はというと、大股でゼロ達の方へ

ドスドスというような音が鳴りそうな歩き方で歩いてくる。

そんな上条の歩き方を無視してゼロは、

「遅い」

インデックスを探しまわり、携帯にかけようと思って教室に取りに行ったら吹寄と一悶着あり、なおかつ結局インデックスには繋がらず一旦戻ってきたらすでにインデックスがいたという状況で放たれた一言は上条へとトドメをさした。

まるでさっきのインデックスみたいな恰好で倒れこむ上条。両手をあげて何に対してか降参の意を示す。

「とうま、私はお腹が空いたんだよ」

不幸だ、という声が小さくだが聞こえた。床に向けて上条が放ったのだろう。

上条はゆっくりと立ち上がり、

「行こうか」

少々元気なさげにそう言った。

「行くってどこへ？」

「うーん。とりあえず屋台エリアかな？」

瞬間、一瞬で目を輝かせるインデックス。

なんだかんだ言いつつも結局上条は割とインデックスには甘いのだ。

次の『大玉転がし』までは少し時間があるため、行く時にも通ってきた屋台エリアへと向かう。

「当麻、金は大丈夫なのか？」

「まあ、ゼロにもよく奢ってもらってるし、結構残ってるぞ」

最近では食費よりも怪我の治療費とかの方がかかっていたりする。だが、

「屋台、屋台、屋台！」

インデックスの楽しそうな顔を見てわずかに思う所のあるゼロ。

「この様子だと屋台の飯全部食べそうなんだが」

その言葉に確かに、といった顔をして、上条はだんだんと心に大

きな不安の穴ができてくる。

と、三人は横断歩道に差し掛かった。

基本的に学園都市内での移動方法は徒歩だが、全く車両がないわけでもない。

自律バスやタクシー、運搬トラックなど業務用車両は運航している。そのため完全に歩行者天国にする事は出来ないのだ。

この表通りを渡れば屋台エリアの為、すでに上条達の下には食欲をそそる匂いが届いている。その匂いについて上条とゼロもお腹が空いてくる。

信号が青に変わり、インデックスの体から発せられるキラキラ具合が本年度最高潮に達し、

ガラガラガラガラと、

学園都市の治安を守る警備員アンチスキルさんが、通行止めの看板を持ってきた。

「あー、ごめんねえ。ここ、もうすぐ吹奏楽部の複数校合同パレードが始まるじゃんよ。そろそろ人の流れをせき止めておかないと整備が間に合わないじゃん」

その警備員は二週間ぐらい前にお世話になり、ゼロにとってはその後にもお世話になった女性だった。黄泉川という名前だったはずとゼロは記憶の中から相手の名前を掘り出す。

今日は学校で見かける時の緑のジャージではなく、黒を基調とした警備員用の正規装備で身を固めている。

折角スタイルいいのにどうしてこの人はそんなのばかりしか着ないんだろう、と上条は思う。

上条は通行止めの看板と横断歩道の先を交互に見て、

「あの一。あっちに渡りたいんですけどどこまで迂回すりゃいいんですか？」

「ありゃ。大規模パレードだから直線で前後八キロぐらいのコース

は通行止めじゃん。この辺は歩道橋もないし、方法として、一番近いのは西に三キロある地点の地下街じゃん」

さんきろ……っ！？」と上条は絶句する。

左隣を見ると、そんなに歩けん、という顔をした暴食シスターが空腹に耐えかねて、今まさに無言で崩れ落ちる瞬間だった。

さらに右隣を見ると、そこにはいつも通りの仏頂面ながらも明らかにがっかりしているゼロの姿があった。

最近、上条にも徐々にゼロの感情が読めるようになってきた。わずかにしか動かない表情も慣れれば意外と変わる様に見える物なのだ。

すると、インデックスは通行止めの看板にしがみつく。

渡ってはいけないのはわかってはいるけど渡りたい。その気持ちと戦っているようだった。

上条はそんなインデックスの肩に手を置き、

「インデックス。他にも屋台の場所はあるんだしさ。ここにいても匂いで辛いだけだから他をあたろうぜ。な？」

「う、うう。手を伸ばせばそこにある未来なのに、決して掴む事は出来ないだなんてーッ！！」

妙に詩的な事を叫ぶインデックス。

黄泉川もバツが悪そうな顔をしているが、規則は規則なため通すことはできないらしい。

「当麻」

後ろからゼロの声が届く。

「な、何だよ？」

後ろを振り向き、ゼロの様子にえ？ となる上条。

さっきまでののがっかりオーラはどこへやら。今度は明らかな不機嫌オーラを放ち、通りの先を見ている。

上条はゼロもまたかなりの食事好きという事を今更ながらに思いだす。

どうやらゼロは上条が思い描いていた以上に、屋台を楽しみにし

ていたらしい。

「通るのがなしなら、飛び越えるのはアリか？」
本気の目だった。

ゼロは本気でこの歩道を飛び越えるつもりだった。
確かにゼロが力を出せばそれが可能であろう事は上条にも予測がつく。が、そんな事になれば今、そして後々騒ぎになるのは明らかだった。

「ナシだ！ 別の屋台に行くぞ！」

「その屋台だが。ここから一番近いのは西へ三キロの地点だ」
西へ三キロ。すなわち、地下街の入り口と同じ場所。

「マジ？ じゃあ、屋台は次の競技が終わった後だな。どう考えても間に合わなくなる」

ブチッ、と何かが切れる音がした。

恐る恐る上条が振り向くと、そこにはギランと光る歯を覗かせるインデックスの姿があった。

「え、ちよつと待て。何でここでお前が俺にキレちゃうわけ！？
どう考えても今回は私めは悪くないと思うのですがーっ！」

当然の正論である上条の言葉にも一切耳をかさず、インデックスは飛び付く。その速度は警備員アンチスギルの黄泉川すら反応できない速度だった。己の運命を悟った上条は身構えるが、

彼の姿が高速でぶれる。

がちん、とインデックスの歯が何もない所を噛んだ。

あれ？ という表情を浮かべる少女。これまで噛みつきの命中率及び撃墜率は共に百パーセントの制度を誇っていたのだ。

だが、外した所で無理はない。

なぜなら右から勢いよく突っ込んできた御坂美琴が、上条の首根っこを捕まえて、高速で左へと消えていったのだから。

「おっしやーっ！ 捕まえたわよ、私の勝利条件！ わははははは

「っ！」

「ちよっ、待っ……ぐるじい！一言ぐらい説明があっても……ッ
！！」

呆然とするインデックスの前で二人の姿が人混みに紛れていく。
その背を見ながらインデックスはぐったりと倒れこむ。

「大丈夫か？」

ゼロが声をかけるが返事はない。

美琴はどうせ何かの競技の最中だろうと思う。

ただ、叫んでいた勝利条件が上条というのは気になるが、気にしても仕方ないと割り切る。

「インデックス。オレが走って何か買って来てやろうか？」

インデックスと一緒にに行けば時間がかかるが、ゼロ一人だけならば本気で走れば、三キロぐらいならば、そう時間をかけずに戻ってくる事ができる。

瞬間、

インデックスはゼロの目でも追えないほどの早さで立ち上がり、

「うん！」

満面の笑みで答えた。

「じゃあ、ここでおとなしく待ってろ」

ゼロは黄泉川にインデックスを見てくださいと頼んだ後、急いで別の屋台へと向かった。

その目は本気だった。

インデックスの為、ではない。

もちろんそれもあるのだが、それだけではない。

ゼロはただ純粹に、自分も屋台のご飯を食べてみたかった。

屋台で食事（後書き）

ちよつと後悔しています。

ゼロを食事大好きにしすぎた気がします。

元々、レプリロイドの食事なんてないのと同義なので、憧れから好きになるだろうと思って付けた設定ですが、ここまでは予想してなかった。

嫌な方もいるでしょうが、なんとかお許しただけると幸いです。
というか、もう気にしないでください。

日常に潜む非日常

大覇星祭中により人で溢れかえっている道を、すいすいとゼロは人と人の間を通り抜けていく。

その手にはタコ焼き、焼きそば、お好み焼きなど、両手一杯に食事が積まれていた。

先を急ぐゼロの耳に近くのホテルのモニターから音声が流れてくる。
『四校合同の借り物競走でしたが、やはりというか期待を裏切らないというか、常盤台中学の圧勝でした』

常盤台という言葉にピクツと眉が動く。上条を連れ去ったのは誰で、その人物はどこに学校だったかを思い出す。

そちらへと意識を向ける。もちろんまわりの人に注意しながら。人にぶつかったりしたら大事だからだ。

ただし、食料が無くなるという意味が大きい。

人に迷惑をかけるのも嫌だが、あの暴食シスターの倒れている姿を想像すると、そちらの方が気になってしまう。

『一位を獲得した御坂美琴選手はゴール後も体勢を崩す事はなく、まだまだ余力を感じさせる姿を見せてくれました』

今度は立ち止まってビルに設置されている巨大なモニターへと視線を移す。

そこには、汗をタオルで拭いている御坂美琴の映像が映し出されていた。

そして、映像が切り替わり、

『一緒に走ってもらった協力者さんを労わる所も好印象でしたね。』

この辺りが名門常盤台中学の嗜みと言った所でしようか』

今度は美琴が男子生徒と一緒に居る姿が映し出される。

走っている映像、汗を拭いてもらっている映像、そして、美琴が口をつけたスポーツドリンクを貰っている映像。

見事に上条当麻と一緒に居る映像が映し出されていた。

「あんな所に居たのか」

やっと上条が連れ去られた理由が判明し、一人納得するゼロ。インデックスには言っても納得されないだろうが。

すると、

「こ、殺す！ あの類人猿めーっ！ きーっ！！」

「ちょっ！？ 白井さん！？ 大怪我なのに、どうして立ち上がれるんですか！？」

聞き覚えのある声が聞こえた。

この前に見舞いにも行ったツインテールの少女と、花飾りを頭につけた少女の姿が思い浮かぶ。

ただし、ツインテールの方は異常なほどに美琴を溺愛していた覚えがあるので、

「行くか」

とりあえず無視して早くインデックスに食事を届ける事にしたゼロだった。

少し走ると、すぐに白い修道服が見えた。

その近くには、黄泉川の姿も見える。

インデックスがゼロがいなくなった後、道路に（空腹で）倒れこんでしまった為、傍についていたのだ。

「インデックス」

ゼロが呼ぶと、インデックスは顔をあげる。

瞬間、ヒュバツ！ という風を切る音と共に、ゼロの手の中にあつた屋台の食事の数々がインデックスに奪われる。

その速さから、どれだけお腹が空いていたのかが容易にうかがえる。

ゼロはなんとか自分の分を確保すると、インデックスの横に立って食べる。

黄泉川はその様子を微笑ましそうに見ていた。

インデックスは焼きそばを口の中いっぱい頬張りながら、

「へお、はいあろう」

「口の中の物を全部食べてからでいい」

インデックスはごくくんと一気に焼きそばを飲み込むと、

「ありがとう！」

嬉しそうに笑った。

ゼロもそれに笑い返す。

「でも、とうまはどこに行っただろう？」

それなら、とゼロが言いかけた所で、ゼロの携帯からメールの受信音が鳴った。

ゼロは携帯を開いて、メールを確認する。

予想通り上条からだった。

「とうまから？」

コク、と頷くとゼロは内容を読む。

そこには短く、

『インデックスにはばれないように、ここに来てくれ』

メールには一緒に地図が添付されていた。おそらく記されている所が上条の現在地なのだろう。

ゼロはしまったと思う。

もう少し早く見ていれば、上条からのメール自体をごまかせたの
にと思う。

「とうま今どこにいるの？」

「もうすぐこっちに来るそうだ」

嘘だ。

むしろこっちが行かなければならない。

上条は不幸な少年で、すぐに事件に巻き込まれる事はゼロもすでに知っている。だからわかる。

インデックスを連れて来るなど言ったということは、間違いなく何かあったのだ

ゼロは携帯をしようと、

「ちょっと、トイレに行ってくる」

「わかった。ここで待ってるね」

ゼロはインデックスから離れると、もう一度携帯を取り出す。

かける相手は——

『はい。月詠ですが、どちら様ですかー？』

ゼロは学校への入学当初、

『いつでも先生の携帯に連絡してくれていいですからねー』という台詞と共に、強制的に小萌先生の携帯番号を登録させられていた。

小萌先生は生徒の事をよく考えてくれる先生で、ゼロも尊敬している。

ゼロに番号を教えたのもその性格からで、ずっと寝たきりだったゼロ（という設定）を案じての事だった。

要は、寂しかったら電話してきてね、という訳である。

もつとも、上条やインデックスがいた為、今まで使う事は一度もなかったのだが。

一度その事で『先生お邪魔でしたか？』と、本気で泣きそうな目で言われた事があったので、ゼロは尊敬しながらも、小萌先生を少し苦手としていた。

「小萌先生、頼みがあるんですが」

『その声は赤谷ちゃんですかーっ！？』

嬉しそうに声をあげる小萌先生。

初めてゼロが電話してきてくれた事がよほど嬉しかったようだ。

「そうです。それで今から言う所にインデックスがいるんで面倒を見ておいてほしいんです」

自分でも敬語が随分使えるようになったものだと思ふ。

以前はそんなものを使う相手自体いなかったたので、使い始めた頃はかなり違和感があった。

『シスターちゃんですかー？ それはいいですけど————上条ちゃんはどうしたんですかー？』

「すぐに戻りますんで」

場所を言って、小萌先生の了承の言葉を聞く前に、すぐに電話を

切る。

そのままゼロは走り出す。

ゼロが小萌先生にインデックスの事を頼んだのは、ある種の確信をすでに持っていたからだ。

上条はすぐにはインデックスの下に戻れないし、自分も忙しくなるであろう事に。

ゼロの耳に『音』が聞こえた気がした。

何かが崩れていく音————平和が遠ざかっていく音が。

ゼロが言われた場所につく。そして、すぐに上条を見つける。

だが、それは上条が見つけやすい場所に居たからではない。彼の近くに人でごった返す今の学園都市内でも間違いなく目立つ格好をした人物が立っていたからだ。

ステイルⅡマグヌス。

イギリス清教必要悪の教会所属の魔術師の姿があった。
ネセサリウス

さらには土御門元春の姿もある。

これだけの面子がそろえば、何かあるのは間違いなかった。

ゼロは苦い顔をしながらも、三人に近寄った。

「来たか」

土御門がゼロに気づき、他の二人もゼロの存在を認識する。

「悪いが次の競技まで時間がない。会場に行きながら話すぜい」

土御門は次の競技場所の方向を親指で、似合わないくせにキザつたらしく指指す。

ゼロと上条の二人は頷き、ステイルは興味無さげに、妙にそわそわとしている。

「じゃあ、僕は行くよ」

ステイルはそれだけ言うと、さっさとゼロ達から離れていく。

「何だステイルの奴？ 便所でもしたかったのか？」

「違う違う。アイツ、学園都市内じゃ、路上で煙草が吸えないからイライラしてんだにゃー」

「それ以前に、あいつ未成年じゃねえか……」

呆れながらも、三人は次の競技場へと向かう。

「それで、何があった？」

ゼロの問いに、土御門がにやりと笑う。

「察しが良くて助かるぜい」

白々しい、とゼロは思う。

神裂火織やステイル、天草式と出逢う切っ掛けは誰だったか。

だが、ゼロは何も言わず無視する。その反応は正解だろう。土御門にその事を言った所で茶化されるのがオチだっただろうから。

「学園都市に侵入者だ」

「この機に乗じて、か」

「いやー。カミヤんとは違って、本当に察しが良いにゃー！」

「うるせえ！ ほっとけ！」

すねる上条を尻目に二人は話を続ける。

「大覇星祭の期間を利用して、学園都市で取引をしようとしている魔術師達がいる」

「達、と言う事は敵は複数、という訳か」

「ああ。確認されているのは二人。ローマ正教のリドヴィアⅡロレンツェッティ。それにそいつが雇った運び屋オリアナⅡトムソン。両方女だにゃー。……残念ながら、取引の相手の確認はできてないが」

運び屋なんてわざわざ連れて来ると言う事は、かなり大きな取引なのだろうと思う。

そして、土御門はこの学園都市が最高の取引場所だ、と言う。

学園都市の人間は魔術側の人間を攻撃できず、魔術側の人間はむやみに学園都市へ来る事ができない。ステイルは『上条当麻の知り

合い』という事で来ているらしい。それぐらいしか、魔術師が学園都市に入る術がないらしい。

ゆえに、学園都市は逆に安全な場となってしまうていた。

ゼロは周囲をひそかに見渡す。

先ほどから、こうしてゼロは周囲を気にしていた。

食料を運んでいた時のようなものではない。もっと鋭く、もっと細かい。

こちらに敵意や恐れを向ける者、誰にも気づかれないように歩くうとしている者。

向こうもプロなのだから、それぐらいで見つかると思ってはいない。だが、今できる事を精一杯やる。それがゼロにできる唯一の事だった。

「それで、取引の内容は？」

「霊装さ。だが、ただの霊装じゃない。かなり重要で、そして強力なモノだ」

土御門の言葉が真剣味を帯びる。

「名は『スタブソード刺突杭剣』っていうらしいぜい。そいつの効果はな――――

――――

ゼロ達は次の競技である球転がしの会場に着く。

会場の近くでは、すでに他の生徒達が思い思いの行動をとっていた。

そこはいつもの日常。だが――――

「――――あらゆる聖人を、一撃で即死させるモノらしいんだとよ」

彼らはまだ、日常には戻れない。

球転がしも見事に勝利を収めたゼロ達は、競技場を後にしながら、路上で会話を進めていく。

「『^{スタフノード}刺突杭剣』、だっけ？ 何でそんな物の取引をするんだよ？」

「そりゃあもちろん戦争だろうさ」

ゼロの目が見開かれる。

戦争。

エックスはゼロが自分と共にイレギュラー戦争で戦ったと言っていた。

ゼロの世界の現状も、イレギュラー戦争によるものだったと言う。戦争の二文字がゼロの頭の中で反響する。

「ゼロ、どうかしたか？」

上条に言われて初めて、自分が頭を押さえていた事に気づく。

「……何でもない」

納得できないながらも、身を引く上条。

「そう言えば、インデックスもこの事は知ってたのか？」

「今回は禁書目録は使えない。事件の情報を与えるのも厳禁だ」

あまりにあっさりとインデックスを切り捨てた事に驚く上条とゼロ。

彼らの中で、インデックスは最も身近な魔術師であり、それでもつとも魔術に詳しい者、という認識なのだ。

「外には学園都市に潜入したがつている魔術組織なんて、吐いて腐るほど存在する。そして、そいつらはこの学園都市に網を張ってるのさ。学園都市内で魔力を感知すれば、すぐにそれを大義名分に侵入しよう、ってわけだぜい」

「それとインデックスと、どういう関係があんだよ？ インデックスには魔力が存在しないんだろ？ だったら、その網に引っ掛かる事もねえだろ」

「確かにそうだ。だけど、禁書目録って名前は有名なんだよ」

だからどうした、と上条は思う。

だが、ゼロの方は、納得したような顔になっている。

上条は、微妙に自分だけがわからないという現状にショックを受ける。

「その網も、そこまで精度が良くない、というわけか」

「おしいにゃー。正確には範囲が狭いのさ。精々、一キロが限度ってとこですたい」

ここで上条もなるほど、と思う。

「つまり、インデックスまわりにその網が重点的に張られてるってわけか」

「そうそう。魔術業界の連中の多くは今までの事件も『禁書目録のまわりで事件が起きた』って思ってるって訳だぜい。だから事件の中心から彼女を遠ざけておけば、魔力を感知される可能性は低くなるという訳だにゃー。逆に、来られちゃったら確実に、アウトだ」
アウト。すなわちそれは科学と魔術の間に、大きな溝を作ることを意味する。

「つまり、あのインデックスに一切気づかれないようにしなくちゃいけないって訳かよ」

上条だけでなく、ゼロすらその事に頭を抱えたくなる。

インデックスはあらゆる魔術師と対抗するために、十万三千冊の魔道書を記憶しているのだ。彼女はほんの小さなヒントでも見逃さないだろうし、ヒントを手に入れば自然と動いてしまう。

だが、彼女に『動くな』と言った所で、彼女は聞かないだろう。

彼女は誰かが魔術に関する事件に巻き込まれる事を嫌っているのだ。絶対に自ら解決しようとするに決まっている。

「という訳で、カミゃんはインデックスと事件の両方担当で、ゼロはインデックス担当って事で」

は？ という顔を二人共がする。

「何で俺は両方何だよ！ 別にゼロ一人でいいじゃねえか！」

「インデックスのお守なら当麻の方が適任だろう」

「まあ、そうしたいのは山々なんだけどにゃー。ステイルとゼロは大した接点がないから、ゼロをこの件に関わらせ過ぎるのはまずいんだにゃー」

なるほど、とゼロは納得する。

もし、ここで来ていたのが神裂や天草式だったならば、少しは接点がある事にできたと思うが、ステイルとは上条ほど親密でもない。上条とステイルがその事を聞けば、お互いに違うと言い張るだろうが。

「わかった」

「悪いにゃー。でも、これで問題解決だ」

そう言って、歩き出そうとするゼロと土御門の肩を、上条ががしっ、と掴む。

「待て待て待て！ 俺は？」

「いや、だってなあ？」

「オマエがたまには顔を見せなくちゃ、インデックスは絶対暴れる」
土御門もうんうん、と同意する。

「どう考えても俺の負担がでかすぎるだろ！」

「そこはまあ、いつもの通りフラグメーカー上条当麻の力をフル活用して」

「んなもん、あるか！」

結局、事件の解決と、インデックスの面倒を見る役の両方をやる事になった上条だった。

日常に潜む非日常（後書き）

なかなか、話が進まなくてすみません。

大覇星祭、話をどうしようかと考えて、行きついたのが、ゼロ参加せず！

いや、どこかでちゃんと関わらせます。じゃないと、原作ほぼそのままになるので。

ただ、どこで関わらせようかを迷ってます。

……もしかしたらここから一気に話が進む可能性がありますですがご容赦ください。

ただ一人の必要な存在

月詠小萌は、言われた場所まで律儀にも来ていた。

一方的に頼みごとをされたのだが、それでも生徒の頼みが無碍にはできなかったのだ。

「まったく本当に、赤谷ちゃんはー。会ったらお説教なのですー」
そう言いながら、小萌先生はきよろきよろと辺りを見回して、頼まれた修道服を着た白い少女の姿を探す。

小学生ぐらいの背丈の為、人混みの間を注意して探す。

目的の人物はすぐに見つかった。

少し距離はあるが、同僚の黄泉川の近くに座りこんでいる白いシスターがいる。

小萌先生は小走りでそちらに駆け寄る。

体のせいで歩幅が小さいのだが、それでもすぐにインデックス達の下にまでたどり着く。

黄泉川もすぐに気づいたようで、小萌先生はそちらに声をかけようとして、

「うう……。小腹が空いてきたかも……」

グウー、という腹の音に邪魔をされた。

「あ、こもえ」

インデックスもやっと小萌先生の存在を認知する。

「シスターちゃん、お腹が空いてるんですー？ それなら――――
――」

「――――何か買ってきましたようか？ と言おうとして気づく。
インデックスの隣には、屋台の食事を乗せていたであろう紙皿が空になって、何段にも積み重ねられていた。

それだけでもすでに一人で食べるのもきついぐらいの量がある。

その隣では三毛猫が『満足です!』と言わんばかりの姿で寝転がっていた。

「あの、シスターちゃん? これは?」

小萌先生は紙皿の塔を指差しながらおそろおそろといった感じで尋ねる。

「えーと、ね。ゼロが買って来てくれたんだよ。あ、そういえばゼロが、とうまとゼロの分を残しとけ、って言ってたけど食べちゃった。どうしよう?」

おそらくゼロとは赤谷の事なのだろう、と小萌先生は思う。

と言う事は、この紙皿の塔が作られたのはそんなに前の事ではないらしい。

「ていうか、ウチの携帯食料も一つ食べてんだけどね」

「どういう胃袋をしてるんですかー!」?

「あれ? インデックスの奴いないぞ?」

土御門と別れた二人は、インデックスがいた場所にまで戻って来ていた。

だが、そこに見慣れた白いシスターの姿はない。

ゼロが頼んでおいた小萌先生の姿もどこにもなかった。

「……迷子か」

「そんなわけがないだろう。小萌先生と一緒になんだぞ」

「でも、あの先生なら人がたくさんいるから流されてしまいましたー、って言われても違和感ないし」

ゼロも不安げな顔になる。

学園都市の地理がまったくわからないインデックスならともかく、小萌先生（酒も飲めるお歳）が迷子になるとは思えない。だが、確

かにこれだけ人がいると小萌先生（小っちゃい）も迷う可能性が出てくる。

「いや、待てよ。まさかあの屋台エリアにインデックスが飛びこんで、小萌先生がそれを追いかけているという事も」

「オレはこっちを探すからお前はあっち側を探せ。見つけたら連絡してくれ」

そのままゼロは走り去ってしまう。

「無視かよ！」

半分冗談、半分本気で話していた上条は、華麗にスルーされた事に多少の寂しさを覚えながらも、言われた方向へ走り出す。

やや行った所で見知った顔を見つける。

土御門舞夏と、姫神秋沙の二人だ。

向こうもこちらに気づいたようで、

「おい、上条当麻ー」

舞夏は上条へと手を振りながら、清掃用ロボットに乗って近づいてくる。姫神はその隣を並んで歩いていった。

「なあ、インデックスを見なかったか？」

上条の問いに二人は顔を見合わせると、

「あのシスターならさっきあっちの方を歩いていたけど」

姫神は今自分達が来た道を指差す。

実はまだ屋台エリアで暴れているんじゃないのかという思いを捨て切れていなかった上条は、自分の予想が違っていった事に安堵する。

「なんか上条当麻の学校の名物ミニ教師に手を引っ張られてたぞー？」

どうやら小萌先生も一緒らしかった。

と言うより、話を聞く限りだと小萌先生がインデックスを連れていったらしい。

「学園都市の案内でもしてもらってんのか？……まあ、いいや。とにかくありがとな。あとは自力で探してみる」

上条はそれだけ言うと、姫神達が来た道を走る。後ろから舞夏の

『頑張れよー』という声が届いた。

割と大きめの通りを走りながら、辺りをくまなく見回す。『外』から来た観光客が風力発電のプロペラに感心していたり、間近で見た超能力の事を興奮したように話している姿を見かけると、逆に新鮮に思えてくる。

と、不意に横合いからミャーと鳴き声が聞こえた。

耳にただけで特徴がわかるほど聞き慣れた鳴き声————
スライク三毛猫のものだ。

「インデックス？」

上条は立ち止まり、鳴き声のした方向を見る。

ビルに囲まれる中、葉の生い茂る木々が多く生えた小さな公園のような場所。厳密には公園ではない。大学が植物の生長データを取る為の場所だ。

警備がない所を見る限り、一般開放はされているようだが、普通よりも高めの金網や葉の生い茂る木が客足を遠ざけているようで、ほとんど人の気配はない。

とりあえず、上条は携帯を取り出して、ゼロに連絡を取る。

『わかった。すぐに行く』

場所を聞くと、ゼロはすぐに電話を切る。

上条はポケットに携帯をしまうと、入口をくぐって中へ入る。

ゼロならばおそらく数分で来るだろうが、先に見つけておこうと思っただけだ。

木々の枝を折らないように中へと踏み込みながら、

「インデックス？ いるならいるって返事してもらえると嬉しいんだけどー」

返事はない。どうやらまわりの木のせいで上手く声が届かないようだった。上条は黙って、さらに奥へと進む。

そして、少し進んだ所で視界が開ける。そしてそこには————
———。

上条の言っていた場所にまで着くと、ゼロはすぐに入口をぬけ中へと入る。

（すごい数の木だな……）

任務でジャングルに行ったことも何度もあるが、密度だけならこの方が上だと思った。

狭い敷地に多くの木を植えすぎなのだ。

枝を押し分けながら進んでいくと、微かに声が聞こえてきた。

そして、視界が開けた先には、

吹寄整理にサンドバックのように扱われる上条当麻の姿があった。

その近くにはインデックスと小萌先生の姿もある。

が、インデックスの服装がいつもとは違った。

小萌先生が来ているチアリーディングの衣装と同じモノを今はインデックスも着ていた。

ゼロは頭を抱えたくなる。

この状況の原因・理由・経緯、何一つわからない。

そうこうする内に、吹寄が掴んでいた上条の襟首を放す。

「ふん。今回はこのぐらいで許してやるが、次やったらこれぐらいじゃあ済まないわよ！」

ガキ大将の文字が良く似合いそうな仁王立ちだった。

上条は地面に突っ伏しながら弱弱しげに頭をコクコクと縦に振る。

「……とりあえず、何をやってるんだ？」

全員がゼロの方を向く。全員がゼロの存在に驚く。

先ほどの状況ならば気づかなくても仕方ないと思う。なにせ目の前で人がサンドバックになっていたのだから。

「正義の為に、悪を成敗してたのよ！」

ゼロはさらに困る。

正直彼にはまったく話がよめなかった。

「えーと、ですねー……」

困ったような顔をしながら小萌先生が説明を始めた。

ゼロはインデックス達の居た場所の入り口の所で高い金網にもたれかかりながら、インデックスが着替えを終えるのを待っていた。さっきの状況はどうも、上条がインデックスの着替えシーンに遭遇し、インデックスが噛みつこうとしたら失敗して頬にキスをするような形になり、そしてその姿を吹寄に目撃された、という事らしい。

土御門の言ってた通りのフラグメーカーぶりを発揮しなくてもと思う。

件の上条は吹寄連れられてどこかへ行ってしまった。

吹寄の事だから、学校の応援にでも無理やり引っ張っていったのだと思う。

ゼロは土御門に言われたとおり、インデックスの相手をしている事にしたのだ。もっとも今は別に大丈夫だとは思いますが、もしもの場合を考えての事だ。

不意に横から、

「あれ？　ゼロだけ？　とうまは？」

声のした方を見ると、そこには完全にチア衣装に着替えたインデックスと小萌先生の姿があった。

「当麻なら吹寄と一緒にどこかへ行っただぞ」

瞬間、

ガクツとインデックスが膝をつく。そのまま四つん這いになると、
「うう……。折角とうまに見せてあげようと思ったのに……」

可哀想になる姿だった。小萌先生はそんなインデックスを励まそうとしている。

だが、ゼロはその姿を暖かい目で見える。事情を聞いた時、二人の関係は大丈夫だろうかと思ったが、心配なかったようだった。

ゼロが思っているよりもずっと、インデックスにとって上条は大切な人なのだ。

「あれ？ 先生、まだいたんですか？」

ゼロが後ろを振り向くと、そこには上条を連れていったはずの吹寄の姿があった。

「む。赤谷、貴様も上条と同じように応援をしない側の人間だったのか？」

吹寄はゼロがすぐに学校の競技の応援に向かうと思っていた。だから、上条と違って無理やり連行しなかったのだ。

だが、そんな吹寄の予想とは裏腹にゼロがまだこの場所に残っていたのは彼女にとっては意外だった。

「貴様は上条達とつるみながらも、真面目な人間だと思っていたのだが」

「別に応援をしない訳じゃない。ただインデックスの面倒を見ないといけないと思ってる事だ。言われなくてもこれから応援に行く」

「それなら良いわ。しかし、上条当麻め！ まさか、一瞬目を離したすきにいなくなるとは！」

ゼロは違和感を覚える。

確かに上条だって無理やり連れて行かれるのを良しとは思わないだろうが、勝手にいなくなるだろうか。

それに逃げたのならば上条はおそらくここへ帰ってくるとゼロは思う。

「吹寄。いつ当麻はいなくなったんだ」

吹寄は怪訝そうに、何でそんな事を聞くの？ という顔をしながら

らも、

「私が電話をしてる時よ。まったく上条当麻は！　すぐに女性にぶつかって、キスが良いた言ったり、握手したり。どれだけ女性が好きなのかしら！」

吹寄は憎々しげに話している。というより、すでにゼロに話すというよりも、段々と愚痴になっていた。

だが、ゼロはそんな事は気にはならない。それよりも、

「……何か変わった事はなかったか？」

「……そう言えば、女の人と握手した時になにかが碎けるような、そんな音がしたのよね。あれは何だったのかしら？　その後女の人はずぐにどっか行っちゃったし」

決まりだった。

上条は魔術師のどちらかと接触したのだ。

だが、ゼロは動けない。ゼロがこの件に関わるわけにはいかない。同時にゼロは、気づく。

今、自分のすぐ後ろにはインデックスがいる。もしかしたら今の会話から、魔術師の存在を気づかれたかもしれない。

そんな不安がよぎる。

ゼロが後ろを振り向くと、

「うう……」

未だに項垂れているインデックスの姿があった。

インデックスはまだ落ち込んでいて、ゼロ達の話など聞いていなかった。ゼロはその事に安堵の息をもらす。

「どうも、一体どこに行ったんだろう……？」

その答えを知っている。

だが、彼はそれを言う事は出来ない。戦っているであろう上条達の為にも。

ここにいる人たちの為にも。

学園都市に住む人々の為にも。

言わない。

それだけが、ゼロにできる唯一の事だった。

「さあー、シスターちゃん！ レッツトライなのですよー！」

「あ、あれ？ こう、かな？」

インデックスは滅茶苦茶ながらも、なんとか小萌先生の動きを真似する。

ゼロはその様子を見ながら、罪悪感を感じていた。

今、インデックスは小萌先生から応援の振付を教えてもらっていた。

そんなに難しくはないので、インデックスも段々とできるようになってきているが、それは全て一人の少年を応援したいがための努力。

だが、その少年が競技に参加する事は、今日はあるかどうかわからない。

その事をゼロは知りながらも、伝える事も出来ず、ただひたすら頑張るインデックスの姿を見ている事しかできなかった。

「ねえ！ 見て見て、ゼロ！」

インデックスは笑いながら、ゼロの前へと駆け寄ってくる。

そして、踊りだす。

お世辞にも上手いとは言えない。今ちょっと練習しただけなのだから当然の事だ。

だが、そこには必死になって努力している姿がある。ゼロはそれは素晴らしい事だと思った。

インデックスは踊り終わると、

「これでとうまも頑張れるよね！」

「ああ」

インデックスは満面の笑みになる。

一人の少年の為の努力。

代わってやりたいと思った。

ここにいないべきは自分ではなく、上条当麻なのだ。

だが、彼はいない。

彼は今きつと、この少女の為に戦っているだろうから。

「じゃあ、そろそろ競技の会場に行きましょうかー。次は『パン食
い競争』ですからねー」

時計を見た小萌先生が荷物を持って歩き出す。

うん、と楽しそうにインデックスもその後を追う。

だが、その先に上条当麻はいない。

ゼロはどこにいてもわからない友の顔を思い浮かべる。

(……早く帰ってこい)

それだけを願いながら。

ただ一人の必要な存在（後書き）

更新が遅れてすいません。

遊戯王のタッグフォース6にあけていました。

これからも少し遅れてしまうとは思いますが、なんとか両立できるように頑張ります。

自分に出来る事

「つたく、ホントにあの馬鹿は！」

美琴は近くの木をガンガンと蹴りつける。その木とはある少年の代用だった。

通りの人の多さに反して公園内には人はほとんどいなかった。昼休みならば弁当を食べる人で賑わうのだろうが、今は競技中で、大半の人が超能力を一目見ようと競技場に足を運んでいる。

誰にも見られていないのをいい事に、美琴の蹴りの具合はますます強くなる。

「紛らわしいのよ！」

段々と、木の幹につく傷が目立ち始める。

それを見てようやく我に返った美琴は蹴るのを止め、近くのベンチに腰掛ける。

ふと、隣を見てしまう。

いつもならば、そこに一人の後輩の姿がある。

だが、今は何もなかった。

その事に寂寥感を覚える。いたらいたで騒がしいのだが、やはりいつもいる存在がいないのは寂しかった。

そして、今度はついさっき終わった競技について考える。

結果には何の問題もない。常盤台中学の圧勝だった。

だが、問題は競技中に起こった事故だ。

競技中に運営委員の一人が倒れ、一時競技は中止となった。

日射病で倒れたらしいという事は聞いた。事実、美琴は目の前でその委員の人が倒れる姿を見ている。傍目から見ても、能力の余波に当たった、という感じはしなかった。

だが、腑に落ちない。美琴には納得がいかない。

もし本当に日射病だったならば、

他校の競技に忍び込んでいたあの少年の叫びは何だったのだろう。

彼が力任せにポールを殴ったのは、なぜだったのだろう。

彼は――――一体、何に怒っていたのだろう。

あの競技において誰よりも異常だったはずなのに、なぜか美琴には彼が誰よりもあの競技で何が起きていたのかを理解しているような気がした。

「はぁ。まったく何なのよ、あの馬鹿は」

その問いに答えてくれる人はいない。答えれる人がいるのかすら美琴にはわからない。

だが、とりあえず一つだけ美琴にはしておきたい事がある。

「どうしたらこの記憶を抹消できるかしら……」

言葉だけを聞けば、とても重い。だが、彼女の言う記憶とは、
「どうしてあの時、私は目を瞑ったのよー!!」

競技中、急にあの少年に押し倒され、そこで目を瞑った自分。その理由が自分でも理解できない。

バチッ！ とわずかに放電しながら、美琴は先ほどとは別の木に、再び蹴りを入れ始めた。

「何だ……こりゃ？」

目の前には結び目をほどかれ、中身をさらした白い布とその中身がある。

つい今しがた、オリアナから必死になって奪い取った物だ。

オリアナには逃げられたものの、これで事件は終わる。上条は、そう信じていた。

オリアナの置いて行った巨大な荷物には『スタブソード刺突杭剣』が入っている。そう思っていた。

だが、現実には彼の安易な想像を置き去りにする。

目の前には『スタブソード刺突杭剣』などない。

あるのはただのアイスクリーム屋の看板だった。

「どうなってる……?」

わからない。

上条の問いに答えてくれる者もない。

だが、わかる事もある。

「一体、何がどうなってるんだよ……ッ!」

まだ、彼らは日常へと帰れない。

まだ、何も終わってはいない。

ゼロはとあるオープンカフェに来ていた。

土御門に呼び出されたのだ。

「にゃー、こっちだこっち」

声のした方を見れば、土御門とステイルが座っていた。そのテーブルの上には、料理どころか、お茶すらない。

ゼロはオーダーを取りに来た店員にコーヒーを頼むと、空いている席についた。

この場には上条はいない。

彼は朝、ゼロが会った彼の両親、それにインデックスと食事をと

る事になっていた。

本来ならば、ゼロもそこにお邪魔するはずだった。

ほとんどの学生は大覇星祭中、親と共に食事をする。だが、彼に両親などいない。それどころか、この世界に、ゼロの下に来てくれる者など居はしないのだ。

だから、ゼロも上条達と食事をするはずだったのだ。
本来ならば。

「状況はどうなってる？」

本当は聞かなくてもわかってる。

土御門はともかく、ステイルは明らかに笑っていない。いや、笑う余裕もないのだろう。

ゼロは状況が改善していない事にやや気を落しながらも、そんな素振りは一切見せず、土御門に向き合う。

「残念ながら、より悪くなってるにゃー」

「どういう事だ？」

土御門は浮かべていた笑みを消し、

「『スタフソード 刺突杭剣』。それが存在しない事がわかった」

ゼロが眉をひそめる。

取引されるはずの物が無いとは一体どういう事なのか。

「正確には、今まで『スタフソード 刺突杭剣』だと言われていた物はまったく別の物だった、という事だけだね」

「なら取引される物は何なんだ？」

「『クロウチエディビエトロ 使徒十字』。ペテロの十字架というやつだよ」

だが、なおもゼロは何だそれ？ という顔をしている。

「さっき、上条当麻には話したし、詳しく知りたかったら土御門にでも聞くといいけど。端的に効果だけ言えば、『立てた場所をローマ正教の支配下に置く事』だよ」

ゼロの顔が一層険しくなる。

「この街を支配する？ そんなことが可能なのか？」

「支配すると言っても、武力で抑えつける訳じゃない。立てた場所

でローマ正教の者にとって都合の良い事が起きるようになるんだよ」

「……確かに問題だが、それだけならば易しい方だろう」

ステイルは首を横に振る。

それと同時に吸い殻を捨て、新しい煙草を取り出して口にくわえると、手で口を覆い、煙草に火をつける。科学の火、ではなく魔術による火だ。

「例えばギャンブルをすれば、ローマ正教の人間は不自然なくらいに勝ち続けるだろう。そして同時に、負け続ける人間が出てくるんだよ。だけど、負けた人間はそれを不幸だとは思わない。何らかの理由で『負けても幸せだ』と思うようになる」

「まるで詐欺だな」

「まさしくその通りだよ。『使徒十字』クローチエディピエトロがあつたから不幸になったのに、誰一人としてそれを不幸には感じない。狂った、幸福な世界だよ」

仮初の平和。

それがどういう物か、ゼロは知っている。

ネオ・アルカディアは平和な街だった。人にとっては。

その平和はレプリロイド達の犠牲の上に成り立つ、暗い部分から目を逸らして生まれたものだった。

だが、その街を管理するの者も、またレプリロイド。

人の力ではなく、機械に統治され、機械の犠牲で存在した街。それがネオ・アルカディアの実態だった。

土御門はその場の空気を断ち切るかのように再び笑みを浮かべると、

「心配しなくても大丈夫だぜい。そんな計画、オレらでぶっ潰してやるからにゃー」

ステイルも煙を口から吐き出しながら、

「これ以上ローマ正教に力を持たれば、世界は大変な事になるんでね。やるやらないの問題ではなく、やるしかないのさ」

ゼロは歯を噛み締める。

歯痒い。その思いがゼロの心に広がる。

こんな大変な状況で、何の助けにもなれない自分が情けなかった。土御門は慰めるように、

「そんな顔するなって。何か助けが必要だったら、絶対呼ぶ。そのためにこうして事情を知っておいてもらったんだからにゃー」

だが、ゼロの心は晴れない。

真っ先に戦闘で戦う存在だった彼にとって、それは不自然以外のなにものでもなかった。

学園都市の風車のプロペラがくるくるとまわるその上空。

オレンジ色の物体が浮いていた。

「ふふふ……」

プロペラが一回転した所で、

その物体は消失していた。

誰も見ていた者はいない。気づいた者もない。

日常の裏に潜むモノに気づく者は一人としていない。

携帯を開いて時間を確認すると、すでに四時に近い。

土御門達と話した後、遅めの昼食をとったゼロはずっとインデックスを探していた。が、まったく見当たらないのだ。

携帯も繋がらず、事情を知っていそうな上条に電話する事は不可能。

根気良く、自分の足で探すしかなかった。

そのまま、ゼロは今度は割と大きめの公園に入り、インデックスがないか探す。

すると、

「誘ったらいいいじゃないですかーっ！」

「誘わないったら誘わない」

賑やかな、聞き覚えのある声が聞こえた。

ゼロはそちらへ足を向けると、走り出す。

思った通りの人物がいた。

「何をやってる」

騒いでいた二人――――姫神秋沙と小萌先生は振り向くと、

「赤谷ちゃん、何をしてるんですかー？」

首を実際に傾げながら聞いてくる小萌先生。その行動は、どう見ても小学生にしか見えなかった。

その横で姫神はフルーツジュースの入ったカップを口元に運んでいた。

「インデックスを探してるんだが」

「うーん。先生は見えてないのですよー」

ゼロは姫神に視線を移す。

姫神は申し訳なさそうに首を横に振りながら、

「残念ながら私も見てない」

「そうか」

ゼロが別れの挨拶をしようとする、

「そう言えば、シスターちゃんは上条ちゃんと一緒に昼食をとったんですたよねー？ でしたら、上条ちゃんのご両親さんと一緒に次の競技の会場に行ってるんじゃないですかー？」

ゼロは、はっ！ となる。

小萌先生の言うとおりだった。確かにその可能性がある。

同時にそれならば、今は自分がついていなくても大丈夫という事になる。

肩の荷が下り、少し気が楽になるゼロ。

「それじゃあ、このまま次の競技会場に行こうなのですよー！」

右腕を上高く上げ、意気揚々と歩きだす小萌先生。

「実は。時間は割とピンチ」

「いつの間にーっ!？」

今度は慌てて、走り出す小萌先生。

ゼロと姫神を顔を見合わせると、少し困ったような顔をして、

「小萌先生が一番遅いけど」

すぐに、小萌先生を追い抜かず。

えーっ! と本気で走り出す小萌先生。ゼロ達は少し速さを落と
して、わざと小萌先生の後をついて行く。

小萌先生はそれに気を良くし、後ろを向いてゼロ達を見ながら、

「さあー、二人とも急いで——————」

ドン! と前から歩いてきた人にぶつかった。

そのまま、跳ね返って今度は姫神にぶつかる。すると、姫神の持
っていたカップからフルーツジュースがこぼれ、二人の服に盛大に
かかってしまった。

姫神は自分の胸元と小萌先生の顔を見比べると、

「小萌先生。よくもやってくれた」

「ご、ごめんなさいなのですよー! でも、先生もびしょ濡れだか
ら大丈夫です。て、あれ? どうして赤谷ちゃんにはかかってない
んですか?」

「すぐに避けましたから」

ゼロは前の人にも気づいていたのだが、小萌先生に注意する前に
ぶつかってしまったのだ。

小萌先生はすぐにぶつかった相手にも謝り始める。

ぶつかったのは女性だった。

この街ではまず見ないような衣装に身を包んでおり、かなり露出
度の高い服を着て、大人の色気を醸し出している。

有り体に言って、かなり綺麗な女性だった。

女性は優しそうに微笑みながら、

「お姉さんは平気よ。それより、そちらの方が心配かな？ そのまま表通りを歩くには少々刺激的な格好になっているのではないかしら」

女性の言うとおり、姫神の体操服じゃびしょびしょで、色々と透けて見えていた。

ゼロはすぐに目を逸らす。

すると、女性と目があった。女性はゼロへと微笑みかけてきたので、ゼロは会釈して返す。

ゼロの隣ではあわわわ！ と小萌先生が慌てふためいている。見ていて微笑ましい光景だった。

だが、

目の前から激しい殺気が放たれた。

(!?)

ゼロが女性の方を見ると、先ほどとは打って変わって陰しい目つきをしていた。

その目には明らかな敵意が宿っている。

そして、ゼロが何かする間もなく、女性はどこからか単語帳のような物を取り出すと、その一枚を噛んで束ねていたリングから引きちぎった。

瞬間、白紙だった引きちぎられたページに文字が浮かび上がる。

そして、

「姫神ちゃん!？」

振り向いたゼロが見たのは、

体中から血を噴き出す姫神の姿だった。

「姫神!!」

ゼロにも姫神の体から噴き出した血がかかる。だが、そんな事を気にしている暇はない。

ダッ！ という地を蹴る音がする。

振り返れば女性が走って、この場から遠ざかっていた。

ゼロは携帯を取り出すと、急いで救急車を呼ぶ。

「救急車は呼んだ。小萌先生。姫神を頼む」

敬語を使うのも忘れて、ゼロは女性が逃げた方向を睨む。

そして、急いで走り出す。

（あれが……魔術師か）

こんな事になって初めて、ゼロは女性が誰だったかを知る。

（ちくしょう！）

ゼロは街中を風のように駆ける。奥歯を強く噛み締めながら。

今まで以上の悔しさがこみ上げてくる。

今のゼロには戦う理由がある。戦う理由ができた。

だが、ゼロは戦う事しかできない。

目の前で血を噴き出して死にかけている少女を助ける術を彼は持たない。

自分の無力が、惨めで、情けなくて、悔しくて。

戦う事しか知らない自分が、許せなかった。

オリアナは焦っていた。

『歩く教会』であるケルト十字のネックレスをしていた黒髪の少女を攻撃してから、すでに三十分以上経っているが、それからずっと追われている。

相手の動きは追跡を学んだ者の動きではない。所詮は素人。すぐに撒けると踏んでいた。

だが、そうはならなかった。

どれだけ予測不可能な動きをしても相手は騙されずに追ってくる。それも段々と距離を詰めながら。

オリアナは自分の身体能力にも自信があった。

だが、追手の学園都市の学生の速さは普通の人の速さではない。

（これが超能力なのかしら？）

オリアナは、少し考えて、急に進路を変えた。

上条とステイルの目の前には血まみれになった姫神秋沙の姿があった。その体の至る所に包帯が巻かれている。だが、全て赤く染まって、逆に痛々しかった。

そして、ステイルは見た。

月詠小萌が、辺りの石や空きカンを拾い集め、必死に何かを作ろうとしている姿を。

それは儀式場だった。

理論も何も理解していない。おそらくはそれがどういう効果を持つかすら分かってはいないだろう。だが、それでも。

一人の少女を救うために、必死になっていた。

月詠小萌はとある少女に良く似ている。誰かの為に笑い、誰かの為に泣き、誰かの為に怒る。そして、できなくても、わからなくても、誰かを助ける為に必死になる姿が。

だからこそステイルは、

「まさか、この僕が……誰かを癒すために魔術を使う日が来るなんてね」

本当に億劫そうな、だが、確かな意志を込めた声で呟いた。

上条は姫神をステイルに任せ、一人でオリアナを探す。

オリアナがどこに行ったのか、まったく見当がつかない。

どれだけ願っても、どれだけの覚悟を決めても、どうしようもない事がある。

だが、まだ希望が失われたわけではない。

上条は携帯を取り出すと、一人の友人へと電話をかける。

だが、でない。

仕方なく別の人物を呼び出す。

「土御門！！　ゼロの場所ってわかるか！？」

『そんなもん、ゼロに電話すれば一発で————』

「今、ゼロはオリアナを追っているみたいなんだ」

『どういう事だ？』

「姫神がオリアナにやられて……。ゼロが後を追ったらしい」
場を沈黙が支配する。

『流石、と言うべきなのかにゃー。瞬時に自分のできる事を判断したって訳か』

「んな事言ってる場合じゃねえだろ！」

『わかってるって。すぐにこっちから連絡が取れないか試してみるから、カミやんはもう少し探してくれ。ゼロだってオリアナに逃げられてる可能性だってある』

上条は土御門の言葉に答えず黙りこくる。

何かが引かなかった。

その違和感のわずかな糸を、必死に手繰り寄せる。

「なあ、土御門。オリアナは、どうして逃げてるんだ？」

明らかに人がいなくなっている。

魔術師が人のいない場所へと自ら進んでいるようだった。

それがゼロには腑に落ちない。

普通は追われる者は、人が多くいた方が逃げやすいはず。にもかかわらず、人通りの少ない場所へ向かうという事は、

「……誘われてる、か」

だが、ゼロは好都合だと思った。

魔術師が曲がり角を曲がる。

ゼロも追って曲がった瞬間、

水の矢が足めがけて飛んできた。

それを横に跳んで避ける。火の矢は、そのまま真っ直ぐ飛び、後ろに立っていた木に突き刺さる。

水の矢はすぐにただの水に戻って、木の根元へとバシャッ！という音を立てて落ちる。矢が突き刺さった所には深い穴が開いていた。

「今ので終わりにしてあげようと思ったのに。まだ続けたいの？」
人通りは少ないものかなり広い道。

ゼロから十メートルほど離れた距離に魔術師は立っていた。その手には金色のリングでまとめられた単語帳が握られている。

「お前が魔術師だな」

ゼロの言葉に、魔術師は意外そうな顔をして、

「あら。あの坊や達以外にもまだいたのね。三人だけだと思ってたわ。まあ、別にお姉さんは何人相手でも全然構わないのだけれども

ね」

魔術師はクルクルと単語帳を手で弄びながら、

「オリアナ！ トムソン。それが私の名よ。魔法名は名乗らないから安心しなさい。あなた相手に本番をする気はお姉さんにはないから」

「別に本気を出さないならそれで構わない」

ゼロは拳を握りしめる。

オリアナを睨み付け、

「だが、覚悟しろ。オレはオマエを許さない」

低く、重い声が響く。

ゼロを敵として見なしていなかったオリアナがわずかに怯む。

「坊や。本当に一般人？ それとも私の、敵？」

ゼロは一呼吸置いて、

「敵だ！」

自分を英雄だと思った事はない。

だけど、自分には戦う力がある。

戦う事でしか誰かを守れないのなら、彼は戦う。結局はそれが、彼の生き方だった

自分に出来る事（後書き）

原作的には、一気に話が飛びました。

具体的には、上条が美琴達にボコボコにされるシーンがなかったり、土御門がボコボコにされるシーンがなかったり。

こういう場面が知りたい人は原作10巻をお読み下さい。

残念ながらこの小説ではだせませんでした。

それでもこれもゼロが強すぎるから……ではなく、僕の力不足です。もっと読みやすく、面白い作品が書けるように頑張ります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3798u/>

とある伝説の赤き英雄《レプリロイド》

2011年11月12日03時15分発行